
魔法少女リリカルなのは s t s ~ 魔皇の世界救済物語 ~

魔帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはst☆魔皇の世界救済物語

【Nコード】

N78580

【作者名】

魔帝

【あらすじ】

とある一人の男がリリカルな世界を救うためにトリップ！！

敵はなんと悪魔！！神からの援軍はなんと考えられない組み合わせの三人！！ちよ、なんで！？

さあ今！！世界救済の物語が始まる！！！！

プロローグ（前書き）

やってしまった二作目。

まだ一作目も完結してないのに……。しかし後悔はしていない！！

感想宜しくお願いします！！

プロローグ

「うん、どこだ？」「」

俺が目を開けるとそこには何も無く、真っ白い空間だった。

「えっなに！？どゆこと！？ここどこ！？私は誰！？大和 一颯です！…ってそうじゃない！！」

落ち着け！！落ち着くんだ！！…！ヒッヒッフー…って違う！！

「あゝ馬鹿らしくなってきた。寝よ」

「…いつかは寝るのが一番だ。」

「ブルアアアアアア！！！！！！！」

「おわあああああ！！！！？」

なっ何だ！？何なんだ！？ババース！？

「神の前で寝るとは、なんたる愚かしさ！！！！」

「違った！！シ ルだった！！つてはあ！！？」

何でシャル が！？…そうか、これは夢なんだ！！アニメのキャラ
が出てくるなんて夢に違いない！

「どうせなら可愛い女キャラ出せよ、俺の夢」

こんなクルクルロール頭ジジイなんてやだ。

「これは夢ではない」

……はあ？

「じゃあ何なんだよ!？」

「現実に決まっておろう」

「嘘だ!!!!!!!!!」

やってみたかったひぐし。

「なら仕方無い。カズくでもわからせてやるわ」

あれ…何でそんな禍々しい斧なんか出してんの？

「覚悟は出来てるか?…ワールドデストロイヤー……!!!!!!!!!!」

「!」

「それキャラチがああああう!!!!!」

どがあああん!!!!

「ギヤ————!!」

…数十分後…

「殺す気か!??てあれ?あんなに痛かったのに何ともない…」

「どうだ、これで現実と認めたか?」

「わかった。わかったから斧を構えないで下さい」

「フン、くだらん」

だからキャラ違っつて…。

「で…どうゆう状況なんだ？」

「ウム…どこから説明すれば良いのやら…」

なんだよ一体。…まさか『お前は死んだ』とか言っんじやないだろ
うな…。

「お前は死んだ」

「はいきたー！ー！予想通りー！ー！短い人生だったあー！ー！
！ー！」

ウソオー！ー！俺まだ20だぞ！？やっと成人になったんだ
ぞ！？なのに！ー！なのに！ー！

「まあ落ち着け。お前はまた生きれる」

……………え？

「それ本当？」

「無論。ワシは神だ」

「神様——！！！！　　ルル様——！！！！！！」

……………でも待てよ？何で俺死んだんだ？

「なあ…何で俺死んだんだ？確か俺、俺のがこんなに
わ
け
がないを観てた筈なんだが……………」

「ウム、それはな……………」（真剣な顔）

「あることをやってもらったためだ」

「あること？」

ん？ちょっと待てよ？このパターンって……。

「まさか俺……トリップするの？」

「まあそうだ」

……フッ

「イヤッホー……！！！！」

キタキタキタキター……！！！！ついに時代がキター……！！！！
！！まさか本当に存在するなんて……！！うれし……！！！！

「で？ど」の世界！？」

楽しい所だったらいいな〜。

「バイトハザード」

「いやあああああ！……！！！」

いやだいやだ！！そんな怖い所やだ〜！！！！！！

「にはしない」

「殺すぞてめえ！……！！！」

コイツ本当に神か！？外見はシャルル、中身もシャルルに似てるし……ちょっと違うけど。……あれ………神にピッタリじゃん。

「それよりど」?

「リリカルマジカル」 (裏声)

「おええー！ー！ー！」

キモッ！？キモ過ぎる！ー！ー！「ねはどどいー！ー！ー！……っでもしかして…」。

「なのはか！ー！ー！」

「ウム」

「よっしやあああ！ー！ー！」

やった！ー！フェイトに逢える！ー！ー！

「但し、お前には使命を果たしてもらおう」

「なんだ？言ってみろ！！」

あの世界に行けるんだ。何でもやってやる！

「その世界を潰そうとする奴から命を賭けて守れ」

……は？

「どつゆづ事だ？」

「悪魔と言う存在は知っておるな？実はな、その悪魔達が世界を渡る力を手にしてしまっただ。そしてその世界を自分達の物にしようとしているのだ」

「……マジかよ」

「だがな、ワシら天界の者には世界を渡れないのだ。しかし、人間

なら送り出せる。だから、人間界で都合の良い者を殺し此処に連れてきたのだ」

「何で俺なのかはあえて聞かねえが、まあわかった。それで、俺を見つけてここに連れてきたと？」

「そうだ。…やってくれるな？」

「……いいぜ。その代わりに、力をいくつかくれよ」

「良かろう、何がよい」

うんとチートにしないと生き残れなさそうだな。…ここは…。

「取り敢えず、ギアスをくれ。能力は視界に入れた物、触れた物全ての破壊。物も記憶も概念も」

「ほう…。良かろう。しかし、それには持って居るだけで極わずかだが体が徐々に蝕まれ、さらに使用すると異常な程の負担が体にかかるが、良いな？」

「そっちの方が面白いな。いいぜ。二つ目は身体能力の底上げ」

じゃないと絶対戦えない。

「簡単だ」

「三つ目、魔力無限」

これ重要。

「良い」

「四つ目、無限の剣製、勿論投影も使用可能。五つ目、王の財宝使用可能」

これこそ反則。

「ウム」

後はオマケに

「最後、レギオスの技全て」

なんとなく入れたが、これと言って深い理由はない。ただなんとなく。

「ウム。強欲だな」

「好きだろう？そつゆつの」

「ふはははは！！良かろう、その答え気に入った」

フツ…なんか神に気に入られたぜ。

「言っておくが、中級悪魔から上はこの力でも厄介だぞ」

マジかよ…キツいな。でも…フェイトの為だ!! やってやろう!!
そして……うへへへ! (何か目的間違ってる)

「ああそれと、ギアスをやるに差し当たって契約者が一人と、此方側からもう二人の計三人を同行させる」

「天界の奴らは渡れないんじゃないのか？」

「こ奴らは特別の中の特別だ。人間と一緒に送れる。何故かは知らんが」

ふん…。

「……美人な女性？」

「………無論」(ニヤリ)

神は斧をバットの様に振り、俺をぶっ飛ばした。

「ぎゃあああああああ……!!!!!!」

こうして俺、大和 一颯の世界救済物語が始まった。

プロローグ（後書き）

さあ、一颯の運命はどうなるのでしょうか…！

感想宜しくお願いします…！

主人公設定（前書き）

— 颯「俺の設定だぜ!!」

主人公設定

名：大和 一颯 やまと いぶき

リリカルな世界ではイブキ・ヤマト

年：20

髪：真っ黒なショート。ワックスで立たせてる。

目：日本人のくせに深い青色。

身長：182

服装：理想としてはデビルメイクライ2のダンテの格好を真っ黒にした感じ。

性格：めんどくさがり、優しい、怒ると怖い、面倒見が良い、少々一人で背負い込むタイプ、恋愛感情に疎い、シスコン（実妹だけ）

好きなもの：和食、美女（クールでナイスバディでロングヘアーな美女）、狐娘、子供（別にロリシヨタではない）、妹（実妹だけ）
嫌いなもの：めんどくさい事、デスクワーク、酸っぱい物、見下す奴。

能力

ギアス：視界に入れた物、触れた物全ての破壊。更に、触れて集中すれば、触れた物の記憶や概念（例えば刃物なら斬る事）も破壊する。

副作用は、ギアスを所持しているだけで極わずかだが、徐々に体を蝕まれていき、使用すれば体に大きな負担がかかる。

無限の剣製 アンリミテッド・ブレイド・ワークス：その名の通り、武器であれば見た物、触れた物を無限に複製する力。しかし、威力は本物よりワンランク落ちる。
発動時には、周りの風景が荒れ果てた荒野と化し、空には多くの巨大な歯車が一つつ回っている。
この力で作った武器は全て魔力の塊で出来ていてるので、任意に非殺傷設定に出来る。

王の財宝 ゲート・オブ・バビロン：自分の背後の空間が歪み、無数の宝具を取り出す力。射出も可。これも魔力の塊。展開時はそ

の場から動けない。
しかし、一颯は……

投影：自分の心を形にする力。しかし、それは、見たもの、触れたものだけを形に出来る。また、物の強化、同調も可。これも魔力の塊。

レギオスの技：そのまま、鋼殻のレギオスに出てくる全ての技。

備考：神によりリリカルな世界を救わせる為に萌え死にさせられた男。家族は父、母、兄、姉、妹がいたが、とある事件により三年前に全員死亡。一颯だけ生き残った。

一颯は一つ下の妹を溺愛していた（妹も一颯を溺愛していたから他人から見ればバカツプルと思われる程に）。

四人の美女との出逢い（前書き）

作者「すみません、待たした上に少し短いです」

一颯「……………死ねばいいのに」

作者「すみませんした……………!!……………!!」

四人の美女との出逢い

「……………」

うん…なんだ…？

「……………」

なにか……………きくえる……………。

「起きるって言っているだろう…！」

「……………」

「グオ!?!」

腹が!?!腹が!?!

「~~~~ツ!?!何しやがる!?!?.....へっ?」

なっ...そんな...ばかな...

「お前がさっさと起きないからだ」

嘘だろ...まさか...この女が?

「ん?なんだ?ジロジロ見て...。そんなに私が美しいか?」

間違いない...コイツは...

「フェリス……エリス……」

「そうか、知っているか、この美貌を」

「……………」

「……………ンン！／／／／冗談だ／／／／」

やっぱり……。

「お前が三人の内の一人名か？」

「そうだ。神の命令でわざわざ蛆虫の様な奴と同行してやっているんだ。感謝しろ」

「……………蛆虫だあ？」

言うじゃねえかコイツ。原作でライナが弄られていいな〜って思ったけど、実際に言われると腹立つな。

「ああ、礼は団子にする」

「……まあそれは置いといて、後の二人は？」

「後ろ」

「ん？…ツ！？」

まつまさか！？そんな…この二人が！？いや…なんだこの組合せ。中の人も一緒、毎日ゴロゴロして食ってばかりと言っ点も一緒。

「はあ…なんだ？何か文句でもあるのか？」

「俺を味方にするんだ…文句は無いだろ？」

何故……

「何故、C・Cと天狐空幻なんだよ！！？」

いや、C・Cは結構有名だが、空幻はマイナーだな。知ってる奴そんなにいるのか？いや人気あつたけど、俺めっちゃ好きだけ。

「フン……お前がギアスなんか貰うからだ……。こちらの礼はピザだ」

「俺はただ暇で、食い物が食えると聞いたから来た」

……うん、まあ取り敢えず……

「お前ら世界救済はどうした！？天界の奴なんだろ！？神の命令なんだろ！？俺と一緒に戦うから来たんだろ！？なのは何だ！？神の命令だから仕方無く来た！？俺がギアスを貰ったから来た！？食い物が食えるから来た！？そんな不純な動機で来るなよ！！もつと正義感だせよ！！！てかギブアンドテイクかよー！？」

はあ…はあ…。ツッコミ疲れた…。
つたく…神よ…喜んで良いのかいけないのかわからん三人組を連れ
てきてありがとうよ(怒)

「で、ここはどこだ？森の中の様だが…」

フェリスが嫌々聞いてきた。…そんなに俺と話すのが嫌なのかよ。

「知らん。ここがどこなのかも、いつなのかも知らん」

「チツ…使えん蛆虫だ。それでも私の奴隷か？」

……はら・た・つー……！！！！

ライナよ、よく耐えたな、尊敬するぜ。
だが俺は耐えられん。よって……

「ここで誰が上かはつきりさせてやる」

フフフ…ここでボロボロ……は可哀想だから絞めてやる。

「ほう…私とやると言っのか。蛆虫で奴隷のくせに。いいだろう…殺虫剤をかけてやるから苦しみを味わうがいい」

……………訂正。……………ぶっ殺す！！！！

「てめえだけはぜってえボコる！！そしてこっちが奴隷にしてやる
……………」

「フン…女奴隷を欲しがるのは、この変態が。まあこんな美人を見たらそう思いたくもなるな」

言ったなコイツ…。変態って言ったな。この俺を変態と言ったな！！

結局、フェリスは何もしないで俺に押し倒され動きを封じられた。

「ふはははははははっ！……どうやら俺の気迫に圧されて何も出来なかった様だな！？さあ、このまま俺に……」

「管理局だ！！その男！！動くな！！」

……………えっ？

いきなり後ろから、C・Cでも空幻でもない女性の声が聞こえた。

管理局？……………あれ？何だっけ……………。いやそれより、この声……………まさか……………。

俺は壊れた人形みたいに首をギギギツと後ろに回した。そこには……

「動くな！！強姦の現行犯で逮捕する！！」

ずっと会いたかった、フェイト・T・ハラオウンがいた。

逢えた…逢えたんだ俺!!やった!!夢にまで見た女性が目の前にいる!!これほど嬉しい事はない!!しかもアニメで見るよりずっと美人だ!!ヤバイ…惚れてまうやる…!!
…ん?今何か変な言葉が出なかつたか?こうかん?好感か?いや…それだと何か合わない。…ツ!?まさか!?

「強姦!?ハッ!?まさかお前、フェイトが来ることを知ってわざとやられたな!?!」

「きゃああああ!!止めて!!助けて!!」

「はあ!?止める!!誤解されるだろうが!!」

「ツ!?バルディッシュ!!」

「ソニックムーブ」

シュン!!

ブウウウウン!!

「ぐひやああああ!!!!」

「ブラズマスマツシャー!!」

ズドオオオオオン!!!!

「ぎゃああああああ!!!!!!!!」

俺は幾つもの光弾が命中し、飛んできた刃が男の大事な所に命中し、太い黄色い魔力砲に吹き飛ばされた。

「ア……………イ……………ア……………」

チーーン……

「「「……………」」」

「ふう…無力化完了」

今起こった惨事を目の当たりにした三人は恐らくこう思っただろう

「「「（幾ら何でもやり過ぎだ！）」「」」

他人から見た俺はもう見るに耐えない姿になってしまっているだろう。それはもう規制が掛かってしまう程に。

- イブキ side out -

- フェイト side -

私ははやてから此処に何かわからないけど大きな力が発生したと聞いて調査に来ただけど、そこには男が危ない表情で女の人を押し倒していた。私はすぐに飛んでいき男を捕まえようとしたけど、どうやら抵抗するようだから無力化した。…ちょっとやりすぎたかもしれないけど。

「もう大丈夫ですよ。男はもう拘束しましたから」

「あっああ…」

…?どうしたのかな?

「あの…大丈夫ですか?」

「えっ?あっいや、大丈夫……かもしれない……かもしれない……かもしれない……かもしれない……かもしれない……」

えっ?どういこと…?」

「おい、これはヤバいんじゃないのか？」

突然横から声が聞こえてきた。どうやらまだ誰かいたようだ。
でも…何がヤバいのかな？

「おい！生きてるか？一颯」

「ちょ！？危ないですよ！？さがって下さい！！」

今度は私と同じ金髪の女の人が男に近づいていった。

「ああ、大丈夫だ。あれは私達の連れだ」

「…………え？」

でもこの人は襲われてたんじゃ…？

「それはコイツが悪ふざけでアイツを嵌めただけだ。寧ろアイツが被害者だ」

え…………それじゃあ…………私…………。

「…………おい…………コイツ…………息してないぞ!？」

「「えつ…………」」

「きゃあああああ!?!どうしよう!?!どうしよう!?!私大変な事を…………!」

「お、おおお落ち着け!?!どうせコイツの事だ!さっきの仕返しでビックリさせようとしているだけだ!おい!?!悪かった!謝るからもう起きてくれ…………!」

「……………」

もしかして……

「良かった！！息を吹き返した！！！！これなら…… シャマル
！？すぐに治療の準備をして！！負傷者を運ぶから！！」

「えっ？フェイトちゃん！？……わかったわ！！準備をしておく
わ！！」

私はすぐにシャマルに念話で連絡を取り、治療の準備をもらっ
た。

「あの！三人とも、空は飛べますか！？」

「あっああ……一応……」

「私もだ」

「俺も」

「良かった！今からこの人を運びますから着いてきてください！」

私は男の人を担ぎ、急ぎ六課へと向かった。

「……………」

「ぎゃあああああ！？！しっかりしてください！…！」

フエイトside out .

リリカルな奴らとの邂逅（前書き）

イブキ「おい……何で早く更新しないんだ？」

作者「すみません……。寝てしまっていました……」

イブキ「……トレース・オン……」

作者「ぎゃあああああああ！？許して！！気をつけるから！！だから剣を俺のアソコに突き立てないで！！」

イブキ「皆さん、すみませんでした。これからはちゃんと土曜日に更新するよう、調教しますから。……ほら豚の様にお鳴き……」

作者「ぶひひひひひ！？」

実際の作者はMではありません。

リリカルな奴らとの邂逅

- はやて side -

さつき、フェイトちゃんが慌てて男の人を担いで戻って来よったけど…。何かあったのかな？それに、三人の女の人まで連れてきよったし。……しかもめっちゃ美人やし。

兎に角フェイトちゃんは男の人を医務室に連れてった。よく見たら男の人の顔や体が ピーー！！ ってなっとつたのは、ビックリしたけどな…。

「フェイトちゃん？一体何があつたん？」

「……はやてえ……グスツ……」

………かわええな…。

じゃなくて…！

「ど、どないしたんや!？」

「私…私……わああああん!?!」

フェイトちゃんは顔をぐしゃぐしゃにして泣き出してしまった。

ホンマ……どないしたんや？

「フェイトちゃん!？」

「なのはあゝゝ!?!ヒック!あああん!?!」

なのはちゃんも駆けつけて来たんやけど、フェイトちゃんは泣いてばかりでなのはちゃんも驚いとるし…。

「あの……一体何があったんですか？」

ウチはフェイトちゃんと一緒に来た三人の美女に聞いた。

「うっ……それは……だな……」

金髪で長い剣を持った美女は、なんや気まずそうな顔をして言葉を濁した。すると、緑の髪の美女が口を開いた。

「それはコイツがかくかくしかじかしたんだ」

「うわっ!?! なんやのそれ!?!」

だからフェイトちゃんが大泣きしてるんか!

「……こんなになるとは予想がつかんだろっ……」

「だからって何でそんな事したんや!?!」

「それが面白いからだ!!」

Sや!! サドや!! 本物や!! こんな人がおるなんて!!

「しかしやりすぎるな。あいつは一応私の契約者なんだ。それに別の意味でも死んだら困るだろう」

「……わかった。少しやりすぎた」

「虐めるのはいいんか!？」

「「いいんだ」」

……ああ……かわいいそんな男の人……。どうか無事でいてください。

プシュー

「ッ！…！シヤマル！…！あの人は！？助かったの！？」

「お、落ち着いてフェイトちゃん！大丈夫、助かったから」

「あ……はああ……良かったあ……！」

どうやら男の人は無事の様やな。

「本当大変だったわよ。体中はピー！！…ってなってるし、顔はバキュウン！！…ってなってるし、それに…男性のアレはズバアアアン！！…ってなってる、もう大変」

うわぁ……。フェイトちゃん…ちょっとやりすぎやな…。それで生きとるのもアレやけど…。

「まあ、後は目が覚めるまで安静にしておく事ね」

「グスツ！よかった…生きてた…！」

なんやその恋人と再開できた様なセリフは…。

「なのはちゃん、フェイトちゃんと一緒に居てあげて？後はこっちでやっとかから」

「うん、わかった。フェイトちゃん、部屋に戻ろう？」

なのはちゃんはフェイトちゃんを連れて、部屋に向かった。

「さて、ほなこっちは色々話しせんとな？」

「」「」………「」「」

「これから忙しくなりそうやわ。」

・はちてside out・

・イブキside・

「……………きる」

う……………ん……………なんだ……………？

「……………い……………る」

なんか……………前にも……………

「いい加減に起きろっつってんだろっつがあ……………!!」

あんなにボロボロにされて……もう駄目だあ……（泣）

「今回はワシが悪かった。で、力だが……」

「きっちりかつちり揃えて渡せ！！今すぐ！！」

そしてお前を殺す！！

「まあ待て。それなのだが、こんなやり方はどうだ？」

「あん？」

「ギアス関係で……」（物凄く真剣な顔）

「……ゴクッ……」

「C・Cと熱……いキスをしろ！！」（光り輝く程の笑顔）

何だよ…どうせまたくだらない話しだろ……。

「あの世界の記憶は無くなる」

………は？

「なっ何故だ!？」

「世界の補正だ。これは神であるワシにも無理な事だ」

そんな……じゃあ、何も出来ないのか？

「それはお前自身の働きによる。さあ行け。世界を救ってくれ」
「まっ待て!!--」

そして俺は意識が遠のいていった……。

- - 医務室 - -

「……ここは…？」

「あ、目が覚めた？」

俺が目を開けると、知らない天井と、知らない顔が見えた。

チツ……本当に消えてやがる……。この世界の事や人の名前まで全部……。

「えつと……誰？」

「私はシャマル。ここは医務室よ。どう？どこか痛い所はある？」

「いや……どこも……。むしろ気分がいい……」

「そう、良かった。あなたの事はあの三人に聞いてるわ」

「そうですか……。俺はどのくらい……」

「丸一日よ。あの怪我で生きてるなんて、もう奇跡ね」

ああ、そうだ。俺、確か誰かに半殺しにされたんだっけ……。

……………無性にフェリスに腹が立って来た。

「もう動ける様なら、皆に会ってみる？。ちよつどお昼だから食堂に居ると思うわ」

……………そうだな、そうするか。

「そうします。…あ、俺はイブキ・ヤマトです。これから宜しくお願ひします」

俺は意図的に名前を逆にした。

何故かって？そっちの方がカッコイイからさ。

「ええ、宜しく」

さてと、行きますか！

- - 食堂 - -

ガヤガヤ… ガヤガヤ…

「うわ……混んでるな……。こりゃアイツらを見つけるのに苦労……
…しなかつたわ……」

アイツらが居る所だけ雰囲気が違うな。カリスマパワーか？

「よう、お前ら」

「「「ツッ!?」「」「」

「「「「?」「」「」

ハッハッハー！みんな色々な顔してんな。驚いたり、気まずそうだったり、誰こいつ？だったりな。

「なんだ、もう起きたのか…。これから寝てるお前を弄ろつと思っ
ていたのに…」

「俺起きて良かったー!!」

危ねー!!フェリスに弄られてたら、大変な事になってた!!

「お前、よく回復したな。天狐である俺でもそうはいかんぞ」

「知らん。俺はダンプに跳ねられても、三十秒で完治した」

まあ今回はそれを軽く超えるダメージだった様だが…。

「あっあのー!!」

「ん?」

金髪の女性が話し掛けて来た。

……………美人だ。

「どづしました?」

「えっど……………」
「う、いめんねー!」

……えつと？

「あゝ…何で…謝るんですか？」

「え！？だって、私が勘違いしてあなたを危険な状態に……」

ああ！この人だったんだ！俺をヤツたの……。

「別にいいですよ。寧ろ謝る必要は有りません。悪いのは全部フェリスだけですから。」「おい！？何で私だけ……」アイツは団子抜きに刑にしますから「やめろ！！止めてくれ！！」「…ね？」

「……はい……」

後ろでフェリスが何か言ってるが、無視だ無視。

「あの…フェイトさん。そちらの人は…？」

赤髪の少年が先程の金髪に質問をした。

「ああ、自己紹介がまだだったな。俺はイブキ・ヤマト。イブキとでも呼んでくれ」

俺達は簡単な自己紹介を済ました。

「あの！イブキさん！神様の使いつて本当なんですか？」

スバルが飯を食っている最中に話し掛けて来た。

「まあ…そつなるな」

「ほえ〜!! 凄いね!? ティア!!」

「わかったから離れなさい!! 一々くつつくな!!」

スバルの奴元気だな〜。
それより……。

「なあフェリス。C・Cはどこだ? さっきから見当たらないんだが……」

「なんだ、気になるのか? まあ、アイツも私には負けるがそれなりに美人だしな」

いや、めっさ美人です!!

「いいから答える」

「ちっ…面白くない。……そこだ」

フェリスは少し離れた所にある、空いているテーブルの陰に隠れていた。

何やってんだ？

「おい、C・C」

「ひゃ！？／／／な、何だ？／／／」

ひゃって……お前？

「一体どうした？」

「どっどっもしない！！！！／／／／」

何か顔が赤くないか？って言うかお前そんなキャラだったか？

「本当に何も無いんだ!!! / / / /」

ふうん……。あっ！そうだ！

「C・C、力なんだが……」

「ほえあ!?! / / / /」

……何? そのユニークな叫び……。

「本当にどうした? 変だぞ?」

まさか、シャルルが言った事を本気にしてるんじゃないだろうな?
あんなの冗談に決まってるんだろ。別の方法が有るって。

マジかよ！？やるのかよ！？アレを！？そんな馬鹿な！？いやでもある意味とんでもないチャンス！？そしてこのままゴールイン！？そうなのか！？そうなんだな！？よし！！！！（混乱状態）

「よし！！やろう！！」

よく考えたら、C・Cは美人だ！！こんな女性と　ピイー！！出来るなんて夢みたいだ！！（最早思考回路がイケない方向に）

「お、おい……。何の話だ？」

「嫌いフェリス！！俺とC・Cの邪魔をするな！！さあ行こう！！二人だけの場所へ！！」

「なっ！！？／／／ちよっ！？／／／おい！！？／／／／」

「なのは！！C・Cの部屋はどこだ！？」

「えー？えっと…階の×号室だけど？」

「させんぞC・C……!!!!アイツは私の専属奴隷だ!!!!」

「俺の飯づるだ!!!!」

ダツ!!

二人は後を追いかけて行き、残ったメンバーは真っ赤になり固まっていたとき。

おまけ

「おっおい!!??/!/!/よせ!!!/!/キスだけでいいんだから

「！！／／／／」

「かまわん！！」

「かまえ！！／／／せつせめて心の準備だけでも！！／／／／」

「ふっふっふっ………いっただっきまーす！！」

「ちよ！？／／／あっ！？／／／「シーツウウウウウウ
！！！！」ツ！？」

バコオオオン！！

「グホオオ！？」

「あっ………」

「かつ………ここ………まで………か………ガクッ………」

かくして、C・C・Cは食べられずにすんだ。

……C・C・Cがちょっとぴりガツカリしていたのは秘密だ。

おまけ2

「ん〜」

「どうしたんだイブキ？」

「C・C……。俺どうやって力を手に入れたんだ？なんか起きたら使えるようになってるし……。しかも、寝る前の記憶がないんだ……。お前知ってるか？」

「……………知らん／＼／＼／」

「そうか……。やっぱりシャルルの悪戯か？」

ちやっかりイブキと（軽い）キスをしていた。・。・。だった。

オワレ……。

戦闘訓練（前書き）

作者「いや、時間遅くに更新ですみません！」

イブキ「遅い！何やってた!？」

作者「……………書いてた話し……………間違えて消しちゃった」

イブキ「……………死ぬ」（ギアス発動）

作者「ごめんなさ……………い……………もつと頑張りますから……………」

どはむんびん…

戦闘訓練

ジュジュジュジュジュジュ……

「うん、うん……」

朝6時、この時間に彼の朝ははじま……

バゴオンー！！

……らなかった。彼は目覚ましを殴りつけ、潰した。

「グ〜……グ〜……」

そして更に眠り続ける。それはもう気持ち良さそうに。

シユン…

誰かが彼の部屋に入ってきた。その誰かは彼を見た後、ゆっくり近付き彼が寝ているベットへそっと入った。

ギユ…

そして彼の顔を自分の胸に当てた。

「グ〜…グ〜…グ？…何だ…これ…？」

彼は目を覚まし、視界が何かに塞がれているのに気づいた。彼はそれを触り、確かめようとした。

もじゆ…

「せん…／／／／」

「…？」

もじゆもじゆもじゆ…

彼は何か解らず、更に触り続けた。

「あん／／／／あつ／／／／んっ／／／／」

「……………」

彼はその正体に気づき、沈黙した。
そして……

「……いただきます!」

「させるか……!」

バキィ!!

「ぐぐぐ!」

それを食べようとしたが、別の誰か二人に殴り飛ばされた。

これが彼のこの世界での初めての朝の始まりだった。

「あゝ痛つて〜…」

「…大丈夫ですか？イブキさん」

「心配してくれてありがとな、エリオ」

「…朝起きたら何故か（理由を尋ねたら顔を赤くして逃げた。何故？）空幻が裸でいたから食べようとしただけなのに…。何でフエリスとC・Cは俺を殴るかな。」

「俺は朝に天国と地獄を味わい、鬱な気分だった。しかもこれから訓練があるときだ。」

「もういいや。死のう。死んで鳥にでも生まれ変わりたい…」

「ほう、なら今すぐ殺してやるから首をだせ」

「冗談であります！！フエリス様！！」

「ならさっさと歩け」

「アイ・ママ!」

危ない危ない…。マジで殺される所だった。…コイツも何か機嫌が悪いし…。触らぬ神に祟り無しだ。………つっても、俺の訓練はフェリスとのワン・ツー・マンだから…。はあく、どんな死亡フラグだよ…。

「おはようございます! ティアナさん、スバルさん、キャロ!」

「おはよう、エリオ!」

「おはよう。朝から元気ね」

「おはよう、エリオ君!」

「キョク〜!」

「フリードもおはよう!」

ああ…あつちの訓練が羨ましい。ちょっとキツいだけで、命に危険が無い。ああ！…なんて平和なんだ…！
それに比べてこっちは…

「さて、どこを切り落としてやろう…。やはり首か？いや、それでは痛みが感じられんな…。耳か？」

訓練と言う名の死刑なんだから（泣）

「何か…ヤマトさん、暗くない？」

「うん…周りが真っ暗だよ…」

「何かあったの？エリオ君」

「朝会った時からあんなだったから…」

ああ…みんながこっち見てる。取り敢えず挨拶を…。

「おはよう…みんな」

「「「お、おはようございます…」「」」

「みんなは安全で楽しい訓練を頑張ってね」

「「「（それなりに苦しいんですけど…）」」「」」

「こっちは必死に生き残るから…！」

「「「（一体何をするの！？）」」「」」

「それじゃあまた必ず会おうな…！」

ダッ！

「「「あっ…！」」「」」

俺はみんなに挨拶をし、一人、訓練場所へ走って行った。

絶対…絶対また会おう!!

「ふむ…。そんなに私と訓練をしたいのか。良いだろう！ズタズタに切り裂いてくれよう!!」

ダッ!

フェリスも意気揚々と走って行った。
残されたフォワードメンバー達はと言つと……

「……………(何かわからないけど頑張ってください!!)」

手を合わせ、彼の無事を願った。

所変わって訓練場所。周りが木で覆われている。そここの開けた場所に、俺とフェリスがいる。

「さて、今回やるのはお前が貰った力の訓練だ」

「ほっほっ……」

「まずは投影、やってみろ」

「わかった。……トレース・オン……」

シューンー！

「よし、成功！」

俺が投影したのは、お馴染みの干将・莫耶。一度使ってみたかったんだよな。

「なら、それで私の剣を受けてみる」

そう言ってフェリスは剣を構え、此方に振り下ろしてきた。…って、いきなり!?

「ちよっ!?!クソ!?!」

バキーン!!

「なっ!?!」

フェリスの剣を受けたら、双剣が一瞬で砕けてしまった。

「だめだな。それじゃあ意味がない。もう一度」

「クッ！トレース・オン！」

今度はさっきより強く魔力を込めた。

「行くぞ！ハアアア！！」

フェリスがまた勢いよく剣を振り下ろしてきた。

カキーン！！

「…ほう、二度目で完成か」

「飲み込みは……俺の得意分野でね！！」

俺は受け止めた剣を押しつけた。

「やるな……」

「そりゃどつも……」

「なら、そのまま私と打ち合え」

「はあ！？そんな無茶な！？……ッ！？」

何だ……？今、変な感覚が……。

「行くぞ！」

「ッ！？？しまっ……」

キーン！

「……よく止めたな」

何だ？体が勝手に…。

「まだまだ！」

キーン！キーン！キーン！キーン！カキーン！！

「（何だ…？何で剣の軌道がわかるんだ？それに…こんなに動けたっけ？）」

今俺はフェリスの剣の嵐を易々と受けたり、流したりと、まるで戦い慣れた戦士みたいに動いている。

「お前、昔何かやってたのか？いくら身体能力が上がったとは言え、そんなに慣れた動きなんかできないぞ？」

「いや…何もしてない。…それに、何故かどう動いて良いのか、頭に浮かんでくるんだ…」

何でだ？俺、生きてた頃何もやってなかったぜ？

「まあいい。それはそれで便利だ。次は頸技だ」

「…わかった」

今悩んでもしょうがない。今は訓練に集中だ。次の技はレギオスのだ。

「行くぞ！内力系活頸・旋頸！」

シュウンー！！

「なっ!?!一発で!?!」

俺は体中から頸…気みたいな物だ。それを出し、纏わした。そして、高速で動けるようになり離れていたフェリスに突っ込んだ。

「チツ!?!」

フェリスはギリギリ避け、俺は通り過ぎた。これは一直線にしか行けないんだよな…。

「お前、天才か?何故使い方がわかるんだ、教えてないのに」

「う…ん…何となく」

これ事実。何故かわかったのだ。

「活頸衝頸混合変化・竜旋頸！」

ズオオオオオン！！

俺は頸の竜巻を起こし、フェリスに放った。

「なあ！？バカが！！」

ズガアアアン！！

フェリスはまたもやギリギリ避けた。

「いきなりする奴があるか！？」

「いや、お前やったじゃん！？」

「煩い！！死ぬ！！」

フェリスは旋頸を使ってるんじゃないかと思う位の速さで突っ込んで来た。

「ぶわああ！？危ねえ！！」

「避けるな！！」

「避けるわ！！」

「黙れ！！」

駄目だ！！コイツ、俺を完全に殺す気だ！！何か方法は！？……八！！まだアレを使ってないじゃないか！！

俺は大急ぎで、フェリスから離れた。

「行くぞフェリス！！王の財宝 ゲート・オブ・バビロン ……
ッ!?」

ギイイイイン！！

あ、頭が…！痛い…！！

「お、おい！どうした!？」

フェリスが何か言っているが、耳に入らない。

「ぐ…おおおおおああ…！！」

バァン！！

いきなり、頭痛が弾け飛んだ。

「はあ…はあ…。一体…何だったんだ？」

「…おい、それは何の力だ？」

「…？何って、王の財宝　ゲート・オブ・バビロン　に決まって…
…何だ、これ？」

俺の後ろには、黄金色に輝く門ではなく……

されていた……。

紫色に輝く魔法陣が幾つもの展開

「（ブチッ）……良いだろう……。貴様がそう言うのなら私は……
……まずはその幻想をぶち殺す！！！」

たった今、戦闘訓練第二ラウンドが始まった。

おまけ

「空幻……何故俺の横で、裸で！寝ていたんだ！？」

「そ、それはだな……／／／／／」

「何だ！？」

「万年発情狐と言っただろう!！」

「言わねえよ!！」

……………鈍感野郎が……。

戦闘訓練2（前書き）

作者「いや、すみません。テストが終わったらすぐに更新しようかと思ったんですが、無理でした！」

イブキ「……………」

「およ？イブキさん、何やってんの？」

イブキ「ん？お前を痛めつける道具を投影しようとしてんだ」

作者「……………」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
……………」

イブキ「誠に申し訳ありませんでした。テストも終わり、更新し易い状況になったので、これからも頑張って行きますので、暖かい目で見守って下さい」

戦闘訓練2

俺が展開した魔方陣は、紫色の円の中に六角形があり、その中に六
暴星がある。円にはよく分からない文字が書かれている。その一つ
一つの中から宝具が出てきている。

すげえ……今まで感じなかった魔力がもの凄く感じる。俺の魔力光
って赤黒いんだな。

俺の体からは赤黒い魔力があふれ出ていた。

……カッコいい。

「おらぁー！いくぞぉー！ー！」

ズドドドドドドドドドド……！！

俺は無数の宝具をフェリスに向けて射出した。

フン…流石のフェリスでもこれは避けられ……はあ!?

「はああああ!」

シュ!シュ!シュ!シュ!シュ!

フェリスはあろうことが、向かってくる宝具を命中する物だけを剣で弾き、避けながら此方に向かってきた。

「んなアホな!」

「私をナメるな。私は天界では一位二位を争う程の剣の腕だ。そう簡単にヤラれはせん!」

そう言いながらフェリスはどんどん進んで来る。

「くそおおおおおー!!」

俺も負けじと射出のスピードを上げた。しかし……

「そこだー!!」

「何!？」

フェリスは視線軸上から飛びのき、俺の後ろに着地し、剣を振り下ろした。

ヤラれる……

「なんちって……」

ズウォン……

「なっ!？」

フェリスの剣が俺に届く前に、俺はフェリスの前に魔方陣をいくつ
か展開した。そして……

ズドドドドド!!!!

宝具を射出した。

この皇の次元武ディメンション・オブ・エンペラーは、名前の通り次元を扱う武器。つまり、俺が認識
している空間なら好きな所に、好きな数だけ魔方陣を展開出来る。
しかもチートな事に、一度でも視た武器なら複製し「本物」として
次元の中に保存し、扱える。しかし、あまりにも強い武器は複製で
きないし、インテリジェントデバイス等の高度の性能の武器も複製
できない。

……これってUBWっている？

「くっ!？」

カン!カン!カン!カン!

フェリスはそれでも反応し、弾きながら俺から離れていった。

「はぁ……………はぁ……………」

「流石だな。息が切れているだけで、まだかすり傷もつけてないとは……………」

「チツ…ボロボロにして永遠の服従を誓わせようという計画が台無しになってしまった……………」

……………力が手に入って良かった!じゃなければ俺は男として何かを失っていた!!

「そうかい、そうかい。そりゃあ良かった。ならもう決めていい?いいよな?てか決める」

「ふん…やれるものならやってみる」

俺はアーチャーが使っていた弓を想像した。

「……トレース・オン」

パン！

そして投影した。

「させるか！」

フェリスが突っ込んできたがそれは予想していた行動だ。

「天の鎖よ！」

ジャララララ！！

「あっ！」

俺は天の鎖を出し、フェリスを縛りあげた。

「くっ！離せ！私はこんなプレイはいやだ！」

「俺だって嫌だわ！！！」

ぜってー決めてやる！！

俺は投影で螺旋状の剣を出した。

「我が骨子は捻じれ狂う……」

そしてそれを物質変換し矢にした。

俺はフェリスの足元の地面に狙いをつけ……

「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）……！！」

シュドン！！

放った。それはまっすぐ狙い通りの所に行き着弾した。

ズガアアアアン！！！！

それは大きな衝撃を生み、フェリスを襲った。

「あああああああ……！！！！」

そしてフェリスは鎖から外され、吹き飛ばされた。

「……………ってやべえ！！やりすぎた！！！」

思った以上の威力だった！！予想外だった！！

「フェリスー！！！！生きてるかー！！？」

俺は倒れているフェリスに駆け寄り、揺さぶった。

「起きろー！！！！死なないでくれー！！！！ふえりぐべえ！！！！」

「煩い。勝手に殺すな」

フェリスは俺を殴り飛ばし、上半身だけ起き上がった。

「まったく……もう少し力を抑えろ。私じゃなかったら体が吹き飛んでいただぞ。……どうした？」

「よ……よ……良かったああ……!!」

ガバア!!

「なっ!?!?!/!/ちよ!?!?!/!/おい!?!?!/」

俺はフェリスが無事だとわかり、嬉しさのあまり抱きついた。

「良かった!!無事だった!!」

「おい！／／よせ！／／／」

「大切なパートナーを殺したかと思っちまった！！良かったぜー！
！！」

ギユウウウウ！

「ッ！？／／／／／」

俺はさらに抱く力を込めた。

「どうしたの！？凄いい爆発音がしたけど……何…やってるの？」

フェイトがいきなりやってきた。

「何って見れば分かるじゃん。フェリスを抱きしめて……抱きしめて？」

OK…状況を整理しよう。俺は今何をやっている？フェリスを抱きしめている。この時点でアウト。

「あわわわわわ！！？／／／／わっ悪い！！／／／つい嬉しくて勢いでやっちゃまった！！／／／」

「ヤツた…？」

「一体どうしたの！？ってええ！？なにこれ！？」

「うわ！ひでえ……」

「うわ〜…周りがめちゃくちゃだよティア！！」

「分かってるから、大声だすな！」

「剣がいつぱい……」

「何があつたんだろ……」

「クキユ」

F W陣＋スターズの隊長と副隊長までやった来た。

「ねえ、ヤツたつて……何？」

「フェイト？何か目が怖いぞ？」

「いきなり抱きついて来て、強引にキスを……／／／」

「何言つてんだフェリス！？」

「「「「……」」」」

「いやー！違つからー！だからそんな目で見ないでー！」

やばいよー！やばいよー！俺変態扱いされちゃうよー！

「……バルディッシュ？いけないことをした人には、お仕置きしないといけないよね？」

「<さ、サー・イエツサー！>」

いやいやいやー！イエツサーじゃないよー！ちょー！？鎌になるなってー！

「フエイト！？何を！？」

「ん……ちょっと切り落とそうかと」

「何を！？」

「ちあー！覚悟しなさいー！」

「いやあああああああ！！！」

その後、俺は夜までフェイトと死の鬼ごっこを繰り返した。

.....

「うっ……ひどい目だった……」

俺はフェイトとの必死の逃避行を続け、結果捕まり、公然の前で
正座で反省させられた。

……ってか何でフェイトはあんなに怒るかな……。ハッ！まさか嫉妬か！？……んなわけ無いだろうが。

「はあ、あ、彼女欲しいなあ……」

おっと、口に出ちまった。今は街に出てるんだから誰かに聞かれちゃう。

俺は夜の街を歩き回った。

こういう時は女性がかからまれてるのがお約束なんだけどな……。

「おいね、ちゃん。どうだ？これから俺たちと気持ちイイ事しねえか？」

……起きたよ。俺の目の前で。

三人の男が一人の女性に寄ってたかっていた。

まったく、居るもんだな、屑ってのは。

俺は女性を助けるべく男たちに近寄った。

「おい、お前ら。やめ」「うづるひゃい！」「っひくんひゃ！」「…ん？」

俺が助けようとしたら、女性が叫び始めた。…ってか、だいぶ酔っているな。

「どづへ、わたひのかふあひゃぎゃえっひいかや、きひゃんへでひよー！？」

おう…そう言えばナイスグラマーで俺の好みのドストライクだな。

「どづへわたひなんへ、おとこどみよがよくひょうしゆるたいひよづでひかありまへんよーでやー！？」

うづん……すごい酔い潰れたな。辛い事があったんだな、きつと…。

「おいおい、いい感じに酔い潰れてるじゃん。ちよづどいいや。連れて行くぜ」

「そうだな。へっへっへ」

男たちが女性の体を掴み、連れて行くこととした。

「あっ…」

「ところがギツチョン！」

バキイ！

「ぐえ！？」

俺は女性の体を掴んでいた男を殴り飛ばした。

「な、なんだてめえ！？」

うわ、そのセリフベタだ。ヤラレ役のセリフって知ってるの？

「お前らなんぞに言う名前なんてねえよ」

「へ！正義の味方気取りの馬鹿が。やっちまえ！」

男たちは全員でかかってきたが、動きが止まって見える。

「気取りじゃない。そうなんだよー！」

五分後

「「「す、すいませんでしたー！！！」」

男たちは無残な姿になり土下座していた。

「もうこんな事すんなよ。したら、男の証をへし折るからな」

「「「は、はい!」「」」

「なら行け」

「「「失礼します!」「」」

男たちは一目散に逃げて行った。

「さて、君、大丈夫か？」

俺は女性の方に向き、尋ねた。

「うう…なんへもありましえ〜ん!」

……あるだろうが。頼むからしっかりしてくれ。このままじゃ目が離せないだろ。

「うん……」

彼女はふらふら歩きだした。……っておい！

「おい！あぶなくバシャン！>……あゝあ……」

女性は近くにあった溝にはまった。しかも、大きいので体が全部はまってしまった。

「大丈夫か？」

「……………」

女性はムクリと起き上り、辺りを見渡した。そして……

「……またやっちゃった……」

と、呟いた。

「……おい？」

「はあ、あ、服も体もドロドロ……。ついて無いな……」

「いや、あの人……」

「まあ、誰にも見られて無いからまだいいか」

「最初から最後までみていたが？」

「……え？」

「……………」

女性はやっと俺に気付いた様で、此方を見た。

「……………見たんですか？」

「……………見た」

「最初から最後まで？」

「最初から最後まで」

「……………」

「……………」

「いやあああああああ！！！！／／／／／」

女性は手で顔を隠して叫んだ。

近所迷惑だぞ。

.....

「落ち着いたか？」

「……はい／＼／＼」

俺達は近くのベンチに座った。

「はぁ……酒を飲むのはいいが程々にしろ」

「……はい／＼／＼」

「もし俺が見つけてなかったら、お前男たちに良いようにされてたぞ」

「えっ!?!うそ!?!」

「本当だ。だから気をつける」

「……はい、気をつけます……」

「分かればよろしい」

俺は女性に説教をし、今後気をつけるように言った。

……にしても……この人、何所かで見たことある様な……。

ここで女性の外見を説明しよう。

身長百六十センチより数センチ高いぐらい。髪の毛はふくらはぎの所らへんぐらいの長さで美しい白髪。それを、黒い大きなリボンで後ろで一つに束ねている。そして目は赤色。服装は肩口からないスーツの様な物を着ており、少し小さ過ぎるのか、そうゆうファッションなのか、へそ出して胸元を大きく開け、青いネクタイをそれにあわせてつけている。そして二の腕辺りから黒い袖見たいのをつけ

ており、それには何やら「コンピュータ的」なのが付いている。そして黒い長ズボン。

……だめだ、思い出せん。

「あ、あの、お名前を聞いてもよろしいですか？」

「ん？ああ、イブキ。イブキ・ヤマトだ。そっちは？」

「イブキさんですね。私は、ハク・スペリアです」

……ハク？ハク……ハク……ああ……！

「弱音ハクか……！」

「えっ……！？」

「あ、いや！何でもない……！ハクか。良い名前だな」

「ありがとうございます／＼／＼」

そつだよ！ボーカロイドの弱音ハクだよ！そつくりじゃん！性格は違う様だけど。

「あの、お礼がしたいので、ご迷惑でなければ連絡先を聴いてもよろしですか？」

なんと！？健気な人だ！あいつ等にも見習ってほしいもんだ！

「ああ、いいぞ。でも別に礼なんていらねいぞ？」

「いえ！これは気持ちの問題ですから！」

そか。なら遠慮するのは失礼だな。

俺ははやてにもらった連絡や雑務専用のデバイスにハクの連絡先を登録した。

ハクは袖のコンピューターらしきものに、俺の連絡先を登録した。どうやら俺のと同じような物らしい。

「登録完了つと！イブキさん、デバイスを持っているってことは、管理局ですか？」

「うーん、まあそんな所かな。民間魔導士って奴だな。ハクこそ、それデバイスだろ？ならハクも管理局なんだろ？」

「はい！」

「なら、仕事先で会うかもな」

それから俺達は、少しの間喋っていた。

「あつ！もう帰らないと！」

「送って行くのか？」

「大丈夫です！こう見えて私、百人抜き腕を持ちますから！」

そうなんだ。なら安心かな？

「じゃあ、気をつけてな」

「はい！それでは、また後日に」

「ああ」

ハクは走って帰って行った。

可愛い人だったな。今更だが俺、連絡先を好感したんだよな・・・
。これがきっかけで二人は・・・なんてな。

「にしても……ハクの魔力…何か変だった様な……。酔ってたから
か？まあいいか」

俺はあの訓練の時から、人の魔力を敏感に感じ取る様になった。が、
この時は気にせず俺も六課へと帰って行った。

この出会いが、イブキにとって運命の出逢いだったと気づくのは、
まだ先の事だった。

魔皇とハーレム王（前書き）

作者「え、この小説は原作と違い時間が違います。最初の任務から時間がだいぶ開いたりしています。例えば、ヴィヴィオと出会って1ヶ月以上経ってから、事件が起こったりとね」

イブキ「それでも良い人は読んで下さい!」

魔皇とハーレム王

朝、機動六課の前に、一人の男がいた。

「ここか、新しい職場は……」

その男の容姿は、青髪で左目は隠れて、見えている右目は緑色で、男の人から見てもイケメンと認めざるを得ない顔だ。身長も高い方で無駄な脂肪も無く、筋肉質でも無い。しかし……

「よし……俺はここで……ハーレム王になる……！」

性格は異常……いや、欲望に素直だった。

「ふうん……中々の人材やね、この人」

「レオン・スラスト一等空尉。魔力ランク陸戦SS+…空も少しは飛べる見たいです」

「クロノ君、凄い人連れて来てくれたよね」

「付添いの人もなんや中々の腕みたいやし…ホンマ助かるわ。イブキ君たちといい、この二人といいえらいついとるな」

「本当です〜！」

ここは隊長室。はやてとリインとなのはが居た。彼女達は、とある資料を見ていた。それは、今日ここに新しくやつて来る二名の隊員の資料だ。どうやら人手不足の六課に、クロノが根回ししてくれた様だ。

「それで、いつ来るの？」

「もうここに向かって来てるらしいけど…」

ピュン！

「お！来た来た。入ってー！」

「失礼します」

噂をすれば何とやら。ちょうどその当人がやって来た。しかし、一人だった。

「本日より、機動六課に配属されました、レオン・スラスト一等空尉です！」

そして、彼は三人を見てから、こう口にした。

「俺と……バラ色の人生を歩んで下さいー！」

「「「……はい？」「」」

この日、機動六課に新たなる波乱^{バカ}がやって来た。

「ふわあ〜ああ……ねむ……」

ああ、眠い。昨日はハクの事考えててあまり眠れなかったな……。別に深い意味は無いぞ？

んで、俺は今隊長室に向かっている。何でも、新しい奴が入ってくるらしいから来てほしいとはやて直々の命令が下ったから、仕方なく、仕方なく、向かっている。そうだ、こうして説明しているついでに、何で俺たちの武器が質量武器なのに、咎められないのか教えておこつ。実は、悪魔を殺すには、特別な魔力、或いはそれ専用の武器でないと傷一つ付けられないらしく、それを説明したところ、特例中の特例で許されているのだ。

……っと、説明している間に着いたか。

ギユイイイン

「はやく、来てやつ……た……ぞ……」

はい、ここで問題です。今俺は何を見たでしょうか？

？はやくが狸のコスプレをしていた

？ヴィータがエターナルロリータを卒業した

？なのはとフェイトが × をしていた

さあ、どれでしょう？

正解は……

「この凡人では眩しすぎる程の美貌……まさに女神！！そんなあなた達を世の中男性がほっとく筈が無い！どうでしょう？ここで出会ったのも何かの縁……どうかこの私と夢の樂園ハレムへと向かいませんか？」

？の見知らぬ男がなのは達を口説いていた、でした。………って待てやゴラァ！！！！

「誰だてめえ！？」

「「「「うお！？」「」「」

「何だその今気付きましたって反応は!？」

「誰だか知らないが、邪魔をしないでくれ。いま大事なところなんだ」

「喧しい!?!なにウチの隊長らを口説いてんだよ!?!」

「いいだろうが!?!美人は大好きなんだ!?!」

「俺もだ!?!……って違うわ!?!……そこ!?!美人と言われて照れるな!?!」

「だって……//」

「なあ……//」

「はいです……//」

「いつら……いや今はこっちだ!」

「で、誰だよお前？」

「お前こそ誰だ？名前を聞く時は自分からだと教わらなかったのか？」

くっ…こいつ、俺が言ってみたいセリフ第十五位を言いやがって！

「俺はイブキ・ヤマト！！民間魔導士で訳あってここにいる者だ！」

「俺はレオン・スラスト一等空尉だ。ここに新しく配属された者だ」

……何？

「そうなのか？」

「えっ？そうやで」

……うそだろ？こんな奴が？絶対気が……合わなくも無さそうだな。

「そんで？お前は一体何の用なんだ？」

「俺ははやてに新人が来るから来いと言われたから来たただけだ」

「ふ〜ん、なら恋人じゃないんだな？」

「こつちから願下げだ」

「ひどっ！？なんやのそれ！？」

うっさい。俺は中途半端なスタイルの奴は興味ない。悪く思うな。

「そつかそつか。なら別にいい」

「…？何がだ？」

レオンは安心した表情になった。

「一つ言っておく」

「……？」

「俺はここでハーレムの王になる。だからお前は邪魔をするな」

「…何だと？」

こいつ今何て言いやがった？ハーレム王だ？ここで？とゆうことは、フェリスやC・C・や空幻にも手を出すって事か？……笑止！！！！

「ざけんな！ここには俺の大切なパートナーがいるんだ……お前みたいな軟派な奴に手を出させるか！！！」

「ほう…。別にそのパートナーと恋人でも無いんだろ？」

「だったら？」

「お前が口出しする権利はねえって事だ。まあ、嫉妬するのは分かるが、お前みたいな奴の事だ。どうせしょうもない女なんだろ？」

ブチッ！！

「言いやがったな…言うてはいけない事を…。俺の悪口は良い、だが！あいつ等の悪口を言う奴は王だろ？が神だろ？が許さねえ！！」

「へえ…俺にたてつくか…。良いだろう！相手してやらああああああああ！！？」

「……は？」

突如、自称ハーレム王のレオン・スラストが上に吹っ飛び、天井につき刺さった。

「まったくもう…。此処でもバカなことやってるんですか…」

ん？この声…確か…。

俺は声がした方を向いた。そこはレオンがいた所で、予想するにその人がレオンを蹴り上げたのだろう。その人物の顔は、とても長い白髪で赤目、髪は後ろで黒い大きなリボンで一つに結んでいる。

「……………あ」

「……………え？」

「「あああああ！！？」」

その人物は昨日出会ったハク・スペリアその人だった。

「ハク!？」

「イブキさん!？」

「ん?なんやあんたら知り合いなん?」

「え!?あ、あの、それは…」

「ああ、昨日街に出てただろ?その時に道に迷ってお世話になったんだよ。なっ?」

「え?あ、はい!そうです!」

管理局の人が酔っ払って男に連れ去られかけてたって、言えないよな。

「それよりどうしたんだ?」

「あっ!」

ハクはいきなり姿勢を正し、敬礼しました。

「本日付で機動六課に配属する事になりました、ハク・スペリア二等空尉です！宜しくお願いします！」

……what?何だつて？

「それ…本当か？」

「はい。そこに垂れ下がっている変態の付添い人として来たんです」

「……こいつの付添い人？とゆうことは、今まで一緒の職場だったという訳だから。。。」

「ハク！こいつに何かされたか！？」

「えっ!?!？」

俺はハクの両肩に手を置き、問いただした。

「このバカにセクハラとかされなかったか!？」

「え、えつと…//大丈夫です!//される前に殴り飛ばして
いますから!//」

「何!?!ということとは、しよつとしていたんだな!?!この野郎!?!
こんな可愛いからってそんなことするなんて、女に集られる前に警
察に集られてる!?!」

「か、可愛い!?!//」

俺は現在進行形でぶら下がっているレオンに投影した棍棒で突きな
がら怒鳴った。するとレオンは、足をばたつかせ始めた。

「ねえ、もう降ろしてあげた方がいいんじゃないかな…」

「…チツ！命拾いしたな」

ズボツ！

俺はレオンの脚を掴み全力で引っこ抜いた。

「ぐえ！？」

そのせいか、レオンは首を思いつきり捻った様で、暫しの間悶絶していた。

「…てめえ、よくもやりやがったな」

「うっせ！てめえこそ、ハクにセクハラしてんじゃねえ！」

「おい、何でハク的事知ってんだよ？」

「お前には関係ない」

ふん、何でお前に知らせないといけないんだよ。

「さてはお前、ハクを狙ってやがるな!？」

「えっ!?!?!?!」

「んな!?!」

「そうなの!?!」

「いやいや、信じるなよ!?!」

「ほんなら、何でハクちゃんの事でレオン君に怒ってたん?」

「いや、それはそうだろ!?!セクハラだぞ!?!怒るだろう!?!」

「ホントですかね?」

「リイン。何だその言いふらして来ます的な顔は！？頼むからやめてくれ！！」

畜生！何で俺が弄られてんだよ！？確かに、ハクは美人で尚且つ可愛いし、髪も長くて綺麗だし、スタイルも性格もドストライクだけどー！！……あれ？そうゆう要素満点じゃね？つてかあれ？何か顔が熱く……

「あつ！イブキさん、顔が赤くなってるですぐ！」

「ウソオ！？」

マジか！？何故だ！？別に俺はハクの事なんか好きって思ってねえぞ！？ちよと！？ニヤニヤすんな！！

「……許さん」

「ん？どないしたんや？」

「許さんぞ！！ハクは俺の楽園の一員だ！！誰の手にも渡さん！！」

「誰がですか！？嫌です！！」

レオンがいきなりハクは俺の嫁宣言をしだした。
ハクはそれに全力で拒否した。

「今はそんなんでも、何時かはデレ期に入るんだ！！それを横取りするなんて杉○鍵が許しても俺が許さん！！」

「誰ですかそれ！？」

レオンが何故そいつを知っているかはこの際どうでもいい。つまりこいつはあれだ、漢なら正々堂々と奪い取れと言っているって事だ。……良いだろう。その言葉、聞き入れようじゃないか。ちょうどはやてに話していた「アレ」にもってこいだ。

「レオン、俺と勝負しろ」

「何？」

「お前が勝つたら、俺はお前のハーレム道を邪魔しない。寧ろ手伝つてもいい」

「ほお、中々いい事言つじやねえか。で？お前が勝つたらどうすんだ？」

「俺が勝つたら……」

「ハクを貰う……！」

「……………へ？」

「ほっ」

「例のアレの手続き、頼むな？」

「ああ、アレね。任しとき！」

さて、これで文句無いはずだ。

「良いだろう。約束だ」

「よし。……ハク」

「は、はい！／／／／」

「そつゆう事になってしまったが、無理ならいい、断わってくれ」

「え、えつと……／／／」

「俺と来るって事は、とても危険な道を辿るって事だ。しかし、俺は一目見た時から確信した。お前なら十分にその素質がある」

「……私で……いいんですか……？／／／」

「お前じゃないと、駄目なんだ」

お前じゃないと駄目なんだ…お前じゃないと駄目なんだ…お前とじやないと駄目なんだ…お前じゃないと…

ズキユウウウウウウウン!!!!!!

「は…はい…//喜んで//////」

「ありがとう!」

こうして、イブキとレオンの女を賭けた戦いの幕が上がった…。

魔皇VSハーレム王(前書き)

作者「連続投稿!!」

イブキ「良くやった!!」

作者「燃え尽きたぜ……真っ白に……」

イブキ「燃え尽きるなよ!? もっと頑張れよ!?!」

魔皇VSハーレム王

前回のあらすじ。

突如機動六課にやって来たハーレム王、レオン・スラスト。

彼は、機動六課の女性を我がものにしようとしていた。

しかし！同じく機動六課にいた神の使いイブキ・ヤマトがそれに立ち塞がった！そして彼は、ハーレム王の部下である、ハク・スペリアを貰うと宣言した！

さあ！一体どうなってしまうのか！？

「お前は何をやってんだはやてえー!？」

「え？読者の皆に「言つなそれ以上」もう、なら言わせんといてえな」

こいつ……何時かしばく。

まあ、はやての言った通り、俺はレオンと勝負をする。フェリス、
C・C、空幻以外の勝負は初めてだが、大丈夫だろ。…え？C・
Cと空幻も戦えたのかって？ああ戦えるとも。C・Cは天界で

格闘技を一位二位を争う程で、空幻は術は天界一らしい。
昨日帰って来た後に模擬戦をやってもらったが、拳で地面は半径1
0メートルが砕け散るは、炎や雷や水やら木やらが延々と迫って来
るはでそれはもう大変だった。

「んまそれは置いといて、はやて。一つ言いたい事がある」

「なんやの?」

「なんで……機動六課全員集合してんだよお————!!?」

そう、今はあのバーチャル的な訓練場にいるのだが、風景がまさに
闘技場になっていて、観客席に六課の隊員全員が座っている。お前
ら仕事しろお!!

「だって面白いやないの!イブキ君って実は結構人気やねんで」

「え?そうなのか?」

「そうやで!なんせ神の使いやねんからな!」

それはスバルが言っただけなんだが。まあそれには少しだけ近かったから肯定したけどさ。

「さあ賭けた賭けた！イブキ・ヤマトとレオン・スラストの女を賭けた勝負！五千から！はい、賭けた賭けた！」

「おいはやて！管理局がそんなんで良いのか！？」

「外にはれんかったら良いねん！」

ええー……。。

「はやて部隊長！俺イブキに五万ツス！！」

ヴァイス……後でエロ本をあげよう！

はやては観客席で賭け金を集め始めた。
何人がレオンにも賭けていたが、嬉しい事に俺に賭けてくれる人が多かった。

あいつ等も賭けてくれてんのかな？

俺はフェリス達を探した。

いた。しかし…

何でそんなに怖い顔してんだよ!?

三人はまるで鬼神もびっくりする程の形相をしていた。

俺、何かしたか？

「イブキの奴…奴隷の分際で私以外の女を選ぶだと…？。後で調教し直してやる」

「私とキスをしておきながら（イブキは気絶していた）他の女に手を出すだと…絶対に後悔させてやる」

「イブキは俺のもの、イブキは俺のもの、イブキは俺のもの、イブ

キは……」

まあ、後で団子とピザと甘い物をやればいいか。
さてと……。

俺は少し離れた正面にいるレオンを見た。

「おうおう！美人ちゃん可愛子ちゃんがいっぱいいるじゃん！でも？
お前の言うパートナーはどいつだ？」

「……あそこで鬼神の如くの形相してる三人」

俺は指をさした。

「……怒った顔でもあの美しさだと……？前回の発言は撤回させても
いい？」

「……怖くて言えないからだろ？」

「……………うん」

そつだよな、言えないよな？なんせ足が三つに見える程震える怖さだぞ？逆らえねえよ。

「両者、準備を！」

はやてがマイクで叫んだ。準備つて……バリアジャケットなんか無いぞ？

「よし！俺のカッコいい姿を目に焼きつくせ！」

レオンがそう言うと、首に掛っていた小さい黒い棒のネックレスを首から取った。

「ギレン！！セットアップだ！！」

「<おつしやー！…！セットアップ…！…>」

どうやらそれはデバイスだったらしく、受け答えた。そしてレオンは白い光に包まれた。そして光が消え、出てきた姿は . . .

何でDMCのネロの白版なんだよ！？お前絶対知ってるだろ！？てかデバイスがゲイ・ボルクの黒版！？あ、でも刃の付け根に青い宝石が付いてるけど！

「さあ！お前もセツトアップしろ！」

と言ってもな。俺デバイス無いし。 . . . そうだ！投影すれば良いじゃん！ . . .
となれば、ネロときたからダンテといこう。

「 トレース・オン」

イメージはDMC2のダンテ。手袋は指が出る奴に。そして服の色は全て黒に。

パン！

「…………予想以上の出来栄だ……」

何だこれ……。ヤバい、惚れてまう……。

「…………黒が。いいねえ！白と黒で対になってるじゃねえか！」

あ、ホントだ……。それだと色的に俺が悪役じゃねえか！？

「それでは…………始め……」

「そらあ……」

レオンは合図と共に此方へ突っ込んできた。

「これしきー！」

パン！キーン！

俺は干将・漠耶を投影し、突いてきた槍を防いだ。

「まだまだ！」

レオンは高速の突きを連続で繰り返してきた。
が、訓練のおかげで全て見える！

「なんのぉ！」

キーン！キーン！キーン！キーン！

「見切った！」

「何!？」

ガキインー!!

俺は双剣で槍を挟んだ。そしてそのまま横に飛ばし、レオンを蹴り飛ばした。

「ゲウツ!？」

レオンは少し離れて着地した。

「どうしたハーレム王?大口叩いていた割に大した事ないな」

「へっ!どうやら甘く見てた様だ…。お前、タダ者じゃないな…。」

「こっからは本気で行くぞ!!」

ほう、魔力が上がったか。こりゃ、こっちも本気で行かないとまずいな。でもあの速さは面倒だな…。なら此方も速さで対応してみるか!

俺は双剣を消し、次なる武器を心に浮かべた。

速い斬撃がいい。となると俺が思い浮かべるのは刀…。そうだ! 閻魔刀にしよう!

「トレース・オン!」

バチン! ギガツ! ギギギツ!!

「ッ!? グアツ!?!」

突如、頭に激痛が走った。

この感じは……あの時と同じ!?

「アアああ!？」

パン!!

「はあ……はあ……」

「ん?お前、双剣だけじゃなかったのか……ってか双剣もだがそれ
って質量武器じゃないのか?」

「大丈夫……だ……はあ……人は斬れないようにしてある……」

何だったんだ?この痛みは?結局何にも変化無かったし、閻魔刀も
ちゃんと……

「何だ……これ……？」

俺が投影した物。それは……

全てが漆黒に染まり、赤黒い魔力のオーラが全身に纏っている日本刀だった。

何だよこれ……ッ!？

今度は何かの情報が頭に流れ込んで来た。

「ファオルネス魔皇刀………？」

イブキ said ant

フェリス said

「あれは!?!」

何故だ!?!何故あいつがアレをだせた!?!アレは!

「フェリス……」

「ああ……わかっている……。C・C、何か神から聞いていないのか?」

「何も……。空幻、お前は?」

「俺も知らん。…いや、そもそもアレが出る筈がない。アレは悪魔…
…しかも上級の中の上級の奴しか持てない代物だぞ？」

そつだ…アレは人間が触れる物ではない。アレは伝説の魔具…

「魔の皇帝…魔皇ヴァルネスの刀…」

一体…あいつは…。

フェリス said aut

イブキ said

「魔皇刀…」

すげえ……

この刀に込められてる魔力半端ないぞ…。

「お前……その刀は何なんだ？ 禍々し過ぎるぞ」

確かに禍々しい……。だが、俺には丁度いい！

「なんだ？ 怖気づいたのか？」

「ッ！ 言ったな……その言葉、後悔させてやる！ ハア！！」

レオンは突っ込みながら槍を突いてきた。
だが遅い！

「フン！」

ガキン！

「チイ！？」

俺は鞘に納めたまま槍を受けた。

「今度は此方から行くぞ！！」

俺は受けたまま刀を抜刀し、レオンに向かって振り下ろした。

「うお！？」

その黒い刀身はレオンが反射的に避けたため、空中を斬った。レオンはそのまま離れた。

「離れても無駄だ！」

俺は居合いの構えをとった。そして……

斬！……チン……

「ッ！何！？」

斬斬斬斬斬斬斬斬！！！！

多くの斬撃が、レオンを襲った。

「ぐわあああ！！？」

レオンは幾つかは避けたが避けきれず、斬撃の餌食になった。

どうだ？手応えは感じたが……フツ……流石だ。

「チツ！この俺が防御に専念するとわな……」

レオンは立った。少しボロボロなだけで、ピンピンしていた。

「大した奴だ！お前となら、親友になれそうだ！」

「偶然だな。俺もそう思ってたところだ！」

「へへっ！そうか！なら俺達は今日から親友だ！その祝いに俺の切り札を見せてやる！ギレン……！」

「<OK……>」

レオンは槍を胸の高さに持ってきて横にした。

「行くぞ…ブリューナクモード!!」

「<ブリューナク!!>」

レオンがそう叫ぶと、ギレンが黒に光出し、槍の形が変わり始めた。

ブリューナク。それは彼の英雄クー・フリーンの父、太陽神・ルーが持つ槍。それは五本の矛先を持ち、突けば五本の雷になり、投げれば五本に分かれ全てが必中の槍になる神話の武器。それをレオンが使うのか？

光が止み、ギレンが姿を現した。

その姿は、一回り大きくなり、五本の矛先を持っていた。

やはり…。

「これは地球って言う所の神話を元にしてプログラムした武器だ！

お前にこれが防げるか！？行くぞギレン！！」

「<OK!>」

レオンは魔力を槍に溜め、投擲の構えをとった。

…チツ！厄介な！どうする？やはりアレか！

「…I a m t h e b o n e o f m y s w o r d」

俺は刀を鞘に納め、詠唱した。

「ブリューナク！！」

「織天覆うくロー>…」

「当たれくイブル>…!!」

「七つの円環<アイアス>!!」

レオンはギレンを投げた。

俺は、投擲に対して絶対的な威力を持つ、七つの花卉の盾を投影した。

ガアッ!!!

「うおおおおお!!!!」

「いけええええ!!!!」

レオンの槍と俺の盾がぶつかりあった。

くっ!?!きつい!?!なんて威力だ!?!もう三枚も碎け散っただと!?!?

「くっ!!.....ッ!?!?」

「ガハアツ!!!?」

バアアン!!

そして制御を失った盾は破られ、残りの四本も全て俺を直撃した。

ドガアアアアン!!!

そして、土煙が舞い上がり、何も見えなくなった。

イブキ said aut

ハクスaid

どうなったの？イブキさんは？土煙で見えない…。

「これは…流石のイブキ君でもひとたまりないで…」

隣に座っていた八神部隊長が呟いた。

確かに、あの技はレオンさんの最強の技。今までアレを使われて立っていた人はいなかったけど…。

「イブキさん…」

どうか無事でいて下さい…。

やがて、土煙が止んできて視界が開いてきた。
すぐさまイブキさんがいた場所を見た。しかし…

「えっ？いない？」

そこにはイブキさんの姿が無かった。

何で？避けたの？でも直撃した筈じゃ…。

「おい！ヤマトさんは！？」

「わかんねえ！」

他の人達もイブキさんを確認出来ていなかった。

「あ！いたぞ！！」

「どー！？」

「あそこだ！あの端の壁に！」

端？どこ？

私は男の人が差した方向の壁を見た。そこにはイブキさんがいた。

壁にめり込み、ぐったりしているイブキさんが……。

「イブキさん!？」

そんな……負けたの……？

「ヤマトさんがやられただど!？」

「そんな！？せつかく一万も賭けたのに!？」

「イブキさん……」

私はうつむいて目を逸らした。

「……ん？おい！まだ終わってねえぞ!！」

……えっ？

「ホントだ!!ヤマトさん!!頑張ってくれ!!！」

観客の声で私は顔を上げた。そして目に映ったものは、肩で大きく息をしながら立っているイブキさんだった。

ハク said a u t

イブキ said

「はあ…はあ…くそ…」

ヤベえな、これ…。なんつー威力だよ…。

「おいおい、冗談だろ？これを使って立っている奴なんている筈がねえ」

「はは…なら俺が初めてって事が…。中々の攻撃だったぜ。肋が四本砕けてるぜ………」

「大丈夫かよそれ!？」

「やった本人が何言ってるんだ…。こんなので一日寝れば治る」

「それはそれで、結構傷つくな……」

いいじゃねえか別に。

てか冗談言ってる場合じゃねえな。これ以上は戦うのがキツイ……。
ここは強力な技で一気にやるしかねえな。

「レオン、正直言ってもうこれ以上戦うのは無理っぽい」

「なら降参するか？」

「冗談！最後に俺の切り札の一つを見せてやる」

「ハッ！そう言われて黙って見せられるかよ！」

そこは見よつぜ…。

レオンは槍を前に突きだし、突っ込んできた。

「I am the bone of my sword」

俺は弓をと螺旋剣を投影し剣を矢に変え、レオンに向けた。

「そらあー!!」

「…偽・螺旋剣（カラドボルク?!）」

シュドン!!

「ッ!？」

「弾ける…壊れた幻想!!」
フロックン・ファンタズム

ドガアアアアン!!!

レオンは放たれた弓を咄嗟に槍で防ごうとしたが、壊れた幻想により大爆発した事によって大きく吹き飛ばされた。

これを吹き飛ばされただけにするとはい…。こいつなら悪魔と対等に渡り合えるんじゃないかね？

「くそっ！？何だっつてんだ！？」

レオンはいきなりの事に混乱していた。

好都合だ。

「…Steel is my body and fire is my blood」

パン！

俺はこの隙に、干将・莫耶を投影しレオンに向かって投げた。

「I have created over a thousand blades」

そしてまた投影し、投げた。

そしてそれは、レオンの周りで引き寄せ合い、くるくるとレオンの周りを回り始めた。

「ブローケン・ファンタズム壊れた幻想」

ドガアアアン！！！

そして爆発させた。

「うわああああ！！！！？」

それを喰らったレオンはまた吹き飛ばされた。今度は少し対応が遅れたのか、傷を負って。

しかし、レオンはすぐに立ち上がった。肩で息をしているが、戦いの意思は消えて等いなかった。

「……………」

俺は地面に転がった魔皇刀に手をかざした。
すると、刀がかたかたと動き出し、地面から抜けて俺の手に飛んできた。俺はそれを掴み、居合いの構えをとり、魔力を溜めた。

「Unknown to Death
o Life
Norknownt

そして抜刀した。

「魔人衝斬！！」

黒い波動がレオンのいる場所を斬り裂いた。

ズバァン！！

「ぐはぁあ！？」

レオンはそれを避ける事が出来ず、まともに喰らった。

「がぁあ！……まだだ……まだだまだだまだだ！……ギレン！！！！」

「<OK!>」

「ハアアアア！！」

まだ魔力が溢れ出てくるか！凄いな…何も苦労しないで力を得た俺なんてちっばけに見える。だが…だからこそ負けられない！！

俺は刀を納め、詠唱に入った。

「…Have with stood pain to created many weapons」

「オラアアアア！！！」

レオンが突っ込んで来る…。

「Yet, those hands will never hold anything」

槍が此方に伸びてきた…。

「S o a s I p r a y ……」

U n l i m i t e d B l a d e W o r k s
「」

「ッ！？」

レオンは俺から出てきた炎に驚き、動きを止めた。

「な…何だ…これは…」

レオンは辺りを見渡し、目を見開いた。

それもその筈、辺りの景色は荒野が広がり、空には巨大な歯車が幾つも有りその一つ一つが回っており、地面には無限の剣や槍が刺さっているのだから。

「ここはもう俺とお前だけしかない。決着をつけよう、レオン！
！」

かくして、後にこの勝負は後世に語られる戦いになったのである。

「ああ〜い〜た〜い〜」

「誰に？」

「痛い違いだ……」

俺とレオンは医務室のベッドの上で騒いでいた。

結局、あの戦いは俺のギリギリ勝ちで終わった。

本当にギリだった。なんせあの後、ブリューナクを百回喰らった。レオンも剣の雨を喰らってポロポロだ。

……確か俺は、肋骨全部と両腕を骨折＋内臓に中ダメージで、レオンは脊髄以外の骨を軽く折った。よく生きてたな、俺ら。

「もう…やりすぎですよ…。限度っていうものを知ってください」

シヤリシヤリシヤリ…

ハクが隣で林檎を剥きながら言ってきた。

「ホントに大変だったんですからね。いきなり二人が消えたと思ったら、急に出てきて、レオンさんが倒れて、八神部隊長が終了の合図を出した途端にイブキさんも倒れるし…。私とシヤマルさんがすぐに治療しなかったらどうなってたか…」

…うん。説明ご苦労さん。

ハクの言うとおりで、俺達は本当にボロボロで二人がやってくれなかったらどうなってた事やら。

「悪い。つい熱くなり過ぎて…」

「わりい…」

「でもハクの回復魔法って凄いな！やり方はアレだけど」

「確かにすげえな。アレだけど」

「…褒めているんですか？貶しているんですか？」

ハクの魔法は凄まじかった。シャマルの魔法よりも効果が桁違いだった。

でもそのやり方がな……。

実は、ハクはレアスキルの所有者で、弓と様々な能力が有る光の矢を具現して戦うのだ。

…分かるだろ？つまり、治癒能力がある矢を体のあちこちに打たれた訳だ。

一瞬殺されるかと思った。

「でも俺はこうして怪我して良かったと思ってるぜ」

「え？何？お前そうゆう趣味なの？」

キモ……。今すぐ縁を切ろうかな。

「違つつっの！俺はこうしてハクに林檎を剥いて貰つてる事に喜んでんだ！」

「何言つてるんですか？レオンさんの分は有りませんか？」

「……………え？」

「はい！イブキさん！剥けました！」

「……………え？俺？」

ハクは笑顔で林檎を差し出してきた。

「ちょ！？俺のは！？」

「有りません」

「ガーン！！！！」

レオン…哀れな…。

「はい、あ〜ん！」

「なっ!?!?!?!」

「ガガーーーン!!!!」

あ〜んって!?!?食べさせてくれると!?!?

「あ、あ〜ん…?!?!?!」

シヤク…

「美味しいですか？」

「…う、うまい?!?!?!」

「よかった!」

は、はずかしい…。

でもうれしい…。

何だ…この高まる感情は…。

「チクシヨーーー!!!羨ましんじゃボケーーーー!!!」

「……フッ!」

「な!?!てめ!表出る!ぶっ刺す!!!」

「煩いです」

「…すみません」

レオンはハクの一言で沈黙した。
うん、俺もあんな怖い声で言われたらああなるよ。

「これからは毎日させてもらいますから！」

「え！？／／そつそれはちよつと…／／／」

「補佐官として一生懸命頑張ります！」

「うん、補佐を頑張つてね、補佐を」

ここで補佐とはどういう事が説明しよう！

実ははやてにある話をしていた。それは、対悪魔戦専用部隊を作りたいと言う話だ。そうしておけば、管理局本部が悪魔関係以外の仕事を俺たちに頼んで来れないように出来るからだ。はやては機動六課のスターズ隊、ライトニング隊に続くものならと許可をくれた。その時、「メンバー以外の事ならウチに全部任しとき！」とはやてが頼もしい事を言ってくれた。俺はこの事を一生忘れはしないだろう。…つと、話がずれたな。まあそんな訳で、フェリス等三人は当然決まりだが、どうしても補佐が欲しかった。三人はそんな事してくれないし、どうしようかと悩んでいる時に出会ったのがハクだった。

ハクはあのバカの部下だ。という事は、補佐にはもってこいだ。それに後から気付いたんだが、ハクの魔力は普通とはちよつと違い、何故か悪魔に通用するものだった。

フェリス達もそれに気づいたが、何故かはわからなかった。……あゝ、つまり何が言いたいのかと簡単に言うと、個人的にハクが欲しかったと言うことだ。いや、恋愛とかそおゆうのじゃないよ……多分。

でも何でハクは補佐のこと宜しくって言ったら落ち込んだんだろ？それに何か「個人的って言ってたし、チャンスは……」ってぶつぶつ言ってたし……やっぱ嫌だったのか？

「はい、あゝん？」

う……まだやるのか……。恥ずいって……。

「あゝ」「おいイブキ、団子を持ってきて……」「……ん？」

「イブキ、喜べ。ピザを……」

「イッブキ〜！ケーキを持ってきてやつ……ほづ……」

………何かマズイ。何かマズイ！非常にマズイ！！

「レオン！ほら、美人さんに御挨拶を！！！」

「……あ、ムリ」（ガタガタガタ！）

おいハーレム王！何怖気づいてんだ！？それでハーレム目指すとか言っちなよ！？

「私がせっかく奴隷が頑張ったから褒美に団子をやるつもりでいたが…どうやら褒美はもう貰っている様だな…？」

「い…いえ、そういうつもりは…」（泣）

「そんなに「あ〜ん」が良いなら、私もしてやるのではないか」

「C・Cさん？何でピザを投げる格好をしてるんですか？」

「そんなに熱々になりたいなら、俺がしてやるっ」

「空幻さんも、何故狐火を溜めているんですか？」

はは…せっかく生きながらえたのに死んだな、俺。

「この大馬鹿者が!!!」

「ぐふえ!?!」

ちよっ!?! 団子をそんなに口に!!! がは!?! く、串が!?!

「あら、あ〜ん!?!」

「ひーふー!?! (C・C・い!?!?) (ベチャ! あひ〜!
あひ〜!) (あち〜! あちいいいい!?!)」

ピザをパイ見たいに投げるな!!! あちいいいい!!!

「ほら、熱々にしてやる。ボウッ!」

「それは本当か？」

「ハッ。コノ目デシカト見テマイリマシタ。アレハタシカニ魔皇刀
デゴザイマシタ」

「そうか……。わかった。行け」

ここはとある廃墟。

そこには一人の若い男と、とても人とは思えない異形な姿の生物が
いた。

男は生物からの報告を聞き満足げにその場を去った。

そして、また違う廃墟に男は現れた。

今度は他に四人いたが、全員ちゃんとした人だった。

「父さん、イブキが目覚め始めたぞ」

「ほう、やっとか。神に感謝だな」

四人の内の一人である、ダンディーな男が知らせを聞いて嬉しそうにした。

「良かったわ。あの子、何にも知らないから心配だったのよ」

同じくそこにいた女性が言った。

「でもアイツ、案外鈍感だからなー。自分の力に気づくかしら？」

別の女性が言った。

「アイツなら大丈夫だろう。心配なら、私達から気づく用に仕向け
れば良い」

ダンディーな男が言った。

「そうだろう？
…」

ダンディーな男が見る先には、なのはやフェイトぐらいの女性がい
た。

「ええ。そうでもしないと、絶対に気づかないわ。私の事だっ
てそうだったもの」

その女性は、昔を思い出す様に言った。

「待ってて。もう少しで会えるからね……」

愛しいイブキ……」

今、イブキにとって最大で最悪の間が動こうとしている……。

派遣任務？（前書き）

作者「ハッピーニューイヤー！！」

イブキ「明けましておめでとございますー！！」

作者「早速今年初投稿！！前半後半に分けていますー！！」

イブキ「それではございませー！！」

派遣任務？

はい、どもども。対悪戦専用部隊、エンペラード隊の隊長、イブキ・ヤマトです。

只今俺はへりの中にいます。何故かと言うと、地球にロストログアが発見されたらしく、それを回収するために向かっているのです。

しかし、へりの中では大変な事になっています。

レオンの周りから女性陣がいなくなり、レオンを汚い物を見る様な目で見ているのです。

何故こうなったのかと言うと、少し前にさかのぼります。

「なあ、お前も地球出身何だよな？」

「あん？」

なのはやはやてが地球出身の事で話をしていた時に、レオンが聞いてきた。

「そう言えば、そう言っていましたよね」

エリオが思いだした様に言った。

「そうだけどさ…俺がいた地球はまた別の世界のだよ」

「え？そんなんですか？」

「ああ。平行世界って言った方が良いかな？」

「平行世界？」

「ああ。詳しく知りたいなら、フェリス達に聞いてくれ。俺じゃあ上手く説明出来ない」

「え？わかりました」

「あ、でもフェリスはダメだ。絶対何か余計な事を吹き込む」

「はあ…」

絶対俺の事で吹き込むな。俺が奴隷とか、俺が下僕とか、俺が召使
いとか。

「で？レオン、まだ何か聞きたいのか？」

「おうよ！これは真剣な話だ」

「…何だ？」

「地球には…」

「地球には？」

「……美女美少女が沢山いるか？」

聞いてきたレオンの目は、まるで獣だった。

「「「「……「「「「」」」」」

そして現在の状況になる。

「何故、そこまでドン引きされるの？」

「お前の目がヤバいからだと思っ」

俺も離れたい。

「エリオ、キャロ。あの人に近付いちゃ駄目だよ」

「フエイトちゃん、それは酷くない？」

「馴れ馴れしく呼ばないで下さい」

「ガン!!」

哀れハーレム王。安らかに眠れ。

「いや！俺は挫けない！！俺は俺を貫く！！」

いや、カッコいい様でカッコ悪いから。

「で!?!?どうなんだ!?!?」

「肩を掴むな、揺らすな、息が荒い」

「ああ…悪い」

ったく……。美女ねえ……。

「わかんねえや」

「は！？お前男だろ！？女性のケツを追っかけたことぐらいあるだろ！？」

「無いわんなもん！！」

「ウソだ！！！！」

「ひぐ○しゃめい！！ってか何で知ってたんだ！？」

「気にするな！！早く答えろ！！」

答えろって……。美女美少女か……。

「」「」「」「」……「」「」「」

「あの…皆さん？どうしてこっちを見るのですか？」

「え？いやだって、イブキ君が惹かれる女性ってどんなんだろうか
なって、にやはは…」

「そやな、あの鈍感なイブキ君がそう思う人ってどんなのか気になるわ」

おい、誰が鈍感だと？そんな筈はない。

「それに、個人的に聞きたい人もいるしな。なあ？フェイトちゃん」

「え！？そっそうだね！（はやて！／／／何で私に振るの！？／／／）
「／」

「（え？だって聞きたいんちゃうの？）」

「（そっそれは！／／／…そう、だけど…／／／別にただ気になるだけで！／／／）
「／」

「ちょ！？おまつ！？恋人居たのか！？」

「ん？ああ、悪いか？」

「ウソだ…俺もまだ出来て無いのに…」

そりゃハーレム目指してたらな…。

「おい！！どう言うことだ！？そんな事聞いて無いぞ！！」

「ちょ！？C・C…！お、落ち着け！！」

「落ち着いてられるか！！俺の男が他の女に盗られていたんだぞ！！」

「空幻！誰がお前の男だ！？誤解を招く言い方はよせ！！」

「奴隷のくせに、下僕のくせに、家畜のくせに、ボロ雑巾のくせに

！私以外の女に心を許すか！？」

「お前、俺を何だと思ってるんだ！？」

「そんな…じゃあ、イブキさんの初めては…もう…」

「ハク！？初めてって何！？ちょ！？泣かないで！！」

「……………」

「フェイトちゃん！戻ってきて！」

何なんだよ！？俺が恋をしないとも思ってるのか！？失敬な！俺はもうお前達より先に進んでんだよ！！

「お前ら静かにしろ！！！！」

ジャラララララ！！

俺は天の鎖で騒いでた奴らを縛り上げた。

「いいか！？俺だって恋はする！！キスだって、夜の営みだってする！！そんな俺は可笑しいか！？ああ！？」

「……い、いえ！」「……」

「だったらこれ以上この事について騒ぐな！！分かったか！！？」

「……イエス・マイロード！！」「……」

「シグナム！！」

「ビクッ！？な、なんだ？」

俺は端で若干驚いているシグナムを呼んだ。

「こいつ等が二度とこの事を口に出さないように調教しろ！！」

「なっ！？何故私が!?!」

「今度模擬戦してやる」

「よし分かった。任せておけ」

「「「ええ!?!?!」」」

これでもう大丈夫だろう。俺の安息は守られた。

「あの…イブキさん？」

「ん?どうしたエリオ、キャロ」

エリオ達も驚いていたが、子供だったので許した。

「その、悲しまないで下さい」

「……………」

何で悲しむんだ？

「だって、もう会えないんですよね？」

ああ……………そう言う事か。

「お前らは優しいな」

俺は二人の頭をなでた。

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとな」

「い、いえ／＼／」

「とんでもないです／＼」

二人は恥ずかしいのか、顔を赤くした。

悲しいけど悲しくないさ。だって……俺が死ぬ前に死んじゃったからな……。もう乗り越えてるんだよ……。

地球、とあるコテージ。

「ん〜ん、やっと着いたか」

あの後、はやてとヴォルケンスは寄る所があると言い、途中で別れた。その時のシグナムはまだ調教し足りなさそうにしていたが、気のせいだろう。

「綺麗な所だな…」

「そうですね」

「うお！？ハク！？びっくりした」

「………仕返しです」

………？何の？

ブロロロロ…

「ん？」

車が走って来た。

一体誰だ？

「なのは！フエイト！」

「アリサちゃん！」

「アリサ！」

何だ、知り合いか……。にしても……。中々の逸材……。

「……フン！」

グリ！

「痛てえ！？」

ハクが足を踏んづけてきた。

いけね。思考がレオンになって来た。

「ハク、助かった」

「えっ？あ、いえ…（あれ？何でお礼言われたんだろう？）」

おっと、いつの間にか皆アリサって言う人の所に集まってやがる。

俺はハクと一緒に皆の元に向かった。

「アリサ・バニングスです！よろしく！」

「「「「宜しくお願いします！」」」」

「うん！」

丁度紹介をしていた所だった様だ

．．．あれ？レオンは？あいつなら真つ先に挨拶してると思ったんだが．．．って、いた。何故かうずくまってる。大方、ナンパしようとしてなのはかフェイトに沈められたんだろ。

「なんだ、俺達は退けものか？」

「ッ！？」

……………
何でバニングスさんはなのはとフェイトの後ろに隠れるの？

「俺……………何かした？」

「いえ、何もしてないと思います……………」

「今にも襲いますって顔してるぞ？」

「なっ！？そうなのかフェリス！？」

「オオあ？」

くっ！からかったな！

「にははは…アリサちゃん。この人は大丈夫だよ」

「そっ？なら良かった」

はて？何の事ですか？

「レオンがアリサにね…」

ああ…成程…。

「俺の認めたくはないが親友が失礼をした。後でお仕置きをしておくから許してくれ」

「いえ！大丈夫ですから！所で、あなたは？」

「おっと失礼。俺はイブキ・ヤマト。こっちは俺の部下の…」

「ハク・スペリアです」

「私はアリサ・バニングスです！ふうん…あなたがイブキ・ヤマトさん…」

ん？知ってるのか？

「どっしって？」

「ああ、実はフェイトが「アリサストップ！！！！」ん！？んん！！！」

アリサが何か言おうとした時、フェイトがアリサの口を押さえた。

「（ちょっと！？／＼／＼言わないでよ！！！！／＼／＼）」

「(ええ〜！良いじゃない！)」

「(ダメ！！！！絶対にダメ！！！！)」

「(分かったわよ) ええっと、なのはがメールで教えてくれたのよ」

「へえ〜」

そうなのか。なら知ってて当然か。

なのはがそんな事言っただけと言っていたような気がしたが気のせいだな。

俺達はあの後、隊に分かれて街全体にサーチャーを設置する事になり、今それを行っている。

因みに、レオンはスターズの二人目の副隊長だ。

「おい、団子屋は何所だ？」

「知らん」

「ピザ〇〇トは何所だ？」

「知らん」

「腹減った〜！」

「我慢しなさい」

「イブキさん。サーチャーの設置終わりました」

「お前だけだよ、俺の味方は」

自己中モードに入っている三人に俺は酷く悩まされている。ハクのおかげで何とか仕事を進められているが…。

「使えん奴だ。主に対して何て態度だ」

「それでも男か？甲斐性を見せる」

「腹減った、腹減ったー！」

「イブキさん、次行きましょう！」

神よ。何故この三人なのですか？空幻はまだ可愛らしいけど、後の二人は何ですか？心が折れそうです。

「フツ…漸く終わったな…」

「そうですね…」

「ふん、漸く終わったか。待たせすぎだ」

「女を待たせるとは、なって無いな」

「もう我慢出来んぞ！！早く何か食いたい！！」

何でこんなに言われなくちゃならないんだ…。
俺が何をした…。

「あなた達…いい加減にしなさい！」

あ、ハクがキレた。

「何だ小娘？文句があるのか？」

「大あります！何にもしないで我がままばかり言ってるだけじゃないですか！！イブキさんがどれだけ困ってるのか分かっているんですか！？」

おお！ハク！その調子でどんどん言ってくれ！！

「そいつは奴隷で下僕で家畜で雑巾で遊び道具だ。そっちの事情など知らん」

うわ……酷い……。

「ふざけないで下さい！！イブキさんはそんなんじゃない！あなた、最低ですね！！」

「…何？貴様、もう一度言ってみろ」

あ、なんかヤバい。

「何度でも言います！！最低！！鬼畜！！鬼！！悪魔よりも最っ低な悪魔！！」

「ッ！！？…殺す！！！！」

フェリスは剣を出し、抜いた。

「ッ！？よせ！！！！！」

キーン！！

「くっ！？」

俺はギリギリ皇の次元武をフェリスとハクの間を展開し、剣を上
に射出し弾いた。

「フェリス！！！！何をやっている！！！！？」

「あ…いや…これは…」

フェリスは冷静さを取り戻し、事の重大さに気付いた。

「今すぐ仕舞え！！！」

「あ……す……すまない……」

フェリスはすぐに剣を消した。

「ハク、俺をかばってくれるのは嬉しいが、少し言いすぎだ」

「す……すみません……」

「フェリス、お前何をしようとしたのか分かっているのか？」

「……すまない。ついカッとなってしまうた……」

「……なら、お互いに謝れ」

「「……すまなかった／すみませんでした」「」

はあ……この先ちゃんとやっつけていけるのか……？
にしても、何時もなら軽く受け流すフェリスが何であんな反応した
んだ？何か理由があるのか？

「さて、一応落ち着いた所た様だな。丁度良い所に喫茶店があるか
ら、そこでちょっと休憩しようか」

「……そうですね」

「……ああ」

ふう……。これで少しは良くなるかな。

「C・C、空幻もいいよな
」？

「……ここで断られる奴がいるか？」

「いないな」

「さっさと食べる〜！」

「……はあ」

カランカラン

「いらっしやませー！」

俺達が店に入ると、女性店員が迎えてくれた。

おうおう…美人だな…二十前半位か？

「五名様ですね？此方になります！」

俺達は店員に付いて行った。

………気のせいだろうか？どこか見た事ある様な青髪が見えるんだが……。

「レオン……何やってんだ？」

「ん？おお！イブキじゃねえか！偶然だな！」

「イブキ君！？どうして此処に！？」

「休憩しに」

そこにはスターズのメンバーがいた。

「あら？知り合いなの？じゃあ……」でよろしいですか？」

「あ、はい。ありがとうございます」

俺達は知り合いという事で隣のテーブルにしてもらった。

「なんだお前ら？サボりか？」

「んなアホな。ちょっとした休憩だ。そう言うお前らは？」

「ハッハッハ！聞いて驚け！俺達が此処に来た理由は！なんと！」

「ここ、私の実家なの！」

「っておい、何でセリフ盗っちゃうの？」

実科？いや実家か。……って実家！？

「へえ〜！そうなのか！ここが……」

まさか実家が喫茶店とは……。さらに魔法とは無縁だな。

「ん？そう言えばさっきの店員、何か親しかったよな？もしかして

なのはのお姉さん？」

「あら！嬉しい事言ってくれますね」

「うっおー!？」

何時の間に後ろに!？」

「初めまして。高町なのはの母、高町桃子です」

「あ、これは「丁寧」ごうも。自分はイブキ・ヤマトです。なのはとは仕事仲間です。……………母?」

「うん。お母さん」

「……………若!?!？」

若い!?!?若すぎるだろ!?!?マンガじゃ有るまいし!?!?って、あれ?ここ二次元だっけ?いやいや、現実だよな。

「ハッハッハ！やっぱりお前もそう思ったか！..」

「という事はお前らも？」

「」「」「あゝうん／＼はい」「」「」

「ははは...だよー。」

.....ん？

「レオン.....まさかとは思っけど.....お前..」

「ああ.....ナンパしちゃった..」

「.....はあ..」

アホが。そのまま夫に殺されてしまえ。

「イブキ！俺これとこれとこれとこれとこれがいい！..」

「ふん…なら私はこれだ」

空幻とC・C・がメニューを決めた。

空幻、どんだけ食べるつもりだ。

「ハクとフェリスは？」

「……………これだ」

「……………じゃあ…これをお願いします…」

「よし、じゃあ俺はこれをお願いします」

「畏まりました。少々お待ち下さい」

桃子さんは、奥へと向かった。

「……なあイブキ」

「何だ？」

「ハクとフェリスちゃん、一体どうしたんだ？」

「まあ……色々とな」

「……そうか」

レオンは察してくれたのか、それ以上追及してこなかった。

「お待たせしました」

「待ってました！」

桃子さんが注文したケーキと飲み物を持ってきた。

おお……美味そうだな。

「いったただつきまーす!!」

パクパクパクパク

落ち着いて食べよ…。

「ふむ……ピザといい勝負だ」

ピザと比べるなよ…。

「パク…おお！これは美味しい!!」

こんな美味しい物、食べた事ないぞ!!

「ほら、ハクとフェリスも食べ。さっきの事なんて吹き飛ばさず」

「……パク……！美味しい／美味しい……」

二人は少し元気が出てきて笑顔がこぼれた。

「どうだ？さっきの事なんてどうでもよくなったたる？」

「ああ……少々お前の認識を改める必要があるな」

「それはありがたい」

「ああ……心が落ち着きます……。イブキさん、ありがとう……」
「……」

「……」

良かった。これで一件落着だな。俺ナイス！

「どづかね？お味は？」

「ん？」

俺が安心してしていると、男の人がやって来た。

「あ、ああ……とても美味しいですよ。世界に余裕で通用しますよ、絶対」

なのはの……兄？いや……お父さん？

「そうかい！それは嬉しいね！ああ、失礼。私はなのはの父の高町士朗です」

「ああ、お父さんでしたか！自分はイブキ・ヤマトです」

父か……やはり若い……！

「宜しく。…と…」

「…?はい、いいですよ」

「君も…なのはを狙ってるのかな?」

「「「ブフー!!!」」」

「…はい?」

「お、お父さん!!!」

え?なのはを狙う?俺が?ん?俺も?

「……レオン」

「ガタガタガタガタ!」

……成程、ヤラレたのか。

「どうなんだい？」

「…いえ、自分はその事思っていませんよ」

「「「「ホッ…」」」」

「そうかい！それは良かった！また御神流の餌食にしないですんだよー！」

……レオン、帰ったら奢ってやるよ…。

「いや、君とは仲良くやっていけそうだよ！」

「そうですか」

「うんうん！ところで、その四人は君の恋人か何かかい？」

「『『『ツ／／／』』』」

「違いますよ」

「『『『』』』』」

「俺の大切なパートナー達ですよ」

「『『『』』』』（……複雑だ……）」

あれ？何で複雑そんな顔をしてるんだ？褒めたつもりなんだが……。

「ああ、そう言う事かい。君達、苦労してるね」

ん！？士朗さん、分かったの！？全然分からん！！

「……流石俺の親友。伊達じゃないぜ」

「うん…そうだね」

だから何なんだ！！？

結局、フェイトが迎えに来るまで、何の事が分からなかった。

因みに、フェイトの車には当然全員乗れないので、エンペラード隊とレオンはトレーニングがてら走って帰った。三人は嫌がっていたが、団子とピザとデザートを条件にした。

派遣任務？（前書き）

誠に申し訳ありません。

諸事情により、小説を書く事が出来ない状態が長く続いてしまい、更新出来ませんでした。

本当に申し訳ありませんでした。

さて、今回の話ですが、予想外に長くなり、中編になりました。しかも会話文が多く、グダっていると思います。

楽しみにしている読者の皆様には大変迷惑をお掛けしますが、何卒、応援宜しくお願いします。

派遣任務？

コテージ

「よお、遅かったな」

「：イブキ達が速過ぎるだけだよ。何？車を追い抜かず走りつて？六十キロは出てたよ？」

はっはっはー！俺の身体能力をなめるなよ！本気を出せば百キロは超える！はい嘘です。スンマセン。

「あつ…何かちょっと良い匂いが…」

「キユク〜！」

「ん？」

確かに……美味そうな匂いがするな。

「はやて達がもうご飯の用意始めてるのかな？」

ほうほう、あいつ作れたのか。

俺達が匂いがする方向に行くと、アリサがいた。

「あ！お帰り〜！」

アリサは俺達を見つけ、出迎えてくれた。……ん？誰か一緒に来てるな……。

「なのは！フエイト！」

「すずかちゃん！」

「すずか！」

なんだ…また知り合いか…。それにしても…。

「…なあ、レオン。俺が今思ってる事、分かるか？」

「ああ、イブキ。たぶん俺も思ってるわ」

「「何であいつ等の周りは美人の知り合いばっかなんだ」」

何故だ！？何かの法則でもあるのか！？アレか！？類は友を呼ぶなのか！？

「世の中不思議だな…」

「まっただけだぜ…」

「あれ？そちらの方達は…？」

新しくいた女性が此方に気付いた。

「ああ！忘れてた！」

「「おい！」」

忘れてんじゃねえよ！その歳でボケてるんですかなのはさん！？

「えっと、ほら！メールで教えた人達だよ！」

「ああ！」

……俺達、そんなに存在感薄いかな？

「えっと…イブキ・ヤマトだ」

「あ、月村すずかです。……何かの……コスプレ？」

「ちよつとすずか！」

「確かにイブキ君達の格好って、この世界から見たらそうだよな」

「そうか？いたって普通だと思うが……」

「……それは無い」「……その場にいた全員」

おい！そこまで否定しなくてもいいだろ！

ああ、言っただけで無かったが、俺達エンペラード隊は六課の制服では無く、何時もそれぞれの格好をいっている。俺はレオンとの決闘で投影した服、フェリスとC・C・とハクは御馴染のあの格好（C・C・はR2版の）を着ている。これは公私共々使用している。空幻だけは術で今時の格好をしている。本気の戦闘になれば狐耳巫女さんになっているが。

巫女さん万歳！！

「いいじゃねえか別に。オシャレと言うものは、所詮自己満足なんだよ。自分が良ければそれでいいんだ」

「そう言う問題なのかな？」

「そうなんだよ」

「すずかちゃん！」

「え！？は、はい！」

突然レオンがすずかの名を呼んだ。

……レオン、まさか……。

「すずかちゃん……その可憐な容姿にピッタリの名だ……。どうでしょう？？そんなあなたをこの私が守らせてはくれませんか？」

「…………え？」

「…………レオン……言ってる意味がわからん。そんなので引っかかる奴がいるか。」

「…………レオン、それナンパのつもりか？」

「おじよー！」

「…………馬鹿が」

「それで、お返事をお聞かせくれますか？」

「しめんなさい」

「……………」

「ま、頑張れや」ポンッ

「……………」

ま、無理だろうけどな！！ 酷！！

「レオンくん、私言ったよね？ 私達の友達にしないでって」

なのはがとつても、とつても！ 怖い笑顔でレオンに言ってきた。

262

「……………」これが、俺のハーレム道だ」

良く言った！！ このなのはを前に良く言った！！ それでこそ親友！！

「ちょっと向こうで O H A N A S I I しようか」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

瞬殺!?!さっきの俺の気持ちを返せ!!

「分かればいいんだよ!」

……にしてもなのはよ、俺が知らない間に何をしたんだ一体……。俺
と同等の力があるんだぞ?それをこんなにまでするなんて……。

ブロロロ……

「あれ?車が……」

うん?今度は誰だ?どうせまた美人なんだろう?

車が止まり、乗っていた人達が降りてきた。

「はあ〜い!」

「皆、お仕事してるか?」

「お姉ちゃんズ、参上!」

ほらワンパターン!.....いや少し違う!?!今度はロリがいた!!

「エイミィさん...!?!」

「アルフ!」

「それに...美由希さん?」

ん?皆知ってるの?

「エリオ、キャロ、知り合いか?」

「はい！」

「エイミーさんとアルフはフェイトさん繋がりで……」

……あと一人は？

「スバル、あの髪の長い人は？」

「え？……あ！イブキさんが来た時、丁度用事があって会えて無かったけ！美由希さんって言うて、なのはさんのお姉さんですよ！」

「……うん、もう驚かんぞ」

驚く気なんて失せたわ！！ってか、いちいち驚いてたら体が持たんわ！！

「……レオン」

「ビクッ！な、何だ？」

「死にたくなかったらジツとしておけ」

「ぐっ……」

はあ……まだ懲りて無いのか。まあ、無理だわな。欲望に忠実な奴だし。

「それでも俺はやってやるー……！」

ほら、行きやがった。もうしーらねっと！

「ぎゃああああー……？」

はい跳んで夕食時。

皆さん、はやてが用意した料理に夢中です。

「うまいうまいうまいうまいうまいうまいうまいうまい」

俺の隣で器用に喋りながらガッツいている空幻がその証拠です。

「あんな、もうちっと落ち着いて食べ」

「何を言う！？これが落ち着いてられるか！！これ程美味しい物があるかぁ！！」

「ああ、そう」

確かに美味しいけどな…。

「ふうん…これは中々美味しいな」

「ほう、C・Cがピザ以外の物を褒めるなんて……明日は悪魔か？」

「そんなもんは降らん。お前はと言う目で見ているんだ」

「……妖怪ピザ女」

「思考がガキだな」

「うるさい、ほっとけ！どうせIQ50ですよ！」

「俺がいた世界では殆どの人間がそう思ってると思うが」

「それはお前が生きていた人間界の話だろう」

「…？違うのか？」

「当たり前だ。お前達の知る私達とここにいる私達は、姿こそそっ

くりだが、中は違う」

…成程！

「だからお前の知る知識は私達に通用せん」

「……ピザ食べ放題チケット」

「くれー！」

「めっちゃしてんじゃねえか！！！」

「まったく…つまり、外は一緒だが中は二、三割位違つと言つ訳だな。ややかしいな。」

「ん？ならさ、ハクは？」

「は？」

「だってハクって俺がいた世界では弱音ハクと言うキャラクターで存在してるぞ？」

「そうなのか？…まあ、そんな事もあるのだろう。世界には三人そっくりさんがいると言っただろう」

「いや、世界を超えてるんですけど」

ま、性格は全然違うしC・Cの言っただけなだけだろうな。

「ん？何ですか？イブキさん」

「えっ？ああ、何でも無いよ」

どうやら俺はハクをジッと見ていたらしい。危ない危ない。これをはやてとレオンに見られてたら、絶対からかってくるな。

「おやおや〜？イブキ君、な〜に見ていたんや？」

「まさか〜、ハクを見ていたのか？」

げ……見られた…。

「何や何や？イブキ君、ハクちゃんにお熱？」

「えっ！？／／／／」

「な！？ちっ違っつて！！／／／／」

「ほ〜う？なら何で顔が赤いんだ？」

「何！？／／／こっこれはだな！その、酒に酔ったんだ！」

「それ麦茶だぞ？」

「お茶割だ！！」

「んな強引な…」

ほら来た。弄って来やがった。大体、俺が恋なんてするか。そりゃまあ？ハクは可愛いし、美人だし、気配りが出来るし、仕事も出来るし、スタイルいいし、髪は長くて綺麗だけどさ？それが恋になるなんて必ずしもそうとは限らんだろうに」

「…お前…」

「しっわ〜…」

「ん？どした？」

「お前、それ全部声に出てたぞ」

「なっ！？／／／／」

ま、マジで？っすお！？

「騒ぐな変態」

「ぐほあ!？」

フェリスが俺を剣で殴ってきた。

「まったく…これだから男は…」

フェリス…だからって顔にクリーンヒットは無いだろ…。

「…何か気まづくなってもうたな…」

「ああ…これも作者の下手な文才のせいだな」

「レオン…メタな発言はやめ…ろ…ガク」

「「「御馳走様でした〜!」」」

「ん〜…は!飯は!?!」

「貴様が寝ている間に終わった」

「なっ!?!シグナム、俺の分は!?!」

「お前の分何かねえよ」

「ヴィータ…いくら大きくなりたいたらって人の分まで食べたら駄目でしょ!」

「何!?!ふざけんな!?!」

「俺のメシ〜…」

ああ…あの喫茶店でもっと食ったときゃ良かった。

「イブキさん」

「ん〜？」

ハクが話かけてきた。

…あの事があつたのに何でそんなに平然と出来るんだ？

「後で何か作ってあげますから、落ち込まないで下さい」

「…ハク…何て良い奴なんだ！俺はお前に会えて嬉しいい〜！！」

「え！？何も泣かなくても…」

天使だ…ここに天使がいる！悪魔も見たら惚れ惚れする天使が！

「はいはい、いちゃついたらんとはよ用意し〜」

「んあ？何の？てかいちゃついで無い！」

「話聞いて無かったんかい。これから銭湯に行くで」

戦闘？いやいや、そんな空気じゃ無いな…。銭湯か？

「銭湯！？」

「どっどっしたんですか？」

銭湯…裸の付き合い…裸…。

「…何考えとんや？」

「え！？何でもないさ！はは、はははは！」

あぶねー！もうちよいで変態扱いされる所だったぜ。

「大方、覗こうとも思っているのだろう」

「ギクツ　　なっ何を言っただ？そんなわけ無いだろ？」

「「「「」」」」」　　女性陣全員

「ちょっと！？何で信じんの！？」

「イブキ、涎」

何！？…あ、ホントだ…。

「えと……」
「うめんなぞ」

俺とした事が……バレない様にしなくちゃいけないだろうが！

「レオン君も、ダメだよ？覗いちゃ」

「へ？まさか！この俺がゴソゴソ覗くなんてするわけ無いぜ！」

「レオン君、鼻血出てるよ？」

「……」
「めんなさい」

「」「」（絶対覗くわね）「」「」

「はい、いらっしやいませー！……団体様ですか？」

「ええっと、大人十八人と……」

「子供四人です」

「エリオとキャラコと…」

「私とアルフです！」

「え〜と、ヴィータ…副隊長は？」

「あたしは大人だ」

「違うだろ。見栄をはったらいけません」

「何だと！？変態奴隷は黙ってる！！」

酷い！！唯の変態でも無く、唯の奴隷でも無く、変態奴隷だと！？

「すみません、子供六人で」

「てめえ〜！！」

「黙れ、エターナルロリータが!!」

「お、おい…何泣いてんだよ…」

俺は変態じゃない…奴隷じゃない…ただ皆と仲良くしたいだけなの…。

「…良かった、ちゃんと男女別だ」

「広いお風呂だって…。楽しみだね！エリオ君！」

エリオとキャラロが注意書きの前でそんな事を話していた。

…てかエリオよ、一緒に入った事あるのか？

「あっうん！そうだね。スバルさん達と楽しんできて」

「え？エリオ君は？」

「えっ？ぼつ僕は、ほら、一応男の子だし」

「エリオ、注意書きをよく見てみる」

「イブキさん？…女湯への男子入浴は、十一歳以下のお子様のみでお願い…します？」

エリオ十歳。と言っ事だ。

「いっつてらっじゃ〜い…」

「ええっ！？イブキさん！？」

「いいよな。堂々と見えるんだからな」

「レオンさん！？そんなつもりはありませんよ…！」

「せっかくだし、一緒に入ろうよ」

おっと！ここで保護者様のご登場だ！どうするエリオ！？

「あつあのですね！？お気持ちは非常に・・・そっそれに！！他の皆さまもいますし・・・」

おっと、第三者の気持ちを出したか。だがそれで通る輩ではない筈だ！！

「別に私は構わないけど？」

「って言うか、前から頭洗ってあげようかって、言ってるじゃない」

「えっ？えっ？えっ？」

「アタシらも良いわよね？」

「うん」

「良いんじゃない？仲良く入れば」

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は久しぶりだし、入りたいな」

エリオ、諦めて入れ。もう逃げ場は無いから。

「<イブキさ〜ん！！レオンさんも助けて下さい！！>」

俺に求めるな。…だからその目はやめい！！わかった！！わかったから！！

「フェイト、エリオもそう言うお年頃になって来たんだ。察してやれよ」

「えっ、でもさっきは…」

「あれはからかっただけ。それに、レオンと二人きりだと、ちとキツイ」

「ああ？どう言う意味だ？」

「いや、でも…」

「来るよな？エリオ」

「はい！勿論です！…！」

「…わかったよ」

頼むからそんなに落ち込むな。俺が悪いみたいじゃねえか。

「じゃ、行くか」

「はい…」

「フェイトちゃん！エリオの代わりに俺が「来ないで」…はい」

「え〜と…」

エリオはまだ知らなかった。この注意書きには落とし穴がある事を…。

「よし、ここにするか」

「はい…」

「ほほっ…ここです皆脱ぐのか」

俺達はロッカーを確保し、服を脱ぎ始めた。

「…？おいイブキ、どうしたんだよ？その腹のでっかい刺し傷」

「ん？…ああ、これが。これは…三年前に出来た傷だ」

「…どうしてか、聞いても良いですか？」

「大した事無いさ。唯、殺人鬼にヤラれたただだよ」

「大した事だろ！？」

「どっつてこと無いって。こっつて生きてるんだし」

そう…俺“は”な…。

<父さん！母さん！兄さん！姉さん！桃香！>

<お…兄…ちゃん…>

<桃香！？しっかりしろ！！>

<い………たい……よ……お兄……ちや……>

<桃香？……桃香！桃香！！！！>

「……さん！イブキさん！」

「ッ！？あ、ああ………すまない、ポーっとしてた」

「大丈夫か？」

「ああ………さ！入ろうか！」

「………ああ」

「………はい」

あゝやだやだ。嫌な事思い出しちゃったぜ。これから楽しむ所なの

に…。

「はあ〜い、ズンズン」

「ありがとうございます…」

「えっ?」「ん?」「あ?」

「あっ! エリオ君!」

「ちよいちよいちよいちよい!! 何で男湯にきてんの!??」

「きゅっきゅっきゅっキヤロ!!…?」

「うん!」

「ふっふっ服!??」

「うん! 女性更衣室の方で脱いで来たよ! だからほら、夕オ」
「見せなくていいからー!!…!!」
「あっ! えへへ…! ごめん」

わお…意外と大胆ねこの娘。いや、単に純粹なだけか？

「キャラロ、どうしてこれたんだ？」

「男の子が良いのなら、女の子も良いのかなーって」

「…エリオ、キャラロの方が一枚上手だったな」

「そんな〜…」

「キャラロちゃん！皆の裸はどう」「己は子供に何聞いとんじゃ！…」
ぐぐぐぐらー！…」

子供に何を言わそうとしてんだよ！？フェイトに言いつけるぞ！？

「さ、さっさと入ろうか」

「はい！行こう！エリオ君！」

「わあ！？引つ張らないでえー！」

「ちょ！？置いてくなー！」

所変わって女湯

「キャロ…大丈夫かな…」

「大丈夫だよ。いくらなんでもキャロまで手は出さないよ」

「でもレオンだよ？確実にそう思う？」

「それは…たぶん…」

「やっぱり私も…」

「わー！それはダメ！そっちも大変な事になるから！」

フェイトはキャロがレオンの魔の手に掛らないか心配な様だ。
なのは的には、フェイトが男湯に突入しないかで心配な御様子。

「イブキ君だっているし、大丈夫だって！」

「…そうだね、イブキがいるもんね！」

どうやらフェイトはイブキを信じ、落ち着いた様だ。

「…ねえ？何でフェイトちゃんはイブキ君が好きなの？」

「ふええ！？／／／だっ誰がそんな事言ったの！？／／／別に好きって思ってたなんか！！／／／」

「ふ〜ん…でもフェイトちゃん、イブキ君を見る時の目って、何時もキラキラしてるよ？」

「えっ！？／＼／＼」

そう、フェイトはイブキを見る時は恋する乙女の顔なのだ。

「それに、イブキ君が他の女の人と話してる時は、つまんなさそうな顔してるよ？」

「うそ…／＼／＼」

フェイトイブキがフェリス達と話している時、何時も不機嫌そうな顔をしている。これを恋と言わず何と云う。

「さあ、白状するの！」

「白状って、別に私は…／＼／＼」

「うーん、ならイブキ君の良い所言ってみて！」

「良い所? ……目、かな?」

「目?」

「うん…優しそうで暖かそうな目。それに意思も強そうだし…」

「……………」

「それと、皆を大切に思ってくれてる。勿論、皆もそう思ってるけど…何かな? イブキにそう思われてたら、とても安心する様な嬉しい様な」

「……………」

なのははこの時確信した。

「(フェイトちゃん…イブキ君に完璧に惚れてる!)」

「まだ出逢って間も無いけど、異性で一番信頼してるよ」

「そうなんだ…」

「…そう言うのはは？レオンの事好きなの？」

「ええ！？／＼／＼なっ何で！？」

「だってなのは、レオンと喋ってる時、何時も以上に楽しそうだったよ？」

そう、なのははレオンと話す時、皆と話す時と比べて幸せそうな顔をしているのだ。

「どっちな？なのは？」

「……そうだね、好きかな、レオン君の事」

「え？そっそうなんだ」

此方はフェイトとは違い、好意を抱いている事をあっさりと認めたと認めると思わなかったフェイトは面を喰らった。

「ど、どうして？」

「だって、いつも楽しませてくれるもん。それにレオン君も皆の事真剣に考えてくれてるんだよ」

「うん…それはわかるかも」

「それにカツコいいし！」

「そうなんだ…」

「でも、ナンパ癖は治して欲しいかな」

「ふふっ…」

「まあ、それがレオン君でもあるし」

確かに、レオンからハーレムと言う言葉を取ったらレオンで無くなりそうな気がする。

変わって八神家

「ったく、イブキの野郎…絶対に泣かしてやる」

「まあまあ、イブキ君も本気じゃ無いやろうし、ただふざけてたんやろ」

「はやての事だつて狸つて抜かしてたんだぞ！」

「それは聞き捨てならんな…。ヴィータ、後でシバきに行こか」

「ああ！」

ここではなんとイブキ抹殺計を企てていた。

「主はやて、ヴィータも。余りやりすぎないで下さい」

「何でシグナムがアイツを庇うんだよ!?!」

「そっそれは…」

「はっはくん…さてはシグナム、イブキ君に恋をしとるな!?!」

「ええ!?!」

「ホントかシグナム!?!」

「なっ!?! / / / 違う!?! / / / /」

はやてがそう思うのも無理は無い。

イブキが来てからというもの、シグナムはどことなく嬉しそうな様子だったからだ。

「私はただあの男の戦いに惚れただけであって、あの男に惚れたわけではありません!?! / / / /」

「ふ〜ん…イブキ君には興味はないと？」

「いっいや、戦いに関しては興味がありますが…」

「ならもしイブキ君が恋人になってくれって、言ってきたらどうする？」

「なっ！？／／／／そっそれとこれは別であって…／／／／いやしかしあの男なら任せれるかもしれないが…／／／／いやいや何を考えているんだ、そんな事…いやしかし…」

シグナムは顔を真っ赤にしてブツブツと言い始めた。

「（あかん、冗談で言ったつもりが案外アタリやった）」

「なんでアイツなんか…レオンの方が断然マシだな」

ヴィータが面白く無さそうに言った。
これを聞き逃すはやてではなっかた。

「なんやヴィータ？えらいレオン君を鼻屑しとるな？」

「ああ！アイツは良い奴だ！イブキの野郎と違って優しくしてくれるからな！今日だってデザートのアイスを譲ってくれたぞ！」

「（まあ、あんな性格やからな）」

「まるで兄ちゃんみたいで、あたしは好きだぞ！」

と、ヴィータは笑顔で宣言した。

「（…ちょい待ち、もしかしてウチだけか！？恋とかしてないの！）」

そんな事をふと思ったはやては、もう一人の女性に聞いた。

「シヤマルは誰かおるん？」

はやては失礼ながら誰もいませんよつにと願った。

「私？私はイブキ君×レオン君よ！」

はやての願いはいけない方向で叶ってしまった。

「あ、そっそうなんや……はあ」

「しかしイブキとなら……いやそれは騎士として……」

「（まだ悩んでる……）」

それぞれ思う所があった八神家であった。

スバル、ティア+現地協力者

「気持ちくね、ティア！」

「ええ、そうね。好きになりそうだわ」

「でしょ？そう言えると思ったわ」

「うん！」

此方ではこう言った話しかして無い様だ。

「ところでさ？向こうの世界は良い男の人っているの？」

「アリサちゃん！？」

訂正、今出てきた。

やはりそう言う話は欠かせない様だ。

「ええ！？そんな事…」

「あはは！やっぱりまだ早かったかな？」

ティアナはこの手の話題は苦手の様だった。

「何で？いるじゃん良い人」

「え？スバル？」

「おお！誰誰？どんな人？」

「落ち着いてアリサちゃん！」

どうやらスバルには良い人と思える男性がいる様だ。

「イブキさん！！」

「え？イブキって、イブキさん？」

「うん？」

「ええ、でもあの人が、なんかバカっぽいわよ？あ、だからスバルは親しみを感じるのね」

「そんな事ないよ！だってあんなに強いんだよ！？しかもあの戦闘衣装！普段着にはちよつとアレだけど、とつてもカッコいいし、技もカッコいいじゃん！それとなんかお兄ちゃんみたい！」

「何所が？…まあでも、強いのは確かね。アレはもはや人間じゃ無いわ」

「どうやらイブキはスバルにとって兄みたいで、ティアナにとっては人間では無いらしい。」

「そんなにイブキさんって強いのか？」

「はい！私、弟子にしてもらおうかなって、思っています！！！」

「ふん…じゃあ、レオンさんは？」

「……………」

「あれ？何で喋らないの？」

「いや、私レオンさんは別に何も…」

「…私はただの女たらしとしか」

「あ、そうなの」

哀れレオン。副隊長なのに女たらしとしか思われて無いとは。

「あ、でもどうやったらあんなに強くなれるのかは気になります。イブキさんとは事情が違いますから」

良かったなレオン。イブキがいなかったら完全に無関心だった所だ。

「すずかはイブキさん派だもんね〜！」

「アリサちゃん!!!／／／／」

「そうですね!?!やっぱりイブ兄ですね!?!」

もういつの間にかイブ兄となっている。

「アリサさんは?..」

「ん〜、私はどっちかと言うとイブキさんかしら?レオンさんよりはまともでしょうから」

「(いや、イブキさんもまともでは無い様な...)」

結局、レオンはかろうじてティアナにだけ興味を持たれたのであっ

た。

本命、エンペラード隊

ここでは女同士の熱いバトルが繰り広げられていた。

「ふん！俺の方がでかい！」

「いいえ！私です！」

「馬鹿者、ただでかいだけでは意味が無い。手触り、掴み具合、形、色、味、感度が大切なんだ。その点、私は丁度いい大きさで、形もよし、張りも柔らかさもある、色も白く感度もいい、そして味も良いはずだ」

「それなら私（俺）だって良いです（良いぞ）！！！！」

ハクと空幻とC・Cが、自分の胸が一番だと勝負をしていた。

一方フェリスは、

「…くだらん」

と、静かに銭湯を満喫していた。

「イブキさんは私の様なグラマーなスタイルがいって言っていました！」

「それなら俺だっていい筈だ！」

「何を言っている。最初に欲情したのは私の体だ」

何故かイブキが体目当ての最低な男に聞こえるのは気のせいだろうか。

「（…これはゆっくり入ってられんな）」

フェリスは三人に気付かれずに上がった。

「私です!!」

「俺だ!!」

「いや、私だ」

イブキをめぐる争っているエンペラード隊だった。

「ヘックション!!」

「大丈夫ですか？」

「風邪ですか？」

「いや、誰か噂でもしてんだろ」

「そうそう、俺の事が好きだって言う噂さー!!」

「んなわけ無いだろ」

もしそうだったら俺は神を呪うね……でもあのジジィに効くとは思えんが。

「さてと…エリオ、背中を向ける。洗ってやる」

「ええ！？いいですよー！」

「遠慮すな。ほら、こっちにむけ、る！」

「わあ!?!」

俺はエリオが座っている椅子をくると、90度回転させた。

「よし、いくぞ」

「うわ!?!くすぐったいですよ!」

「男なら我慢しろ」

俺はくすぐったがるエリオを無視して背中を洗い続けた。

「……………」

「…キャロちゃん、良かったら俺が「イブキさん!私がいブキさんの背中を洗ってあげます!」…いいよ、独り寂しく湯に浸かっているよ……」

「……………」

「ん？どうした、二人とも」

「あ、いえ……」

「ただ、他の人から見たら親子に見えるんだなって……」

ああ、そう言えば二人とも孤児だったっけ？……そうか……。

「なら、俺の事、お父さんって、呼ぶか？」

「え？」「」

「嫌なら別にいいぞ、俺は」

「……………」

二人は顔を見合わせて少し黙った。そして同時に頷いた。

「と、父さん／＼／＼」

「お父さん／＼／＼」

「…何だい？」

「…エへへ／＼／＼」

ふっ…可愛い奴らだなあ。…あれ？でも待てよ？父親に見える
って事は…俺そんなに老けて見えるのか！？うわ、これってちよ
っとシヨック。…でもま、いつか。

それから三人で一緒の風呂に入っていたが、子供用露天風呂があっ
たのでそこに入れた。
そして俺はレオンと一緒に入っている。

「…何で俺はイブキに負ける…」

「いや、何も勝負してないだろう…」

何でこいつはこんなに落ち込んでんだよ…。

「<父さん!!フェイトさんが!!父さん!!>」

「<どうしたエリオ!?!>」

「<フェイトさんが露天風呂に!!女湯に連れて!!>」

「<……グットラック>」

「<父さん!?!わあああ!?!>」

流石に…そこまで来られたらもう無理だ…。頑張ってくれ、息子よ。

「どうしたんだ？」

「なに、ただ子供用露天風呂にフェイトが侵入してきただけ」

「何！？それは一大事だ！！俺も「お前が行ったら大変な事になる！！」…ちえ」

ふう〜！気持ち良かった〜！レオンはまだ入ってるって言ってたし、女の風呂は長いからな〜、ちよつとの間は一人か…。

「…ん？フェリス？」

「ん？何だ、イブキか」

「俺で悪かったな…」

フェリスは一人で自販機の近くにあるベンチに座っていた。

「先に一人で上がったのか？」

「ああ、あいつ等といるとゆっくりできん」

「あー……何となく分かる」

「」「」

き、気まずい！何にもしてないけど何か気まずい！何か話題を……。

「なあ、少し……話がある……」

「ほえ？」

珍しい……と言うか、初めてだな、フェリスがそんな事言っなんて……。

フェリスは顔を下に向け、そのまま口を開いた。

「私はな、産まれた瞬間から独りだったんだ…」

「…………え？」

フェリスはいきなりそんな事を語りだした。
フェリスは構わずそのまま語り続ける。

「神が言うには、私が産まれた時に私の一族は皆死んでいたらしい」

「ちょっと待て、いきなり過ぎてワケが…」

「黙って聞いてくれ。…神が来た時、私は一族の死体の山の上で泣いていたらしい」

「なっ…」

と言う事は、何者かがそうしたって事か？でも何故フェリスだけ…。

「それから私は神に拾われ、育てられた…」

「……………」

「でも、私は異常だった。僅か数週間で歩け、一年で言葉を話し、二年で本格的な剣の修行を始めた」

「五歳の時、人間界で言うと、小学校みたいな所に入った…」

「成績は常に優秀、運動神経も他の奴らよりも圧倒的に上…」

「なら、そこではお前は人気者だったんじゃないのか？」

「いや、寧ろ嫌われていた…」

「…悪い」

「いやいい…。ある時、そこでちょっとした試験が行われた。そこ

は少し特別でな、格闘技の授業があるんだ。その試合の時だ」

「その試合で私はクラスメートの一人とあたった。私より一つ下の実力を持つ男の子だった」

「私はその日、少し熱を出しててな、その子に追い詰められたんだ」

「でも負けたくない。その一心で耐え続けた。しかし…」

- - 医療班！早く！！ - -

- - なんて事を…！！ - -

- - あんな…あんな悪魔みたいな力を！ - -

- - 来るな！！この悪魔！！誰かそいつを殺せ！！ - -

「私の眠っていた力が覚醒し、制御出来ず、相手の男の子を殺してしまい、教官達は私を見て悪魔と呼んだ…」

「なっ……」

フェリスは手を自分の顔の前に出し、その手から魔力を少し出した。
真黒で禍々しさを漂わす魔力を……。

「お前…それは……」

「悪魔の魔力だ……。天界に生まれながら悪魔の力を持っている……」

「だから…訓練の時も唯の剣技しか使わなかったのか」

自分の正体を知られたくないが為に……。

「それ以来、私は周りの者から虐げられ、捕まえられかけ、殺されかける日々が続いた……」

「でもあのジジイがお前を庇ってくれた、か」

「ああ……。C・Cと空幻も少し特殊で、その縁で知り合い、一緒に行動していた」

あいつ等も？…そうだったのか…。全然そんな感じはしなかったが、過去に色々あったんだな…。俺にだって…。

「だから、ハクが悪魔と口にした時、あんな反応していたのか」

「……………」

フェリスは静かに頷いた。

「…本当は分かっている…。私が天使では無く、悪魔だと言っ事を。ハクが言った事は正しい…。あれは私が勝手にキレただけ…」

……………悪魔…か。

確かに、こいつは何時も俺に奴隷だとか下僕だとか豚野郎とか言っ

て来るし、訓練だって言っているのに、本気で殺そうとしたり、悪魔の様な行動をしていたな…。

けどな…。

「あつそ」

「なっ!？」

俺は一言、そう言った。フェリスはこう返答が来るとは、思っていなかったのか、驚愕した。

「お前は馬鹿か？鏡を見た事無いのか？お前の何所が悪魔なんだよ」

「なっ…外見の事では無く、中身の事だ!!」

「へえ、だったら悪魔は優しく笑うのか？明るく笑うのか？今みたいに悲しく落ち込むのか？」

「…いつ私が笑った」

「ケーキ食べてる時だ。訓練の時や俺達と騒いでいる時、お前は人間らしく、天使のように明るく楽しく笑ってたぞ」

「私……が？」

「ああ。皆にも聞けば分かる」

「……………」

フェリスはまた下を向いた。まだ自分は悪魔だと言う考えは消えて無い様だ。その証拠に、手を握り締め、体を震わせていた。

「……………はあ」

俺は片手を伸ばし、フェリスの肩を抱き寄せた。

「え、お、おい……？」

「お前は悪魔なんかじゃ無い」

「え……」

「例えお前にどんな力が有ろうとも、それは誰かを傷付ける力じゃ無く、誰かを守り抜く力だ」

「だが…もしまた、暴走したら…」

「そんな時は俺が、いや、俺だけじゃ無い、C・Cも空幻もハクもレオンもなのはもフェイトも皆で止めてやる」

「……………」

フェリスは次第に震えが止まり、頭を肩に預けて来た。

「それに、こんな美人が醜悪な悪魔の筈がない」

「それは……口説いてるのか？」

「そ、そんなつもりは無い。……それとだ、まだ自分が悪魔とか思っているんなら、何時でも俺の所に来い。その考えが間違っていると

教え込んでやる」

「口説きの次はプロポーズか？」

フェリスのその声は震えていた。どこか嬉しそうな声だった。

「だから違ってた！」

「ふん…分かっている」

「なっ、お前な！」

「ふふっ……………ありがとう」

「ええ！？／／／／／」

あれ！？フェリスってこんなキャラだったけ！？こんな可愛く、ふふって、笑うキャラだったけ！？あ、そう言えばC・Cが違つとか何とか言ってたっけ！？いやでもこれは反則だろおお！！？

「ちょっと!？何で手を俺の体に巻きつけてんの!？／＼／＼」

「良いではないか…。少しだけ…。少しだけこうしていたい…」

フェリスは安堵の表情を浮かべ、静かに頼んできた。

「……………少し、な／＼／＼」

俺はそんなフェリスを見て、仕方なく肩を抱いた。

俺とフェリスはそのまま皆が上がって来るのを待っていた……。

んなら良いんだけどね〜！

「……………ジーーーーー……………」(なのは達全員)

見られてる！思いつき見られてる！何か壁に隠れて見てる！！何が少し、な、だよ！！視られてるのに気付けよ！！恥ずかしいいいい！！！！

「ふえ、フェリス…皆が見てる／／／／」

「…別に良い。寧ろ見届ける」

「何言ってるの！？／／／／／っておい！？力を込めるな！！／／／胸が当たる！！／／／／ひゃ！！？／／／／首に顔を埋めるな！！／／／／」

フェリスの行動は止めるどころか、どんどんエスカレートしていった。

こいつ！？分かってたな！？

「バキバキバキィ！！」「（誰かが壁を握り潰す音）」

マズイ！何かマズイ！！主に俺の命が！！そんな気がする！

ピイイイン！！

「あ、ケリユケイオンが…」

「クラールビントにも！」

ん！？何か向こうが騒がしい…まさか…。

「ロストログアです！！！」

ナイスロストログア！！良いタイミングだ！！

「よし皆！！仕事だ！！さっさと終わらせようぜ！！あははははははは！！！！！！」

俺はフェリスを強引に離し、立ちあがった。

これで逃れられる!!

「そうですね…さっさと終わらせて、さっきの説明をして貰いませんとね、イブキさん？」

「そつだな…一から十まで全部な…」

「俺が納得のいく様な説明をな…」

「ちゃんと説明出来るよね？お父さん」

……ですよ。

逃げれるワケ無いですもんね。それとフェイトよ、もうエリオ達から聞いたのか。

「えっと……どうしても？」

「」「」「」「」「」

「……………ごめんなさい……！」

ダッ！

「「「逃げるな……！」」」

ダダッ……！

「ちよっ！？皆仕事してーや……！」

「ムリだあああああ……！」

「「「さあ！吐け……！」」」

「ヒィィィィィ……！」

ちくしょお!!何でこつなるんだよおおおおお!!!

果たして無事、任務達成出来るのでしょうか。

後半に続く。

「まだあんの!!!？」

ある。

派遣任務？（前書き）

作者「あゝ、体調を崩してずっと寝込んでたから更新が遅れちまっ
たぜ」

イブキ「しっかりしてくれよ」

作者「ごめんチャイ」

イブキ「反省の欠片もねーな」

作者「グダってるかもしれないけど宜しく!!」

派遣任務？

俺達エンペラード隊は、他の隊とは別の場所…何処かの広場に居る。

「…なあ、俺あっち行っていい？」

俺は隣に居るフェリスに頼んだ。

「駄目に決まっているいるだろう」

しかし簡単に拒否られた。

因みにあつちとは、スターズ隊やライティング隊の所だ。

「いいじゃん別に。減るもんじゃないし」

「戦力が減るだろう」

「よく言っ……」

さて、何故俺達が此処に居るのか説明をしよう。

あの後結局捕まった俺は四人にボコられた。(理不尽だ!)で、このイライラをロストロギアにぶつけてやろうと意気込んでいたら、何か薄気味悪い感じがした。しかもエンペラード隊だけが感じた。俺が疑問に思っていたら、いきなりフェリスが俺のコートの襟を掴んで此処へ連れて来やがった。俺の事など無視して。

そのすぐ後にC・Cと空幻が跳んできた。(誤字に非ず)ハクはそんな化け物じみた身体能力は持っていなかったから、走って来た。……結構離れてたんだと思っただが……。

そこで俺がフェリスに何事か聞こうとした時、そいつらが現れた。

悪魔:俺がこの世界に来た理由の存在……。

そいつらが現れた。

そして冒頭になる。

「悪魔って……ミッドにいるんじゃないのか?」

だからミッドに送り込まれたんだと思っただがな……。

「まあ、殆どの悪魔はミッドを狙っているが、極一部の奴は別の所を狙っているんだろう」

俺の疑問にC・Cが答えてくれた。

「なら此処も守らないといけねえんじゃ……」

「必要無いだろう。此処に来るのは下級中の下級……人間界に下界するのがやっとの所だ。人を襲う前に自ずと消滅する」

「なら来る必要は……しかし見つけたからには打っておかないとな……」
「メンドくさ」

何で現れるかなー？こっちはボコられてしんどいっつうのにさらにしんどい仕事を持って来やがって。

俺は悪魔どもを睨んだ。悪魔どもの姿は如何にも悪魔でーすって、言っている様な姿だ。大きさは大体一メートルくらいで真っ黒な体に黒い翼。そうですね、あなたが想像した通りのベタな姿です！

「何か拍子抜け…。もっと邪悪な感じだと思つてたのに…」

「アレは悪魔に成り損ねた出来損ないだ。ちゃんとした悪魔はお前が思っている通りだ」

フェリスが訂正してきた。
出来損ないって…んじゃあ、現代のエクソシストはその出来損ないに苦戦してんのかよ…。

「まあ、厄介なのは下級の奴らと同じく数が多いって所だな」

そう、いま俺達の視界には溢れんばかりの数の悪魔がウジャウジャといる。まるでGみたいに。

「…………ゴキ」言わないで下さい!!」「…ごめん」

俺が思った事を口にしようとしたら、ハクに怒られた。

「…所でハク、お前はあいつ等を見て怖くないのか？」

「怖いです！別の意味で！」

…悪魔に対する恐怖よりも、ゴ○ブ○に対する恐怖が上だとは…中々度胸があるな…。

俺？フツ…悪魔より恐ろしい女性を見ているからな…。今現在一緒にいるし…。

「なあ、そろそろ片づけんか？食った物が出てきそうだ…」

狐耳で袴も白い巫女さんの姿をした空幻が、我慢出来んと僅かな狐火を口から吐き出しながら言ってきた。

確かにずっと見ていたら吐きそうになるな。

「よおし、ならさつさと片付けますか」

俺は皇の次元武から魔皇刀を取りだした。

「ちょっと待て」

俺が突っ込もうとしたらC・Cが呼び止めた。

「何だよ、調子狂うな」

「いやなに、ちょっとした余興をやるうではないか」

「余興？」

C・Cは何かを企んでそんな笑みをこぼした。
わかる。こつ言う時は絶対に俺に被害が来ると。

「一番多く悪魔を倒した者には……」

「者には？」

の衣で包み、禍々しい魔力を纏わした黒い刀を手にした青年…イブキを見れば…。

「おらああああ！！」

ズザアアアン！！

「「「グギヤアアア！！？」」「」」

俺は刀を振り、斬撃を飛ばした。その斬撃は俺の前にいた十体の悪魔をまとめて両断した。

「二十体目！」

俺は次の獲物を求めて群の中に突っ込んだ。悪魔達は恐れをなし、俺から離れていく。

「逃げられるとも思ってたのかあ！？」

俺は天の鎖を出し、逃げ出す悪魔共を絡め取り、一か所に集めた。

「おとなしく俺の為に散れ！皇の次元武 デイメンション・オブ・エンペラー　！！」

ズドドドドドドツッ！！！！

「『ギヤアアアアア！！！！？』」

「権利は俺の物だあああ！」

所変わって別の場所。

此処では悪魔達が逃げもせず一か所に集まっていた。

「さあて、どいつから斬ってやるつ。お前か？それとも……お前か？」

訂正。ただ怯えて動けなかっただけだった。

その怯えて動けない悪魔達の前にいるのは、剣を持ったフェリスだった。

フェリスは恐怖を与える美しくい笑みを浮かべながらゆっくりと悪魔達に近寄った。

「そう怯えるな。急いでいるからな、何も感じさせず一瞬でイカせてあげるから……フッフ」

「「「ギャギャギャ（ガタガタガタ）！！」「」」

もはやどっちが悪魔なのか分からなくなってきた。

「それじゃあ……死ね？」

ズバツ！ズバズバズバツ！！

「「ギヤアアアアア！！！？」「」

「権利は私の者だ……フフツ……フフフフ！」

また所変わって別所。

一人の女性と数十体の悪魔が対峙していた。

「……………」

「……………」

C・Cは悪魔達を見据え、隙をつかっていた。

「……………ハッ！」

そして勢い良く掛け出した。そして右腕を横に出し……

「喰らえ！」

ドゴォー！

ラリアット。

それを喰らった悪魔は首から上が吹っ飛んだ。次にすぐ横にいた悪魔に狙いを定め、左手を握り……

「ハアアア！！」

ズゴォン！！

昇竜拳。

しかも黄緑色の魔力を全身に纏つての攻撃。それに巻き込まれた悪魔達は消滅。吹き飛んだのではなく、消滅。これ絶対。

次にC・Cは空中で右の拳に魔力を溜めこんだ。そのままC・Cは下にいる悪魔達を見降ろした。

悪魔達は見えてしまった。C・Cの目がバースーカーの様に光り輝き、C・Cの口が笑っているのを……。

「『ガアアアア（悪魔だー）！！！！』」

「ウリヤアアア！！！！」

C・Cは地面に着地しながら右拳を地面に叩きつけた。

ドガアアアアーン！！！！

大・爆・発！

周りにいた悪魔達は消し去った。

「フッフッフ…。言い出した私が負けるワケにはいかん…。権利は私の物だ！フッフッフ…アーハッハッハッハ！」

またまた所変わって別所。

一人の巫女が多くの悪魔達に囲まれていた。

「ギャア！！」「ガアア！！」

悪魔達は空幻に吠える。

しかし空幻は周りを見渡すだけ。

「……………こんなものか」

そして空幻はそう呟き、魅惑的な笑みと声を出した。

「<そう怖い顔をなさらないで>」

「ガ？」

「<私、何かしましたでしょうか？>」

今此処にイブキやレオン、男たちが居たら一瞬にして空幻の虜になっ
ていただろう。それほど艶っぽく、妖しい声だった。現に……

「ガッア……」「グルッ……」

悪魔達がそうなのだから。悪魔達は空幻の力で虜にされていた。
それを確認した空幻はニヤッと笑い、口を開いた。

「<さあ皆さま、私の前へ一か所に集まって下さいな>」

空幻の声に従って悪魔達はぞろぞろと一か所に集まっていく。

そして全ての悪魔が一か所に集まった。

「くありがとう。これで……簡単に焼き殺せる」

ボウウ！！！

「ッッグギヤアアアアア！！！！？」

最後の言葉だけ素で言い、ありつたけの狐火の業火を悪魔達に浴びせた。

そして悪魔達は真っ黒の炭になり、消滅した。

「権利の為とは言え、イブキ以外の奴を、ましてや悪魔なんぞを虜にするなんてな……」

。しかし……権利は俺の物だ！」

またまたまた所変わって別所。

一人の女性……て言うかハクしか残っていないんだが……。ハクはマ
ンションの屋上に立っていた。

「……………」

否、弓を構えていた。

彼女の視線の先には、数十体の悪魔達が走りまわっていた。その悪
魔達が通って来た道を見してみると、何体もの悪魔達の死体が消滅し
ていていた。
すべてハクが矢で討ったのだ。

因みに、今のハクの姿は何時も着ている格好ではなく、上半身は白
っぽい灰色でシグナムの格好に少し似ているので、胸に銀色の薄い
プレートを付け、下半身は同じく白っぽい灰色の長ズボン、白く丈
が長く脛まである羽織を着ている。前回、エンペラード隊の服装
は日常時と戦闘時の格好は共有していると言ったが、ハクだけは違

い、ちゃんとバリアジャケットを所持している。

「……そこ」

シュバツ！

ハクが放った光の矢は真っ直ぐ一体の悪魔の頭を貫いた。

「……このままでは負けてしまいますね……」

ハクは今まで建物の被害を考えて広域の攻撃は控え、一体一体確実に潰していたために、まだそんなに倒していなかった。

「しかたありませんね、建物の被害を考えて来ましたが、権利の為です。多少の被害は目を瞑りましょう！」

しかし権利の為、この事の為だけに、その考えは捨てられた。

「数は三十……この距離なら……」

ハクは周りの状況を確認し、右手に集中した。
そして右手から光が出てきだし、それが矢の形になった。

ハクは弓を構え、狙いを定めた。

「これで消えなさい……ストーム・アロウ！」

シュドンッ！

そして魔力が詰め込まれた光の矢が空へと放たれた。

矢は悪魔達の上空に到達すると強い光を出し、爆発した。そしてそこから膨大な量の光の矢が降り注いだ。

ズドドドドドドッ……！！

「ホントすみませんでしたー！！！！！」

はやてのに全力で土下座する俺。

結局、大会の結果は引き分け。

その結果に不満を抱きつつも、仕事は終了したから皆の元へ帰ったんだが、俺は失念していた。エンペラード隊は悪魔でも六課の指揮下である。しかし俺達は誰の許可を得る事も無く悪魔討伐の任に出た事、そして俺達は一体どれくらいの被害を出したのか……。
つまり……

「うちの許可も無く勝手にどっか行ってもて勝手に悪魔を討伐してきておまけに周りの被害が大ってどうゆう事や！？ええ！？」

我が上司、八神はやてを阿修羅にしてしまったのだ…。

「異議あり！！」

「認めんわ！！百歩譲って無許可や討伐はええとして、周りの被害大って言うのは一体何や！？」

「異議なし!!」

「あつてたまるか!!罰として一年間給料無しや!!」

「はあ!?!それは無いだろう!?!」

一年間一体どうやって過ごせばいいんだよ!?!

「うつさいわ!!人の故郷潰してなんやその態度!?!もっと反省し
いや!!」

「俺だつて悪いって思ってるさ!!だからフェリス達に修復させに
行かせてるだろう!!」

俺はフェリス達に頼み、街の修復に行かせた。
あいつ等は天界の力で直す事が出来るらしい。しかし代償として相
当な体力を消耗する為、滅多に使えないらしい。

「知らん!!あんななんか千手観音の手に刺されて悶え苦しんで無

残に死ね!!」

「どういう死に方だよ!?!」

千回刺されて死ねてか!?!一回で終わるわ!!

「はやて、もうそれくらいに……」

「フェイトちゃん、こうゆうのは一度ガツンと言っとかなあかんねん!!」

「でも、イブキ君も悪気があったワケじゃないし……」

「そっやけど!!」

はあく……どうやっても許して貰えないか……。
仕方ない……。

「わかったよ、俺も大人だ。一年間給料無しでいいさ。それで許し

て貰えるのなら」

「「「え？」「」」

「但し俺だけな、ハクやあいつ等の分はちゃんとあげてやってくれ」

「え！？イブキさんダメです！私達も！」

「これは命令だハク。罰は俺だけいい」

本音、もしあいつ等まで無しになると何が起こるのか分からんからな。

「……なんやのそれ、ウチが悪者見たいやないの」

「いや別にそう言うワケじゃ……」

「もうええわ、許す、許します！」

「その時は一体イブキはどうするのだろうか」

彼らの会話は一体何を意味するのか…。

その意味は彼らしか分からない。

女侍と魔王 前編（前書き）

作者「いや、間に合って良かった！」

イブキ「曜日はな」

作者「ごめん。戦闘は次回からですよ！」

女侍と魔皇 前編

エンペラード隊にとっての初任務から数日の朝6時過ぎ。
その隊長のイブキ・ヤマトとルームメイトのレオン・スラストの部屋では…。

「ぐがぁ〜…ぐがぁ〜…」

「ぐ〜…ぐ〜…」

気持ち良さそうに寝ている二人の姿があった。

因みに、レオン、イブキの順である。

本来ならもう起きる時間なのだが、起きる気配がない。二人の目覚ましは無残にも粉々に砕け散っている。

恐らく、目覚ましのスイッチを押したのではなく圧したのだろう。彼らの目覚ましは何時も壊れる。いや、壊している。そんな彼らだが、何時も寝坊はしていない。それにはある一つの理由がある。

シュイン……

部屋のドアが開き、誰かが入って来た。何時も鍵を掛けているのだが、入って来た人物には関係無い様だ。

その人物はベッドで寝ているイブキを確認するとゆっくりと近寄った。

そして傍まで来ると、イブキに手を伸ばし……

「イブキさん、朝ですよ。起きて下さい」

肩を揺らしイブキを起こそうとした。

これが寝坊しない理由。

彼女…ハクが毎朝起こしにやって来るのだ。

「んん……んん……」

「ほら起きて下さい。じゃないとはねられちゃいますよっ」

「何を!？」ガバツ!

「ふふっ…おはようございます、イブキさん」

.....

皆さんおはようございます、イブキ・ヤマトです。

いやー、あの任務以来死にそうで仕方ないくらい嫌なデスクワークばかりでストレスが溜まってます。いやもうマジで。

しかし、唯一癒しとなる事があります。

それは何と、我が補佐官でフェリス達に負けない程の美貌を持つハクが頼んでもいないのに毎朝起こしに来てくれるのだ!俺とレオンは何故か目覚ましを必ず壊してしまい、起きる事が出来ない。そこでそれを何所か知ったハクが毎朝来るのだ。……何故ドアのロックを解除出来るのかは不明だが…。

「ハク…起こしに来てくれるのは有り難いが、怖い起こし方は止めてくれ…」

「でも、そうしないと起きてくれないんですから」

「そう言われるとな……」

「それより何でいつも鍵を閉めているんですか？」

ハクがしかめっ面で聞いて来た。その顔が妙に可愛いと思うのは俺だけだろうか？

「そりゃ閉めるだろ、普通……」

「毎回開けるこっちの苦労も考えてください」

「ごめん……」

って、何で俺が怒られてんだ？常識的には俺が正しいと思うんだが……。

「あ、レオンさんも起こさないと……」

あ、そう言えばいたな、そんな奴。

俺は隣のベッドで寝ているレオンを見た。

レオンは男の俺から見てもカッコいいと思える部類に入るが、今のレオンの顔をとてても放送出来ない状態だ。あえて言うのなら、涎がヤバいという事だ。

「きつたねーな……」

「うへへへ……美味そうな………美女だ………」

「レオンの変態がッ……!!」

「レオ……!!」

「ぐほおあ……!!?」

俺は人として言うてはいけない事を言ったレオンの腹を魔力で強化した拳（C・C・直伝）で殴った。

「ぐおおおおー!?!」

その衝撃でレオンは目を覚まし、ベッドの上で悶え苦しんだ。

「何しやがる!?!」

「お前が見てはいけない夢を見ていたから助け出したただけだ!」

「夢?.....ああ、俺が女体盛りを食いかけた夢か」

「最低です」

「最低だな」

こいつは何所か人として終わっている気がする。そうでも無くても男として終わっている。

「まあ、流石にアレは無いわな」

「何だ、ちゃんと分かってんじゃん」

「やっぱりベッドの上じゃないとな」

「「死ね／死んで下さい」「」

俺とハクは本気でそう思った。

「こんな奴はほっというて着替えるか…」

俺はベッドから降り、俺専用のクローゼットを開けた。中にはコートの下に着る黒い衣類しか入って無い。俺は前の世界でも黒しか着ないのだ。理由は簡単。黒が好きだから。逆に白は嫌いである。

「イブキさん、黒い服しか無いんですね」

「……ハク、俺は着替えたいんだが？」

「お手伝いします！」

「いや結構だ！」

何良い笑顔で言っちゃってんの!?

「これも補佐ですから！」

「仕事だけにしてくれ！」

そう言って無理やりハクの背を押し、退出してもらった。

「まったく、熱心なのはいいが、常識を考えてくれよ……」

「……………」

「………何だよ？」

「いや、お前もハーレム野郎だなんて……」

「はぁ？何言ってるんだ？」

「……………こいつ、鈍感だ」

レオンが何か言っているが、どうせどうでもいい事だろ。

俺は適当にTシャツを取り、いつものズボンとコートを着た。
レオンも六課の制服に着替えた。

「またその格好か？」

「良いだろ別に。これがエンペラード隊だ」

「……………本音は？」

俺、ハク、レオンは挨拶をした。

「おはよう、三人とも」

「おはよう」

「「「「お早うございます！」「「「「

なのは、フェイト、子供達も挨拶を返してきた。

うんうん、皆元気だね。

「よく眠れた？」

フェイトが俺に尋ねてきた。

「あゝ……まあまあかな？」

「駄目だよ、ちゃんと寝なきゃ」

「寝ようとは思ってるんだが、仕事が多くてな……」

多いんだよな、デスクワークが。やたら長い文章やワケの分からん記号やらなんやらばっかりで頭破裂しそうだ。……って言うかこのミッド語が理解出来たのがびっくりだな。

「レオンくんは……聞くまでも無いよね……」

「ふあん？ふあひふあが？」

「食ってから喋れ」

レオンは元気に朝食を食っていた。

こいつ、朝から元気だな。

「あ、そうだハク、今日の予定って分かるか？」

俺はハクに今日の事を聞いた。ハクは補佐官としてスケジュールの事とかその他諸々をやってくれている。いやあ、頼もしい。

「ちょっと待ってて下さい…えっと…」

ハクは袖に付いているデバイスを弄りだした。

「え〜っと…午前は全てデスクワークで埋まっていますね」

「……あの狸は俺を殺す気か。…午後は？」

「みっちり訓練です」

「……ちびほ、明日よ」

死んだな、うん。絶対死んだ。何だよこのハードスケジュール…。完全に俺を殺す気だろ。

「だらしねえな…。デスクワークなんてちょちょいのホイだろ」

「俺はそんなに頭が出来てねんだよ…。なあ、スバル」

「うん！」

「……ちょっとは否定して欲しかった」

俺は同類のスバルに振ったが、とても良い笑顔で肯定した。

言っとくがお前もなんだぞ？

「えッ！？イブ兄！？」

スバルは俺が落ち込んだ事に焦った。

ああ、イブ兄って言うのは俺の事な。あの任務から帰って来た時に何故かそう呼んでも良いかと聞かれた。まあ、エリオとキヤロは俺の事を父さんって呼ばしてるから、別に良いけどって言ったところになった。

それと、父さんの事については、散々皆に尋問されたとだけ言っておこう。……何故かフェイトはとても嬉しそうだった。まあ、自分が保護してる子供に笑顔が出たら嬉しいからな。

「父さんは何時もどんな訓練をしてるんですか？」

「あつ！私も知りたい！」

エリオが訓練の事を聞いてきて、スバルがそれに乗ってきた。

「そう言えば、イブキ君達の訓練って見た事無いよね」

「そうだね、ちょっと気になるかな？」

なのはとフェイトも気になり始めた。

「どんなって……うん……」

「そんな考える必要があんのかよ？」

いやだってな……。お前らが考えてる様な訓練じゃないからな……。

「一言で言えば……殺し合い？」

「それ最早訓練じゃねえ!!」

レオンが全力でツツコンだ。

「だって仕方ないだろ。フェリス曰く、死ぬ思いになれば何でも出来るらしいからな」

「訓練だから!!死んじゃダメだろ!？」

「だからこそだ。生き残るために必死に技を磨くんだけだ」

「あ、成程」

「……納得しちや駄目でしょ!?!?」「……」(俺とレオンとハク
意外)

レオンは俺の言葉に納得し、それに皆がツツコミを入れた。

「駄目だよそんな訓練しちや!！」

「もっと良い方法があるからね!？」

なのはとフェイトが必死になって訓練を止めさせようとする。

「と言つてもな……これが一番簡単だしな……」

「でももし何かあったらどうするの!?!?」「」

フェイトがさらに喰い付いてくる。

「そこはほれ、ハクが矢でズドドドって…」

「……首が吹き飛んだら流石に助けられませんよ？」

「そこまで!?!」

「フェイト、これがエンペラード隊…悪魔と戦うって事はこう言う事なんだ…」

俺はフェイトの頭に手を置き、宥める様に言った。出来るだけ爽やかな笑顔で。

「だったらどうしてそんな悟った顔をしてるの!?!」

あれ?俺そんな顔したのか?おっかしーなー?笑顔を出した筈なのに。

「父さん…涙が出てますよ…」

「どうやら頭では受け入れていても、心の何所かでは助けを求めているらしい。」

「あ、もう仕事の時間ですよ。さっさと終わらせましょう！」

ガシッ！

「え？ちよっ…」

「ちあ早く」

「ああああれえええええ…」

「あっ！イブキ〜！」

「何がですか？」

「いや、何にも無い……」

ヤバい……マジでヤバい。視界がぼやけてきた……。体に力が入らねえ……。

「だらしない……。こんな簡単な事も出来んのか」

「面倒くさがりの私でも簡単にこなせるぞ」

「……フェリスは良いとして……、自分で言っただけ悲しくないか？」

「……悲しい……な」

だったら言つなよ……。でも確かにそうだよな。フェリスはともかく、……、それに空幻までもがこれを簡単に仕上げてるのに、俺だけ出来ないなんてな

…。隊長としての威厳が無い。

「何とかして出来るようにしないとな。…さて！時間も丁度良いし、
昼飯に<ピ>ピ>ー！>…あん？はいよ」

俺が立ちあがり昼飯にしようと言おうとしたら、誰かが部屋チャイムを押した。

「失礼する」

入って来たのは烈火の将・シグナムだった。

「珍しい…と言うより初めてだな、シグナムが来るなんて」

「そう言えばそうだな」

「んで？何か用なのか？」

俺は椅子に座り直し、シグナムを見た。

「ウム、何時かの約束をそろそろ果たして貰おうと思ってな」

……はて？何か約束したっけ？

「……イブキさん？約束って、一体何ですか？」

「まさかとは思うが……デートとか言うんじゃないだろうな？」

「もしそうだったら……お前の頭を斬りおとして……」

「体を丸焼きにするぞ……」

待て待て！何でお前ら戦闘態勢に入ってたんだ！？大体、俺がデートなんてする筈が無いだろう！！

「そうだな、ある意味デートかもしれん」

「シグナムうううう！？」

何を言い出してんだ！！？まさか俺そんな約束しちゃったのか！？
いや！！俺がそんな大事な事忘れる筈がねえ！！

「フェリスさん、空幻さん。今すぐ包丁と火の用意を。C・C・さん
んは私と獲物を仕留めに」

「了解した」「」

嫌ああああ！！！！俺料理されちまううう！！！！？早く何とか
しねえと！！その為には約束が何なのか聞かねえと！！

「シグナム！！」

「な、何だ？」

やっぱり獲物は俺か！？俺なんだな！？いや、それより興奮と言っ
たな！？俺はシグナムの前で興奮したのは一度しか無い！そうあの
時だ！

「シグナム、それはあのへりでの事か？」

「ああ、あの時のお前は顔を真っ赤にしていたな」

「…もう我慢できません。しんで「最後まで聞けっ！」…むう」

俺は弓を具現化しだしたハクを無理やり黙らした。

「…はあ、あれか。確かに約束したな」

「ああ、そつだ。あれから数日、もう果たして貰っても良いのでは
ないか？」

どうやら俺の思っていた事で間違いなかった様だ。

「おい、イブキ。そろそろ説明して貰おうか？じゃないとこの剣が今にもスパッっていきそうだ」

剣を握り締めながら俺を睨んで来るフェリスは、本気に見えて怖かった。

「お前らもその場に居ただろう。ほら、初任務の時、俺がお前らを縛って説教した時だ」

「ああ、あの時か。俺はあの時、もう少しで変な扉を開きそうだったぞ」

空幻が何か聞いてはいけない事を言った気がしたから無視した。

「それがどうしたんだ？」

C・C が先を聞いた。

「その時にシグナムにお前らを頼んだだろ。模擬戦と引き換えに」

「「「「……ああ!!」「」「」

四人も思い出したらしい。同時に手を叩いた。

「そうだ、だからやるぞ」

「……今日？」

「ああ」

「今から？」

「昼食の後でいい」

………ならいつか。訓練よりはらくゲフン！ゲフン！……安全で良いだろうし。

「なら今日の午後の訓練の時に」

「わかった、絶対だぞ」

そう言うシグナムの顔は、子供が新しいおもちゃを貰った時の様な顔だった。

「わかってるって。レオンじゃないが、女との約束を忘れる男じゃないさ」

「………今忘れていただろう」

うっ……でも思い出したから結果オーライだろ！？

その後、シグナムは部屋を出ていき、残ったのは、何所か不機嫌そ

うな美女達と俺だけだった。

女侍と魔皇 後編（前書き）

作者「また遅れてごめんなさい！」

イブキ「あいな！いつつもこうだろう!？」

作者「ごめん!!中々時間が取れなくて!何か最近、部活での試合が多かったり、テストが近くて色々と勉強を!ホントごめん!何とか波に乗る様にしますから!!」

イブキ「...はあ、と言う事で許して下さい。あと、それと後書きに追加の設定があるみたいだ」

女侍と魔皇 後編

「イブキ、体の調子はどうだ？」

「問題無い、十分に動く」

「ギアスは？」

「大丈夫だ、正常に発動する」

「魔力の方は？」

「バッチグー」

「意気込みは？」

「ぜってー負けねえ！」

「「「「なら、行って来い）行ってらっしやい（「「「「「

どもども、イブキです。

只今、あのバーチャル的な練習場（今回はビルが沢山建っている）にエンペラード隊の隊員達に見送られました。

今回はシグナムとの模擬戦：スターズ、ライトニングも練習を一旦止めてまで見学している。

「やっと…やっとこの時が来た！」

シグナムは何時ものバリアジャケットを身に纏い、息を荒げていた。決してえっちな表現ではない。シグナムの目は、正に肉食獣、捕食者、喰う側の目をしている。いや、恐い意味での。

「シグナム、少し落ち着け…」

「これが落ち着いてられるか！やっと悲願が達成されるのだ！」

それ使い方間違っただけか？

「さあ、早く始めようではないか！」

「はいはい。…トレース・オン」

パン！

俺は干将・莫耶を投影した。

「ん？あの刀はどうした？」

「あれはちと魔力が高すぎるからな。レオンやフェリス位の相手にしか使えない」

前まではそうでは無かったが、この頃魔力が成長してきて、魔皇刀の魔力もそれに伴い高くなってきた。それ故、俺とほぼ同等の力を持つレオンか、その天性の魔力と身体能力を持つフェリス位にしか打ち合えない代物になってしまった。

因みに、C・Cと空幻相手にはギリ使えない。

「そうか…。なら、今日からそれに私も入れておけ！行くぞ！」

シグナムは風の如く突っ込んできた。

しかし、俺はこの数日の間、フェリス達と死の訓練をしてきた。この位の速さ、どうってこと無い。

キーン！

俺は振り下ろしてきた剣を難なく受け止めた。

「どうした？この程度か、烈火の将」

「クツ…舐めるな！」

シグナムは縦、横、斜め、あらゆる方向からデバイスを振ってくる。俺はそれをいとも簡単に防いでいく。

「ハアアア!!」

ガキイン!!

「ほらほらどうした？俺はこの場所から一步も動いてないぞ?」

「クッ…」

「…今度は此方の番だ」

俺は受け止めていたデバイスを大きく弾き、隙が出来たシグナムを蹴り飛ばした。

「あいつ等に鍛えて貰った成果…お前で試す」

俺はシグナムに向かって突っ込んだ。

「その程度で！」

シグナムはデバイスを振り下ろしてきた。しかし……

「フェリスの方が断然速い！」

ガキーン！！

「何ッ！？」

俺はシグナムのデバイスまた大きく上に弾いた。

「腹ががら空きだ！」

俺は双剣を消し、両手と両脚に魔力を纏わした。

「C・C・直伝、天連掌！！」

そして回転しながら両脚の四連撃を放ち、四撃目でシグナムを打ち上げ、前に落ちてきた所へ両手で掌底を腹に喰らわせた。
俺の力は悪魔しか殺せない様に、空幻が嚴重に封印し、制御してあるから、人を殺すことは無い。

ドン！！

「がぁッ！？」

ズガァン！

シグナムは吹き飛び、建物にぶつかった。

イブキ s i d e a u t

「うわ〜！イブ兄凄〜い！！」

「どうしたら父さんみたいに出来るんだろっ？」

エリオ、どう頑張ったって、イブキみたいにはなれないよ。

「……………やっぱりあの人も天才なんだ」

「……………え？」

ティアナが何かを呟いたけど、よく聞き取れなかった。
ティアナを見ると、何所か浮かない表情だった。

「……………ティア「あっ！シグナム副隊長がやられた！？」えっ？」

私がティアナに声を掛けようとしたら、スバルの大声に気が行って

しまった。

イブキとシグナムがいた所を見ると、イブキが両手を突き出した状態で止まっていた。両手の先を辿ったら、ビルから土煙が上がっていた。

「え？え？一体何が？」

「フェイトちゃん、見て無かったの？今イブキ君がシグナムを体術で吹き飛ばしたんだよ」

「ええ！？嘘！？一体どんなだったの！？」

「え？えくと…レオン君、見えた？」

「あれは回転蹴りと、掌底だな。それも、魔力を纏っての」

イブキって、確か剣術や投擲しか使って無かった様な…。体術も出来るんだ…。

「ほう…イブキの奴、ちゃんと使えてるではないか」

私の横にいたC・Cさんが、ニヤッと笑いながら言った。

「あの、もしかしてイブキが使った体術って…C・Cさんが？」

「ああ、私が教え込んだ」

C・Cさんが胸を張ってどつだと言わんばかりに威張った。

「へえ、あれってC・Cちゃんが教えたのか！いや、凄いね
〜！」

「ふふん、そうだろう？なんせC・Cだからな」

言っている意味が分かりませよ…。

「流石！見た目も良ければ中身も良し！いよっ！才色兼備！」

「そう褒めるな、照れるではないか」

レオンがC・C・さんを煽てる。

あ、もしかしてこれって…。

「そんな貴女とお食事をさせて下さい！」

「断る」

やっぱり…。出た、レオンの女癖…。

レオンが女性を褒めた後は何時もこれだ。えっと確かこれで誘われた人は三十人は超えてたっけ？

え？何で知ってるかって？だって皆、「スラストさんに誘われちゃった！」とか、「スラスト様ア〜！」とか言ってるもん。嫌でも分かっちゃうよ。

「ウハッ！氷の様に冷たい所もまた素敵！」

…なのは、こんな人で本当に良いの？

「C・C・さん！イブ兄に体術を教えたんですか！？」

「ああ。私があいつに教えられる事は、体術とピザとギアスしか無いからな」

……多少、可笑しなものが入ってるけど…。
確か、C・C・さんは天界だったかな？そこで体術の実力はトップレベルらしいって、イブキが言ってるな。

「……？ぎあすって何ですか？」

キャラコが聞き慣れない単語に疑問を抱き、C・C・さんに聞いた。

「ん？そう言えばあいつ、まだ私達の前でしか使って無かったか？」

「ああ、そう言えばそうだな。あれのお蔭で私が何度剣で打ち負け

「た事か…！」

「俺の術も全て消されたな…」

「私の矢も…」

「どうやら、ぎあすと言うものは相当なものらしい。フェリスさんの剣の腕はシグナムよりも上みたいだし、空幻さんの術って言うのは分からないけど、ハクの矢も凄い。それを簡単に消すものって一体…。」

「ギアスと言うものはな、簡単に言うと全ての人が心の底で願う事を形にする力の様なものだ」

「願いを形につて…おいおい、それじゃあいつは神かよ。ケツ！ますます気に入らねえぜ」

「ヴィータ…どうしてイブキをそんなに嫌うのかな？」

「まあそれは置いて、確かにヴィータの言う通り、そんな力は神と等しい。」

「神、か…。確かに、捉え様によってはそうなるかもしれない。だがなロリっ娘、そんな良いものでもばいぞ」

「なっ何だと!？」

「あの力はいずれ持ち主を孤独にする」

「…………え？」

え？孤独につて…………どうして!？

「どうしてですか!？」

「知らん…。私にも分からない。あの力を持った者は全て孤独になり、死んでいった」

そんな…!？それじゃあ、イブキは!？イブキも孤独になるの!？

「まあ、イブキが孤独になる事は無い」

「えっ？」

「私が一生傍にいる」

そう言ったC・Cさんの顔はとても優しそうで、まるで大切なものを見る様な顔だった。

もしかして……C・Cさんって…。

「何を言っている、俺がいる」

「いいえ！私です！」

「何を言う、アレは私の奴隷で玩具でパートナーだ。よって私がいる」

エンペラード隊の隊員が次々に候補していく。

うっ、まさか皆も？ライバルが…って何言ってるんだろっ！？／＼

／別に私はイブキの事を…／／／

「フェイトちゃん、頑張っ…」

「なのは！？ちっ違うからね！？／／／」

「（顔真っ赤だよ…）」

なのはってば、あの時からいつつもこうだ。私がイブキの事を好きだっ…って勘違いしてる。それはまあ、カツコよくて優しそうで頼もしいけど！でもそれが恋愛に行くワケじゃ…／／／

「え、えっと！／／／そ、それでそのギアスの力と言うのは？」

私はこの思考の輪を抜け出すために、強引に話題を戻した。

「ん？力か？あいつのギアスは…破壊だ」

「破壊!？」

「ああ。視たもの、触れたもの、そのありとあらゆるものを破壊する力だ」

「そんな力が…」

「あいつはその力をこの数日で完全に引き出したからな。あれには驚いた」

「それはどういった……」

「見ていればわかる。そろそろ動くぞ」

「え？」

フエイトside aut

.....

イブキside

シグナムがビルに突っ込んで少し経ったが、動く気配が無い。
まさか、この一撃で完全に沈んだのか？ だったら期待外れだな。シ
グナムならあいつ等によく強敵になれると思ったんだが…。

「はあ、もう終わりか。つまり……ッ!？」

ジャラララララ!!!

いきなり、煙の中から何かが飛んできた。
一瞬、鎖の様に見えたが、違う様だ。

「あぶなッ!？」

俺は間一髪、横に跳んで避けた。

そして煙の中からシグナムが飛び出て来た。

手には剣のデバイス、レヴァンティンが握られているが、刃の部分が鎖の様に伸びていた。

「連結刃か!？」

「そうだ、切り札を持っているのは貴様だけでは無い!此処からは本気で行かせて貰うぞ!」

「<シュベルトフォルム>」

そう言つて、シグナムは刃を戻し、消えた。

そう、消えたのだ。俺の視界から綺麗に消えた。

「なっ!?!何所に!?!ツ!?!」

俺がシグナムを探していると、横からシグナムが現れた。

デバイスを振り下ろしながら……。

「クッ!?!」

俺は倒れるように避け、シグナムから離れようとしたが、シグナムはそれを許さず追撃してくる。

「ハッ!せいッ!ヤッ!」

「うッ!く、そッ!」

俺は魔力を纏わした右拳をシグナムに向かって放ったが、そこにはシグナムはいなかった。

「なっ!?!どこだ!?!」

「ここだ!」

「ッ!?!」

シグナムは上にいた。
切っ先を此方に突き立てて落ちてきていた。

「ハアアア!!」

「クソオ!!」

俺はバックステップで避けようとしたが、僅かにシグナムの方が早く、胸を一闪された。

「がはあ!?!」

「まだまだあ!!」

シグナムはさらに追撃をしようとした。

「クッ、させる　ものかああああ!!」

バアアアン!!!

「うわぁ!?!」

俺は全身から魔力を一瞬だけ放出し、シグナムを吹き飛ばした。

シグナムは滑る様に着地し、デバイスを構えた。

「ハア…ハア…、やるなシグナム、どうやら俺はお前を過小評価していたみたいだ」

「フン、だから最初に言っただろう」

「ああ…此処からは本気を出していこう」

俺は皇の次元武から魔皇刀を取り出した。

「行くぞ、シグナム！」

俺は刀を抜刀し、シグナムに向かって行った。

「ハアアア！！」

ガキイン！！

「クッ！？」

シグナムは俺の攻撃をデバイスで受け止めた。

「連撃行くぞオ！！」

「来い！！」

キーン！キーン！キーン！キーン！

俺とシグナムは何度も打ち合った。

俺が上から斬り落そうとしたら、シグナムが下から弾き、シグナムが横から一閃しようとしたら、俺が刀で受けたりと繰り返した。

「そらア！！」

「ハアア！！」

ガキーン！！！！

「クッ！」

「グッ！」

「う、おおおおお！……！」

カァン!!

「なっ!?!」

俺は鏝迫り合いで押切り、シグナムを怯ませた。

「もらったァ!!」

俺はそこにすかさず横一閃を繰り出した。

「そうは行くか!!」

シグナムは上に飛び、避けた。

俺はまた上から落ちて来ると思い、後ろに飛び退いた。

「そう何度も同じ手を……あれ？」

しかし、シグナムは落ちてこなかった。
俺は空を見て驚いた。

「おまつ！飛べるのかよ!？」

「ん？言つて無かったか？私は飛べる」

ああそういや、この世界の奴飛べる奴もいるんだっただな。確か空尉が付く奴だったな。……つて事はレオンも飛べんのか!？アイツ俺の前で飛んだ事あったか？

「余計な事を考える暇があるのか？レヴァンティン！」

「<シユランゲンフォルム!>」

シグナムはレヴァンティンを連結刃にして、俺に攻撃してきた。

「チィ！厄介だな！」

俺は空から襲ってくる刃を何とかかわし続けた。

「ッ！しまった！」

俺は何時の間にかビルの壁に追いやられていた。

「そこだア！！！」

シューーン！！

「クソオオオ！！！」

俺は前に跳び込み、ギリギリ避けた。
攻撃対象を失った刃はビルに直撃し、ビルが崩れ落ちた。

「なんつー威力だ…」

俺が喰らってたら一体どうなってたんだよ…。

舞い上がった煙の中で、俺は震え上がった。

「今のを避けるか…。流石だな」

シグナムの声が上からした。

「ならこれはどうだ？」

コトコトコトッ…

何か巨大な物が動く音がした。
しかし、煙で視界が悪く、それを確認出来ない。

「クツ、邪魔だ！」

俺は魔力を放出し、衝撃で煙を吹き飛ばした。
そして、目に入ったのは……

「おいおい…それありですか？」

巨大なビルの残骸を連結刃で絡め取り、持ち上げているシグナムだった。

「うおおおおおおお！…！」

シグナムは雄たけびと共に、残骸を飛ばしてきた。

「ウソオオオ!?」

どうする!?!これは大き過ぎる!今からでは避けたとしても衝撃で良くて怯む!そこにシグナムが来れば防げる自身が無い!なら...あれを使うか!

俺は左目に意識を集中し、アレのスイッチをオンにした。そして降って来る巨大な瓦礫を視た。

「.....爆ぜろ、ゴミが!」

ドガアアアアン!!!

突如瓦礫が中から爆発し、粉々に碎け散った。

「ッ!？」

爆発によって出て煙の中で、赤く光る何かが見えた。
そこからヤマトの声が聞こえてくる。

「この力は視界に入れたもの、触れたもの、全てを破壊する」

煙がだんだん晴れてきて、光を発生させている何かが見えてきた。

「それがどんな物体でも、例え記憶でも、そのものの概念でもな…」

その光の正体はヤマトの左目だった。

ヤマトの目は深い青だった筈。右目がそうだ…。なのに左目だけ赤い。それに、左目には何か……鳥が羽ばたいている様な模様がある。

「だがこれには弱点がある…」

「っ……」

「それは所持しているだけで極僅かだが体を蝕み、使用すれば体力を消耗していく事だ。故に、今の攻撃で物が物だ、体力を大幅に削られた」

体を蝕むだと？そんなものをお前は使ったと言つのか！？

「誇りに思え！この世界で一番リスクが高い攻撃を出させたのは実践でお前が初めてだ！」

「それは、喜んでも良いのか？」

「当たり前だ。だが、これのせいでもう疲れた。だからこれで終わりにしよう！」

…フツ、良かろう！ならこの一撃でお前に勝手みせよう！

「良いだろう！受けて立つ！レヴァンティン！」

「<シユツルムフォーム!>」

私はレヴァンティンの刀身と鞘を合体させ、弓へと変身させた。

「我が最強の一撃、受けてみよ!」

そして矢を出現させ、ヤマトに狙いを定めた。

シグナムside aut

.....

イブキside

シグナムがレヴァンティンを弓に変身させ、俺を狙った。俺も弓を投影しようと思ったが、今の状態の俺では、偽・螺旋剣<カラドボルク>を全力で放てる自身が無い。放てたとしても、シグナムの攻撃を打ち消せる程の威力は出せないだろう。

ならこのギアスでやるしかない。

だがさっきのやり方では、先に俺の体力が尽きてしまう。

ならC・Cと特訓した使い方であるしかない。

俺は魔力とギアスの力を左腕に送り込み、腰を落とし、拳を握りながら左腕を振りかぶった。

このギアスには、使い方が三つ有る。

一つ、対象を直接視て発動する。

二つ、対象に触れて発動する。

そして三つ、破壊する為に能力を大幅に飛躍させる。

例えば、石を握り潰す為に握力を上げる。

例えば、鋼鉄を斬り裂く為に刃の切れ味を上げる。

例えば、攻撃する為に魔力を大幅上げたりと……。

「来いシグナム。お前の一撃、破壊してやる」

「では行くぞ……翔けよ、隼!!」

「<シュツルムファルケン!>」

シュドン!!

シグナムは光り輝く矢を放った。

「全てを消し飛ばせ　ヴェアリアス!!!」

俺は左腕を思いっきりシグナムに向けて突き出した。
そこからは、黒く太い魔力砲が放たれた。

ズドオオオン!!!

二つの攻撃は俺達の中心でぶつかり、爆発した。

ドカアアアアーン!!!

大きな衝撃が練習場に伝わり、幾つかの周りの建物が衝撃で潰れた。

「クウツ!?」

「ウツ!?」

俺達にも爆風が襲いかかった。

しかしまだ攻撃は続いている。

シグナムの矢は俺の砲撃を貫けなかった。

俺の砲撃は矢を破壊し、シグナムに迫った。

「クツ!?」

シグナムは咄嗟に避けようとしたが間に合わず、右腕が閃光に飲み込まれた。

「アアアアアア!!!?」

シグナムは悲鳴を上げたが、すぐに矢を剣に戻し連結刃にしたが、

俺がその隙を見逃す筈が無い。

「内力系活剱・旋剱！」

俺は剱を使い、高速移動でシグナムの後ろに回った。

「ッ！？」

「チェックメイトだ」

俺は黒い剣、干将だけ投影し、シグナムを斬った。

ドカッ！

「ガハッ！？」

シグナムはもろに喰らい、落ちていった。
地面に着く時、レヴァンティンが衝撃を無くす魔法を発動してくれ
たので、無事に地面に着いた。

俺も重力に従って落ちていき、魔力で脚を強化して着地した。

「フウ、俺の勝ちだ、シグナム」

俺はシグナムに向けて言ったが、反応が無い。

「お、おい！シグナム！？」

俺は横たわるシグナムに駆け寄り、抱き起した。

「おい！？シグナム！？」

「く大丈夫です、ただの気絶です」

シグナムのデバイス、レヴァンティンが代わりに応えてくれた。

「そ、そうか……。はあ、焦った……」

良かった……。殺してしまったかと思っただけ。

取り敢えず、ハクとシャマルに連絡をしないと……。

俺は念話で二人にシグナムが気絶した事を連絡し、傷の治療と医務室の準備をしてもらう事にしてもらった。

「さて、行きますか。レヴァンティン、シグナムを運ぶから、元に戻ってくれ」

「＜了解＞」

「あ、制服が汚れるとあれだからバリアジャケットはそのままでもいいぞ」

「＜了解＞」

模擬戦から一日

「ん？よう、シグナム！体の調子は……」

「ツ！？／／／」バツ！（顔を見た途端走り出した）

「あれ？ちょ、何で逃げるんだ！？おい！？」ダツ！（追い掛ける）

「くっ来るな！／／／」

「何で逃げるんだ！？」

「うっうるさい！このセクハラが！！／／／」

「はあ！？何時俺がした！？」

「そんな事言えるワケないだろう！／／／」

「いや言えよ！？謝るから！」

「誤って済むものではないい！！！！／／／／」

抱っこされていた時、起きていたシグナムだった。

ちゃんちゃん

女侍と魔王 後編（後書き）

皇の次元武 ディメンション・オブ・エンペラー

何故か王の財宝を発動しようとしたら変化して出来た能力。

ゲート・オブ・バヒロン
基本は、王の財宝と変わりないが、金色の門から宝具が飛び出すのではなく、紫色の文字が書いてある円陣の中に六角形があり、その円の中に六暴星がある魔方陣が幾つも出現し、その一つ一つの中心から宝具が飛び出てくる。

さらに、王の財宝が前方だけに対し、これはイブキが認識する場所ならば何所にも出現させられる。ただし、イブキを中心に500メートルまでである。

さらに特殊能力として、あまりにも強い武器とデバイスのような高度な技能な武器以外であれば、視ただけで複製し、「本物」として完全に扱える。

この力にはまだ秘密がある？

ファオルネス
魔王刀

イブキが投影で閻魔刀を出そうとしたら、激しい頭痛と共に出来た真っ黒い刀。赤黒い魔力のオーラが刀身に纏っている。

現在判明している事は、伝説の魔王の皇帝・ヴァルネスが愛用していた刀。

イブキがこれを手にした時、この刀の使い方等が頭に流れ込んだ。
た。
レオンに使った斬撃等は全て刀の情報からである。
しかし、イブキはまだ完全には扱えていない模様。

剄の色：赤黒

キャラ設定（前書き）

作者「今更ですが、イブキ以外の設定です。こんなキャラは嫌だ！
とかは、受け付けませんので。おかしかったら言っして下さい」

キャラ設定

名：フェリス・エリス

年：外見年齢17〜19

容姿：原作・伝勇伝を参

照。

服装：原作・伝勇伝を参

照。

性格：基本原作と同じだ
い。

が、此方のフェリ

スの方が丸

武器：原作と同じ。

普段は何処かの空

間にしまっ

り、戦闘時

になる。と出現させ、戦う。

魔力ランク：SS

魔力光：殆ど剣のみで戦

う故に、魔力を

使わないが、使

用した場合は黒

である。

備考：天界の住人。神の
れて来た。異世界に行け

援軍としてイブキ

と共に送ら

る貴重な人物の一

人。原作と同じく凄ま

じい強さを誇る。

天界では一位、二位を争う程の剣の

達人。

フェリスが生まれ
産声を

た時、一族の死体

の山の上で

上げた。それ故、

天界では育ての親

の神以外に嫌われ

ていた。幼

い頃、

試合で天界の住人

なのに悪魔の力が

目覚め、相手を殺

してしまい、天界

の住人から

命を狙

われる事にもなっ

た。その際、神が

守っ

てくれた。そ

の関係で、

自分が 悪魔と言われる事

を極端に嫌い、口

にした者を殺そう

としてしま

う程。

C・C、空幻とは、

そういった暗い過

去繋が

りで出逢い、結構長い仲。

原作と同じく、団

子が大好き。

イブキに対して酷

い事ばかり言が、

恋心を抱い

ている

模様？本人は私の

専属奴隷だと言っ

てい

が。。。

名：C・C・C（本名不明）

年：外見年齢16～18

容姿：原作・コードギア

スを参照。

性格：基本原作と同じだ
い。

が、此方のC・C・Cの

方が丸

服装：原作・コードギア

スの二期で着用し

ていた服。

武器：体術。魔力を纏わ

した拳や脚で攻撃

する。その威力は

半径20メートルま

での地面に地割れ

を起こせるほど。

魔力ランク：SS

魔力光：黄緑色

備考：天界の住人。神の

援軍且つイブキの

契約者として送ら

に行ける貴重な人

イブキがギアスを

者とな る。契約内容は不

明。

手にするに至って

、その契約

不老不死で、下手

したら神よりも年

上かもしれ

ない。

天界の格闘技界で

は、フェリスと同

じく一位、二位を

争う。

原作と同じくピザ

が大好き。

フェリス同様、過

去に暗い経験があ

るようだが、

まだ

語られていない。

イブキに恋心を抱

いており、理由は

一目惚れに

近い。

それ関係の話しに

なると顔を真っ赤

にし、

ショートす

る事もあるが、普

段は表に表に出さ

ないようにしてい

る。イブキがなの

はの世界に来て、

初めてキスをされ
絶して いた。

た人物。その際、

イブキは気

名：天孤空幻

年：外見年齢17〜19

容姿：原作・我が家のお

稲荷さまを参照。

服装：大体、白の半袖の
シャツに黒の半袖
の上着、暗いジ―
テール

ンズに黒の靴、そ

してポニー

性格：基本原作と同じ。

イブキの為なら何
時は、

だってするが、緊

急時以外の

食の方が優先にな

る事が殆ど。

武器：狐火、幻術、陰陽

術。

魔力ランク：SS

魔力光：金色

備考：天界の住人。

神の援軍としてイ

ブキと共に送られ

てきた。異

世界に 行ける貴重な人物

の一人。

その正体は何千年も生きた古狐で、

大天狐である。

原作とは違い、性

別を認識している

ので、人間

の姿に

なる時は女性の姿

になる。稀に男に

変身するが、心が

女の為、嫌がる。

狐の姿になる時は

かならない。

大抵寝る時位にし

術の実力は天界で

程。

その手の部門では

一位、二位を争う

イブキに一目惚れ

ールするが、全然

けるも、フ

エリス

、C・C・に邪魔をさ

れ失敗に終わる。

美味しい物が好きで

、美味そうな物が

あれば所構わず手

を出してしまう。

過去に何かあった

ようだが、まだ語

られていない。

名：ハク・スペリア

年：20

階級：二等空尉

容姿：ボーカロイドの弱
方が明るい。

音ハク。ただし此

方のハクの

服装：ボーカロイドを参

照。

性格：明るくて元気な女
めで可憐な感じ。

性。しかし、どこ

となく控え

ゴキブリやお化け
等は怖い、悪魔
は平気。

武器：自身の稀少技能で

出す、白く光り輝

く弓。

自身が作り出す、
白く光り輝く矢。

稀少技能：弓矢の具現化

光り輝く弓と

自身が考えだ

す能力を備え

た矢を

具現化

する能力。

魔力ランク：S+

魔力光：白

B・J：上半身はシグナ

ムに似たもので

、色は白っぽい 灰色、その上か ら胸に銀
色の薄 いガードを着け

、下半身は同じ く白っぽい灰色
の長ズボン、そ して白く丈が脹 脛まであ
る羽織

備考：レオンと共に機動

六課に転属された 管理局の人物。
元々はレオンの直 属の部下で、補佐 官をしてい
たが、

その頃からレオン
の女癖に苦勞して いた。その対象に
自分が入っている 事に全力で拒否し
ていた。

イブキとは、自分
が泥酔している時 に、街のチンピラ に連れて行
かれそ うな所を助けても らった事であつた。
その時の記憶

は覚えておらず、 自分が泥酔してい た事しか覚
えてい ない。その次の日

六課に転属したの で、そこで再開。 そしてレオ
ンとイ ブキの決闘で賭け の対象になった。 その
際、イブキが

ハクを貰うと宣言
した事と、「お前
じゃないと駄目な

んだ」の一言で落 ちた。この時、ハ クはプロポ
ーズ的 な事だと思ひ込ん だが、イブキは自 分の
補佐官として

欲しいと言った。

それ以来、イブキ

に対して恋をする

。イブキの為なら

例えばどんな時であ

ろつと全力で尽く

すと決めて

いる模 様。

何故か悪魔に通用

する魔力を保持し

、それをイブキに

見込まれ、エンペ

リード隊にスカウ

トされる。

デバイスは雑務用

兼B・J展開用の

ストレージ

デバイ スしか持っていない。

大の酒好き。

名：レオン・スラスト

年：20

階級：一等空尉

容姿：青の髪で左目が隠

れている。

目は緑。

顔はイケメン。

服装：六課の制服

性格：無類の女好き。美

が付く女が大好き

。とても血の気が

多い。熱い心を持

つ。

武器：アームドデバイス

のギレン。

稀少技能：??????

B・J：デビルメイクラ

イ4に登場する

ネロのコートと

ズボンを白にし

、中に着ている

のを黒にした感

じ。

魔力ランク：SS+

魔力光：白

備考：ハクと共に機動六

課に転属してきた

管理局の人物。

大の女好きで自称

ハーレム王と名の

る程。転属初日に

初めて顔合わせし

たはやて、なのは

、リインを口説こ

うとしていた。が

、その場に駆け付

けたイブキに邪魔

をされ、失敗に終

わる。当初、イブ

キに対して

邪魔者

扱っていたが、

えた。実力はイブ

キとほぼ同

決闘の末二人の間

に硬い友情が芽生

る」と感じ

等で、

イブキ曰く、「気

を抜いたらやられ

る」と感じ

させる

程。

ハーレムを目指し

ているだけあつて

、女性の扱いに慣
れており、その容
姿と気遣い
と強さ

により、管理局内
の女性にはかなり
の人気者。大規模
なファンク
ラブま
で有るとか無いと
か．．．。

しかし、ナンパの
仕方が意味不明だ
ったり、古
臭かつ
たりと、逃げられ
る事も多々ある。

悪魔に対して傷を
負わす事は出来な
いが、怯ま
せたり
り、吹き飛ばした
りは可能である。

レオンは基本、接
近戦を好み、その
が、何故か
他の魔法は使用し
ない。空も飛べる

飛びた
がらない。
何故此処までの力
があるのかは不明
である。

デバイス：ギレン

タイプ：アームドデバイ
ス。
カートリッジ無
し。

待機時：黒く小さな棒
状のネックレス。
ス。

戦闘時：2メートル程の

黒い槍。原作・
F a t e に登場する

し、刃
の付け根に青い
宝石をはめ込ん
でいる。
にしたバージョ
ン。しか

死神（前書き）

作者「いやった！！やっと書けた！！」

イブキ「おせえ！！何してた！？」

作者「いや、留年を賭けたテストをなをとか乗り切って、安心してたらこうなっちゃった」

イブキ「……………アホが。皆様に謝れ」

作者「皆様、この度は長い間更新せず申し訳ありませんでした。ちやんと完結まで書きますので、宜しく願います」

死神

「はあ、なんで俺が中の警備じゃないんだよ」

「お前が行ったら周りの女性をナンパしまくるだろうが」

「その何が悪い！？美女に声を掛ける事は子孫繁栄の大切な一歩だ！謂わば男の宿命だろう！？」

「俺は断じてそんな宿命は背負っていない」

よう、イブキだ。ついでにさつきから馬鹿な事を言っているのは俺の（最近認めたく無くなってきたが）親友のレオンだ。

今俺達は此処、ホテル・アグスタの近くにある森の中にいる。

何故かと言うと、そのホテルで行われる骨董オークションの警備の任務に当たっているからだ。

何でも、その内にロストロギア関連の物が出品されるらしく、それを…あ、確かレリックと言う物と勘違いした…え、ガジェットと言うロボットが出て来る可能性が高いのどうのらしい。

ガジェットと言うのは、所謂ヤラレキャラ…いや、ヤラレロボット

トで、え〜っと、確かすかしっぺ？いや、スカイツリーか？「スカリエッティ」ああすまないレオン。そのスカリエッティが作り出した物らしい。スカリエッティは何かとてつもない犯罪者で悪者らしい。見た目は中々にイケメンで良い奴なんだけどな。

んでまあ、そいつらが来ても対処出来るように皆で来てるワケだ。俺とレオン以外は、ホテルの中とホテルのすぐ近くを警備している。ああそうそう、フェリス達はなのは、フェイト、はやてと共に中の警備に当たっている……もの凄く綺麗にドレスアップして。いやもうレオンと二人で見惚れちゃったね。レオンなんか泣いてたし。……どんなドレス？勝手に妄想してくれや。思い出すだけで鼻血が出そうだから。

「ふう、やっと終わった」

「『』苦労ね」

「ありがとうよ……」

「しかし、こんな所警備して意味あんのか？」

レオンが木に凭れながら愚痴った。

「案外、こつ言う場所から奇襲が来るかもよ?」

俺も近くにあった大きな岩に座った。

「否定できねえな」

「……………」

「…?何だよ?」

レオンは俺の視線に気付き、聞いてきた。

「いや、こつやってゆっくり話すのは初めてだとな」

ずっと仕事仕事で親友らしい会話なんてロクにしてなかったからな……………。

「……………」

「……………どうした？」

レオンは俺の顔を凝視し、絶句していた。

「お前……………そっちなのか？」

「よしコラ、その考えを捨てさせてやる」

いきなり気色悪いことぬかしてんじゃねえよ。

「いつも忙しくて親友らしい会話をする機会がなかっただろっが！」

「あ、ああ！そっだな！はは、はははは！」

コイツ……………本気で思いやがったな。後でベットの下にあるエロ本を

筋肉ムキムキの男の本と入れ替えてやる。

俺は心の中でレオンを地獄に突き落とす計画を企てた。

「んじゃ何話す？好きな子とかタイプとか？」

「修学旅行か！？」

「それじゃ、イブキの元カ」それ以上口にしたら下の棒を斬り落とすぞ？」「ごめん、マジでごめん」

俺はいらん事を口にしたレオンの股から魔皇刀を離した。

「ん〜じゃあ、家族は？」

「……………家族？」

レオンがいきなり普通の話題を切り出してきた。

「そう家族。いるんだろう?」

「……正確にはいた、だな」

「……ああそうか。お前、前の世界で死んだんだっただな。悪い」

「いやそうじゃない」

「……?」

「俺が十七の時に皆殺されたんだ」

「なっ……」

レオンは息を呑んだ。それはそうだろう、いきなり家族は皆殺されましたと言われて驚かない奴は殆どいないだろう。

「……悪い」

「いや、いいさ。…この際だ、家族の事を話させてくれ」

「良いのか？」

「ああ」

俺は話した。父の事、母の事、兄の事、姉の事、妹の事を…。

「へえ、家族皆天才だったのか」

「ああ、父は総合格闘技、母はフェイシング、兄は剣道と空手、姉はカンフーと槍術、妹は運動はあまり出来なかったが、小学生の時には既に世界で一番凄い大学の卒業資格を取った」

「…何だか良く分からんものもあるが、タダ者じゃないと言う事ははっきりと理解した。…ならお前も何かあんのか？」

レオンの目は何か期待した様な目だった。

やっぱり、お前もそうゆう目をするんだな…。

「無いな、これと言って…」

「何だ無いのか」

「強いて言うのなら、治癒能力が化け物並だって事だな。トラックに轢かれても数秒で治ってたし」

「お前はマンガの主人公か…」

「だとしたらお前は主人公の親友でギャグキャラだな」

「そんなポジションは嫌だ！」

「そうか？ 捉えようによっちゃあ、これ程おいしいのは無いと思うがな。」

「よし、次はお前だ」

「ん？俺か？」

俺はレオンに話を振った。

「俺もな、お前と同じで家族はもういないんだよ」

「そうなのか？」

驚いた…。レオンもそうだったのか…。

「俺が産まれて間も無い時に父さんと母さんは事故で死んで、三つ上の兄も二年前に殉職した」

「……お互い、辛い目にあっただんだな」

「……ああ」

「「……………」」

そこで会話は止まった。

聞こえるのは木が揺れる音だけだった。

「……………あゝ！止め止め！！辛気臭えのはごめんだ！話題を変えようぜ！」

レオンがこの空気に耐えられず、沈黙を破った。

「よしイブキ！お前は誰が好きなんだ！？」

「はあ！？」

レオンがいきなり突拍子もない事を言い出した。

好きな人だあ！？んなもんいても言えるワケが無いだろう！！って
かなんでその話なんだよ！？

「いきなり何を言い出すんだ!？」

「いきなりじゃねえ! フェリスちゃんか? C・C・ちゃんか? 空幻ちゃんか? フェイトちゃんか? それともやはりハクか!？」

「選択肢多!？つてか何でその五人!？」

「お前が何時も一緒にいる女性たちだろうが!」

「それは仕事上、仕方なく……ッ!？」

突然、居心地の悪い気配がした。一度何所かで感じた事のある気配。悪魔だ。

現れたか……。数は……。百!？多すぎる!!

「おい、どつした?」

レオンが俺の様子の变化に気付き、聞いてきた。

不味い……この感じ、俺達を取り囲んでる。レオンを逃がさないと。

「レオン、良く聞け」

「あん？」

俺は魔皇刀を抜き、辺りを警戒した。

「たった今、悪魔が現れた。それも百体も」

「百!？」

「ああ。しかも取り囲まれてる」

「何！？まったく気配がしねえぞ！？」

「当たり前だ。悪魔に対抗できる魔力を持っていなければ見ることは出来ても、感じたり、傷付けることは出来ない」

俺はそう言いながら隠れている悪魔共を探した。

「じゃあ、他の奴らは！？」

レオンもセツトアップし、戦闘態勢に入った。

「安心しろ。どうやら狙いは俺の様だ。どんどん此処に集まって来ている」

くそ、気配がするのに姿が視えない…。一体何所にいるんだ。いや、探すよりも早くレオンを此処から離れさせないと！

「レオン、お前飛べたよな？」

空なら悪魔共の手は届かない筈だ。

「……一応は。けど、ちとトラウマがあつてな。長くは飛べない」

「でも飛べるんだな？」

「まあな」

「フツ…上等!!」

俺は魔皇刀を木に向かって大きく振り抜き、黒い斬撃を放った。それは隠れていた三体の悪魔を木諸共両断した。

「レオン！ここは俺がやるからお前はフォワード達と合流しろ！万が一の時、お前は俺が合流するまで時間を稼げ！倒す事は出来ずともお前程の実力なら吹き飛ばす事は出来る筈だ！」

俺は皇の次元武<ディメンション・オブ・エンペラー>を展開し、
レオンに指示した。

「急げ!!」

「分かった!死ぬんじゃねえぞ!!」

レオンは空を飛び、ホテルの方向へと向かった。

「互いにな...」

俺は辺りを見渡した。今まで姿を見せなかった悪魔達が次々と姿を
現した。

その姿は、黒くボロいマントでフードを被り、巨大な鎌まを持った
悪魔。フードから見える顔はムンクの叫びみたいな顔だった。

「おいおい、何所かで見た事あるんですけどー...」

DMC3のザコキャラかよ。なんでそっくり…いや、ゲームがそっくりなのか？

「まあ何だって良い。世界を救うのが俺の役目……恨みは無いが消えてもらっぞ、悪魔共」

俺は大量の宝具を射出した。その全てが悪魔共に命中していった。茂みに隠れても空間を認識しているため、相手の背後に魔方阵を展開し射出、俺の背後に回り込まれても360°。全ての方向に展開し、死角を無くす。

「消えろおおおおお！！！！」

俺は悪魔共を串刺しにしていった。

イブキ s i d e a u t

レオンside

俺は震える身体を強引に抑えつけて空を飛んでいる。こつなつたのは兄さんの死に遭遇したのが原因だ。なんせ、一緒に空を飛んでいたからな。兄さんが敵の攻撃から俺を庇って……。

「チツ……余計な事を思い出すんじゃないねえ。今は飛ぶ事に集中しろ」

何時制御が効かなくなるか分かんねえからな。

ピーー!ピーー!

突然、通信が入った。

「はいよ、此方レオン」

「<レオン君！ホテル周辺の森にガジェットが現れたわ！>」

相手はシャルちゃんだった。

「何！？森だと！？」

「<えっええ！>」

不味い…森には悪魔が！

「シャルちゃん！他に誰が向かった！？」

「<シグナムとヴィーたちさんとザフィーラよ！>」

「今すぐに戻せ！！」

「<えっ！？>」

「森には悪魔が!!」

見ツケタ

「ッ!?何んだ!?!」

「<どうしたの!?!>

突然、頭に声が響いた。低く、二重音声が効いた声が。

「今声が…ッ!?なッ、うわあああああ!!?!」

俺が動きを止めた瞬間、何か俺の右足を掴んだ。ソレは森から一直線に伸びていた青い腕だった。そう理解した時には、腕に引っ張られた。

レオンside aut

シャマルside

「レオン君!?レオン君!!ダメ、繋がらない!」

念話も繋がらないし、一体何が!?それに悪魔って…まさか!

私はイブキ君に念話を繋げた。

お願い、出て!

「くッ!シャマルか?>」

「良かった、繋がった!イブキ君、もしかして悪魔が出たの!?!」

「<レオンから聞いたのか。ああ、ざっと百ぐらいな>」

「百!？」

そんなに沢山!？無茶だわ!!

「<何、心配するな。この程度のザコにヤラれはせん。それより、レオンはそっちに着いたか?>」

「それがさっき通信していたけど、叫び声と一緒に途絶えたの!!」

「<何!？分かった!すぐに向かう!>」

「それとガジェットが現れて、シグナム達が森に向かったわ!」

もし悪魔と遭遇でもしたら…。

「<大丈夫だ!もう粗方片付いた!それに、狙いは俺のようだ。シ

グナム達の方には行かないさ！じゃあレオンの所へ向かう！>

イブキ君は念話を切った。

良かった。これでシグナム達の心配は無くなったわ。後はレオン君
…無事でいてね。

シヤマルside aut

レオンside

「グッ…くそ、何だっただ…！」

俺はあのまま地面に叩きつけられた。幸い、ギレンが衝撃を無くす魔法を発動してくれたおかげで無傷ですんだが…。

「一体あれは…ッ！」

刹那、また腕が伸びてきた。俺は横に飛び退き、回避した。腕は俺の後ろにあつた木を掴み、そのまま一緒に引っ込んだ。

チツ、まさか悪魔か？

俺はギレンを構え、腕が引っ込んだ場所を睨んだ。

もし悪魔だったら……稀少技能<レアスキル>の出番だな。

俺の稀少技能、エクスプロード。俺の魔力を強力な爆発に変える力。余りにもの強力で、人には使えない代物だ。イブキ相手になら、使っても良かったかもしれないな。

見ツケタゾ、我ノ器

また声が頭に響いた。

くそッ！気味が悪い！

「出て来やがれ！クソったれが！！」

我方皇騎士ノ力、ソノ身二宿セ

「ッ！そこかあ！！」

俺は後ろを振り向き、ギレンを振った。

ガシッ…

しかしそれは受け止められた。俺は受け止めた奴を見た。そいつの姿は悪魔のようで、神々しかった。青白い魔力が全身から溢れだし、装甲の様な強靱な肉体、頭には大きい二本の角が生えており、背中からは輪っかが生えていた。そいつはギレンを何でも握り潰しそうな右腕一本で搦んでいた。

「くそッ！やはり悪魔か！？」

俺はギレンを引っ張ったが、悪魔はそれを許さなかった。

「チィ！ならこいつで！」

俺はギレンに魔力を送り込み、稀少技能を発動した。

「吹き飛ばへ！！」

バァアアン！！

ギレンは光り輝いた後、魔力を爆発させた。

これで…ッ！？

しかし悪魔は何も無かったかのように、ギレンを掴んだままだった。

抗ウナ、受け止めヨ

瞬間、悪魔は動いた。

左腕を掲げ、何所からともなく巨大な剣の様なランスの様な槍の様な物をだした。そしてそれを振り下ろしてきた。

「ッ！？」

俺はギレンを一旦手放し、横に飛び退いた。しかし、悪魔は肉眼で捉えられない速さで動き、武器を振ってきた。

ザン……

「あ………な………」

俺は左腕を二の腕辺りで切り落とされた。

「あああああああ！！？」

俺は傷口を押さえ、その場に蹲った。

悪魔はそんな俺を見降ろし、ゆっくりと近づいて来た。

「クソオオオオオ！！」

俺は力を振り絞り、立とうとしたが、それよりも早く、悪魔の拳が腹に喰い込んだ。

「ゴホオ！？」

ああああああああああああああああああ

「ッ！？レオン？」

今の悲鳴…………まさか！？

「レオオオオン！！」

俺は旋剄を最大力で使い、レオンの声がした方向へ急いだ。

殺られる筈が無い。レオンが…………レオンが死ぬ筈が無い！！あいつが簡単に！！

その時、俺の視界に何かが入った。

白い何かが…………。

俺はすぐさまそれに駆け寄った。そしてその正体を確認した。

「……………レオン？」

それはレオンだった。血の池を作り、その中心にレオンが倒れていた。

「レオン……！」

俺はレオンを抱きかかえた。

「レオン……！レオンしっかりしろ……！」

息は……！？……良かった！まだある！傷は……！？……？

俺は出血場所を探したが、何所にも無かった。

何故だ？こんなに血だらけなのに傷が無い……。いや待て、確かにバリアジャケットには切り裂かれた跡がある。なのに…傷一つ無い。一体どうゆう事だ？

「うっ…」

「ッ！レオン、大丈夫か？」

レオンはゆっくりと目を開け、俺の顔を見た。

「……………」

「ん？どうした？どこか痛むのか？」

レオンは何か言おうとした。

「……………」
「何で一番最初の顔が男なんだよ」

「寝てる」

ゴンッ！

俺はアホな事を言ったレオンを落とすとした。

「いつつ……何すんだよ」

「黙れ、俺を心配させた罰だ」

「心配？……あれ？そついや何で俺は寝てたんだ？」

「それはこつちが聞きたい。一体何があったんだ？シャマルが連絡が取れなくなつたって心配してたぞ」

「何つて……何だ？空を飛んでたら森から腕が伸びてきてそれに掴まれて、森に引き込まれて、それで……駄目だ、思い出せない」

レオンは頭を抱えた。

腕？森から伸びてきた？何だそりゃ？あゝ待てよ？そついや腕が伸びる悪魔もいたな。いやでもアレが敵にいたらヤバイよな。

「まあ良い。その様子じゃ、何で血塗れなのかも覚えてないだろうしな」

「あ？…何じゃこりゃー！？うわっ！？袖がねえ！？うげっ！？腹の部分が引き裂かれとる！？」

レオンは自分の姿にやっと気付き、大いに驚いた。

俺はその間にレオンの無事をシャマルに連絡した。

「さてレオン、動けるのならさっさと合流してこい。俺は残りを片付けるから」

「あ、ああ…分かった。…あれえ！？ギレンがねえ！？おーいギレン何所だー！？」

「<ヘイ！こつちだぜ相棒！>」

「おお！そんなとくに居たのか！」

レオンは茂みに突き刺さっていたギレンを抜き、調子を確かめてから飛んで行った。

さてと……

「こつちも始めるか！？」

俺は振り向き様に魔皇刀から斬撃を放った。

キン！

「ほう…これを防いだ奴は初めてだな」

俺は正面にいる奴を見た。

さっき程までの奴らよりも巨大で、黒い靄のようなマントを身に纏い、さらに巨大な鎌を持った、まさに死神といえる悪魔……ヘル＝バンガード。

「やはりこいつか。ゲーム上、こいつが来るのが当たり前か」

しかし……こいつ、今までの悪魔と力が違い過ぎる！この禍々しさ、この恐怖心……どれを取っても画を期している！

俺はこの世界に来て、初めて負けを予想してしまった。

「フツ……これは、ヤバいかもな」

俺は皇の次元武を展開し、宝具を射出した。
しかし、ヘルは鎌をくるくる回し、宝具を弾いていった。

「やるな！」

俺はヘルの背後にも展開したが、それを逸早く察し、霧の中に消えた。

これは……確か何所からか飛び出て来るやつだよな。

俺は辺りを警戒した。

何所だ…上？右？左？後？前？下？何所からでも来い。

しかし、一向に待っても現れなかった。

逃げた？いや、微かだが気配がする……いや待て！遠ざかっている！？

「クソッ！！その先はフォワード達が！！」

俺は離れて行っているヘルを追いかけた。

イブキ s i d e a u t

レオン s i d e

「まったく、何があつたんだ？ジャケットはボロボロで血塗れだし、それに何か身体がつつずするし、ワケ分かんねえ！」

俺はこの鬱憤を道中にいたガジェット共に晴らしていた。

「失せな！爆陣槍！！」

俺は魔力を乗せたギレンをガジェット共が集まっている中心に投擲した。そして中心に刺さった瞬間、爆発が起き、ガジェット共を飲み込んだ。

「戻れギレン！」

俺がそう叫ぶと、投げたギレンが右手に飛んできて、手に収まった。

やっと此処まで来れたな……ん？あれは…。

俺はスバルちゃんが空中を走りまわっているのが見えた。

ありや確か、稀少技能のウイングロードだったか？俺もあれ欲しいぜ。あれならトラウマを刺激せずに空を駆け回れるのにな。…って、ティアナちゃんの奴、何やってんだ？

俺はスバルちゃんの前こう側で、ティアナちゃんが魔力弾を多く装填してし、発射態勢に入っているのが見えた。

ちょっと待て！無茶だ！スバルちゃんを巻き込むぞ！！

「くそつたれ！！」

俺は飛ぶスピードを上げ、スバルちゃんに近寄った。

「クロスファイヤー……シューーート……!!」

ティアナちゃんは何発もの魔力弾を放った。それらはガジェット共に命中していったが、一発だけ逸れてしまった。

「えっ？」

そしてそれは真っ直ぐスバルちゃんに向かって行った。

スバルちゃんは反応出来ず、動けなかった。

「うおおおおお!!」

俺はギリギリ間に合い、スバルちゃんを抱きしめる形で庇った。

ズドン!!

「くっ!?!?があああ!?!?」

「レオンさん!?!?」

弾は俺の左腕の直撃した。

やべえ…吹き飛んだかも。

俺は驚くスバルちゃんを横目に、左腕を見た。
……何とも無い?俺程の激痛だったのにか?

腕は無傷だった。焦げ目も何も付いていなかった。

「ティアナ!!この馬鹿!!無茶やった上に味方撃ってどうすんだ!?!レオンが間に合って無かったらどうなってたと思う!?!?」

俺の頭上で、後から来たヴィータちゃんがティアナちゃんを努なつた。ティアナちゃんは目の前で起こった事が信じられずに、目を大きく見開いていた。

「あの、ヴィータ副隊長…今のもそのコンビネーションの中で……」

スバルちゃんがティアナちゃんを庇おうとしたが、あれは明らかにティアナちゃんのミスだった。

「ふざけるタコ！直撃コースだよ今は！…」

「違います！今のは私がいけないんです！よけ「うるせえ！馬鹿共！」「ッ……」

「もういい、後はあたしとレオンがやる。二人まとめてすっこんでる！…」

……っつておい、俺も入ってんのかよ。まあいいけどな。

俺はティアナちゃんの傍まで行き、前に立った。

「ティアナちゃん、俺は大丈夫だから。今の状態じゃあ、まともに戦えないだろう？今は大人しく下がっててくれ。な？」

俺はティアナちゃんの頭を優しく撫でた。

「……はい」

ティアナちゃんは渋々と下がっていった。

「ほらスバルちゃんも。相棒なんだろう？」

「あ、はい……」

スバルちゃんもティアナちゃんの後を追って行った。

「さて、やりますか！ヴィータちゃん！」

「ああ！」

俺は残りのガジェット共に突っ込んで行った。

さっさと終わらせてなのはちゃん達のドレス姿をもう一度拝みますか！！

レオン s i d e a u t

イブキ s i d e

クッ！何所まで逃げる気だ！？

俺はまだヘルを追っていた。姿は見えなくとも、魔力は感じ取れる。俺はそれを頼りにヘルを追っていた。

しかし何故逃げ出した？まだ負けていなかった筈だ。

俺は理由を考えたが、情報が少なすぎて何も思い付かなかった。

チツ、フェリスにでも聞くか。

俺はフェリスに念話を繋げた。

「<おいフェリス、聞こえるか？>」

「<八万だ！何十万？なら十一万！！>」

「<何オークションを楽しんでいる！？>」

フェリスは悪魔が出現しているのにも関わらず、オークションで競っていた。

「<何だイブキ？今大事な所なんだ>」

「<此方も一大事なんだよ！聞きたい事がある>」

「<何だ？>」

「<知っていると思うが、今悪魔と交戦中なんだが…。恐らく中級の悪魔だと思う。そいつが最初は俺を狙っていたがいきなりホテルの方へ向かい始めた。それも、何かを探している様な動きで>」

ヘルは途中で姿を現し、きよろきよろと辺りを見渡したらまた消えて、動き出す。これを繰り返していた。

「<それは…不味いな>」

「<どうした？>」

フェリスは本当に不味そうな声を出した。

こいつが真剣になる時は、殆どヤバい時だけだ。

「<そいつ、魔力を喰らって強くなるうとしている>」

「<……つまり？>」

「<外に居る誰かを喰い殺す>」

「ふざけんな！！」

俺は旋廻を使った。

「ざけんなよ……俺の仲間を喰らって力を得るだあ？そんな馬鹿な事させてたまるか！！」

「<おい落ち着け！そう慌てたら奴の思っ
>」

フェリスの忠告を最後まで聞かず、念話を強制終了した。仲間が狙われているのに落ち着いてられるワケがない。俺は冷静さを失いヘルの後を追いかけた。が、それがいけなかった。

ドス…

「がっ…！？」

ヘルの魔力反応が急に後から現れ、それに反応出来なかった俺は、巨大な鎌で後ろから腹を刺された。

こいつ…まさか…ワザと…。

「くそ……」

ズブシャッ…！

へルは俺の腹を引き裂きながら鎌を抜いた。

「があッ!!!?!」

俺は夥しい量の血を出しながら地に伏せた。

アハハハハハハ

意識が薄くなっていく中、悪魔の笑い声だけが聞こえた…。

イブキ s i d e a u t

フェリス side

「<おい、おい！返事をしろ！>」

チツ、あの馬鹿者、強制的に切りおつて……。中級以上の悪魔共には知恵が備わっているんだぞ！冷静さを失ったら危険だ！

「…………チツ」

「ん？どうした？」

私は席を立ち、会場を出ようとしたら隣に座っていた……に止められた。

「花を摘みにな……」

「そっか……」

私は別にそう言う事は気にしないが、場所が場所な為に、用語を使った。

C・C・はそれを理解し、オークションに集中した。

私は会場を出て、ホテルの外に出た。

「<シャマル>」

「<え？何？>」

私は念話でシャマルに繋げた。

「<これから私がいる場所に誰も近づけるな。様子も見るのも駄目だ>」

「<えっ！？どうして！？>」

「<これから此処に悪魔が来る。それと私の戦い方を見て欲しくないからだ>」

「くだ、だったらイブキ君を！」

「くあいつでは無理だから私が此処にいるのだ！良いから言われた通りにしろ！！」

私は渋るシャマルに怒鳴り、命令した。

「くッ！？……分かったわ」

「く……すまない」

「く……」

私は念話を切った。

はあ……仕方のない事とは言え、きつく言い過ぎたか…。

私は少しばかり後悔した。

フツ…今までならどうでも良かったが、この私が他人を気遣うなんて…。これもイブキのおかげか…。瘡だが礼を言わないとな…。

「だから返して貰うぞ、死神」

私は愛剣を出し、切っ先を正面にいるヘル＝バンガードに向けて言い放った。

ヘルの腕にはぐったりとしたイブキが抱えられていた。

「おい死神、そいつは私のものだ。勝手に持って行くな」

アハハハハハ

ヘルは笑い声を辺りに響かした。

「煩い奴だ。そんなに斬り落として欲しいのか？」

私は殺気を込めてヘルを睨んだ。
ヘルは笑いを止め、イブキを盾の様に前へ突き出した。

ほう……相手の仲間を盾にして攻撃を凌ぐ考えか……。まったく、誰に教わったのやら。だが……。

「相手を間違えたな」

私は高速で動き、ヘルの懐へ入り、イブキを突き出した左腕を斬り落とした。

チツ、ドレスが汚れてしまった。後でイブキに弁償してもらおう。
私ではないが……。

私は解放されたイブキを抱きかかえ、ヘルから離れた。

……傷は無い。いや、無くなったのか？

私はイブキの状態を診たが、コートが切り裂かれてるだけで、傷一つ無かった。

だがこれを見る限り、相当深い筈だ。即死だったとしても不思議ではないくらいに…。やはり、イブキは…。

私はイブキを寝かせ、ヘルを見た。ヘルは腕を斬り落とされた痛みで、腕を押さえ暴れ回っていた。

「ふん…痛みは感じるか…。なら、痛み苦しみながら消えろ」

私は剣に禍々しい色の魔力を纏わせ、漆黒の剣にした。剣の付け根からは魔力が渦を巻いて溢れている。

「喜べ、お前は这个世界で初めて私の本気の力で殺されるのだ。光栄に思え！」

私はヘルの後へ回り、背中を斬り付けた。

ヘルは痛みを耐え、鎌を振り回してきたが、私は剣で鎌を受け止め、そのまま刃の部分を斬った。

ヘルは驚いたのか、元々大きく開いていた口を更に大きく開け、斬られた鎌を見た。そしてすぐに私から飛び退いて離れようとしたが、逃げられると面倒くさいから飛び退いた時に右足を斬り落とした。

「良く斬れるだろう？私の魔力で切れ味、耐久性が何十倍にも上がっているからな。それに、こんな風にも出来るぞ」

私は剣を上からしたに勢い良く振り落とした。すると、漆黒の魔力が斬撃の塊と化し、ヘルに向かって地面を巻き込みながら飛んで行った。

「魔人斬破…魔剣士が扱う初歩的な技だ。何故私が扱えるのかは…
…聞かないでくれ」

その斬撃はヘルの身体を巻き込み、斬ったと言っよりも消し飛ばしたと言っ言葉が合っているかの様に両断した。

アアアアアアアア!!?

ヘルは叫び声を上げながら塵と化した。

私は剣に纏った魔力を消し、剣をしまった。

「まったく……まさかこれを使ってしまつとはな……。どうかしてる。それもこれもイブキが馬鹿やるからだ」

目を覚ましたらどうしてくれよう？

私は心の中で楽しい事を考えながら、シャマルに連絡し、救護班が来るまでイブキを診ていた。

こうして、ホテルの警備は終了した。

大きな闇を残して……。

「ふん、まだ力の制御が出来ていないのか」

とある施設で、若い青年がモニターを見ながら口にしていた。そのモニターにはイブキが多数の悪魔を斬り伏せている所が映っていた。

「それに、ただのヘルにヤラれちゃったしね」

隣にいた若い女性が頭を押さえながら言った。

「でも、面白い娘がいたわね」

女性はモニターを操作し、金髪の女性・フェリスを映した。

「天界生まれのくせに、悪魔の力なんか使っちゃって……」

「そいつだけじゃない」

男性はまたモニターを操作した。

「俺の手下にイブキの部隊を監視させていたんだが、悪魔が現れた時、異様に反応した女がいる」

「へ、どの娘？」

「こいつだ」

モニターに映された女性、それは美しい白髪に赤目の女性、ハク・スペリアだった。

「こいつ、どこか怪しい。天界人でもないのに悪魔と殺りあえる魔力を持っている。普通ではあり得ない事だ。異常過ぎる」

「そう？私はただイブキにお熱な可愛い娘にしか思えないけど？」

バキッ…

女性がそう言うと、何か壊れる音がした。女性と男性は恐る恐る後を向いた。そこには潰されたガジェットが、別の若い女性の足元で転がっていた。

「……気に入らない」

その女性は不機嫌さをあらわにし、通信を開いて誰かに繋げた。

「<やあ、 さん。何か用かい？>」

「スカリエッティ、あなたが望んでいた悪魔の研究をさせてあげます」

その相手はなんと次元犯罪者のスカリエッティだった。

「<本当かい！？嬉しいね！！>」

「しかし条件があります」

「<……何かな?>」

「イブキ・ヤマトの部下達……特にハク・スペリアを調べ尽くしなさい」

「<おや?その件は君達の分野では?>」

「私達はイブキに集中したいの。だから代わりに調べなさい」

女性はモニターに映るイブキを眺めながら言った。

「<……分かったよ。私は君達と円滑に交流したいからね。任せておくれ>」

「ええ……」

女性は通信を切った。

「いいのか？」

男性が聞いた。

「構いません。兄様も気になるのでしょうか？」

「……まあな」

「あらあ？もしかしてこの中の誰かが好きなの？」

別の女性が楽しそうな声で男性に詰め寄った。

「なわけあるか。人間や天界人なんぞ、ゲス共にそんな感情を向けるものか。反吐が出る」

「だよね〜。あんな奴らに囲まれてるイブキは可哀想だよね〜」

女性は男性から離れ、兄様と呼んだ女性に抱きついた。

「そうですね、姉さま。早く解放させてあげませんかね」

三人はモニターに映し出されたイブキとエンペラード隊を見つめた。

緊急告知

え、私、パソコンで打ってケータイで編集し投稿しているのですが、パソコンが故障してしまい、更新が出来ない状況に陥ってしまいました。

ケータイで打とうにも、時間が掛かってしまうので、パソコンの修理が済むまで更新をしない事に決めました。

これまでも色々とアクシデントがあり、中々更新出来なかったりしましたが、それも含めて深くお詫び申し上げます。

尚、修理には最低でも三週間掛かるそうなので、それまでは下準備を行っていきます。

最後にもう一度、深くお詫び申し上げます。

帰投後（前書き）

作者「諸君……私は帰ってきた……！」

イブキ「イエーイー……！」

作者「やっと更新出来た……。パソコンが故障して約三週間……とうとう帰って来れた！」

イブキ「これからはノンストップで行くぜ……！」

作者「いや、それ無理」

イブキ「何……？」

作者「いやまあ、頑張っていくけど、色々と状況が変わったんだよね」

イブキ「んな言い訳が「それではどうぞー！」「まてやコラー！」

帰投後

「えっと、報告は以上かな」

事の收拾後、俺達フォワードは分隊長であるのはちゃん、フェイトちゃんと報告のやり取りをしていた。

「現場検証は調査班がやってくれるけど、皆も協力してあげてね」

俺達は真剣に耳を傾けていたが、ティアナちゃんだけは下を向いていた。

仕方ねえか、味方を攻撃しちゃったからな……。

「暫くして何も無いようなら撤退だから」

「」「」「はい……」「」

「おっ」

「……」

「……で、ティアナは……ちょっと私とお散歩しようか」

「……はい」

なのはちゃんはティアナちゃんがやった事について説教するみたいだ。

「なのはちゃん」

「なに？」

「もうヴィータちゃんにこってりと言われてるから、あまり……」

「……分かってるよ。少し話すだけだから」

そう言って、なのはちゃんとティアナちゃんは歩いて行った。

「……じゃあ、三人ともお手伝いに行こうか」

「」「はい！」「」

「……おう」

フェイトちゃんが重くなった雰囲気軽くしようとして声を掛けてきたが、その本人も雰囲気は何所となく暗かった。

「……心配なら行って来ても良いんだぞ」

「え？」

「イブキの事、心配なんだろう？」

そう、イブキの奴は先の戦闘で負傷して、今も意識を取り戻して
ねえ。命に別条は無いそうだが。

俺とやり合えるイブキがそこまでやられるなんてな…。それ程まで
に強い相手か…。

「俺も一応スターズの副隊長だ。フェイトちゃんの穴ぐらい、この
俺が埋めて見せるさ」

「……ありがとう。でもそれはそれ、これはこれ。仕事はちゃんと
するよ」

フェイトちゃんは少しだけ笑い、エリオとキヤロを連れて仕事へ向
かった。

「……んじゃあ、俺らも行くか、スバルちゃん」

「……はい」

スバルちゃんも心配なんだろう。少し顔が暗い。

かあ~~~~!!!!イブキの野郎!!こんな可愛い娘達に心配掛けさせやがって!!このアホたれが!!

「大丈夫だって。あいつなら明日、いや夕方には元気になってるさ」

「…そうですね!だってイブ兄ですし!」

「そうそう!良し!その元気のまま仕事に行こう!」

「はい!」

俺達は意気揚々と仕事に取り組んだ。

それから暫くして俺達は六課へと帰った。

イブキが目を覚めたのは、帰ってから少し経った頃だった。

.....

夢を見た。

何処かの城で一人の王と一人の騎士が親友の様に杯を交わしていた。二人はとても楽しそうな笑顔だった。肩を組んだり、騒いだりしていた。

場面が変わった。

今度は王と騎士が武器を持って言い争っていた。

そして二人は

「……………夢？」

何だ、さっきのは…。何でだ？何で、こんなにも懐かしくて、こんなにも悲しいんだ？

俺は何故か泣いていた。枕も少し濡れていた。

「1111は...ど111だ？」

「医務室よ」

「っ.....シャルマ？」

声がした方を向くと、白衣を身に纏ったシャルマがいた。

「.....待て、医務室だと？悪魔は!？」

俺は起き上がりベッドはら下りようとした。が、そこで自分が上半身が裸だと気づき、シャルマの目を気にしてシーツで隠した。

「落ち着いて。悪魔ならフェリスが倒してくれたわ。貴方を助けたのもフェリスよ」

「そ、そうか...」

俺はそれを聞いて安心して、ベッドに転んだ。

そうか…フェリスが助けてくれたのか…。後で礼をしなくちゃな。

「さてと、起きたばかりで申し訳ないけど、身体の検査するからね」

「ああ……頼む」

それから検査をし、何所にも以上が無いと判断され、医務室を出る頃には夕食の時間帯だった。

因みに、コートはボロボロで血塗れだったから、また新しく投影した。

色々強化やら何やらで改造したのに…。しかも時間が掛ったんだぞ！？チクシヨウ！！

俺は自室に戻る前に飯でも食おうと、食堂に向かった。

フェリス達に会おうかなと思ったが、何か嫌な予感がして会いにいけないかった。いや決して怖いからじゃないぞ？違うからな！

食堂に着き、俺は唐揚げ定食（この世界にもあったとは…）を頼んで受け取り、空いている席を探した。

「ん〜何所かに席は……あ」

「……え？」

周囲を見渡していたら、ある人物と目が合った。

「え〜と……」

「……………」

「……よう、げんきいいいいー!？」

俺が頑張っ て挨拶をしようとしたら、 矢が足元に十本程刺さった。

「……………」

「い、ごめんなさい！ 謝りますから矢を構えないで下さい！！」

俺は新たに矢を放とうとしていたハクに頭を下げ て懇願した。

「心配… したんですよ…」

「え？」

「連絡を受けて駆け付けたら血だらけで… 怪我は治ってるのに目は
覚まさないし…」

「ハク…」

「無茶…しないでくださいっ…」

ハクは涙を流していた。

今にも大泣きしそうで、必死に堪えていた。

「……すまなかった。一人で頑張り過ぎた」

俺はテーブルに料理を置き、ハクの頭を撫でた。

ハクの事だ。俺が倒れているを見て大泣きしてただろうな。

「そう、ですよ…サポートする私達の事も…考えて下さいよ」

「ああ…ごめんな」

「謝らなくても良いです。それが使命ですから」

「そっか。ありがとな」

「お礼なら、私よりもフェリスさんに言って下さい。助けたのは彼女ですから」

「ハクだって、俺を治療してくれただろ？お前も立派に俺を助けてくれたよ。ありがとう」

「い、いえ……／＼／＼」

さて、ここで読者の皆様に質問だ。俺達がこんなやり取りをしている場所は何所だか分かるか？……………そう！食堂だ！ましてや今は食事の時間帯。食堂には人がわんさか食事をしている最中だ。よって、俺達は周りの人に見られているワケで…。

528

「ヒューヒュー！見せつけてくれるね〜！」

「うおおお！！ハクちゃんが赤くなってるー！！萌〜！！んでもって羨ましいいいい！！！」

「ヤマトさんとスペリアさんが恋人って噂は本当だったんだ…」

「あ〜ん！羨まし〜！」

「こうなったらレオン様を何としても！」

と、騒ぎ始めるワケでして……って言うかちょっと待て！！上二人は良しとして三番目の人は何を言っているんだ！？お、俺とハクが恋人だと！？一体誰がそんな噂を流した！？

「……と、取り敢えず座ろうか」

「は、はい……／／／／」

俺達はテーブルに座った。暫くしても騒ぎが止まなかったので、投影で何十本もの剣を空中に待機させて黙らせた。

「……とんだ噂が流れたもんだ」

「えっ！？あ、ええ！／／／／／／／／／／（恋人……周りからはそう見えてるって事……よね？）ふふ……えへへ／／／／／／／／／／」

「……………」

ハクさんや、笑顔が怖いですぜ。何で笑顔かは知らんが…。

「あ、そついやレオンはどうしてる?」

「…ハツ! ね、レオンさんですか? えっと、何時もの様にナンパしてますけど…」

「心配した俺が馬鹿だった」

あの野郎……あんな事になってたから気にしたのによ……この女たらしが!

「あの性格を何とかしたら最高にカッコいい男なのによ」

「そうですねー。…でも、それでもイブキさんの方が……／＼／＼／」

「ん?」

「なっ何でもないです!!! / / / /」

ハクが何か言った気がしたが、気のせいだったらしい。

俺はふと、ハクの食事を見た。ハクの食事は野菜のスープだけだった。

「ハク、これだけで足りるのか？」

「え?...あ、これは...その...」

「...?」

聞いちゃあ不味い事だったかな...。ダイエットとか？

「その、イブキさんの事で一杯で、食欲がわかなくて...」

.....つまりあれか？俺が心配を掛け過ぎたばかりに、ハクにストレスを与えて食欲を失せさせてしまった、と.....。

「ごめんなさい」

「いついえー謝らないで下さい！勝手に心配し過ぎた私が悪いだけですから！」

「いや！今回は俺が完全に悪い！」

ハクは俺を気遣ってくれるが、それに甘えていては男が廃る！

「よし！ハク、この唐揚げを食いなさい！」

「ふえ！？／＼／＼／」

俺は箸で唐揚げを挟み、ハクの口元へ運んだ。

「もう俺は元気だ！だから心配せずにしっかりと食べる！」

「でっでも／＼／＼」

「でもない！ほら、あ〜ん」

「そ、それでは……あ〜ん／＼／＼」

ハクはパクつと、可愛らしい口で唐揚げを食べた。その時にまた周りが騒ぎ始めた。

「美味いか？」

「はいい…／＼／＼幸せですう…／＼／＼」

ハクは顔をへにゃ〜とさせた。

そうか、そうか。それは良かった。やはり、女性は笑顔の方が良いな！

「イブキさん、その、もう一つ良いですか？／＼／＼」

ハクがモジモジさせて聞いてきた。しかも上目使いで。

「ツ／＼／＼べ、別に構わないぞ／＼／＼」

俺はまた唐揚げを取り、ハクの口へ運んだ。

「あ〜ん／＼／＼」

「あ、あ〜ん…／＼／＼」

ストーン…

「……………へ？」

「……………？」

本来なら唐揚げはハクの口に入るのだが、何故かテーブルに落ちてしまった。良く見ると、箸も先端部分が一緒に落ちていた。それともう一つ、長く白い何かが目の前を通過した。

「……………」 (タラタラタラ)

「……………」 (カタカタカタ)

俺達はそれを理解してしまった。エンペラード隊の斬り込み隊長、団子好きで俺を奴隷扱いする女剣士…フェリス・エリスの愛剣である！

俺とハクは壊れた人形の様に首を横に向けた。
そこには……………

阿修羅が四人いた。

「ヒイ!?」

俺とハクはあまりにも威圧感に押されてしまった。

「…お前が死にかけてたから助け出してやったのに…礼を言っどころか、他の女とイチャイチャしているとはな…」

「い、いやあの、それについてはもの凄く感謝してましてね!!後で色々とお礼を…!!」

「俺は未だにイチャつけてもないし、出番もないと言っのに…」

「それは作者に言って!!」

「今さっきまで心配してたのに…仕事の最中もイブキの事ずっと気に掛けてたんだよ?なのに、他の女の人と居るなんて…」

「フェイトさん!?目にハイライトが!」

イブキが元に戻ったのは、二日後だった。

デート？を追跡せよ！（前篇）（前書き）

作者「こ・う・し・ん！」

イブキ「今回は何かカオスだが、許してくれ」

デート？を追跡せよ！（前篇）

早朝5時

俺は寮の屋上に居た。

そこで俺はホテルでの戦闘を思い出していた。

今のままでは下級の悪魔には勝っても、中級の悪魔には勝てない。
いくらあの時冷静さを欠いていたと言っても、ヘル相手に無傷で勝利出来ていなかっただろう。

もっと強くならなくては……これでは何も守れない。俺はもう、大切な人を失いたくない。

「……………ん？」

ふと、訓練場所を見た。

そこではスバルのウイングロードと、それを走っているティアナの姿が見えた。

朝練か？そっぴや、レオンが最近スバルとティアナが頑張ってるっ

て言ってたな。この事だったのか。

俺は少しの間眺めてから自室に戻った。

「フン！」

「ハッ！」

所変わって別の訓練所。

今俺は、レオンと打ち合っている。フォワードの訓練が始まるまで、相手をして欲しいと、俺から頼んだのだ。

「そらどうした！？動きが遅せえぞ！」

「そう言つお前こそ！槍にキレが！無いぞ！」

俺は魔皇刀で槍を捌きながら斬りかかるが、レオンも刀を捌き、突いてくる。

「ってかお前リミッター付けてんじゃなかったのかよ!？」

「付けてっけど、何か力がみなぎってくだよ!前よりも魔力増えた感じだぜ!」

レオンとハクはリミッターを付けており、レオンの場合魔力ランクSS+からAまで、ハクの場合S+からAまで落とされている。…俺とかフェリス達?何度か付けようとしたけど、何故か意味がなくて特例中の特例でこれまた無しと言う事で許可された。てか、されたら死ぬし。ハクも何とかならんかな…。

「余計な事考えてんじゃねえ!」

レオンの槍が白く光り出した。俺は危険を察知し、飛び退こうとしたが、槍のリーチを生かされ、脇腹に打ち込まれた。

「喰らえ！」

打ち込まれた瞬間、ギレンに流し込まれた魔力が爆発した。

レオンの稀少技能、＜エクスプロージョン＞。己の魔力を爆発へと変える能力。

「がぁッ！！」

俺は吹き飛ばされ、宙を浮いた。

「まだまだぁ！！ギレン！」

「＜OK！レッツゴー！！＞」

レオンの呼びかけに、ギレンが青の宝石を光らせて応えた。

「吹き飛ばせ！飛爆槍！」

レオンはギレンに魔力を溜め、それを投擲した。

「なめんじゃ…ねえ!!」

俺は中に浮いている状態で、更に無詠唱で織天覆う七つの円環^{ローアイヤス}を発動した。

「ぐううう!!」

しかしそれはあまりにも脆く、七枚の花弁が残り一枚となった。

「爆!!」

ドガアアアン!!

「うおおおお!!!!?」

ギレンに込められた魔力が大爆発し、残り一枚の花弁が消し去り、俺は吹き飛ばされ、地面に転がった。

「どうした!?それがお前の本気じゃないだろ!!」

レオンはギレンを手元に呼び寄せ、構えた。

「たりめえーだ!!今度は此方からだ!!」

俺は刀を仕舞い、一つの武器を投影した。

「トレース・オン!!」

パン!

右手に青い刀が現れた。

「行くぞレオン！ サイハーデン刀争術・水鏡渡り」

「ッ！？」

俺は旋剄を超える旋剄。超高速移動でレオンに突っ込んだ。

俺は右手の刀、青石鍊金鋼サファイアタイトに剄を注ぎ込み、左手からも刀身の根元を掴み剄を流し込んだ。

そして抜き打ちの構えになり、振り抜いた。

「サイハーデン刀争術・焰切り」

右手と左手、別々に収束させた剄が刀身に凝縮され、互いの剄が衝突で炎を起こした。

それを左下から斬り上げたが流石はレオン、すぐさまギレンを盾にし防いだ。

「だがまだだ！サイハーデン刀争術・焰重ね！」

振り上げた刀が炎を巻きながら軌道を変更する。上から下へ。斬り上げた斬線をそのままなぞって刀を振り下ろした。

「ぐう！？」

レオンは何とか耐えたが、ギレンを持つ手が怯み、防御が疎かになった。

「ここだあ！！サイハーデン刀争術、焰切り・翔刃！！」

跳ぶ、抜くを同時に行い、炎を纏った刀身が曲線を描き、ギレンのガードを打ち破った。

「ぐおッ！？」

レオンは体勢を崩し、大きな隙が出来た。

「ラストオオオオ!!!サイハーデン刀争術、焰重ね・紅布ううう
!!!」

炎と化した衝刺の斬撃を眼下のレオンに叩き落とした。

「でやあああああ!!!」

斬撃はレオンの肩から袈裟斬りで入った。

「がはっ!?!」

「吹き飛ばべ!!!」

俺は魔力を込めた右脚でレオンを蹴り飛ばした。

レオンは吹き飛んで地面を転がった。

「これでおあいこだな」

「ちっ…やられたぜ」

レオンはムクつと起き上がり、汚れを叩いた。

流石はレオン。まともに喰らったのにピンピンしている。まあ、それを言ったら俺もなのだが…。

「あゝもう時間切れか」

「あ？…ああ、フォワードの訓練時間か。サンキューな、付き合ってくれて」

「なーに、俺とお前の仲だ。いくらでも付き合っちゃんよ。レディが優先だけだな」

んじゃあな〜と言いながら、レオンは集合場所へと向かった。

俺も刀を消し、仕事部屋に戻ってシャワーを浴びた。

イブキside out

レオンside

時は夕方。訓練も終わり、俺は一人散歩していた。決して美少女美女を散策しているワケではない。探さなくても六課全員がそれだからな。…っと、話がそれたな。で、俺が歩いていると、スバルちゃんとティアナちゃんが自主練をしているのを発見した。

うんうん、毎日頑張ってるね〜！…だが、無理している様にも見えるな。

「よう！お二人さん、頑張ってるか？」

「レオンさん!?!」

俺は二人に近付き声を掛けた。

「毎日毎日めげないで頑張ってるな。偉い偉い」

俺は二人の頭を撫でた。

スバルはうにやゝつと喜んでいたが、ティアナは顔を赤くして恥ずかしかった。

うゝん、初な奴よゝ！

「頑張るのも良いが、頑張り過ぎるなよ。君達みたいな年代の子は無理をし過ぎるからな」

俺がそう注意すると、ティアナが顔を曇らせた。

「……………レオンさんは」

「ん？」

「レオンさんも、無理とかしたんですか？」

ティアナが顔を上げて尋ねてきた。

無理…か。そうだな…。

「結構してたかな。その頃の俺は、魔力なんてCが良い所だったし、皆に負い目を感じてたしな」

「「ええっ!？」」

そう、俺は15、6歳まで管理局の内で落ちこぼれだった。それに俺の兄さんは管理局の内ではEーS級だったし、それと比べられたりされたからな。

「それじゃあ、どうやって今の様になったんですか!？」

「うお！？お、落ち着け！」

ティアナがもの凄く喰い付いてきた。ティアナみたいに可愛い娘に迫られたら嬉しいが、流石に驚いた。

「えつとだな、実は俺も良く分からねえんだ」

「え？」

「事件で出勤して、犯罪者にやられて、意識を取り戻したら何故か魔力が今みたいになってな」

「そ、そんなことって…」

「医者が言うには、リンカーコアが生命を維持する為に魔力を暴発させたからかもって言っていたんだが、悪魔で推測だし何度調べても原因は一切不明」

俺も最初は驚いたけど、今となってはどうでも良い。俺は力を得た。もう誰も失わないよう守れる力を。

「そう、ですか…」

ティアナは望んでいた答えが聞けなかったのか、また顔を曇らせた。

「けどな、ティアナ。君はこれからどんどん伸びていく。確かに、今は魔力は低いけど、それも今だけ。この努力を続けていけば、必ず報われる。…って俺が言っても意味無いか」

「そ、そんなことはありません！」

「そう言ってくれれば嬉しいな」

俺はティアナを優しく撫でた。今度は抵抗せずに受け入れてくれた。

「でもティアナにも、誰にも負けない力がある」

「えっ？」

「ここだよ、ここ」

俺はティアナの頭をポンポンと叩いた。

「この頭脳はフォワード達の要、司令塔だ。俺達には考えられない作戦を考え付き、敵の意表を突く。これは誰にでも真似出来る事じゃない。謂わば、天賦の才だ」

そう、この娘は天才だ。ハクも頭がキれるが、それでもティアナちゃんはその上を行こうとしている。

「そんなこと…」

「無いとは言わせないぜ？君は少しは自分の力を自覚しな。な、スバルちゃん」

「はい！」

「……………」

俺はティアナから手を離し、散歩の続きをする事にした。

「とにかくま、程々にしておきな。それじゃあな」

俺は手を振りながら一人から離れた。

ん〜！颯爽と現れて立ち去る俺。かあっちょいいい〜！！

「レオンちゃん…」

「…ティアア？顔赤いよ？」

「ッ！？／／／何でも無いわよ！／／／さ、続き行くわよ！／／／」

「あ、うん！頑張ろうね！」

レオン side out

イブキ side

「うっ、これは終了。んでうっちが……こうで……よし完成」

「イブキさん。次で最後です」

「うっし、デスクワークはこれで終了だな」

「はいー。」

ふっふっふ！どうよ！？この余裕たっぷりな感じは！？あの狸がまわして来る仕事にうなされる俺はもついない！俺は勝ったのだ！書類整理と言つ名の地獄に！

「我が生涯に一片の悔いなし」

「お疲れ様です。お茶をどうぞ」

「すまないな、いつもいつも」

「いえ、お役に立てて光栄です」

うんうん、何て優しい女性なんだ。ああ、嫁にするならハクみたいな人が良い。……それに比べてこっちは……。

「おお！？ミッドー美味い団子が三割引きだと！？さらに此方は開店記念で団子の食べ放題だと！？行かなくては！！」

「ふ〜ん…新しいピザが三つも…。どれも美味そうだな…。ん？ポイントを集めれば…。お好きな商品と交換！？うむ！なんと魅力的

だ！これは手に入れなければ！」

「腹っへたー、腹減ったー、はら…ん？これは何だ？ニューアトラクションワールド？…おお！遊園地に水族館にプールにショッピングモールにレストラン！しかも今なら安く入れる！イブキー！ここにデートに行きたいな〜！！」

何と言う職務怠慢。こいつ等は自分の役割を理解しているのだろうか？いや、していない。

「あのなあ、少しは仕事を」「もっちゃった」「わあお…そうでしたか」

訂正。しっかりとやっています。

くそっ…俺はちゃんと隊長としてやっつけているのかよ…。

「なあなあ！行こうぜイブキー！ずっと仕事ばかりで退屈だ、面倒だ、疲れるんだー！」

「仕方無いだろ。それが仕事なんだから」

「良く考える。今団子を買ってあげば、今後暫く団子三昧を続けられるんだ。これ程重要な買い物は無い」

「それはお前だけだろ」

「イブキ。私はポイントを溜めてこのチー○くんが欲しい。だから一気にポイントを集めるんだ、今すぐに」

「それはコツコツと溜めていくから楽しみになるんだ」

「はあ、どうしてこの三人はこう自己主張が強いんだ。いや、本人なりに考えての行動なのだろうが、どうして…。」

「はあ…ハク」

「はい？」

「お前は何か行きたい場所とかしたい事とか無いのか？」

「えっ？」

俺は隣の席で苦笑しながら三人を見ていたハクに尋ねた。

いつもこいつ等ばかり我がまま言っていて、ハクが言っているところを見た事がない。多分、我慢している筈だ。

「もうこの際だ。お前らには助けってもらってばかりだからな。礼を兼ねて今回ばかりは好きな所へ連れてってやる」

「……」

四人はまるで信じられない物を見る様な目で俺を見てきた。

「な、何だ？」

「……ハク」

「……イブキさんの体調は良好ですよ、フェリスさん」

「それでは……偽物？己貴様！俺のイブキを何所へやった!？」

「事と返事によっては痛くしないでやる」

……「じいじ等。」

「ああ、そうかいそうかい。お前らが何時も俺をどついつた目で見ているのかはつきりと分かったよ。もう良い。連れて行かん」

俺はデスクに脚を掛けて椅子に踏ん反り返った。

「なっ！？それでは……本物？」

「あのイブキさんが……」

「俺達を……」

「デートに……誘った？」

「誰がデートって言った!!?」

デートじゃねえ!お礼だ!そこんどこをはき違えるな!大体、俺はもう恋人は作らないんだよ。

「で?行くのか?行かないのか?」

「「「「行きます!!」」」」

「よし」

俺は席を立ち、四人に準備してると言ってから部屋を出た。
向かうは部長長室。

「はやて」

「ん?どないしたん?」

「百歩譲ってはやてとリインは良しとして、何故レオンまでが休憩している？」

「い、いやな？俺も毎日皆より多く仕事してるんだぜ？」

「例えば？」

「美女が歩いていたら声を掛けたり、出勤してくる女性を屋上から眺めたり、はたまたこうして美女美少女とお茶をだな…」

「うん、もう良い。取り敢えず死ね」

「ぐほお！…」

俺は旋廻でレオンに近付き、腹に魔力拳をめり込ませて沈めた。お茶は零れていない。

「さてはやて」

「なっなんや？」

はやてはビクビクしながら涙目で返事をした。

「そう怖がるな。俺はただこれから出かけると言いに来ただけだ」

「へ？出かけるん？」

「ああ」

「誰かと？」

「ああ」

「……………女の人と？」

「ああ」

「……………」

するとレオンは見る見るうちに顔色を変え、最後には叫び出した。

「煩いぞレオン」

「じゃあかましい！！テメエ！俺を差し置いてデートだと！？」

「デートじゃねえよ！ただ出かけるだけだ！」

「それを世間一般ではデートと言っただ！」

レオンは俺の胸倉を掴んで揺さぶってきた。

おえ、気持ち悪い…。

「兎に角！エンペラード隊は午後から抜けるからな！いいな！しっ
かりと伝えたぞ！」

「ちよっ！仕事は！？」

「ある分は全て終わらせた！」

俺はさっさと部屋を出た。

まったく、煩い奴らだ。

「……レオン君」

「ああ…分かっている」

「「フォワードメンバー集合やのだ！」」

「あれ？どうしたのイブキ？何かはやての部屋から大きな声が聞こえたんだけど？」

俺が部屋を出ると、丁度フェイトが歩いている所だった。

「ああ、フェイトか。いや、俺がエンペラード隊で出かけるって言っただけなんだがな」

「出かける？もしかして出撃？」

「うんにゃ。遊びに」

「えっ？（遊びに？…それってもしかしてデート！？先越された！？）わ、私も行って良いかな？」

「へ？行っても良いって…仕事は？」

「そんなのは大丈夫だよ！」

フェイトはずいっと身を寄せてきた。

「そ、そうか…」

何故、そんなに真剣なんだ？でもまあ、多い方が楽しいか。

「なら一時に玄関で」

「うん！」

そう頷いてフェイトは走り去って行った。

ん、余程ストレスが溜まっていたのか？だとしたら解消させてやらないとな。それが男の甲斐性つてもんだ。……解消なだけに。なんつって。

「……………おっさと準備しよ」

俺は自室に戻り、早いところ準備を済ませることにした。

イブキ side out

はやて side

ウチは今とある一室にフォワードメンバーと共に居る。窓はカーテンを閉め切ってライト一つだけにして薄暗くしている。正に作戦会議室。

「さて、皆に集まってもらったのは他でもない。実は先程、エンペラード隊の隊長、イブキ・ヤマトから直々に連絡を受けたんや」

ウチは某司令官みたく手を組みながらそう口にする、皆は騒ぎ始

めた。

「主はやて。それは悪魔絡みですか？」

「ある意味、そうかもしれへん」

「…？」

「スラスト一等空尉、説明を」

「はっ」

レオン君はホワイトボードに明かりを向け、写真を数枚張り付けた。

「時刻は午後12時過ぎ。イブキ・ヤマト隊長は私達にある重大な言葉を残しました。午後から出かけると」

「それが何なんですか？ただ出かけるとしか聞こえないんですが…」

ティアナが拳手した。

「ええそうです。その通りです。しかし、この後が問題なのです」

「…？」

「……女性と出かけると」

「「「ツ！！？」」「」」

この場にいたウチとレオン君以外の人は全員息を呑んだ。それもその筈。イブキ君はレオン君と違って、女性とは中々そう言った事はしいひん。しかも、書いてないだけで実はイブキ君は六課の女性達からはもの凄く人気で、アプローチされても全く反応せえへん。しても断るばかりや。せやから、この発言には驚いた筈や。

「そつそれは一体誰だ！？」

シグナムが椅子を蹴って立ち上がった。

「落ち着いて下さい。調査によると、ハク・スペリア二等空尉、フエリス・エリス、C・C、天狐空幻の四名のようです」

「エンペラード隊か！」

「でもそれなら別に驚く事ねーんじゃないか？隊で親睦を深めるとか…」

ヴィータが挙手した。確かに、その場合もあるけど…。

「はい。そう捉える事も出来ます」

「だったら…」

「しかし、ある視点で捉えると、そうはいきません」

そう、この事件の一番重要な点。それは…。

「それは、この四名が全員イブキ・ヤマトに好意、もしくはそれに近い感情を向けている事です」

「「「「ツッ!」「」「」」

全員はそうだったと理解した。

そう、フェイトちゃんと多分シグナムも含め、この六人はイブキ君に少なからず好意を抱いていると言う事や。

「よって彼、イブキ・ヤマトにはその気は無くとも、女性陣はこれを機に一気に迫ろうとするでしょう」

レオン君はボードに張ったエンペラード隊の写真を叩きながら言った。

「それと私達とどう言った関係なのかな？」

なのはちゃんが質問してきた。

確かに、イブキ君に好意を向けていない人達にとっては何の関心も無いやろう。せやけど、フェイトちゃんとシグナムは例外や。フェイトちゃんもシグナムもイブキ君の事が好きな筈や。イブキ君がデートしてて、それを見たフェイトちゃんとシグナムはどう反応するか見たいんや！それに……。

「気になりませんか？あのイブキ・ヤマト相手に一体どういった手段でアタックするのか」

「……なる！」「」「」

全員が全力で首を縦に振った。

せやるせやる！そしてイブキ君がどう反応するかも気になるやろ！
？こないなイベントはそうそう無いで！

「そこで私達はある事を実行します！」

レオン君はボードにでかでかと文字を書いた。

「それは！イブキ・ヤマト等の後を着け、このデートをビデオに撮り、イブキを弄り倒すのだー！はっはっは！見てるよイブキ！今まで散々俺のハーレム作りの邪魔ばかりじゃがっ！これをネタに二度と邪魔出来ない様に釘を刺してやる！ふっふっふ！あーはっはっはっはっはっはっは！」

「ていつ！」ガスッ

「ギャツ!?!」

「落ち着き。素に戻っとるで」

「あ…ンン!…兎に角、イブキ・ヤマトの後を着けます」

レオン君はキャラを作り直し、簡潔にまとめた。

「それでは八神部隊長とスターズとライトニングに分かれ、追跡を行います。尚、私は八神部隊長と行動を共にします。各隊長はビデオカメラを取りに来て下さい」

「あの〜…」

「ん？どうしましたエリオ君？」

エリオが恐る恐る挙手した。

ん？やっぱり子供には難しいかな？

「それは今日の午後一時からですよね？」

「そうだが…時間まで言った覚えがない。エリオ君、一体どうしてそれを？」

「フェイトさんも一緒に行くって…」

「なに！？／＼何やって！？」

ウチはフェイトちゃんが座る席を見た。そこには誰も座ってへんかった。

まさか！？イブキ君はちゃんとエンペラード隊でって！

「うそーん！？フェイトちゃん（シグナムも）が我慢できずにデパートに突撃して修羅場になる所を見たかったのにー！！！！」

「いや、五人連れてるだけで結構修羅場なんじゃないのかな？」

「……そう言えばそうやね。ナイスやなのはちゃん！」

ウチとした事が…もう十分修羅場やないか。大丈夫や。まだ楽しめる。

「それじゃあ、作戦開始や！」

後日、機動六課は仕事を後回しにした事により、そのツケを二日掛けて払う事になった。

デート？を追跡せよ！（後編）（前書き）

作者「うがあゝ！甘く出来ない〜！」

イブキ「俺って……何か無理やりなキャラになって来たような……」

作者「今回は私のアホな文才が全力で披露されています」

デート？を追跡せよ！（後編）

午後1時、機動六課・局員寮玄関前。

俺はそこで皆を待っていた。

俺の格好は何時ものコートでは無かった。

前まではコートの格好で出歩いていたが、子供とすれ違う度に子供が怖がって泣き出してしまつと言う、怪奇現象が起こるのだ。仕方なしに他の格好で歩くとあら不思議。誰も泣き出さなかった。

で、今の格好はと言うと……。灰色の半袖のTシャツにチエスト辺りまでで半袖の黒ジャケット。下は黒のジーンズに黒の靴という黒づくし。

何？センスの塊も無い？言っただろ、オシヤレは自己満足だと。

「さてさて、あいつ等はどんな格好で来んのかね」

俺はあいつ等（空幻は含まない）がああの格好以外でいる所を見た事が無い。まあ、似合っているから良いんだけどな。

「お、お待たせしました！」

「お、ハクが一番乗り……か……」

あ、あれ？おかしいな……疲れているのか？

「すみません。身だしなみを整えていたら時間が掛っちゃって」

気のせいだろうか？ハクの格好……。

「な、なあハク」

「はい？」

「お前……それで行くのか？」

「……？そつですけど……ッ！どこか可笑しいですか！？」

いや、可笑しいも何も……お前、普段のまんまじゃねえか!!何! ?これ以外の服はありませんってか! ?そう言えば最初に会った時もこの格好だったか! ?くそう!何で気付かなかった!!

「可笑しくはない。ただ、その服しか無いのか？」

「はい!」

「自信満々に言っな!」

くう〜!俺が言うのもなんだが今時の女性がこんなんで良いのか! ?いや、良くない筈だ!!

「ハク!」

「は、はい! ?」

「服を買っぞ! !」

「ええ!?!」

「その服は実に魅力的だ。だがな、それだけしか無いと言うのは些かいただけない。それに、夜その格好で一人で出歩いてみる。へソ出しで、胸が見えてたらまた襲われるぞ!?!」

「ッ／／／」

そつだ。最近耳にしたんだが、ハクは六課の男性局員の中でエロいお姉さんキャラで第一位になってしまっているらしい。俺の(補佐官として)ハクにそんな称号はいらん!

「だから服を買ってやる」

「え、えつと、イブキさんがそう言うなら…／／／」

何故そこで赤くなる。何も恥ずかしい事は無いだろう。

「ほづほづ。なら私達にも買ってきてくれるんだろうな？」

「う…フェリス…って、あれ？」

フェリス達もやって来たが、服装が変わっていた。

まずフェリス。

まあ、あれだ。赤と白のコートの様な物、中には黒の…何だろう、インナーの様なもの。下は黒のホットパンツ、白のベルト、ピンクのニーソックスに白のブーツ。ぶっちゃけ、アニメで出てきた二つ目の衣装だ。それで調べてくれ。しかし、前より此方の方が良い。

で、C・C。だが。黒のコルセットの様な胸から腰までの服に黒のミニスカ。ミニスカは裾の部分が白い半透明のヒラヒラ。それと茶色のベルトに黒のサンダル。うん、夏を先取りし過ぎだと思う。

次に空幻。薄いピンクのシャツ。しかも身体を伸ばしたらヘソが見えそうなサイズ。で、赤の長袖の上着、黒のジーンズをミニスカにした様な物、茶色のブーツ。少し目のやり場に困ります。

フェイト。紫の半袖Tシャツに白い上着、下は黒のジーンズに白のスニーカー。至ってシンプルに見えるが、それが逆にとても良く似合っている。

「なんだ、お前等も別の服持ってたのか」

「いや、先程作った」

「……どうやって？」

「気合いだ」

フェリスは胸を張りどーだと言わんばかり誇らしい笑みを浮かべた。

いや、気合いって……。んな滅茶苦茶な。

「にしても、お前等やっぱ様になってるな」

「そ、そうか？／＼／」

「ああ。フェリス、お前もうこれからずっとそれでいろ。その方が俺は良い」

「ほ、本当か？／＼／＼ふふん！／＼／仕方ない。奴隷を喜ばせると言っのも面白そうだから、そうしておいてやるっ／＼／」

そうですね。まあ機嫌が良いから良いか。

「C・Cはまた夏を先取りしたな。まだそんな時期じゃないぞ？」

「なに、別に良いんだ。私が着たい。それだけだ。お前も言った
だろ？自己満足だと」

「まあそうだが……。うん、悪くない。結構好きだなそういう格
好」

「そうか／＼／＼褒めてもピザは出んぞ／＼」

はいはい。寧ろ今回は俺が出す方だし。

「空幻は…サイズ、合ってるのか？」

何かこう、ムチムチしてるんだが。胸とか尻とか。

「合っているぞ。これはそう言ったファッションだそうだ」

「……誰から聞いた？」

「ドン小西」

誰だそれ。

「なあなあ！似合ってるか？似合ってるか？」

「なあ！？／／／／くっ付くな！／／／／似合ってる！／／／／良
く似合ってるって！／／／／」

「そうか」

くう…正体は狐だがそんな事は微塵も感じさせない存在感。つてい
うか狐とは思えない。もはや一人の女性だ。故にくっ付かないで欲
しい。理性が危険だ。

「フェイトは…うん、落ち着いてて良いな。良く似合ってるよ」

「あ、ありがとう／＼／＼」

フェイトの性格上、派手な服は着ないだろうから予想はしてたけど、これは予想以上に似合ってるな。

「その、イブキもカッコ良くて似合ってるよ／＼／＼」

「え？あ、ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいな」

「「「「チツ、横取りされた！」「「「「」

「ぐおお！イブキの野郎！あんな美女に囲まれやがって！」

「しかもあんなに違和感無く服装を褒よった……もしかして相当なやり手？」

「はやてちゃん、本当にやるの？」

「当たり前や！それになのはちゃんはフェイトちゃんがデレデレしてるとこ見たないんか！？」

「……見たい！」

「……」（見たいんですか！？）「……」

全員私服でカメラ片手に尾行中。

「お？動き出したで！追跡開始や！」

「それで、何所に行くんですか？」

「空幻が言っていたこのスーパーミッドワールドだ」

「本当か!？」

「ああ。此処なら遊び場も団子もピザも服もその他諸々もあるからな」

何故ここの都合良くあるのかは不思議だったがな。まあ良しとしよう。

「でっどじやっていくんだ？」

C・C・Cが尋ねてきた。

ふん、そう言うと思ってちゃんと準備しているぞ。いや違うな。これからするんだ。

俺は両手をかざし、投影した。

「トレース・オン！」

パァン！

俺は今まで修行の成果か、どんな複雑な物も投影出来るようになった（インテリジェントデバイスは流石に無理だった）。そう、例えば今投影したこの特性の車だってな！

「ト〇タ、マ〇クメジオだ。しかもミッドで走っている車と同じ構造にした。いや、成長するのっていいね！」

「その成長を戦い方面に持って来て欲しいな」

「……すみません」

フェリスが呆れた顔で一喝してきた。

そうなんだよな。この投影精度を戦闘に活かさなくちゃならねえ

んだよな。精進、精進。

「さて、早く乗った乗った。此処から目的地まで飛ばして一時間。閉園は10時だが、うんと遊びたいだろ？」

俺は皆を乗せて車を走らした。

因みに、助手席の取り合いが起こったので、ハクを指名し終止符を打った。理由？そんなもん、ハクが一番気がきくからな。

「く、車やて！？予想外や！てつきりモノレールで行くと思とった
！」

「ってか何時の間に免許取ってたんだよ！？」

「確か、他にも色々と免許を取ってるって、父さん言っていました」

「兎に角追いかけるで！なのはちゃん！ヴァイス君にヘリの準備さ

せといてー!」

「りよ、了解!」

「いや、ナンバーとか問題があるんじゃないよ…」

「ティア、気にしちや駄目だよ」

「…はあ…(こんな事してる場合じゃないのに)」

一時間後。

漸くスーパーミッドワールド、略してスミワに到着。何事も問題は無かった。

俺達は入場券を買い、中に入った。

「お？思ったより人が少ないな」

今日は平日だから、それが関係してんのか？まあ良いや。ラッキーだ。

「団子団子団子団子団子団子団子団子団子……」

「ピザピザピザピザピザピザピザピザ……」

「うおおー！何だあれは！？こっちは！？あれは！？あそこは！？」

「取り敢えずお前等落ち着け！！」

ハクとフェイトは周りをキョロキョロと見るだけなのだが、この三人は目をギンギンにさせて、空幻に至ってははしゃぎまわって周りに目をやっていた。

「さて、どうする？買い物からか？それとも遊園地か？水族館か？飯はもう六課で食ったからな」

そう言うと五人は話し合い、話が着いたのか口を揃えて答えた。

「「「「遊園地!!」「「「「

「よし来た!」

「まずは何から乗る?」

「このジェットコースターからだ!」

フェリスが指をさしたのは、天高くそびえ建つ絶叫マシンだった。名は確か……ディープリンパクト。名前を聞いただけで怖そうだな。

「いきなりこれか？」

「何だ？怖いのか？」

「いや全然。お前等は？」

「私はどちらかと言うと乗りたい」

「俺も！」

「私も。速いのは好きだし」

皆も乗りたいようだが、ハクだけ顎に手をあてて考えている。

「ハクは止めとくか？」

「（はつきり言ってこれは苦手だけど、イブキさんの隣をゲット出来れば、『きゃー、イブキさん怖ーい！』と、違和感無く腕を組めるかも！）乗ります！」

「そ、そうか…」

えらく気合が入ってるな。そんなに好きなのか？

取り敢えず俺達は列に並び、順番が来るまで待った。

「いきなりジェットコースターかよ!？」

「しかも何やこわそうやねー」

レオン達はヴァイスにへりを出してもらい、イブキ達の後を着け何とか見失わずに作戦を実行していた。

「しゃーない。誰かが一緒に乗ってビデオ撮ってもらおか」

はやては念話でスターズとライトニングに連絡した。
はやて達は、それぞれ違う場所からの撮影を行っているのだ。

「<こちらはやて。見ての通り、イブキ君らはジェットコースターに乗る模様。そこでシグナムとなのはちゃんには一緒に乗って撮影してもらいます>」

「「<ええ！？なっ！？>」」

「<因みに拒否権はないで>」

鬼だ。ここに鬼がいる。隣にいたレオンは冷や汗を流しながらそう感じた。

「<ならレオン君も同行を求めます！>」

「<俺え！？>」

なのはがいきなりレオンも同行して欲しいと要求してきた。

「くむ、無理無理！俺過去のトラウマで高い所はく宜しい！許可します！>何でそんなに面白そうな顔で言っちやてんですか！？」

「トラウマを克服するには最高なチャンスチャンスやないの。それに恐がるレオン君の顔も見て見たいし」

「それが本音だろう！？」

「なんや、レオン君って女の子のお願いも聞いてくれへんの？」

「良いだろう。レディの頼みとあらば、この身、例え朽ち果てようとも馳せ参じよう！」

流石は部隊長。自分の部下の扱い方を心得ておっしゃる。レオンは態度を180度変え、なのはとシグナムを引き連れてイブキ達の後列にばれないように並んだ。

俺達はジェットコースターの席に座り、動き出すのを待った。両隣には何故かとても嬉しそうにしているハクと、まだかまだか待ち構えているフェリスが座っている。しかも密着してきて。

「な、なあ…何でそんなに密着してくるんだ？」

「気のせいだろう。これが普通だ」

「そうですね。普通です」

「そうか…」

普通なら仕方がない。仕方が無いんだ。例え後ろから三つの視線が恐く感じててもそれは仕方が無いんだ。

ゴトン…

コースターが動き始めた。ゆっくりとゆっくりとレールを進み、どんどん、どんどん高くなっていく。遂に人が豆粒程に小さく見える

「ぜえ…ぜえ…良かった…俺…生きてた」

「ヒツグ…やっぱり…無理は、ヒツグ…ダメですね…」

「こ、この私が…まさかここまで、追い込まれる、なんて…腰が…動かない…」

俺とハクとフェリスは近くのベンチにへたり込んでいた。ハクなんか涙が出てきていた。

「お前等…良く平気だったな」

俺はピンピンしている…空幻、フェイトを、疲れ切った目で見た。

「い、いやまあ…」

「ああ…」

「うん…」

「…？」

「……（い、言えない。腕に抱きついてた二人に嫉妬しててそれどころじゃなかったって言えない！）」「……」

何だ？何か変な事でも聞いたか？まあ言いにくいのなら無理に聞くまい。

「よし。ここでこうしてても時間の無駄だ。何か他で遊ぼう」

俺はハクをどうにかして元気づけ、フェリスを復活させて、次の場所へ向かった。

「ぶ、ぶじやった？」

はやては目の前にいる三人に尋ねた。

「主はやて…世の中にはこんなにも恐ろしい物が有ったのですね…」

シグナムはどこか悟った様に空を見上げた。

「高いとこ嫌い…空嫌い…速いの嫌い…高いとこ嫌い…空…」

レオンは膝を抱え、呪文のようにブツブツと唱えていた。

「はやてちゃん…ちょっと、頭冷やそうか」

「そのセリフはまだ、いやああああああ！！！！！」

なのはは自分をこんな目にあわせた張本人を物陰に連れていき、お話と言うお仕置きを行った。

その後も俺達は次々とアトラクションを楽しんで行った。ウォータ―系の乗り物、コーヒークップ、メリーゴーランド、お化け屋敷と様々な体験をした。中でもお化け屋敷では、空幻はケラケラと笑っていたが、他はビクビクしながら俺の後ろに隠れながら進んでいた。

その時の皆の反応にドキツとなったのは秘密だ。

アレは不覚だった。まさかあんなに可愛い反応するなんて。

「そろそろ楽しんだか？」

「そうですね。もう殆ど回りましたし……」

「中々面白かったな。天界では味わえない楽しさだった」

「だがあのジェットコースターはもう乗りたくない。あれに乗ると……思い出したくもない」

「俺はお化け屋敷が気に入った！あのマヌケな顔のお化けと言ったら……カツカツカ！」

「私はカートに乗るやつが楽しかったかな。結構スピードも出たし」

皆は満足している様だ。

しかしまだ遊園地で遊んだだけ。これからショッピングに行ったり、夕飯食べたりとまだまだすることは沢山ある。

「じゃあ、次は買い物でも行くか？荷物が出来ても、俺の力で仕舞っとけるし」

と言う事で俺達はショッピングゾーンにやって来た。

多くの店が有り、その一つ一つが大きく、スーパーマーケットの商

店街の様な感じだった。

取り敢えず先ずはハクの服を買いに行く事にした。

「さて、金なら気にするな。一千万ほど口座に入ってたから」

確認した時は焦ったな。給料は貰ってたとは言え、まさかこんなには…。はやて曰く、上の人が出てくるって言っていたが…まさかフェリスとかが脅しかけてたんじゃ…。

俺はそんな恐ろしい事を考えながら、服を選んでいる皆を眺めていた。

「お！この服ええな！」

「ティア〜！これ可愛くない!？」

「そっね…こっちの方も良くないかしら？」

「ヴィータ、子供服は向こうだぞ」

「なっ!?!うっせえ!シグナムはあのクソ野郎を誑かす服でも選んでろ!」

「なっ!?!///誰がヤマトの事を!?!///」

「へっ!誰もあいつの事とか言ってるねえーよ」

「レオン君、この服どうかな?」

「良いじゃねえか!可愛らしくくて!」

「本当?///」

「ああ!」

「じゃあ、買ってね!///」

「え……」

本来の目的は何所やった…。

さてさて、俺は今試着室んの前にいる。

何故かと言うと、ハクが試着した姿を見て欲しいの事…なのだが、フェリスやらC・C、空幻らが面白がって様々な服を着させた。

ゴスロリの服やら、メイド服やら、丈が極端に短くもっ見えてしまっ程の服等々…着せ替え人形のようにハクに着させた。

フェイトも苦笑しながらも決して止めはしなかった。かく言う俺も、そのハクに見惚れてしまい、こっそりとフェリス達を選んだ服に自分が選んだ服を忍ばせたりしてしまったが。っっていうか何でコスプレ衣装があんだよ！？何でもありが！！

そして今、ハクがもう自分で選んだ服しか着ないと断言したので、着せ替えは終了。それで今はハクが着替え終わるのを待っている。

「お、終わりました〜」

着替え終わったハクが仕切りを開け、俺達の前に姿を現した。

「ど、どうですか？」

「……………」

正直、とても良く似合っている。

ハクは明るい性格だからてっきり明るい色の服を選ぶと思っていたが、逆に暗い服を選んでいた。それがその、何と言うか、年相応の大人の女の雰囲気醸し出している。

ハクの格好は、水色で胸の谷間が見えて袖が肩までのシャツにウエストまでの黒い半袖ジャケット、下はまた違う黒のジーンズ。

「ハク…もの凄く似合ってるぞ！」

「ほ、本当ですか！？／＼／＼」

「ああ！」

「良かった〜！私ああいうヒラヒラしたのはどうしても駄目です。それにイブキさんは黒が好きだって聞いたから黒を基調に選んだんです！」

そうか、そうか…俺の好みを気にして…。なんて健気な！その心遣いに一万点！

「むう…私も黒は似合うのに…」

「と云うか、私は今現在黒の服だぞ…」

「と云う事は、俺の普段着は気に入られている…？」

「良かった。私の服は黒が多い…」

後で何か言っている様だが、周りの騒音であまり聞こえない。

俺達はその後も服を選び、全て俺の支払いで済ました。

……何故か皆黒が多かったな。

夕方6時。

「そろそろ腹が減ってきたな……」

「それじゃあ、夕食にする？」

「そうだな」

俺はフェイトの提案に乗り、食事に行く事にした。

確かここはバイキングがあった筈だ。そこなら何でも揃ってるから
団子剣士やピザ女や大喰らいにとっても問題は無い筈だ。

「レオン君、ウチらお腹すいたで」

「そうだな。あいつ等も食いに引っついてる様だし……なら俺らも行くか」

「さすが！話分かつとるやんかいな！<皆、レオン君が晩ご飯奢ってくれで〜！>」

「え……」

何かもう、こっちはこちらで満喫している様だ。

「イブキ！これ全部食べて良いのか!？」

「まあ…良いんじゃない……か？」

空幻が目を輝かせて尋ねてきた。

別に問題は無いと思うが…空幻なら本当に食べてしまいそうで怖い。

しかし、本当に何でもあるな。ミッド中の料理全部あるんじゃない

か？それに地球の料理も沢山ある。

俺達は席を確保し、各々料理を皿に盛り付けていった。

「……………いただきます！……………」

空幻は皿を何枚も持って来て山盛りに料理をのせていた。

フェリスはてつきり団子ばかりと思っていたが、半分程はちゃんとした料理だった。いや、半分団子もアレだが。

C・Cはもうご想像の通り。一面中ピザだ。様々なピザがズラッと並んでいた。

俺とハクとフェイトはバランス良く野菜や肉、魚を取ってきていた。

「んふぁいんふぁい！ひうらへもふぁひふほ！（美味しい美味しい！いくらでも入るぞ！）」

「食ってから喋れ」

「フンフーン この肉料理や魚料理もいいが、ここの団子は中々美味しい！土産に千個程買っておきたい！」

「そしてその団子入れは俺か…」

「ピザは良い……生地に様々なトッピングをする事で無限に味を生みだす……。なんと素晴らしいんだ！」

「んな大げさな……」

三人はとても満足している様で良かったが、自分の世界に入り、俺のツツコミも耳に届いていなかった。

まあ良い。俺は俺でゆっくりと味わらせて貰おう。

「……ん、この肉美味しいな。肉汁がしみ出て歯応えも良い……」

「そうですね。私も料理しますが、こんなに上手に焼けません……」

「……って、もしかして五つ星並かも……」

かあ……凄いな、スミワ。何で俺がいた世界にもこんな場所を作らなかったのかね。

「あ、あの…イブキさん／＼／／」

「ん？…へ？」

「あ、あゝん／＼／／」

ハクの呼びかけに振り向くと、ハクは顔を真っ赤にしながらフォー
クで刺した肉を差し出していた。
これはいつかやったあのあゝんだ。

「は、ハク…？／＼／／」

「あゝん！／＼／／」

ハクは恥ずかしいのか、グイッと差し出してきた。俺は仕方なく素
直に差し出された肉を口に入れた。

「あゝん／＼／／」

うん……恥ずかしい／＼／

「イブキ」

「ん？…え」

今度は隣に座っていたフェイトに呼ばれ振り向いたら、魚を差し出された。

何？これを食べると？

「あゝん／＼／」

フェイトも顔を真っ赤にし、口を開くよう催促してきた。

「あ〜ん／＼／＼」

俺が口に入れるとフェイトは満足したのか、笑顔になり食事を再開した。

「『イブキ』」

「……ええ？」

今度はフェリス、C・C、空幻に呼ばれ前を向いたら、団子にピザにパスタが差し出された。

「『あ、あ〜ん／＼／＼』」

「ぶうツ!？」

三人は顔を赤らめ、照れながらそれぞれを俺に向けてきた。

な、何なんだ!？俺はからかわれているのか!？いや、ハクやフェイトはそんな事はしない!だとしたらやはりからかわれているのか

！？いやしかし！…ここで断ったらさらにややくしく！ええい！もう
ままよ！

「あ〜ん！／＼／／」

俺はやけくそ気味に口を開き、それぞれ差し出された物を食べた。

う…口の中で味が弾け合ってる。

俺はやつと終わったと思い、自分の食事を再開しようとした。

「「「「あ〜ん／＼／／「「「「

「うそーん…」

.....

「~~~~~ぶ~~~~~き~~~~~!!!!」バキイ!

レオンは持っていたフォークを怒りのあまり握り潰してしまった。

「このリア充が!!!このハーレム王に刃向かうとは、何たる愚かしさ!!!まだ俺だってそんな素敵イベントを起こしてないのに――!!!」

レオンは今にもイブキに飛びかかりそうな雰囲気だが、場所も場所なので何とか堪えている。

しかし、我慢も限界に近付いていた。だがそこへ、救世主が現れた。

「はい、レオン君。あ〜ん」

「え？」

なんとなのはがレオンに料理を食べさせようとしたのだ。

「恥ずかしいから早く食べてよ／＼／＼」

「あ、ああ…あ〜ん／＼／＼」

レオンは素直に食べたが、まさかされるとは思っても見なかったの
で、顔を赤くした。

「美味しい？／＼／＼」

「ああ…／＼／＼／＼」

「（こっちも撮影しとこっか？）」

ピンクオーラを周りに散布させている二人を見て、はやてはこの二人もターゲットにしようかと思いはじめた。

時は流れて行き、午後9時。

俺達はあの後、皆へのお土産を買ったり、イベントを見たりしてこれでもかと言う位楽しんだ。そしてもうすぐ閉園の時間。俺達は最後の締めくくりに、観覧車に乗り夜景を見る事にした。この観覧車は少し大き目に作られており、6人丁度乗れる広さだった。

「綺麗だな…」

本当に綺麗だった。街の街灯が灯っており、街が星空の様に輝いていた。

「…今日は楽しかったか？」

俺は四人に聞いた。お礼のつもりで来たから、皆には楽しんでもらってないといけなかった。

「はい。とても、とても楽しかったです…」

「ああ…。生まれてからこんなに楽しい日は無かった」

「そうだな…。本当に楽しかった」

「俺もだ。こんなに心が温かくなったのは初めてだ」

「うん…。今度は、エリオとキャラも連れて来たいな」

ハク、フェリス、C・C、空幻、フェイトはそれぞれの感想をと
ても満足した笑みで応えてくれた。

一瞬だが俺はそんな五人に見惚れてしまった。

「…ならば、また皆で来よう。今度はエリオもキャラもスバルも
ティアナもなのはもはやてもシグナムもヴィータもシャマルもザフイ
ーラも、ついでにレオンも一緒に」

そうしたら楽しいだろうな。子供達ははしゃぎまわって、俺達はそ
の面倒を見て、レオンがナンパして俺達が制裁を下して、こうして
皆で夜景を見て……。

だからもう…俺は悪魔に負けられない。俺はこいつ等を失いたくな

い。それが親愛か友愛か恋愛かは知らない。俺はもうこいつ等を、皆を愛している。だから俺はこの世界を守ってみせる。必ずな…。だから皆。これからも宜しくな。

俺は声に出さずに心の中で伝え、夜景を眺めた。

「あゝもう！ここはキスやる！絶好のチャンスやないか！」

「いや、二人きりなら分かるけど、六人だよ？」

はやてと副隊長以上の者達は、イブキ達が乗っている一つ下に乗って撮影をしていた。

「まったく、イブキ君もはよ気付けや！皆待つとるねんで！」

はやてはプンスカと怒り、一人叫んでいた。

「ん？……げっ！？」

「どないしたんや？」

レオンが突然引き攣った声をだし、天井を見上げた。
それに気がついたはやてはレオンが見ている天井を見た。

「……なッ」

「「「……？……え？」「」」

他の皆も天井を見上げた。
その視線の先には……

皇ディメンション・オブ・エンペラーの次元武が展開されて、銃口が向けられていた。

この銃はイブキが投影した物で、一秒間の間に八発も撃ち出すマシンガンである。

と、ヒラヒラとはやての手元に一枚の紙切れが落ちてきた。

はやてはそれを掴み、書かれている文章を読んだ。

「『覗き魔に正義の鉄槌を』……」

この後、一つの観覧席が蜂の巣になって一周してきた。

父と子 皇と王の過去（前書き）

作者「どもども、更新です」

イブキ「作者の馬鹿がとあるミスをしてしまった」

作者「イブキの母の特技、フェ“ン”シングがフェ“イ”シングになっちゃいました。ごめんなさい」

イブキ「それと今回はちょっと重要な会話が出てくる。みんな、見逃さないでくれよ!」

父と子 皇と王の過去

はやて達が八チの巢にされかかった翌日。

イブキが女達を侍らせた日の翌日。

スターズ、ライティングの隊長、副隊長。

そして部隊長事、八神はやて達は昨日ほっぽり出した仕事に追われ、必死にデスクと向き合っていた。

子供達のもあったのだが、量が少なく既に終わっており、自主トレ等をしている。

エンペラード隊はちゃんと自分達の仕事はきっちり終わらせているので、その優秀さ故、既に終わらせて各自で色々と好きにやっている。

そしてこの隊の隊長もそれに当てはまっていた。

「せいっ!」

「よっど!」

「はっ!」

「甘い甘い!」

「やあ、お早う、今日は、今晚は、
イブキだ。」

「今俺は練習場で我が息子のエリオの槍を避けている所だ。」

「俺が外を歩いていたら声を掛けられて、稽古を付けて下さいと頼まれたのだ。」

「よくよく考えると、エリオとキャロの父となったのに、それらしい事を一つもしていないではないか。
よって俺は快く引き受け、今に至る。」

「エリオ、槍みたいに長い武器は遠心力が命だ。だからそんな風に振り回すのはNGだ」

「はい！」

俺は姉が槍の達人だったので、時たまレクチャーしてもらった事がある。

……………全く身に付かなかったが。

だが今となつてはそれが役に立っている。神のお蔭で身体能力が上がっているので、今まで教わって来た事が実現可能になっている。

「そつだ！槍を回す時は腕や手だけじゃない！身体でも回せ！」

「うおおおお！」

エリオは凄い。

教えた事をスポンジの如く吸い取っていく。

まだ子供だなんて所はあるが、それでも時が経てばそれも無くなる。

こいつは化けるぞ！

「よし！今回は此処までだ！」

「はい！ありがとうございます！」

エリオはしっかりと礼をした。

うんうん！礼儀をちゃんと知ってるな！

「エリオは凄いな。教えた事は全部覚えていく」

俺はエリオの頭を乱暴に撫でた。

「うわっ！と、父さんこそ凄いよ！僕の攻撃、武器も使わないで避けてたし」

「まあ、スペックが違うからな。それは仕方のない事だ」

タオルで流れた汗を拭き、ドリンクを飲む。

「…そうだエリオ。お前、この後空いてるか？」

「え？…はい。隊長や副隊長も手が空いてないから自主訓練だけですから」

「そうか。それは好都合だ」

「……？」

「エリオ、これから出かけるぞ」

イブキside out

レオンside

俺は今なのはちゃんを探していた。

とある事を伝える為だ。

「何所だ、なのはちゃんは…。お！いたいた！」

なのはちゃんは仕事場のデスクで一生懸命に書類と向き合っていた。

ありゃあ……。これは言いずれえな。

「なのはちゃん」

「う……。ん？レオン君？どうしたの？」

「いや、その、伝える事があってな……」

「何？」

なのはちゃんは手を休め、此方に身体を向けた。

こんな状況で言うのは言い難いんだけどな、こればかりは…。

「実はな……俺、昼から外に出るわ！」

「え？外回りなんかレオン君の仕事にあっただけ？」

なのはちゃんは可愛らしく首を傾げた。

そのキュートさに一万点あげたい所だが、そんな場合ではない。

「いや、仕事じゃなくて……私用」

「……レオン君？今がどんな時か分かって言ってるのかな？かな？」

怖い！！怖いであります！！

目のハイライトが消えています！！

しかし！今回ばかりは譲れない！

それが例え俺のハーレムNo.1番でもだ！

「すまない！今日この日だけはどうしても行く場所があるんだ！」

俺は手を合わせて頭を下げた。

「……………どうしてもなの？」

「どうしてもです…！」

「ん……………」

なのはちゃんは腕を組んで考えだした。

どうする…、もし断られたら。

仕事を片付けてからでは時間が無くなるだろうし…。恥を忍んでイ

ブキに仕事を頼むか！？

いや、それは俺のプライドが許さない！

なら強行突破！？ありえない！

くそっ！万事休すか！？

「良いよ」

「そつだよな、そんなの自分かって……へ？」

「だから、良いよ」

なのはちゃんは天使の様な笑顔で許してくれた。

「ホントか！？ありがとう、なのはちゃん！」

俺はなのはちゃんの手を握り喜んだ。

「ただし！」

「……ただし？」

「今度二人で食事しよう」

そうなのはちゃんは照れながら言ってきた。

おおっ……もしかして俺、何時の間にかなのはちゃんを落としちゃった？

いやいや、そんな事は……。でも待てよ？これってひよっとしてチャンス？恋人を作るチャンス？よし！そう思おう！

「良いぜ。しっかりとエスコートしてあげよう」

「にははは！楽しみに待ってるね！」

俺はなのはちゃんに許可とチャンスを貰い、上機嫌で出かける準備に入った。

いや〜！俺のハーレムも時間の問題かな！

あは！あははははははは！！

レオン side out

イブキside

「よし、揃ったな」

俺は玄関前でエリオとキャロと待ち合わせした。

二人は私服で仲良く揃って現れた。

「あの、父さん。一体何所に行くんですか？」

「子供が楽しく過ごせる場所だ。…ってエリオ、お前は俺の息子だろう。その余所余所しい喋り方を直せ。キャロもだぞ」

「え、えっと……」

「その……」

二人はモジモジだして視線を泳がせた。

「……はあ、まあ最初は照れるよな。……俺だってそうだったし」

「え？」

「何でも無い。ま、何時か直してくれよ。じゃあ、行こうか」

俺はまたまた投影した車に乗り込み、目的地へと出発した。

「よし、着いたぞ」

「じじって……」

「水族館？」

そう、俺達はミッドにある水族館へとやって来た。

ここは世界のありとあらゆる水辺の生物が揃っている場所だ。

「エリオとキャラも、中々こんな所へ来た事無いだろ」

「はい！」

「私、初めてです！」

エリオとキャラは喜んでくれているようだ。

それだけでも連れてきた甲斐があったと言う物だ。

「それじゃ、行こうか」

「うん！」

喋り方も直ってきてるみたいだし。

「「うわあ〜！」

中に入ると、そこは正しく海の中だった。

水槽は横、上、下、至る所に設置されており、サイズも大きい。

「エリオくん！上を見て！」

「うわっ！大きい！何て魚だろ？」

「あれは……地球にもいたな。あれはマンボウって言うんだ」

「へえ〜！あはっ！面白い顔！」

「お、お父さんっ！こっちは何ですか！？」

キヤロに引つ張られ、指を指した方を見た。

「ん〜？お！これはマンタだな。にしてもデカイな。迫力に圧される」

マンタがいた水槽は天井だったので見上げたのだが、あまりにものでかさに視界全部を覆い隠すほどだった。

「ミッドもあまり地球と変わらないのか？……ってなんじゃこりゃあ！？」

近くにあった水槽を見ると、そこには世にも奇妙な生物が存在していた。
いや、奇妙であって奇妙で無い生物……。

「……ポッ○マ？」

いやいやいやー！いくら異世界だと言ってまさかポ○モ○○がいるワケ……。

「チャマー！」

「黙らっしやああいー！」

何水槽の中から挨拶してんだ！？ってか本物なのか！？

「何これ！？可愛い〜！」

「本当だ！ペンギンだね！」

確かに見た目はそうだが、気をつける！
そいつは水鉄砲を放つぞ！

それから俺達は歩き回った。

エリオとキャラロは初めてみる生き物に感動し、ずっと笑顔だった。

かく言う俺も驚きで一杯だった。

何故なら……。

「何でポ○モン大集合なの？」

この水族館には水○ケモンが数多くいた。

稀にハ○リユーヤラプ○○なんかまで…。

でもまあ、子供達が喜ぶんなら大目に見よう。

「「「「「チャマー！」「」「」

「だからすんなあああああ！ってか増えて、ええ！？」

イブキside out

レオンside

首都クラナガンから遠く離れた田舎町。と言っても、ビルが無くて自然が多いと言っただけなんだがな。

その町の更に向こう。

そこに海が見えるんだが、俺はその海が一望できるちょっと突き出た崖にいた。

俺の目の前には文字の彫られた大きな岩。

俺の家族の……兄さんの墓……。

今日は兄さんの命日……。

「……おひさ、兄さん」

ここに来る途中で買った花を供えた。

兄さんは二年前に俺を庇って死んだ。

局の中でもなのはちゃん達には及ばないがエリートだった。
魔力は高いし、頭も顔も良かった。

俺が一番憧れた人だった。

「今日で二年だ。……俺は元気でハーレムを作ってる。今日なんか、デートに誘われちゃったぜ」

兄さんも大の女好きだった。

今思えば、俺のこの性格は兄さんから来てるのかもしれないな。

「それとな、俺にもライバルが出来たぜ。強いしモテル……最高の親友だぜ」

俺はこの一年にあつた事を全部報告した。
任務の事、女性の事、六課の事、悪魔の事。
一つも残す事無く全て。

「……そうだ、この傷の事だけど……もう何ともねえから」

前髪に隠れた左目……まだハク以外の六課メンバーには見せていない、傷跡。

「最近になってやっと開く様になったんだ。まだ、あまり見えねえけどな」

左目に触り、傷の感触を感じる。

縦に斬られた傷……兄さんを殺した男が付けた斬り傷。

「見ててくれ。アイツと一緒にこの世界を救って見せっからな」

それを言うと、俺は墓に背を向けて歩き出した。

「また一年後にな」

誰もいない墓に向かって手を振った。

レオンside out

イブキside

俺達は水族館でよく行われるイルカのショーを見ていた。

「凄い！」

「あのイルカさん、可愛い！」

エリオとキャロはイルカがジャンプしたり、尾で立ち上がって泳いだりしている所を見て子供らしく興奮していた。

イルカが笛の合図と共に技を見せていくたびに、「おお〜！」とか、「わあ〜！」とか言っていて騒いでいた。

やはり子供はあんな戦場じゃなくてこう言う所が良いに決まってる…。

イルカのショーも終わり、時間も時間なのでグッズ店で何か買って帰る事にした。

「フェイトさんとなのはさんにはこれとこれを…」

「ティアナさんとスバルさんにはこっちを…」

「ハクにはこれ…フェリスにはこれ…C・Cにはこれ…空幻にはこれを…。レオンにも何か…」

「ロングアーチの皆さんにも買ってあげた方が良くないかね？」

「うん！」

「後、隊長や副隊長陣にも何か……」

「」「これ下さい！」「」

「すみません、父さん。僕達の方まで払ってもらって」

「こんなに一杯……良かったんですか？」

店をでた後、エリオとキャロが申し訳なさそうに尋ねてきた。

因みに、荷物は次元に入れてある。

「はあ……あのな、お前達は俺の息子！娘なんだ！親が払わないなんて聞いた事が無い」

「でも……」

それでも渋ってくるエリオ。

ん〜、こりゃ相当時間がかかるな。

「兎に角、子は親に甘えろ、いいな？」

俺は優しく二人の頭を撫でた。

「……うん／＼／＼」

「よし！んじゃあ帰るか！」

「うん！」

それからは車に乗り込むまで親子三人で手を繋いだ。

「……………寝たか」

ミラー越しに後ろの席を見る。

エリオとキャロははしゃぎ疲れたのか、仲良く寄り添って眠っていた。

「……………心に残ってくれたかな……………」

俺は残っていなかったから……………。

夕陽が沈む中、子供を乗せた車は六課へと戻っていった。

イブキ side out

ハク s i d e

午後七時。

今日もまたこの日が来た。

レオンさんのお兄さん、ダレイスさんが亡くなった日…。
また今日もあそこに行っってるんでしょうね。

「はあ、そろそろ行かないと…」

「何所に行くんだ？」

「ひゃあああ!？」

後ろからいきなり声を掛けられ、びっくりして大声を出してしま
った。

「わ、悪い…。驚かすつもりは無かったんだが…」

「いつイブキさん！？すつすみませんでした！」

声を掛けてきたのは私の隊の隊長で直接の上司で私の全てを捧げれる……ンン！／＼／＼イ、イブキさんだった。

「いや、良いって。それより、何所に行こうとしてたんだ？」

イブキさんが尋ねてくるけど、これは言っても良い事なのか？

でも…イブキさんはレオンさんの親友だし、ここは頼んでみても良いかも…。

「えっとですね、実は今日、その…」

「…」

「その、今日はレオンさんにとって特別な日です…」

「特別？誕生日か？」

「いいえ、その……お兄さんの……」

「……ああ」

イブキさんは分かってくれたらしく、気まずそうに目を伏せた。

「それで……レオンさん、この日はお墓参りに行ってるんです」

「そうか……。そう言えば俺の家族のも……」

「えっ？」

イブキさんが何か咳いた気がしたが、聞き取れなかった。

「いや……。それで？」

「えっと……それで、お墓参りの後は必ずバーに行くんですけど……」

「……飲み過ぎて帰れなくなる……とか？」

「良く分かりましたね！」

「凄い、流石親友です！イブキさんです！まだ何も言っていないのに分かっちゃうなんて！」

「そうなんです！それで何時も私が迎えに行ってるんです！」

「まったく、レオンのバカ……。ハクにそんな事させるなよ。もしまた襲われたらどうすんだよ」

「ッ／／／／／」

イブキさんは頭を抱えて呆れてしまった。

私は消したい過去の事を言われて恥ずかしくなった。

うう〜！／／／泥酔時の私のばかああ！／／／

「うう…／／／あのそれで、私一人じゃ結構大変なので、手伝って欲しいとかなんとか…／／／」

私は最後まではっきりと言えず、両手の指をツンツンさせて目を逸らしてしまった。

こ、これじゃ失礼じゃないですか！もつとちゃんと相手の目を見て語りかけなくちゃ！…でも、そんな優しい瞳で見られたら……はふう／／／

「良いぞ」

「え？」

私がイブキさんの事で妄想……もといイメージトレーニングしていたら、了承の返事が返って来た。

「良いんですか!？」

「ああ。俺もなんか酒が飲みたい気分だし」

あ、そう言えばイブキさんって私と同年でしたね。
よし!ここは私がエスコートして一気に攻める!
それでフェリスさん達と差をつける!

「で、では案内しますから行きましょう!／／／／」

「って、何故腕を組む!？」

「見失わないようにです!／／／／」

我ながら上出来です!これで見る人に如何にも付き合ってますと見せつけれる!

「い、いや……当たってんだが／／／／」

「……………えっち／／／／」

「ぶうつ！？／／／」

ハク s i d e o u t

イブキ s i d e

ハクに連れられて数十分。

うん、周りからの目が痛いね。何見せつけてくれてんだコノヤロウってな。

いくら夜だからってまだ人が出歩いている時間帯だ。そんな中、ハクのような美女（露出大のあの格好）と腕を組んで歩いていたら必然的にこうなってしまうのは明らか。

もしこれがフェリス達に知られたら……ブルツ！

って言うか何であいつ等は怒るんだ？別に関係は無いだろうに。：

…まさかどっかの主人公の様にフラグ立てた！？……ふっ、なわけあるか。

「……随分高そうな店だな」

「まあ、それなりには……」

そしてついた場所が、六課から四十分程度の場所にある、六本木にありそうな大人の雰囲気漂わす高級ビルだった。

「……まさか、レオンって結構金持ち？」

「……まあ、色々……」

「………？」

一瞬、ハクは何所か悲しそうな表情をした。
俺はあまり触れずに店のドアを開けた。
ベルの音が店内に鳴り響くが、店内で流れているジャズ系の静かな音楽がそれを消した。

そして、俺を迎えてくれたのは……。

「あらあゝ！いらっしやああい！」

ムキムキでガタイがでかく、少し濃い化粧をしたオカマだった。

「うおおおおー!？」

俺はとてつもないインパクトに思わず魔皇刀を取り出してしまった。

「ちょっとく、ウチでは武器禁止なのよ?」

「す、すまん…あまりにももの」美しさに「びっくりしてしま…っ
て被せるな!!そして近い!!」

オカマはカウンターにいた筈なのに、何時の間にか俺の目の前に現れ、顔を近づけてきた。

「むっふっふっふ…。貴方、良い顔してるわね…ふう…」

「ッ!?!?!?!?!」

オカマがいきなり俺の耳に息を吹きかけてきた。

俺は悪寒が背中を駆け巡り、本能的に危険だと判断し殴り飛ばしてしまった。

「ぶらあああああああああ!?!」

オカマはもの凄い叫び声と共にカウンターの後ろへと飛んで行った。

幸いにも、客は誰一人いなかったので問題は起こらなかった。

「……………ハッ!ま、マスター!?!」

ハクはいきなりの事に驚いて少しの間動けなかったが、我に気付き急いでカウンターへと駆け寄った。

しまった…ついやってしまった…。だが…だがあんな事やられて黙ってる俺じゃない！

ハクはカウンターの裏に行き、マスターと呼ばれたオカマ野郎を助け起こした。

「痛ったいわねえ、何さらしとんじゃああああ…！」

「だああまらっしやいっ！！何耳に息吹きかけてんだ！？殺すぞ！」

「あらん？ここに来たのだからてっきりソツチかと…！」

「何故そうなる…！」

ピシッとツツコミを入れて俺はハクに向かった。

「おいハク！この化け物は何だ！？この醜くて暑苦しく怖いオカマは！？？」

「あら失礼ね。こつ見えて乙女なのよ？」

「乙女はあんな叫び方はせん！」

何だぶらあああつて！？つてかあの神とキャラ被ってんだよ！

「イ、イブキさん落ち着いて下さい！この人はこのバーの責任者でレオンさんの師匠です！」

..... はいい！？

師匠！？この化け物が！？この変態が！？この筋肉の塊が！？Tバツク履いてそんな化け物が！？

「ホント、失礼な男ね。ハクちゃん、何なのこの男」

「ほら、前に言ったじゃないですか。六課にレオンさんより強い人

「がいるって」

「ああ、ハクちゃんが惚れてるって人ね……ぬわぁんですってええええええ！？」

「イヤアアアアアアア！！！！／／／何言ってるんですかあああああ
あ！！！！？／／／／」

オカマとハクが急に騒ぎ始めた。

俺は師匠に吃驚し過ぎていて何も聞こえていなかった。

「ちよちよちよちよつと！？貴方、レオンを倒したの！？」

オカマは俺の胸倉を掴んで持ち上げシェイクしてきた。

「ぐっ！ぶおっ！やめッ！ちよっ！」

「早く答えなさい！！」

「ぎっ……ギっ……ど」

「……………」

オカマは手を離し、俺はそのまま地面に落とされた。

このクソ野郎……必ず痛めつけてやる。

「……………」この男、まさか……」

「ゴホッ、ゴホッ……あ？」

「何でも無いわ。それで？今日はどつしたの？」

オカマが何か呟いた気がしたが、気にしない事にした。

「来てますよね？レオンさん」

「ああ、その事ね。オーケー、こっちよ」

オカマは背を向け歩き出した。
それにハクが続き、俺も続く事にした。

「今日もまた飲んでるわよ」

「まだ荒れて無いだけでマシですよ。あの時は流石に嫌になりましたね」

「そうね。何せエクスプロージョンを店内にまき散らせたからね」

「そうですね。私の矢を千本も喰らっても落ち着かないんですから」

と、もの凄く物騒な事を話している二人。

「って言うかハクとこのオカマは一体どんな関係なんだ？」

「なんか親しそうだし……。そもそもレオンとは何時からの関係なんだ？………気になる。」

「はい、このエレベータに乗って最上階よ」

「ありがとうございます」

「ハクちゃんも飲むんでしょ？ちゃんと用意しておくわ」

そう言って俺をチラッと見て…。

「……むふうん」ぱちん！

デスウインク。

「ごええええええ！？気色悪ううううう！！」

あまりにももの絵に吐き気を覚え、その場に倒れそうになった。

「は、ハク……。良くあの化け物と会話できるな」

「ふふっ……。もう慣れちゃいました」

慣れたって……。そう言う問題なのか？って言うか慣れるのか！？
ハク……。恐ろしい子！

ハクの許容力に驚きながらも、エレベータに乗り、最上階へと到着した。

最上階は街を見渡せれる程の大きな窓があり、そこにカウンター席があった。

この階にはレオン以外の客もいた。

「ここは特別会員のフロアなんですよ。会員じゃなくても連れの人
が会員なら入れるんです」

だ、そうだ。

と言う事はレオンはこの会員なのか。

しかもここ本当に高そうだな。ボトル一本うん十万円とかしそうだ。

「あ、レオンさん」

ハクはカウンター席でレオンを見つけ、歩み寄った。

「んお？ハクじゃんか。どうしたんだ？」

「どうしたんじゃないやありませんよ。どうせまた飲み過ぎて帰れなくなるんでしょ」

「はっはー！そう言うハクだって帰れてないじゃん、飲み過ぎて」
「うぐっ」

「そうなのか……」
「あゝ、でも納得。うん。」

「よ、レオン」

「あ？………なんでイブキがいんだ！？」

レオンは俺に驚き、飲んでいたグラスを零しかけた。

「ハクに頼まれてな。それに俺も飲みたかったし」

「……………ハク」

「はい？」

レオンはハクの肩を掴み、店の隅まで連れていった。

……………何だ？

「お前、何時からそんなに積極的になった？」

「ええっ！？／／／／な、何言ってるんですか！？／／／／」

「あ、分かった！フェリスちゃん達に置いて行かれなくなかったからだろ？」

「ッ！／／／／／そうですよ！／／／／」

「ふっふっん。ならこの機に酒の勢いで既成事実作っちゃまえ！」

「はっ！？／／／／えっ！？／／／／そっ！！／／／／」

「さっきから何コソコソやってんだ？」

「「イヤアアアアアアアア！！？」

二人は両手を大きく上げて驚いた。

「ってかレオンってこんなキャラだっけ？……こんなだったな。」

「な、何も無いぜ！なっ！」

「は、はい！／／／／何でも無いですはい！／／／／」

……怪しい。もの凄く怪しい。
けど聞かない。今回は聞いてはいかないと、何所からか声がするから。

「まあ良いや。それより飲もうぜ」

「おっ！」

「はい……／＼／＼／」

「へえ、ハクとレオンって五年の付き合いなのか」

「ああ、俺がまだ下っ端の時、兄さんの部隊にハクが来たのが五年前なんだ」

「お前の隊って、確か……陸の……」

「陸士666部隊。兄さん率いる凶悪犯罪者専門の部隊」

「そこで私はダレイスさん……レオンさんのお兄さんの副官として入隊したんです」

「へえ……」

酒も入ってどんどん口が回っていく。

思ったけど、俺はレオンやハクの事を殆ど知らない。

この機会に色々知りたいと思った。

ついでに、俺の事も教えておこうかな。

「ハクって人気だったんだぜ〜！なんたってこの容姿、スタイル、性格！そして決め手はこのエロい格好！」

「ぶっ！？／／／／」

「あゝ、その頃からか……」

ハクって何でこんな露出が多い服着てんだろ？

いや、個人的…もとい男性的には良いんだが…。

「れ、れれれれれレオンさん！／／／何言ってるんですか！？／／／」

「もう大変だったんだぜ！男共は必死に良い所を見せようとして頑張ってたしよ！」

ほう…やっぱりハクってモテてたんだな。

そりゃあ、こんな女性がいたら放って置かないだろうな。

「にいてもイブキも大変だな」

「何が？」

「その男共に存在が知られたらリアル鬼ごっこだぜ」

「何故それを知ってるのかはこの際置いていて、何でそうなるんだ？」

「いやだつてハクは「レオンさん？」い、いや何でも無い……」

レオンはハクの顔を見て青ざめ、グラスに集中した。
何でかは知らないが。

「あ、イブキさんの話も聞きたいです」

「お！そりゃ良いな！」

ハクがいきなり話を振って来た。
それに便乗し、レオンも飲んでいたグラスを置き、此方に身を乗り出してきた。

「俺の？良いけど何が聞きたい？」

「お！ノリが良いな！そんなじゃ、今まででの女性かん」「……」「
冗談だから二人して睨まないでくれ」

レオンが禁句を言おうとしたから睨みを効かせて黙らせた。

何故かハクまでもが睨んでいたが。

「えつと……あ！子供の頃の話とか！」

うっ……痛い所突かれたな。

「良いじゃん！聞かせるよー！」

レオンが机を叩いて急かしてくる。

レオン……お前酔ってるだろ。

まあ良いか。どうせ俺の事も知っておいてほしかったし、それに何時かばれるだろ。

「えつとな……」

「」「うんうん！」「」

「何も覚えてない」

ズテンツッ!!

二人は盛大に椅子から落ちた。それはもう盛大に。

「な、なんじゃそりゃ…」

「もう…ふざけないで下さいよ」

「これがふざけてないんだよね」

「「え?」「」

さて、ここで重い過去話でも語るとしようか。

「実はな、俺がいた世界でとある事件が起こったんだ」

「事件、ですか？」

「ああ。それは未だ解決されていないんだ」

「どんな事件だったんだ？」

「とある小学校の大量殺人事件」

「ッ！」

二人は息を飲んだ。

多分、そんなに大きな事件とは思っていなかったんだろう。

「児童、教師問わず全員が殺された。それも惨い死に方で」

身体が弾けたり、捻じれていたり、食い千切られたような後だったり、様々だったらしい。

「それで、どう言った関係があんだよ？」

「俺はその事件の生き残りだ」

「「えっ!?!」」

「俺が十歳の時の話だ……ってあれ?どうしたんだ？」

「いや、何か重い話だなって……」

「イブキさん……!私がいいますから!」

ハクや、アンタもう酔ってるのね。

普段の君はそんな事言わない筈だ。

「それでだ!……俺はその時まで記憶が無くなったんだ」

まだまだ続くぞ、この話は。

二人はこれを聞いた途端、顔を伏せてしまった。

「すまん…そんな事も知らずに！」

「イブキさん…ぐすつ…良く頑張ってきましたね」

あれ、皆さんどんだけ酔ってるんですか？

もしかしこの話ネタだとか思ってたなーい？実話だからな。

「だから、子供の頃は覚えてないんだ」

「うおおおおっ！なんてっ！なんて悲しい話なんだああ！」

「イブキさああん！私がつ！私がつつと傍にいますからっ！だからっ！泣かないで下さいっ！」

あら…、こりゃマズイ。

二人とも酔ってる。

そりゃウイスキーやウォッカ、ワインやビールの瓶をそれぞれ十本

以上も飲めばね。

「ぐぶっ…！なんて悲しい過去を背負ってるのかしらっ…！ずりよっ
！あぐん！私が慰めてあげるうっうっうっ…！」

「こっちくんな化け物…！」

「ぼらあああああああ…！」

マスターが鼻水だらだらで近寄って来たからお構いなしに蹴り飛ば
した。

「よおおおし…！今日は飲みまくるぞおおお…！お…！」

「イエ…！イ…！」

「ちよっ…！？ええ…？」

レオンとハクがグラスを持って高々と宣言した。

「よーし、ついでだ！この階にいる客全員に奢ってやる！ほおらあ！紳士淑女共！飲みまくれーい！ー！」

「「「イエーイー！ー！」」」

そしてフロア全部の客を巻き込んでしまった。

知らん。俺は知らんぞ。後で痛い目に会うのはレオンだからな。

誰か何とかしてくれー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

イブキ s i d e o u t

フエイトside

「ふふっ…良く寝てる」

エリオとキャロの寝顔を見て、今日はとても楽しかったのだと確信できた。

エリオとキャロがイブキに抱っこと背負われて帰って来た時は驚いたけど、事情を聞いたら笑ってしまった。

二人の寝顔を見たら起こすに起こせないだなんて。まあ、私もそう思うけどね。

しかもエリオとキャロ、イブキの上着をしっかりと掴んでてどうしても離さないから、エリオの部屋で二人を寝かせる事になった。ホント、仲が良いな。

「お休み、エリオ、キャロ」

二人の頭を撫でて部屋を出た。

水族館か……。楽しかったんだろうな……。

「イブキとエリオ達、本当の親子みたいだったな……」

そんな事を呟いて、ふと考えてみた。

あの三人に私を入れて……。

イブキとエリオが手を繋いでて、エリオとキャラロが、私とキャラロでつないでたら……。

「（完全に家族……）ふにゃ……／／／／」

私がお母さんでイブキがお父さん……いい……凄く良い！／／／／

「よし！頑張るぞ！」

「何頑張るん？」

「へっ！？／＼／＼はやて！？／＼／＼」

「ひっひっひ…さあ、何を考えてたのかハッキリしい！」

「あ、あはは…」ダッ！

「あ！待ちいや！フェイトちゃん！洗い浚い吐いて貰うでー！」
ダッ！

取り敢えず、はやてに捕まらないよう頑張るづ。

一方その頃…。

「ごんちゅあ〜ん…／／／／」

「…／／／／」

「どっち向いてるんですか？／／／／」

どうしよう…。ハクが酔って寄ってくる…。

「ちゃんとどっち向いてくださいよあ〜／／／／」

しかも服が乱れてヒロい！ヒロ過ぎる…！

「いぶきさ〜ん……んっ／＼／／」

「はえ！？／＼／／」

ハクは何所から出したのか、ポツキーを口に啜えていて、目を瞑って俺に突きだしていた。

これはアレか！？伝説のポツキーゲームなのか！？

「ん〜ん！／＼／／ん〜ん！／＼／／」

ハクはまだかまだかと、ポツキーを、口を突き出してくる。

俺はそんなハクの様子に思わずポツキーを啜えてしまった。

「（俺のアホ！……こっからどうせっちゅーねん！……）」

「……………んっ！／＼／／」

「……a」どつせええええい!!!」むきやつ!

「……へ?」

唇と唇が当たる寸前、マスターがハクを突き飛ばした。
ハクは可愛らしい悲鳴を上げながら倒れ、そのまま寝てしまった。

「……………」

「お客さん?店内ではそうゆうの禁止よ?」

「……………すみませんでした」

この後、酔い潰れたレオンを引き摺り、同じく酔い潰れたハクを背負って、六課まで帰った。

「んんっ…// //」

「(む、胸が…// //)」

悪の影 騎士の目覚め（前書き）

作者「……何か滅茶苦茶……。それにレジアスが変……」

イブキ「後先考えないからだ」

悪の影 騎士の目覚め

午前7時。

「……………」

森を想定した訓練所。

俺は静かに目を閉じて立っていた。

気を落ち着かせ、草が揺れる音まで聞き取る。

「……………」

わっ……。

「……………」

音がした方向に、投影魔術の改良型で作りました二丁のエボニー＆アイボリーを向けた。そして引き金を引いた。

ズドンッ！

一発の銃声が辺りに響き、やがて消えてゆく。

放たれた紫の魔弾は、人の形をした紙人形の頭部に命中した。撃たれた人形は砂が風に攫われるように消え失せていった。

ザザザザザッ！

続いて何体もの足音が辺りから聞こえてくる。そして木の影から、茂みの中から、はたまた上から。紙人形達が襲ってきた。

スドドドドドドドツッ！！

そいつ等の頭部、心臓部を次々と撃ち抜いて行く。

一体、十体、百体。

消えてゆく人形は更に増していく。

「っ……」

千体目。やっと全ての人形が消え失せた。

「……ふう〜」

大きく息を吸って吐く。

「
」

「フン……」

瞬間。横から飛び出てきた人形の頭が吹き飛んだ。

「空幻。時間だ」

「うう……。流石にやり過ぎた……」

「大丈夫かよ。隊舎まで歩けるか？」

ドサッと座り込んだ空幻の様子を覗う。

実は先程までの紙人形はこの空幻が作り出した式神である。霊力ならぬ魔力で作り出し、予め術式に組み込んだ行動パターンに従って行動する代物である。

今の空幻は、大量に作り出したため魔力切れを起こし、力が入らない状態である。

うむ。やはり魔力切れとかは起こるんだな。
と言う事はフェリスやC・Cも起こるのか？

「あゝ、しんどい……」

「すまないな。俺の特訓に付き合ってくれて」

「くうく、なんのこれしき……はふう……」

これは相当参ってるな。普段は隠してる尻尾が出てきてるし。……
…尻尾？ああ、そつだ。

「空幻。そんなに辛いんなら、元身に戻ったらどうだ？」

そつだよ。今まで人間の姿をしてたから忘れがちだったが、空幻は狐じゃないか。

人間の姿を保つ為の魔力を無くしたら良いんじゃないか。

「断る」

「何でだ？」

「…………可愛くないから」

「……………ぷっ！」

「なっ、笑うなっ！／／／／」

「あははははっ！わ、悪い！まさか空幻がそんな事を気にしてたなんて！」

「ぐう／／／／／」

空幻は俺に笑われて顔を赤くして不貞腐れた。

まったく、面倒な奴だな。

「安心しろ。狐でも十分可愛いさ」

「世事はいらん」

あらら。拗ねたか。

「ホントだ。それに俺は狐は大好きだ」

「ピクッ…」

「三度の飯より狐耳が好きだ。ついでに狐耳美女もな」

「ピクピクッ…」

「空幻が狐になったらさぞかし美しく、可愛いんだろっな」

「仕方が無いな。そこまで言うのなら戻ってやるっ」

そう言った時にはすでに金色の狐の姿に変わっていた。

美しい毛並みに、ピンっとたった大きな耳。顔も凛々しく、金色の瞳が綺麗だった。身体は大型犬の様に大きかったが、それが逆に空

幻の魅力を引き立てていた。

「ほら、やっぱり可愛いじゃないか」

「そ、そうか／＼／＼。なら良いんだ／＼／＼」

「少しは楽になったか？」

「ああ。歩けるようにはなったな。だが腹が減った」

「はいはい。なら朝飯でも食いに行くか」

「うむー」

空幻と俺は他愛も無い会話をしながら、食堂へと向かった。

飯を食べていると、アナウンスが鳴り、ラインの声がスピーカーから流れ出た。

『エンペラード隊の皆さまーん！はやてちゃんが呼びますよー！至急、部隊長室まで駆け付けて下さーい！』

……もつと真面目に放送出来るのか。だが可愛らしいから許す。可愛いは正義だ。美人は神だ。

「って訳だから行くぞ」

「ガツガツガツ！んあ？」

……お前はペットか。

空幻は狐のままペット用の皿で飯を平らげていた。

空幻は空になった皿を舐めると、口で啜えて返却口に持って行った。

……この映像を撮ってペットコンテストに応募したら、優勝できるか？狐と言っただけで珍しいし。

「では行く」

「おう。…って待て。そのまま行くのか？」

「ああ。まだ魔力が回復しきれていないからな」

カチカチと、爪の音を立てて歩く姿は、何か可愛らしかった。

部隊長室。

「エンペラード隊長、イブキ・ヤマト。出頭致しました」

「なに似合わない事をしているんだ」

「別段、隊長らしい事をしていないではないか」

「ふ、二人とも！イブキさんはちゃんと隊長の威厳を……うっ！頭が痛い……」

上からフェリス、C・C、ハク。

フェリスとC・Cは俺を罵り、ハクは俺を援護してくれようとしたが、二日酔いにより敢え無く撃沈。

くそっ、とうとう言われてしまった。そしてハクよ。酒は程々にしておけ。

「まあまあ。実際何もしとらへんやんか」

「黙れ狸。貴様だけには言われたくない」

「ムキーー！！ウチは狸やない！」

「否定する場所が違うだろ……」

「もう一つも否定す……ちょい待ち。何やその狐？イブキ君のペックトっ」

「ピクッ……！」

はやての発言に空幻の神経は逆なでされた。

見てみる。口から狐火がちよろちよろと漏れてる。

「はやて。こいつは空幻だ」

「はっ？……ああそうやった。空幻さん、狐やったね。ごめん」

「……………ふん」

まうた拗ねた。まあ良いか。すぐに機嫌を直してくれるだろうし。

「それで、はやて。俺達を呼んだのは何でだ？」

このままでは話が一向に進まないと思い、俺ははやてに聞いた。

「うん？あ、そうそう。実はイブキ君等に、レジアス中將のお呼びが掛っとうねん」

「レジアス？……誰だ？」

「レジアス、レジアス……。ああ！あの松ぼっくりか！」

「ぶぶっ！」

フェリスが手をポンと叩いてそう言った途端、はやてが噴き出した。

「ふえ、フェリスさん。相手は地上本部のお偉いさんなんやから、もっと言葉を選ばんと……」

「ん？向こうには了承を得てるが？」

「あかん。なんや地上が心配になって来た」

「いや、多分違う。強引に肉体言語で頷けさせたと思う」

「あ……うん。そんな気がするわ」

はやては納得した顔でうんうんと、頷いた。

「で、話を戻すが、今から行くのか？」

「うん。何や知らんけど、重要な事らしいで」

重大……悪魔か？

そういや、悪魔の存在を一日で認めてたらしいな。何でだ？普通、信じないよな？

「だが、今日はエリオ達の模擬戦があるんだろ？見たかったんだが……」

「ほほう……。まあ、息子娘思いなのは分かるけど、今日は堪忍し

てーな。また今度あるんやし」

「……仕方が無いか。んじゃ、行ってくる」

「くれぐれも、ウチらが不利になる様な事は言わんといてな。唯でさえ地上と海は仲が悪いねんからな」

「はいはい。……ああ、そうだ」

部屋から出ようとして、俺は立ち止った。
それから後ろにいるフェリスに振り向いた。

「フェリス。お前はここで留守番だ」

「……何？」

フェリスは目を細めて睨んできた。
エンペラード隊が全員行くのに、自分だけ置いて行かれるのはそれはもう不愉快だろう。

「もし悪魔に対抗できる奴がここにいない間に悪魔が襲ってきたら誰が対処する」

「あの女誑しがいるじゃないか」

「レオンが出来るのは少しの足止めだけだ」

「しかし……」

「頼む。お前しかいないんだよ」

フェリスの目を見つめて俺の真剣さを訴える。

こうすれば大抵の奴は仕方が無いと受け持ってくれる筈……。

「団子500個だ」

……………こいつはその大抵に入らなかったか。

「……100」

「480」

「200」

「450」

「250」

「430」

「300」

「それで手を打とう」

……チツ、この団子大好き症候群が。
団子を抱いて溺死しろ。

ああ、ごめん！だから剣を刺すな！ちよっ！？いやああああ！！！！

地上本部。

ここに、頭にどデカイたんこぶが出来た男がやって来た。名をイブキ・ヤマト。エンペラード隊の隊長である。なんと情けない。なんと頼り無い」

「黙れよ。終いには泣くぞ?」

「泣けば良いだろう。私は知らん」

「くそ…俺が何をしたと言うんですか」

フェリスに剣でボコられた後、逃げるようにして地上本部にやって来た俺達。

取り敢えず中に入り、受付へと進む。

中に入った途端、俺達に向けて奇怪な視線を向けられた。

多分、俺達の格好が原因だろう。
真っ黒いロングコートに、深いスリットの入ったチャイナドレス風
に、ヘソ出し谷間出しに、デカイ狐が中に入ってきたらそら目立つ
わ。

「すまない」

「は、はい！」

受付嬢に声を掛けたら恐がられた。

……やはりそんなに恐いのか？

少しへこんだが、気を落とさずに要件を伝える。

「機動六課所属のエンペラード隊だ。レジアス中將に呼ばれたんだ
が……」

「えっ？あ、はい！少々お待ち下さい！」

受付嬢は慌てて確認しだした。

その間、とても視線が集中して来た。

気まずい…気まずいぞ。何だこの状況は。まるで女子高に一人男子を放り込まれた様だ。

「ねえ、あの人カッコよくない？」

「ええ。それに周りにいる女の人達も綺麗…」

「あの狐って使い魔かしら？」

くっ…なんかヒソヒソと言われている。くそ、言いたい事があるのなら正面切って言え！（内容が聞こえていない）

「おい見ろよあそこ」

「おお！メチャクチャ美人じゃん！」

「って言うか何だよあの男。邪魔だよ」

「うっし！ぜってー声掛けてやる」

黙れこの野獣共が。貴様らには過ぎた存在だ！手を出そうとするのなら、この俺が許さんぞ！（こっちはバツチリ）

「お、お待たせしました！確かに呼び出ししております！お部屋は○？階になります！」

「ありがとうございます。行くぞ」

「あっ、申し訳ございません！お通しできるのはヤマト様だけになります！」

はっ？何でだ？呼ばれたのはエンペラード隊ではないのか？

「何故だ？」

「ひっ!?!」

少し睨んでしまったのか、受付嬢は怯えてしまった。

「……すまない。それで、理由は？」

「ええええつとつ、急遽隊長お一人で話したいと！」

「……………」

俺は顎に手を当てて考え出した。

何故俺だけと話したいんだ？まさかそつちの気があるとか？……いや、それは無いか。だったら最初から俺だけにした筈だ。ならこいつらには聞いてほしくない内容か？いやそれも最初と同じだ。なら俺と別れさせる？それこそ無い。する理由が無い。なら何で……。

「あ、あの……」

「……仕方が無い。お前等、そのエントランスで待っている」

「分かった」

「はい」

「ああ……」

「狐が喋った!？」

俺は三人を残し、エレベーターに乗った。

コンコン。

『入りたまえ』

「失礼します」

中に入ると、椅子に座った体格がデカイおっさんと、その横に眼鏡をかけた女性が立っていた。

「お初にかかります。機動六課所属、エンペラード隊長、イブキ・ヤマトであります」

「うむ。首都防衛隊代表レジアス・ゲイズ中将だ」

「オーリス・ゲイス三佐です。以後お見知りおきを」

簡単な挨拶を済ませ、さっさと本題に入る。

「中将。何故俺：いえ私を呼んだのですか？」

「そう固くなるな。私が呼んだ理由は二つある」

レジアスは手を組んで俺を見てきた。

「一つ目は……フェリス殿達は元気かね？」

「……はっ？」

一瞬理解が出来なかった。

何故フェリス達を？そして何故殿付け？え、何？あいつ等何したんだ？

「いや、女であれ程の武人はおらん。意志の強い瞳に物言い、そして彼女達の闘気！同じ武闘派として気が合うのなんの」

「あ、そうですか……」

違うぞ……間違っているぞレジアス！あいつ等は武人じゃない！ただの暴力女だ！義理も何にも無いぞ！

「なら何故あいつ等を通さなかったんだ？」

固くなるなど言われたから敬語は使わない事にした。

「彼女達がいると、中々本題に行けないと急に思ったのだ」

そうかよ……。俺の悩んだ時間を返せこの松ぼっくりが。

「それで本題は？こう見えても忙しいんだが？」

「はっはっは、申し訳ない。先ずはこれを見たまえ」

レジアスは手元のリモコンを操作して、大きいディスプレイを空中に出現させた。それから何枚かの画像を出して来た。

「これは……」

「三日前、郊外の古い廃墟で何かの大きな魔力反応が確認された。それを確認する為に三十人の精鋭を送り込んだが……全員殺された」

映し出された画像はその人達の血だらけの死体だった。

腕が無かったり、脚が無かったり、首が無かったり、様々な死体が転がっていた。

「何者の仕業かは未だ不明。ただ一つ、死体に共通点があった」

そう言うと画像が切り替わり、何かのデータが現れた。

「全員のリンカーコアが無いのだ」

リンカーコア。確かこの世界での魔力の源だったか。

「当初、これは過去にあった『闇の書事件』と何らかの関係がある

と思われたが、手口が明らかに違う。まるで…」

「まるで殺し方が悪魔のようだ、か？」

「ああ。これまではこの様な惨い殺し方はしなかった。それに今はあの八神はやてが所有者だ。彼女ならこんな事はしないだろう」

そう言えば、はやてがそんな事言っていたな。確か今は『夜天の書』だとか。

……にしても、陸と海は仲が悪いんじゃないか？それにレジアスとはやては特に仲が悪いと聞いたが…。

「なあ、はやてとは仲が悪いんじゃないか？」

「ん？まあ、確かに意見の対立はしているが、彼女自身が嫌いと言う訳ではない。過去の事はもうどうでも良いのだよ。見るのは前だけが良い」

俺ははやての過去に何があったのかは詳しくは知らないが、レジアスはその事を気にしていない、と言う事か。……訳分からんな。な

らはやては何で仲が悪いとか言ってるんだ？

「多分、そう思われているのは、中將と八神はやての口論が激し過ぎるからではないでしょうか」

オーリスがそう推測する。

あゝ、そうだ。確かこのおっさんは、質量兵器を取り入れるべきだとか何んとか言ってる、はやて達海はそれは駄目だとか言ってるんだつたな。

つまりアレだ。はやての思い込みか。

何だよ、変に気を張っただろうが。後でお仕置きだコラ。

「あゝ、で、この事件を俺達が調べれば良いんだな？」

「ああ、そうだ。何か必要な物があれば此方から用意させるが……」

「随分気前が良いな」

「君達には期待しているからな」

「そうかい。分かりました。この任、承り賜ります」

「宜しく頼む。データは六課に送っておく」

「了解」

敬礼をしてから部屋を出た。

しかし、この事件がもし悪魔の仕業なら、それ程活発に動き出しているって事が。リンカーコアを採取して、魔力を上げていつているのか。

……待て。ただの悪魔にそんな知恵があるのか？俺が見てきた悪魔はヘル以外ただ殺しを求めていただけだし……。まさか、上級悪魔が指示を出している？いやだがまだ一回目だ。偶々って事もある。

「これは何かメンドそうだぞ」

頭をガリガリと掻きながらエレベータに乗った。

「……これで、良いんだろっな」

『
』

「……分かった」ピッ

「……中将」

「分かっている。……こうするしかないのだ」

エレベーターが停まり、扉が開いて降りたら、ある光景が目にとまった。

「ねねっ！お茶でも行こうよー！」

「俺達、いい店知ってたんだ」

「絶対楽しいからさ」

「「「……………」」」

ハク、C・C、人間の姿になっていた空幻が男共に囲まれていた。

三人、いや二人は心底鬱陶しそうにして、ハクだけはとても困った顔になっていた。

さて、俺はどのような行動を取ればいい？

- 1 ・男共を潰す
- 2 ・男共を消す
- 3 ・男共を抹殺する
- 4 ・ここはベタに待ち合わせの設定で行く

……………何故三つも結果が同じなんだ！しかも最後何！？ベタ過ぎなんだよ！

「良いじゃん。行くよ、ねっ?」

「きゃっ!..と、触らないで下さいっ!」

プチッ…

「おい」

「あ? くバキッ! >ぐえっ!?!?」

「なっ、なんだっ!?!?」

「い、イブキさんっ!」

「すまない。待たせてしまったようだな」

ハクとC・Cと空幻を俺の後ろに連れて、男共から離れた。

「だ、大丈夫です！」

「もう少し遅かっても良かったんだがな。後少して下衆を殺る所だったのに」

「待ちくたびれたぞ！何時まで待たす気だ！」

ハクは安心したように笑顔になり、C・Cは拳に魔力を纏わせて残念そうにし、空幻は俺の腕に抱き付いて来た。

「な、なんだよてめえ！」

「横取りすんなやつ！」

外野共がわーわーと騒ぎ始めた。まったく、身分を弁えて欲しいものだ。

「だまれクズども」

「「「ツ!?!?」「」「」

「こいつらはおれのおんなたちだ」

殺気、怒気を言葉に乗せて放つ。しかし笑顔は忘れずに。そうしたら必ず心の奥深くまで恐怖を刻む事が出来る。

「にととてをだすな」

「「「「はっはい!?!?!?!」「」「」

泣きながら敬礼をし、俺が殴り飛ばした男を引き摺りながら走り去っていった。

「ふん。腰ぬけ共が」

世界を守る者がこんなんでどうする。レジアスを見習え。あの肉体は伊達じゃない筈だ。

「……………なあ、イブキ」

「ん？なんだ？」

C・C・Cが恐る恐ると言った感じで話かけてきた。

何だ？何時も気が強いC・C・Cがこんなにも弱弱しく感じるぞ。

「俺の女達って……………あれはその……………」

「……………ああ！あれか」

「そ、そつだ！あれだ！あれは……………」

「俺の部下に手を出すなって事だ」

「「「……………はあ〜……………」」」

……………何で溜息？違ったか？あれ？

「分かってます…。イブキさんはそう言う人だって…」

「期待した私が馬鹿だった…」

「いや、期待させるコイツも悪い……………」

「お、おい…。どうした？」

「「「何でも無い)です」」」

「そ、そうか…」

ぴゅーぴゅー…！ぴゅーぴゅー…！

「ッ！」

三人の態度に戸惑っていると、突然通信が入った。しかもこのアラームは緊急事態と言つ事…。

俺はすぐに通信に出た。相手はシャーリーだった。

「どづした！」

『ヤマト隊長！スラスト副隊長が！』

「ッ！？」

シャーリーの知らせはこうだった。

スターズの模擬戦で、ティアナとスバルがなのはの指示を無視して無茶な戦法で攻めた事に対し、なのはは激怒。

それでなのはは特に言う事を聞かないティアナに砲撃を当ててボロボロにし、更にもう一撃を放とうとした時に、別の場所で見っていたレオンが間に入りティアナを庇った。

それからなのはと争っている時に、黒いマントとフードを被った男が進入。その男の攻撃からなのはを庇ったレオンは魔力砲をもろに喰らい、身体に大きな穴を開け一時気を失った。

だがレオンはゆっくりと立ち上がり、左腕から膨大な青い魔力を噴き出し始め、悪魔の腕に変化した。

それからレオンは男を辛うじて退けた。が、その場で暴走し、フェリスによって抑えられ今は医務室で眠っている。と言う事だった。

何の冗談かと思っただが、左腕と言う言葉に引っかけた。確かホテルの時に左腕がどうって…。

くそっ！何であの時もっと調べなかったんだ！あの時に悪魔が取り付いたのか！？

六課にすぐに飛んで帰り、レオンが眠っている医務室へと向かった。

「レオン！ぶじばっ！…！」

「あ……」

扉を開いた瞬間、掌のような物が俺の顔面に叩き込まれた。

そのまま後へと飛んで行き、壁にめり込んだ。

「あちゃ〜、タイミング悪いぜ親友」

そうか…レオンが犯人か。ふっふっふ……。

「殺して あ」

視えた。レオンの左腕が。

レオンはベッドから身体を起こして、左腕をヒラヒラと振っていた。

その左腕は紅く硬そうな皮膚で覆われ、手の甲から肘にかけてひび割れ、中からは青く光る別の皮膚が見えた。

爪は鋭く伸び、指から掌、爪は全て青く輝いていた。

……何でデビルブリンガーなんだよ。

「言うておくが、お前が知っている物とは少しだけ違つぞ」

レオンの隣に立っていたフェリスが腕を組んで指摘してきた。

俺達は中に入り、レオンの周りに集まった。

「じゃあ、何なんだよ」

「……魔皇ヴァルネスの話はしたか？」

「全然。この魔皇刀ファオルネスの使用者って事ぐらいだ」

そう言うて刀を取り出した。

伝説の魔具。それが何故か俺の投影で出てきた。偽物でなく本物で。

「そっか……。ならばそこから説明するか。一度しか言わんから良く聞
けよ」

フェリスは静かに語り出した。

魔皇と騎士の物語を……。

皇と騎士の伝説（前書き）

作者「待たせた上に短い…。それにグダグダ…」

イブキ「……どアホが」

作者「でも続きは直ぐに出来そうだから!」

皇と騎士の伝説

嘗て魔界と天界は共存していた。

共に生活し、共に遊び、共に生きた。

それはとても平和で、争いが無い世界だった。

しかし、平和と言うものは必ず崩れるものだ。

ある二人の悪魔が平和な世界に火種をまいた。

一人は天の神を殺し、一人は最強の天使を殺した。

神を殺した悪魔は神の力を手にし魔神となり、天使を殺した悪魔は最強の力を手にし最強の魔剣士となった。

魔剣士は魔神の騎士に、友になった。

二人は天界に戦争を仕掛けた。

同時に魔界にも戦争を仕掛けた。

己が故郷の皇を殺し、魔神は皇となった。

民は皇の力に畏れ、恐怖し、そして見惚れた。

民は皇に従い天界へと攻め立てた。

天界の新たな神は抗戦するも皇の力には一步届かず、徐々に天は滅びていった。

しかし、騎士が皇を裏切った。

騎士は天使に恋をしてしまった。

天使の優しき心に、美しさに、何より暖かさに。

皇は裏切られた悲しみと怒りに我を失い、敵味方問わず殺し尽くし始めた。

その最期は皮肉にも騎士の一撃だった。

皇は最期まで憎しみと悲しみを抱きながら闇へと沈んだ。

しかし皇の力は消えなかった。

力はまた新たな悪魔へと受け継がれていき、世界を滅ぼそうとする。

騎士は自らの力を世界に封印し、選ばれし者に力を託す事で世界を救う事にした。

魔皇の名はヴァルネス。

騎士の名はオルファ。

二つの力が現れる時。それは世界の危機なのだ。

「これが魔皇とその騎士の伝説だ。この腕は騎士の腕だ」

フェリスは語りを止め、レオンの腕を一瞥した。

「この腕……力がその騎士の……力？」

レオンは腕に目を落とした。

「……って事は、俺って選ばれし者か!？」

「そうだが……何故そんなに嬉しそうなのだ」

フェリスが言った通り、レオンは目を輝かせて子供のように笑顔になっっていた。

「だって選ばれし者だぜ!？ しかも英雄のだぜ!？ これが嬉し
がらなくてどうする!?!」

腕を上に掲げて喜ぶレオンに、俺は心配して駆け付けた事に後悔してしまった。

「まったく…。もうこれからレオンを心配するのは止めよう。時間の無駄だ」

「そうです。無駄なんです」

「酷いなおいつ！！親友だろうが！そしてハク！何時になったらデレに「入りません」むう…」

まあまあ、そう落ち込むな。ハクは俺の所で立派に育ってるよ。

「しかしこれでちょっと厄介な事になったな」

C・Cが腕を組んで思い口調で言った。

「そうだな。オルファの腕がここにある以上、何所かにヴァルネスの力が存在する筈」

「世界の危機だな……」

空幻、フェリスも表情は暗かった。

「……なあ、ヴァルネスって魔皇はこの魔皇刀の所有者なんだろう？
だったらこれを出せた俺が魔皇じゃないのか？」

「確かに、魔皇刀は魔皇の証だが……。いやそれは無い」

フェリスはそう断言した。

「何故？」

「魔皇の力は悪魔にしか受け継がれない。それも強力な悪魔にしか。しかしお前は神が連れてきたただの人間だ。そんな存在がこの力を

持てる筈が無い。不可能な事だ」

「ならこの刀はどう説明する」

「……恐らく本物に近い何かだろう。…いや、何とも言えない」

フェリスは顔をしかめて、言葉を濁した。

本物に近い何か？それこそあり得ない。だってこの刀に帯びている魔力は膨大過ぎる。それにこれは投影で出来ていない。投影だったら消せる筈なのに、どうやっても消せないんだから。

「……もし、仮に俺が魔王だったら、どうする？」

「だからあり得ないと言っただろう。人間には縁が無い事だ」

「だからもしもの」

「無いと言ってるだろ！……！」

「ッ！」

フェリスは顔をうつつ向けたまま叫んだ。

「お前は魔王にはなれない！そう言っているだろ！」

「ふえ、フェリスさん！落ち着いて下さい！」

ハクが今にも飛びかかってきそうなフェリスを宥めようと後ろから肩に手を乗せる。

「お前は悪魔を殺していれば良いんだ！この世界にいる悪魔全てを！」

「ッ……」

フェリスの怒鳴り声にハクは顔をほんの少しだけ歪ませ、フェリスからそっと離れた。

「……………」

「はぁ…はぁ…」

「…………フェ「私は部屋に戻る」お、おい…」

フェリスは無視して医務室から出て行ってしまった。

フェリス…。何であんなに怒るんだ…。

「…………フェリスの過去は聞いただろう」

C・Cが俺に確認してきた。

「なら分かるだろう。アイツは悪魔と言う存在を憎んでいる」

「っ……」

「だから、あり得ない事でも、お前が魔皇だなんて可能性は考えたくないんだろう」

「……」

フェリス……。お前は俺が悪魔だったら、お前は俺を斬るのか？

「……あの〜」

「どうした、レオン」

レオンが苦笑いをしながらおずおずと口を開いた。

「一応俺怪我人なので、目の前で重い雰囲気醸し出さないで下さい。ってか、もう出てけ」

何だと？せつかく駆け付けて……この件、似たようなのやったな。

「そうですかい。ハク、C・C、空幻。俺はレオンと二人だけで話があるから、先に出てる」

「いやお前も……」

「……分かりました」

「ああ、分かった」

「ウム」

「聞けやおい！」

うっさい。少し黙ってな。

三人が部屋を出ていった後、俺は椅子をレオンの横に置いて座った。

「何だよ。見舞いならあ女性限定」

「何を怒ってる」

「ッ!？」

やっぱりな。フェリスが話している時、ずっと恐い顔で腕を見てたからな。

「……………何の事だ？」

「とぼけるな。お前は怒っている時、何時も目元をヒクヒクさせてるんだよ」

「……………マジで?」

「嘘だ」

「お、お前……………!」

はっはっは、まさか本当に引つかかるとはな。
いや、一度やって見たかったんだよな。

「それで？どうしたんだ？」

「……」

「……親友だろ、俺達」

「……そうだな」

レオンはフツと笑ってベッドに寝転んだ。
それからポツポツと話し始めた。

「俺達を襲ってきた男が……兄さんを殺した奴だったんだ」

「……続ける」

「真っ黒のフードを被って、真っ黒のマントを纏って……瞳が真っ赤だった」

「ッ……！」

レオンは徐々に言葉が強くなっていった。
その瞳にも怒りが段々籠ってきた。

「ずっと探していた。兄さんの仇を……俺の左目を奪ったあの野郎を……！」

レオンの左目……ずっと髪で隠していて分からなかったが……。そうか……だから隠していたのか。

「何時かぜってえー見つけ出してこの手で殺すって決めてたのに……。俺は手も足も出なかった！俺が今までやって来た事は何だったんだ……！」

左腕を掲げてグッと握り締める。

軋むような音がする程強く握った。

「俺の中で何かが囁いた。力が欲しいかと……。だから俺は望んだ！
兄さんの仇を討つ力を！……。けど、結局俺は何も出来なくて、その
上皆に迷惑を掛けて！俺は……。何がしたいんだ！」

掲げた左腕でベッドを叩いて、顔を隠した。

目の辺りからは水滴が頬を伝って零れ落ちた。

「……レオン。まだ泣くのは早いぞ」

「……なに？」

「この六課には俺達がいるだろ。一人で戦うな。皆で戦え。そうだ
ろ？」

「駄目だ。俺の問題に……」

「もう既に遅い。もうお前だけの問題じゃなくなってる」

なのはが攻撃された事、六課が襲撃された事を考えれば、もうこれは機動六課、いや管理局の問題になってくる。

「それに、その状態でも敵わなかったんだろ？ だったらどの道、悪魔専門の俺達に色々と教わるしかないだろう」

その腕の扱い方とかな。

「……………どうせ教えられるのはお前とハク以外だろ」

あ、ひでえな。これでもあいつ等の訓練を生き延びて来たんだぞ。少しは尊敬しやがれ。

「…まあ、そうだよな。なのはちゃんが攻撃された時点で大事だよな」

「そつだ」

「……悪い、少し寝かせてくれ。あの時に大分魔力を消費したみたいだ」

「分かった。しっかり休めよ」

そのままレオンは眠りについた。

俺は医務室から出た。

すると、医務室のドアの横で、なのはが壁にもたれていた。その顔は何所かとても暗かった。

「なのは？」

「あ、イブキ君……」

「……レオンか？レオンなら今眠ったぞ」

「……そう」

どうしたんだ？全然元気が無いな…。ああ、そうか…。レオンと喧嘩したんだっとな。

「なのは」

「…何かな？」

「ドアホ」

がすっ

「にゃっ！？」

なのはの頭に強めのチョップを喰らわした。

なのはは可愛らしい声をあげて頭を抑えた。

「な、何を……」

「ごめんなさい。それから庇ってくれてありがとうがとっその言葉は良いんだよ」

「…………でも」

「レオンは許してくれるさ。自分が何をしたのかわかっているんだっつらな。レオンに何か言われたんだろ？」

「……………」

『なのは！やり過ぎだ！』

『伝えたいのならばっきりと言葉にしろ！ティアナはお前じゃないんだ！』

「…うん」

「なに言えるな？」

妹をあやす様に優しく撫でてあげる。
これだけで人は落ち着くのだ。

「ありがとう、イブキ君」

「ティアナにも言っただぞ」

「うん！」

元気に頷いて、なのはは歩いて行った。
その後ろ姿が見えなくなるまで俺はなのはを見つめた。

「……………」

ガァン！！！！

右腕で殴った壁は大きなクレーターを作った。

「…あの男がこの世界に…！」

しかもレオンの兄まで殺したのか…！俺の親友にまで！

『貴様アアアアアア！！！！』

『フハハハ！イイですね、その憎しみに染まった顔は！』

『父さんを…母さんを…兄さんを…姉さんを…桃香までええええええ！！！！』

『私の力を見て尚挑むか…。面白い！では…』

『ツ！？ アアアアアアア！！！？』

『これで生きていられたら私を探しなさい。この無限の世界から私を見つけ出し、殺してみなさい！ウふふふ…フアーハッハッハッハッハ！！！！』

「くくく…！良いだろう…。この俺が必ず見つけ出してやる…。そして殺してやるよ…！」

神よ、感謝するぞ。この俺を選んでくれて…。おかげで俺はこの世界を知れて、力も使える。しかもあの男がいる世界に来れた！あの男が異世界人だったとは…。道理で探してもいない筈だ。

「待っていてくれ皆…。仇は取るから」

先ずは今のこの力を極限まで高める！ならば…。

「悪魔を一匹残らず蹴散らす！」

俺は嬉しかった。

家族の仇を討てると分かった時、心の底から嬉しさだけが沸き上がってきた。

だから多分気付かなかったんだろう。

俺の後ろで、誰かが泣いていたのを…。

なのはの想い レオンの告白（前書き）

作者「ふう…おかしな所がありそうだ」

イブキ「イヤイヤ！？ 何言っちゃってんの！？」

作者「あ、後それと、ヒロインをやっぱ少し変えた」

イブキ「ああもっつ…！ このダメ作者…！」

なのはの想い レオンの告白

なのはに説教をしてから数時間。

外は日が沈み、星が綺麗だった。

だが俺の心はまるで闇に呑まれた様に暗かった。

仇が討てる。

そう思えば思う程、心が暗くなっていく気がする。

何故だ？

考えても理由が分からない。

仇が討てる。それは良い事の筈だ。家族の無念を晴らせるのなら、晴らさなければ。

その為にはもつと力を……全てが平伏す最強の力を……！
だから頼む、ファオルネス魔皇刀。お前が本物なら、俺に力をくれ。お前が伝説の魔具なら、俺に力をくれ。

「……それとも、悪魔にしかくれないのか？」

静かに刀を鞘に納め、次元に収納した。

今俺は隊舎の屋上の柵に腰をかけている。

この六課に来てから、ここに来る機会が多くなった。
見晴らしが良いのもあるし、滅多に人が来ないのがここに来る理由でもある。考え事をする時、俺にはここが一番良いみたいだ。

だが今日は珍しい客が来たようだ。

「そんなところでなに突っ立てるんだ、ティアナ」

「ビクッ!？」

入り口に突っ立っていたティアナは、俺が声をかけた事によって肩を弾ませた。

まあ、前を向いたままなのに後にティアナがいる事なんて普通分からないもんな。

「そんなどこにいないでこっちに来い。眺めが良いぞ」

後ろを向いてティアナに手招きした。

ティアナはおずおずと従い、ゆっくりと隣に立った。

「……危ないですよ、そんな所に腰掛けて」

「大丈夫だ。到…魔力でひっ付いてるから」

「……」

会話終了。

うわー、気まず。何でか知らんが、ティアナから気まずオーラがぶんぶん出てる。何か話題は…。

「あゝ、身体はもう大丈夫なのか？」

「レオンさんが二射目を防いでくれましたから…。少し眠ったら良

くなりました」

「そっか…」

「……」

やっべ。なんか更に気まづくなりやがった。

チッ、俺の会話能力の無さに腹が立つ。

「……レオンさんは」

「ん？」

黙っていたティアナから話しかけられた。

「レオンさんは…大丈夫でしたか？良く覚えていないんですけど、何か腕が光っていたような…。私、途中で気絶してしまって…」

む、直球過ぎたか。

え〜と…。

「レオンの事はど〜」にゃっ、にゃにいいだひゅんでしゅかつ〜！
？／／／／「おうう？」

うわぁお、予想外の反応キターー！。

まさかここまでデレさせているのか、レオンの奴め。

全然その描写が無かったのにな。仕方が無い。この描写は番外編で作者に書いて貰おう。…あれ？何か意識が飛んでたような…。

まあ良いか。兎に角、ティアナはレオンに脈ありと。

「い、いきなり何を言い出すんですか！？／／／／」

少し冷静さを取り戻したティアナは、改めて尋ねた。

「まあまあ、気にすんな」

面白いくらいに真っ赤になっているティアナを宥め、本題に入る事にした。

「もしさ、レオンがレオンじゃなくなったらどうする？」

「…？ 質問の意味が分かりません」

「どんなレオンでも今と変わりなく接するかって事だ」

例え悪魔になろうとも、復讐に駆られようともな。

ティアナは少し考え、そして口を開いた。

「…どうして、そんな事を聞くのか分かりませんが、私にとってレ

オんさんはレオンさんです。今と変わりません」

そう口にするティアナの目はしっかりとしていた。

恋する乙女ではなく、ティアナ・ランスターとしての目。

「…今以上の関係には？」

「…知りません／＼／＼」

「…そうか」

ならお前はレオンが悪魔になっても大丈夫かな。
…俺の場合はどうだろうな。復讐に駆られた俺に、皆はどんな反応をするんだろうか。

「…うっし…俺はもう戻るわ」

柵から下りて固まった身体を伸ばして解した。

「そうだティアナ」

「はい」

「何が理由でなのはに反抗したのかは知らんが、ちゃんと意見の話し合いからしてから反抗しろ」

「ッ…」

「それからレオンにもお礼を言っておけよ。庇ってくれたんだろ」

「……………はい」

ポンッとティアナの頭に手を置いてその場を立ち去った。

……………今思ったら、これってセクハラか？

俺が食堂で遅めの夕食を取っていたら、突然アラートが鳴りだした。何事が驚いていると、全体放送で海の上でガジェットが出現したと通達された。

ガジェットと言う事で、俺達エンペラード隊はそんなに慌てる事ではないのだが、今回は、いや今回もそんな訳にはいられなかった。

「『エンペラード隊隊長と副隊長を出せ』、か…」

「そや。先程、ガジェットが出現したポイントから通信が来てな。安全を確認してから開いたら…」

「これが入ってたか…」

態々ご指名とは、大層なお客さんだこと。
それとも何だ？この俺が弱そうに見えたからか？

「それで、イブキ隊長とハク副隊長はどうするん？」

はやてが言う通り、エンペラード隊の隊長は俺、副隊長はハクだ。
強さ的にフェリスも副隊長に向いているのだが、俺の補佐をしっかりとしてくれるのがハクだからだ。フェリスだと、「自分でやれ家畜」と言われそうだしな…。って話がそれたな。

「相手呼んでいるのならいつてやるうじゃないか」

「ええの？」

「ああ。ハクはどうだ？」

「畏という可能性もあります。それと…」

そこでハクはいったん言葉を止めた。

「……それと悪魔という可能性も」

「悪魔？」

いや、そんな気配は感じないぞ。悪魔が出現したらまたあんな不愉快な感じがする筈だ。今回はそれが無い。

「エンペラード隊は対悪魔戦部隊ですよ？ それなのにガジェットが、スカリエッティが私達を呼びだしますか？」

「ただ単に興味本意かもしれないぞ？」

「それもあります。けど、悪魔にも理性や知性が存在していたら？」

「……つまり？」

「スカリエッティと手を組んでいる。その可能性も」

馬鹿な。そう言いたかったが、ふと気がつく。

悪魔がガジェットと共に出現したのはこれで二回目だ。偶然、と言ってしまうばそれで終わりなのだが、もしこれが偶然ではなく必然だったら…。

「…俺とハクはこの要求通り出撃しよう」

「ええの？」

「ああ。もし悪魔がいたら、なのは達が危ない」

ロストロギアを搜索する六課の同員が危険にさらされる。悪魔は俺達の魔力でしか殺せないのだから。

「取り敢えず、なのは達と共に出撃して、ガジェットを破壊しながら悪魔を探す。それで良いか？」

「…そやね。そうしてもらおうわ」

「了解」

話し合いが終わり、指令室からハクと共に出了た。

「それにしてもハク、よく悪魔かもしれないって考え付いたな」

歩いてる途中、ハクに先程の事を聞いてみた。

普通、悪魔なんて考えは浮ばない筈だし。

「これでもイブキさんに見込まれた補佐官ですよ？ 考え付いて当然です」

少し胸を張って自慢げに言う。そこがちょっと可愛らしかった。

「…そうだよな」

「はい！」

「ハク。悪魔と遭遇した場合、恐らくあの派遣任務の時とは状況が違うと思う」

人間の言葉で、あまつさえ通信で要求してくる悪魔は、十中八九中級以上の悪魔だろう。

「だから危険だと感じた場合、そく逃げる。俺が守ってやるから」

「嫌です」

「はっ？」

ハッキリとした拒否に、少し呆けてしまった。動かしていた足を止め、ハクに向き直った。

「絶対に嫌です」

更に拒否。しかもハクの目には強固な意志を感じてしまった。これでは駄目だとは言えない。

「私はイブキ隊長の補佐官です。どんな状況だろうと、隊長を補佐するのが私の使命であり、願いです」

「…自分の命が危険に晒されても？」

「愚門です」

…まったく、普段はあわあわしてるのにな…。

「分かった。俺の補佐、頼むな？」

「はい！」

元気よく敬礼し、ニッコリと笑った。

その笑顔に少しドキリとなってしまうたのは気のせいだろうか。

俺とハクが出撃の為ヘリポートに向かうと、そこにはスターズ、ライトニング、エンペラー隊のレオン以外全員が揃っていた。

「遅かったな」

フェリスが相変わらずの無表情で睨んでくる。

「それはすまなかつたな」

まあいつもの事だから軽くあしらい、フォワード達の前に立ってい

るフェイトの隣に立った。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長とヴィータ副隊長。それからイブキ隊長にハク副隊長の五人」

「皆はロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

「……はい！」

「……はい」

なのは、フェイト、ヴィータが今回の概要を伝え、フォワード達は頷いた。

だがティアナだけは俯いたまま元気が無かった。

「おい、何故私が待機なんだ」

フェリスがご機嫌斜めにまた睨んできた。C・Cと空幻もそうだと
言わんばかりに睨んでくる。

「今回は俺とハクが敵さんに呼ばれたからな。今回はここに残って
くれ」

「呼ばれた？ まさか悪魔にか？」

「さあ？ それを確認しにいくな」

そう言うとフェリスは黙りこみ、渋々と引き下がった。

「ああ、それからティアナ」

なのはがティアナを呼んだ。

「ティアナは出動待機から外れとこうか」

「ッ!？」

なのはが言った事は戦闘には参加するなと言つ事。

それを言われたティアナは大きく目を見開いた。

「その方が良いな。そうしとけ」

ヴィータもなのはの提案に賛成する。

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし」

「…言つ事を聞かない奴は、使えないって事ですか」

なのは少しばかり驚き、そして呆れて小さく溜息を吐いた。

「自分で言ってるて分からない？ 当たり前的事だよ、それ」

「現場での命令や指示は聞いてます！」

顔を上げてなのはに向かってティアナは吠えた。

「教導だって、ちゃんとサボらずやっています！ それ以外の努力まで、教えられたとおりじゃないと駄目なんですか？」

訴えるティアナの目には涙が溜まっていた。

余程悔しい思いがあるのだろう。アレは昔の俺そっくりな感じがした。

「私は！ なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャラみたいな稀少^{レアスキル}技能も無い！ 少しくらい無茶したって！死ぬ気でやらきゃ、強くなんなれないじゃないですかっ！？」

その瞬間、シグナムの腕がティアナの胸ぐらを掴み、もう片方の腕で殴ろうとした。

が、その腕は誰かの腕に掴まれた。

「はいはい、そこまでー。可愛い女の子の顔は殴らないものだぞー」

「…貴様、スラスト…」

腕を掴んだのは医務室で寝ている筈のレオンだった。

レオンは左手に赤と黒の手袋をしていて、きっちりと隠していた。

「レオン、もう動いて大丈夫なのか？」

「平気平気！ 美少女が泣いてるのに比べたらこれしきゴフォッ！
ゴフォッ！」

「ば、馬鹿がっ！ やはりまだ無理なんだろうっ！？」

咳き込んだレオンの背中を摩り、楽になれるようにする。

「だ、だいびょうぶだ…」

引き攣った笑みで言っても意味無いぞ。

「と、とにかく、ここは俺とシャーリちゃんに任せて行った行った」

親指を立てて後の扉を指す。そこにはシャーリが立っていた。

「…分かった。頼んだぞ」

「へへっ！ 分かってら！」

「ヴァイス！ 行けるな！」

「おうよ！ 準備万端だぜ！」

「行くぞ」

皆に指示してへりに乗り込んだ。ハクとフェイトはすぐに乗ったが、
なのはだけ中々乗り込もうとしなかった。

「ティアナ！ 思い詰めちゃってるみたいだけど、戻ってきたらゆ
っくり話そう！」

「コラ、もう！ だから付き合ってたのに！」

なのははティアナに呼びかけ、それをヴィータが我儘を言う子供み
たいに引っ張ってへりの中へ引き摺りこんだ。

「つたく、心配すんのなら最初からそう言え、ばかはが。」

俺達を乗せたへりは上昇し、目的地へと飛んで行った。

イブキside out

レオンside

イブキ達が乗ったへりを見送り、残ったのは気まずい静寂だけだった。

「さてと、それじゃシャーリーちゃん。始めようか」

「はい」

「スラスト。貴様何をする気だ？」

おうおう、シグナムちゃんよ。そんな怖い顔したらせつかくの美人が台無しだぜ？いや、そっちの方が良いのかも…ってそうじゃない

や。

「そうカッカすんなくて。なのはちゃんが中々この子たちに教えな
いから、シャーリーちゃんの我慢の限界がきたんだよ」

「何かもう、皆不器用で見えなくなってしまってます…」

シャーリーちゃんは悲しそうに表情を暗くさせた。
すると顔を上げ、キツとした目で皆を見た。

「皆、ちょっとロビーに集まって。私が説明するから。なのはさん
の事と、なのはさんの……教導の意味」

.....

ロビーにはフォワード達と、シグナムちゃん、なのはちゃんの事情
知っているシャマルちゃん、そして俺がいる。
フェリスちゃん達は興味が無いと、ロングアーチにいて別
れた。

シャーリーちゃんが空中に投影したキーボードを叩きながら口を開いた。

「昔ね、一人の女の子がいたの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてする様な女の子じゃなかった」

キーを押して、ロビーに設置してあるモニターに幼い少女の映像が映し出された。

分かる。この子はなのはちゃんの幼い頃の映像だ。

「友達と一緒に学校へ行つて、家族と一緒に幸せに暮らして…。そう言う一生を過ごす筈の子だった」

これに映るなのはちゃんの表情はとても明るく、普通に可愛い女の子だった。

「だけど、事件が起こったの」

場面が変わり、一匹のフェレットが映し出された。

「魔法学校に通っていた訳でもなければ、特別なスキルがあった訳でもない」

なのはちゃんがレイジングハートを手にし、怪物と戦っている姿が映し出される。

「偶然の出会いで魔法を得て、偶々魔力が大きかったってだけのたった九歳の女の子が、魔法と出会ってから僅か数ヶ月で、命がけの実戦を繰り返したの」

なのはちゃんと金髪の女の子が空で激闘を繰り広げた。

……この女の子は…。

「これ…！」

「フェイトさん…！？」

エリオとキャラロが息を呑む。

そうだ、この女の子はフェイトちゃんだ。

……そうか、何年も前のジュエルシード事件…
プレシア・テストロツサ P・T事件か。

驚くフォワード達を見兼ねて、シャマルちゃんとシグナムちゃんが説明をし始めた。

「フェイトちゃんは当時、家族環境が複雑だね。あるロストロギアを巡って敵同士だったんだって」

「この事件の中心人物は、テストロツサの母。その名を取って、P・T事件。或いはジュエルシード事件と言われている」

場面はなのはちゃんが巨大な収束砲を放つ所だった。

「収束砲！？　こんな大きな！」

「九歳の…女の子が…？」

「唯でさえ、大威力砲撃は身体に酷い負担がかかるのに…」

エリオ、スバルちゃん、キャロちゃんが信じられないと言う表情をして映像を見る。

「その後もな、さ程時も置かず、戦いは続いた」

今度はヴィータちゃんがなのはちゃんに攻撃している映像が流れた。

「私達が深く関わった、闇の書事件…」

「襲撃戦での撃墜未遂と、敗北」

なのはちゃんの防御を抜けてヴィータちゃんの攻撃が直撃。

フォワード達は息を呑んだ。

「それを打ち勝つために選んだのは…当時はまだ安全性が危うかった、カートリッジシステムの使用」

カートリッジシステム…。そんな物を、こんな小さな女の子が…。

「身体への負担を無視して、自身の限界値を超えた出力を、無理やり引き出すフルドライブ、エクセリオンモード」

リンちゃんに似た女性に突っ込む。その威力は映像からでも分かる程の威力だった。

「誰かを救うため…自分の想いを通す為の無茶を、なのはは続けた」

「…そんな事して、なのはちゃんの身体は大丈夫だったのか？」

シグナムちゃんに聞くと、ゆっくりと首を横に振った。

「事故が起きたのは、入局二年目の冬…」

シヤマルちゃんが泣きそうな表情で口を開いた。

「異世界での捜査任務の帰り。ヴィータちゃんや部隊の仲間達と一緒に出かけた場所。不意に現れた未確認体。いつもの名のはちゃんなら、きつと何の問題も無く味方を守って、墜せる筈だった相手。ただど溜まっていた疲労、続けてきた無茶がなのはちゃんの動きを、ほんの少しだけ鈍らせちゃった」

シヤマルちゃんがキーを押して映像を切り替えた。

「その結果が、これ」

「「「ツッ!?!」」」

「……」

それはベッドに横たわり、医療器具身体中に取り付けたなのはちゃんの姿だった。

「無茶して迷惑かけてごめんなさいって、私達の前では笑ってたけど……」

なのはちゃんが痛々しい表情と声を上げて歩こうとするがすぐに倒れた。

「もう飛べなくなるだろっとか、立って歩くことさえ出来ないかもって聞かされて、どんな思いだったか」

なのはちゃん……。君も……。

苦しんで歩こうとしているのはちゃんの姿に、一瞬だけ昔の俺と被った。

俺も兄さんと一緒に撃墜された後、歩く事が出来ないとかもしれないと言われた事がある…。

「無茶をしても、命を懸けても譲れぬ戦いの場は確かにある」

シグナムがティアナに向かって言う。

「だがお前がミスショットしたあの場面は、自分の仲間の安全や、命を懸けてでもどうしても撃たねばならない状況だったか？」

「ッー！」

「訓練中のあの技は一体誰の為の…何の為の技だ？」

その言葉に、ティアナちゃん達は黙り込んでしまった。

「なのはさん、皆にさ、自分と同じ思いさせたくないんだよ」

確かにそうだ。あんな思いは誰にでも、益してや子供達になどさせてはいけないんだ。あんな苦しい思いは。

「だから無茶なんてしなくても良いように、絶対絶対皆が元気に帰って来られるように…。ホントに丁寧に一生懸命考えて、教えてくれてるんだよ」

ティアナちゃんを横目で見た。ティアナちゃんはもう顔を完全に伏せて、肩を震わせていた。

「……ティアナちゃん、今からでも遅くない。帰ってきたらちゃんと話し合いな」

「でもっ…なんて言えばっ…!」

「そんなのは簡単だ。なのはさん、ごめんさない。そしてありがとう。素直に言えば良いんだよ」

「そんな事…！」

「あゝもう！ だったら俺が見本を見せてやる！」

俺は皆が言えるように立ち、左手の手袋に手を掛けた。

「良いか皆！ 俺はここで隠さずに素直に言う！ 俺の腕は悪魔になつた！」

手袋を取り、青く光る手を曝け出した。

皆がそれを見た瞬間、大きく目を開いて手を凝視してきた。

「俺は素直な男だ！ 女に隠し事はしない！ 故に隠せと言われたこの腕も隠さない！ そして言うおう！ 俺は悪魔になっても皆が大好きだ！」

言いきった。言いきってやった。フェリスちゃん達に隠しておけと言われたが知るか！ 俺は俺だ！ 俺は俺の決めた道を進む！

「ティアナ！ これはどうだ！ 俺は言ったぞ！ 勇気をほんの少し出せば、こんな事だって言える！ ならティアナにも出来るんだ！ 分かったな！？」

ピシッと指を指して言う。

そうだ。言えるんだ。勇気が無くてナンパなんて出来る訳がねえんだよ！ そつれと同じで勇気を出せば簡単に謝れるんだ！ 勇気が出なくても誰かにもらえば良い！ それがティアナちゃんにも出来るんだ！

「レオンさん…」

「それにイブキだって記憶がないって俺に言ってくれたんだ！ きつと勇気があったんだよ！ つまり誰にでもきんだよ！ あっはっは！」

「「「……………え？」「」」

「…………え？」

あれ？ 俺なんか今大変な事を言ったような…。

「あ、あははは…。そう言う事だティアナちゃん。勇気をだすんだ。俺が言いたいのはそれだけ。アデュー！」

その場をそそくさと立ち去って行くが、そうは問屋がおとさなかつた。

「まあ待てスラスト。まだ時間はあるのだろうか？」

「い、いや俺はもう医務室に…」

「だったら聞かせてくれないか？ その腕とイブキの事を」

「人の話を聞きなさいって母におそわらなかって止めて！ レヴァンティンを大事な所に押し付けけないで！」

「さあ、ゆっくりと聞かせてもらおうか……」

ああ、女神よ……。貴女は私に試練をお与えになるのですね……。だったら甘んじて受けましょう……。けどこのレヴァンティンを退けて下さあーい！！

その後、シグナムちゃんにきっちりかつちりと話せさせられた。

腕の事は何故か皆すぐに受け入れてくれた。

これがこの六課の良い所なんだろうな。まあ、まだはやてちゃんとかには話してないけどな。

多分受け入れてくれるよな。

力の片鱗（前書き）

作者「やって来ました敵のボス。これでイブキの力が…!？」

イブキ「読者の皆、作者の文才じゃあ、面白くない戦闘かもしれな
いが、まあ期待せずに読んでくれ」

力の片鱗

レオンに場を任せ、ヘリが飛んで数分。

俺は究極の問題に悩まされていた。

それは……。

「そう！　そうです！　もっと魔力上げて！」

「バランスも上手く取れてるよ。もう一息！」

「中々才能あるんじゃないかな」

「飛べねーのに何でくんだよ……」

「う……うるさい……もうすこしで……！」

そう、俺は飛べなかった。飛べなかったんだ。

今回は完全な空戦なのに俺は肝心の飛行魔法を訓練していなかった。それに気付いた俺は、ハクとフェイトとなのはにへりの中で急遽覚える事になった。

ヴィータにも頼んだが、速攻で断られた。まったく、これだから子供は。

「しかし、管理局で噂になりつつあるお方が、まさか飛べないとはね」

「噂？ どわっ!？」

ヴァイスの言葉に意識が行ってしまい、バランスが崩れて浮んでいた身体が落ちた。

「ヴァイス君、それってどんな噂？」

「あの“白騎士”のレオンを負かした“魔王”って噂ですぜ」

「ぶっ!?!」

白騎士!? 魔王!? 何だそりゃ!?

「白騎士って何だよ?」

「最近付けられたレオンの二つ名だ。ほれ、レオンのB・Jって白いだろ? それに陸での振舞い方から騎士みたいだったから白騎士」

無い無い、それは絶対に無い。あり得ない。

「二つ名ねえ…。レオンってそんなに有名なのか?」

「それも最近だよ。なんでも、二年前から今までの功績が公にされて、それがまた大した功績で、今じゃもう陸ではスターだな」

陸か…。そう言えばレオンとハクが以前いた所は地上本部って言うてたな。

と言っか、何故功績が今まで隠されてたんだ？

それをヴァイスに聞いた所、意外な答えが返ってきた。

「分からん」

「何？」

「理由が分かんねえんだ。今になってレオンの功績と戦闘映像が全
て出されたんだ。多分、レオン自身もそろそろ有名になってるって
気付く頃じゃないか？」

何だそれは。それではまるで何か裏があるようじゃないか。それも
犯罪の類が。

「ねえヴァイス。魔王って？」

フェイトが聞いた。

話からすると俺がその魔王って事になるんだが…。

「レオンと戦ってる時の映像が流されたんですが、その時のイブキの顔が悪魔みたいで、着ているコートも不気味だからそう呼ばれている様ですぜ」

「何所が不気味だ！ カッコイイじゃないか！ それに悪魔の様な顔って！ 俺はそんなに悪人ズラじゃない！」

「一体誰だ！？ こんな侮辱、生まれてこの過多二度しか受けた事ないわ！」

「あははは…。私はカッコ良かったと思うけどな」

「むっ…。イブキさんは何時もカッコいいですよ！」

「っ…。そんなのは分かってるよ。私が言ってるのは戦ってる姿はもっとカッコイイって事だよ」

「そんなの当然です！」

「おおっ！ コツを掴んだら簡単に飛べた！」

「やったね！ これでもう戦えるよ！」

「ああ！ ありがとうなのは！」

「……………」

…ん？ 何でハクとフェイトはこっちを見て固まってるんだ？ …は
っはーん、俺がもう飛べるようになった事に驚いてんだな。まった
く、これ位当然さ。

「どっよ？ 俺の覚える速さ」

「この女誑し！」

「ええー！？ 何でそんなんだよっ！？」

「うっさいぞ！ この変態が！」

「お前もなんだよ!? 何でそんなに嫌われなきゃいけない訳!?!」

俺が一体何をしたと言っただああああああ!!

「よし! 見えましたぜ!」

俺達を乗せたヘリが目的地にたどり着いた。

「分かった。俺とハクは悪魔の搜索を中心にガジェットを破壊し、フエイト、ヴィータ、なのははガジェットに集中しつつ、不審な魔力反応が無いか警戒してくれ」

「了解」

「分かった」

「では始めよう。ヴァイス、開けてくれ」

「あいよ！」

ヴァイスがハッチを開けると、ガジェットが飛行している姿が見えた。

「行くぞフェイト！」

「うん！」

ヴィータとフェイトがへりから飛び降り、空中でB・Jを身に纏い空を飛んだ。

「……ハクもあんな事するのか？」

「……やってみます？」

「いや、俺デバイス無いから…。まあいいや。行こうかハク！」

「はい！」

俺達もへりから飛び降りた。

ハクも空中でジャケットを展開し、俺は覚えてたの飛行魔法で空を飛んだ。

……ジャケットに切り替わる時、ハクの裸が見えた様な気がしたが、それは気の迷いだな、うん。

「どづしたんですか？」

「何でも無いさ。…行動を開始しよう」

「はい」

投影した二丁拳銃を両手に、ガジェットの群れに向かった。

戦闘を開始して数十分。

なのはの援護射撃が開始されて、ガジェットの数も減ってきたが、未だに悪魔の気配は感じられなかった。

となると…悪魔とガジェットが同時に出現したのはただの偶然か…
。なら俺達も本格的にガジェットを潰すか。

『ハク』

『はい』

念話でハクと連絡を取った。ハクは光の矢でガジェットを数体潰していた。

『どうやら悪魔ではなかった様だ。これからはガジェットに集中す

るぞ』

『分かり　　ッ!?!?』

念話の向こうでハクの息を呑む声が聞こえた。

『どうし　　これは!?!?』

突然、邪悪で強大な気配がこの宙域を支配した。

これは今までの悪魔とは桁違いの大きさだ。気を抜いたら一瞬で殺されかねない。そんな気配だった。

俺とハクはゆっくりと近付き、背中合わせにして警戒した。

「くそ…何所からだ」

「視える範囲にはいません…」

ならつまり遙か彼方の場所から？ そんな事があり得るのか…？

「とにかくフエイト達に あ」

来る。

そう感じた瞬間、俺はハクを引つ張り止まっていた場所から退いた。

その一秒後、二本の青い閃光がその場所を通過した。

「えっ？」

「…そこか」

空を見上げた。

そして目に入ったのは、黒いアンダーに黒いズボン、青いコートを着た”人の形をした何か”が空中に止まっていた。その背中には身の丈程ある青い大剣が背負われていた。

「ほう、今のを避けるか。いや流石だ」

顔に目と口が出ている鬼の様な面を付けているが、人間であれば声と身体からして男の様だ。

「何者だ」

「貴様らを呼んだ“悪魔”さ」

悪魔と口にした瞬間、俺の銃が火を噴いた。

飛び出た幾つもの弾丸は悪魔に飛んで行き、そして当たる前に消えた。

「まったくせつかちな奴だ。…いや、余裕が無かったのか？」

「ッ…」

今度は皇の次元武を悪魔の360度に展開し、宝具を射出した。

ディメンション・オブ・エンペラー

が、今度は宝具は消えず、悪魔が消えていた。

「やはりな。俺の存在に気圧されたか。まだまだヒヨっ子だな」

まるで人間の様に喋る悪魔は、俺とハクの真後ろで腕を組んでいた。

ハクの腕を引っ張り、悪魔から距離をすかさず取った。

不味い…。今の俺ではコイツに勝てそうにない。コイツは今完全に手加減をしている。本気だったら今ので十回は死んでる。

「……………その女。名は？」

「え…？」

悪魔がハクを見つめて尋ねてきた。

「名はなんという？」

「……………ハク」

ハクは警戒しながらも答えた。

「ハク、か……。では死ね」

悪魔から一つの青い閃光がハクに向かって飛んできた。

しかしその閃光は破裂し、赤い閃光と共に消えた。

「……………何をした」

「それはこっちのセリフだ。ハクに何をする」

何故なら俺がギアスで閃光を破壊したからだ。視界に入ってさえいれば、力の弱い物なら一瞬で破壊できる。

「……ギアスカ」

「なっ ！？ 貴様！ 何故知っている！？」

「さあな。自分で調べな」

フッ…

「ッ！」

俺はハクの後ろに周り、魔力で固めた右腕を突き出した。

すると視界から消えた悪魔が現れ、青い魔力を纏った爪がぶつかった。

「クツ！ 何故ハクを狙う！」

「貴様に教える義理はない」

「そうかよ。だったらもう聞かん。貴様を殺す！！」

右脚で蹴り上げたが、悪魔は飛び退く事で避け、離れた所で止まった。

「ハク！」

「はい！」

ハクが光の矢を放った。

悪魔は矢の射線軸から退いた。

「散れ！五つの矢！」
ブリューナク

が、ハクが唱えた瞬間、一本の矢が五つのの矢に分かれ、悪魔を追跡し始めた。

悪魔は矢を避けようとしたが…。

「天の鎖！！！」

ジャララララッ！！

「むっ…！！」

鎖を召喚し、悪魔の手足を縛り動きを封じる。

その隙に五つの矢は悪魔に命中し、爆発を起こした。

「レオンさんには劣りますけど…！」

「えげつない事するな。だがこれで……チッ」

「この程度の力が。折角わざと喰らってやったと言っのに……」

煙が晴れ、現れたのは全くの無傷の悪魔だった。

ハクの攻撃は決して弱くはない。それこそレオンのブリューナクに近い程の攻撃だ。それを喰らっても健在だとは…。

「だが収穫はあった。この矢に込められた魔力……そうか、これで合点がいった」

「ッ!? 何の事…ですか？」

「ハク？」

ハクの構える弓矢が僅かに震えだした。

「そっかそっか。そっ言っ事なら仕方が無い。こっは殺さないでお
っ」

「くっ……何を言っている!」

「殺す対象を変更すると言っているんだよ」

チュイン!!

悪魔が右手を上げると、俺達の真上に何十もの青い魔力の塊の剣が
出現した。

これは…!

「降り注げ、幻影剣」

悪魔が右腕を振り払った瞬間、その剣が一斉に豪雨の如く降り注い
できた。

「クソがつ!!」

次元武の展開では間に合わない。なら手段は一つ。

ハクを抱き寄せ腕の中に入れ、振ってくる剣の雨を全て視界に納めた。

「……消えろ!!!!」

ギアスを発動し、視界に入った剣を全て消滅させた。

だが剣の魔力が最初よりも強く、更に数も多く、消滅させるのに半分以上の体力を使ってしまった。

「ハア…ハア…!」

「大丈夫ですかイブキさん!!」

「平気だ！ それより悪魔は！？」

悪魔がいた場所を見ると、既に居なくなっていた。

去ったのか。

そう思ったが、それは最悪の状況で裏切られた。

ガジェットの群れの上空に、先程よりも圧倒的に多い数の青い剣が出現していた。

ガジェットにはフェイト達が当たっている。ならあのガジェットの群れの中にはフェイト達が…。

ふざけるな……！！

「させるかあああああああああああ……!!!!!!」

その時俺の頭に何かが流れ込んできた。俺はそれを受け止めた。

イブキ s i d e o u t

ハク s i d e

イブキさんが叫んだ時、イブキさんの目の前に次元武の魔方陣が展開された。

その瞬間……。

「……え……きえ……た？」

魔方陣と共に姿を消した。

どこに？

その答えはすぐに分かる事となった。

ガジェットの群れの上空が真っ赤に染まり、青い剣が消滅したからだ。

「……………まさか！！」

私はすぐさまその場所に向かった。

私が辿りついた時、ガジェットの姿はなく、フェイトさん達を息を

乱したイブキさんが覆い被さってる姿だった。

「イブキさん!!」

すぐに駆け寄り、イブキさんの容態を確認した。

「ハア　ハア　ア　」

大変！　酸欠に！　それに体力も無い！

私は体力回復効果のある矢を数本具現化し、イブキさんに刺した。
するとイブキさんは次第に顔色を良くして呼吸も元に戻ってきた。

「一体何があったんですか!？」

傍にいた三人に尋ねた。

「わ、わかんねーよ！いきなりコイツが現れたと思ったら、気付きゃここにいたんだよ！」

「私も気付いたらここに…」

「私もだよ…」

三人にも何が起こったのかは分からないようだった。

「ぐっ…！」

「ッ！ イブキさん！」

イブキさんが苦しみ出し、左目を押さえた。

「フン、力の使い過ぎだ」

「「「ツ!?!」」」

上からあの悪魔の声がした。

私達は即座に武器を構えて悪魔に向けた。

悪魔はそれでも指一つ動かさず、イブキさんを見下ろしていた。

「この俺が態々、枷を外してやるうとしてやったのに…。それ程まで守りたいか」

「枷? 一体何ってやがる!?!」

「黙れ。人間と話す口は持ち合わせていない。…いや、貴様も人間ではないか」

「何ツ!?!」

「止せヴィータ!?!」

イブキさんが悪魔に飛びかかりそうなのを止めた。

「守って悪いかよ。俺はもう誰も失いたくないんだよ…！」

「だからと言って柵を守ってどうする。柵は壊すものだ」

「こいつらは柵なんかじゃねえ！俺の家族だッ！！」

「『ッ！？』『』『』」

イブキさん…。私達の事を…。

「家族だと？…益々気に入らないな。人間と共にいる事だけでさえ虫唾が走るんだよ…！」

悪魔が突然怒り叫び、青い剣を出現させ飛ばしてきた。

「俺に掴まれ！」

その声に咄嗟に私達は従い、イブキさんの身体を掴んだ。

そして気付いた時には悪魔の後ろに距離を取って飛んでいた。

「なっ！？ 転移か！？」

「そんな！ イブキ、何時の間にこんな事！」

「凄い……」

転移？ イブキさんが？ そんな高度な魔法は習得していない筈…。
どうやって？

「お前達はここで強固なバリアーでも張っている」

「イブキはどつするの?」

「あの悪魔を退ける」

「一人でなんて無茶だよ！ 私も援護射撃するよ!」

「私も！ 速さなら自身がある!」

「アイツには腹が立ってんだ！ ギタギタにしねえと気が済まねえ
!」

「駄目だ!」

「「「ツ!」」」

イブキさんが三人を今まで見た事の無い、恐い顔で一喝した。

「貴様らでは手も足もでん！ 黙って言う事を聞いている!」

「な、何だとっ!? てめえ、調子に乗りやがって!」

「黙って従え!! このガキがつ!!」

「ッ!?!」

おかしい…。イブキさんはこんなに乱暴な口調じゃなかった。戦闘になると少し性格が変わって口調がほんの少し変わるけど、ここまで変わることなんて無かった。…それ程切羽詰まってるという事?

「……皆さん、イブキ隊長の指示に従いましょう」

「ハク!! 何でこんな奴の…」

「悪魔はエンペラード隊にしか相手に出来ません。それにあの悪魔は今までの悪魔より桁違いに強い。イブキ隊長でも勝てないかもしれない」

「なら尚更私達が援護しなくちゃ!」

「イブキ隊長は今余裕がありません。なのに私達が出ればイブキ隊長に余計な負担を与える事になってしまいます」

「それは……」

イブキさんについて行けない私達が出てても殺されるのがオチだ。

ならここで守りに徹する方が、生き残れる可能性が高い。

「…チツ、分かったよ」

「うん……」

「そつだね……」

「ではこの場で出来るだけ魔力を込めて、バリアーを張りましょう。恐らく、あの悪魔に背を向けた瞬間、殺されるかもしれません」

いくらイブキさんがいるからと言って、背を向けたら容赦なく攻撃してくる。

そうなれば今のイブキさんの状態では恐らく…。

「ほう、逃げずにそこで盾を張るか…。良い判断だ」

「フン、俺が選んだ女だ。優秀に決まっている」

「……そうか、それもまた、面白い。で、お前はとうするつもりだ？ 先程何をやったかは知らんが、たかが一度避けただけで勝ったと……」

「御託はいい。ここは退いてもらっつぞ！」

イブキさんは刀を取り出して、左手を一振り横に振った。

すると悪魔を中心に幾つもの魔方陣を展開し、その空間を埋めた。

「下らん。たかが武器を射出するだけの……」

「行くぞ」

「ッ!？」

イブキさんは近くにあった魔方陣に跳び込み、姿を消した。

否、悪魔の後ろにあった魔方陣から跳び出してきた。

「ハアアアア!！」

「何だと!？」

振り落とした刀は悪魔悪魔が出現させた剣で受け止められた。

「ッ!？ お前、その眼は!？」

「ウオオオオオッ!！」

「チイツ！」

悪魔は両手に剣を出現させて刀を弾く。

その隙にその場を離れ、イブキさんから距離を取った。

しかし……。

「貴様はもう俺の中だ！」

「ぐっ！」

また別の魔方阵から飛び出してきたイブキさんに攻撃された。

悪魔は剣で対抗し、攻撃を防いでゆく。

「ええい！　あまり凶に乗るな！」

悪魔は自身の周りに剣を出現させ、身体を中心に回転させた。

しかしイブキさんはまた魔方阵に飛び込み、今度は私達の前にあつた魔方阵から出てきた。

「フン、まさかこの様な状況下でそれを開眼させるとはな。恐れ入った」

悪魔は楽しそうに笑って剣を消した。

「今回の所はここまでにしよう。俺も本調子じゃないのでな」

そう言うと、悪魔の身体から青い炎が溢れだした。

「
ではな」

炎が全身を包んだ時、悪魔はその場から消えた。

そして支配していた雰囲気も消えた。悪魔が完全に立ち去ったと言
う事だろう。

「終わった……の？」

「はい。もう気配はありません」

バリアーを解除してイブキさんに近寄った。

「イブキさん、大丈夫でしたか？」

「……ああ。問題無い。そちらこそ大事無いか？」

……あれ？ 何だろう？ イブキさんの雰囲気がおかしいような……。
……。なんだか怖い感じが……。

「は、はい……。私達はぶじ

！？」

振り向いたイブキさんの顔を見た瞬間、私は凍り付いた様に動けなくなってしまうた。

性格に言えば、顔ではなく、その瞳に。

眼が……変わってる？

イブキさんの瞳の色は青だった筈。なのに今の色は、ギアスを使用した時の様な赤ではなく、紫に光り輝いていた。

知っている……。私はこの目を知っている……。けど、これは……

「どっした？」

「……いえ、顔に汚れが付いていますよ」

「む、そうか……」

「拭いて上げます」

私はイブキさん瞼を下ろして、魔力を少し流した。

今私に出来る事はこんな事だけ…。後はもう…。

手を離してイブキさんが目を開くと、その眼は元の綺麗な青に戻っていた。

「ありがとうな、ハク」

「いえ」

秀囲気も口調も元の優しい感じに戻っていた。

「皆も無事か？」

「うん。大丈夫だよ」

「イブキ君が守ってくれたからね」

「何だよ、えつらそーに」

「だから何でお前はそんなに俺の事を嫌うんだよ？」

「うっせ！ はやてを馬鹿にする奴は嫌いだ！」

「馬鹿にはしてない。狸みたいだなーって思ってるだけだ」

「それが馬鹿にしてんだよ！ それに！ さっき私の事もガキって言っただろ！」

「……そんな事言っただけ？」

「コイツはー！ー！」

ヴィータさんにアイゼンで殴られかけるが、それをひらりとかわして笑うイブキさん。

それを見て楽しそうに笑うフェイトさん、なのはさん。

こんな楽しい日常が、もうすぐ崩れる事に気付いているのは、多分私だけだろう…。

「ハク。帰るぞ」

「…はい」

それでも私は、イブキさんが……。

その後、ヴァイスさんと合流し、六課へと帰っていった。

六課ではレオンさんがシグナムさんからの尋問を受け終わった頃だった。

仲直りと問題（前書き）

作者「はい、どもども！ また更新だよ！ 変な所があったら言
ってね！」

イブキ「キモいんですけど……」

仲直りと問題

六課に帰還すると、レオンとシャーリー、シグナムにフェリス達が出迎えてくれた。

しかし何故レオンはあんなにボロボロになっているんだ？ まあ、シグナム辺りにでもセクハラしたんだろうな。

へりから降りると、シャーリーがなのはに頭を下げた。

「え〜!?!」

「い、ごめんなさい!」

「駄目だよシャーリー。人の過去、勝手にばらしちゃ〜」

「駄目だぜ、口の軽い女はよ〜」

後ろでヴァイスも呆れた。

「その、何かこつ…見てられなくて」

「ま、いずれはばれる事だしな」

ヴィータが仕方が無いと頷く。

いや、それでもどうだろう。俺だったら滑らせた相手は、即刻説教タイムだな。

「シャーリー、ティアナ今何処にいるかな？」

「あ、えっと多分……」

なのははティアナの居場所を聞き出し、すぐに言われた場所に向かった。

「……で？ 何でレオンはそんなになってんだ？」

「いや、美女たちに追っ駆け回されちゃって」

「お前なら逆に汚すんじゃないのか？」

「失敬な！ 相手の許可を得てから印を付けるさ！」

レオン。この場にはまだ女性がいるんだから……。変な事言つなよ。

「イブキ」

「どした？ そんな怖い顔して」

フェリスとC・Cと空幻が鬼も逃げ出しそうな顔で近付いて来た。

「お前にとって、私たちは何だ？」

「は？」

「さっさと答える」

「俺の部下達で、家族…だが？」

「「「……まあ良いか」「」」

口を揃えて三人は頷いた。

何が良いんだよ。そして良いんなら、何で残念そうな顔してんだよ。

「それがどうしたんだ？」

「レオンは何だ？」

「ウザい親友」

「酷っ！」

まだあるぞ。鬱陶しい親友、駄目な親友、無駄にハーレムハーレム
煩い親友、馬鹿に見えて実は馬鹿じゃない親友、変態。あ、最後の
は親友でも何でもないや。

「だから、それがどうしたんだよ？」

「お前は」

「家族より」

「親友を」

「」「選ぶのか！」「」

上手い具合にシンクロしてんじゃねえ！ 全然面白くないから！
なんかウザいだけだから！

「一体何なんだよ!?!」

「記憶」

「あ?」

C・C が指を眉間に指してきた。

「無いのだから?」

「.....レオン!?!」

「あははは.....ゴメンチャイ」

テメエエエエエエエ!! 勝手に話したなああああ!! 俺が話そ
うと思っていたのにいいいいいい!!

「……」

「…フェイトさんも、入ってきたらどうですか？」

「…うん、そうだね。私だけ仲間外れは嫌だもん。そうだよ、バルディッシュ」

「<さ、サー・イエツサー>」

つて、何バルディッシュ起動してんの！？ 駄目だつて！ 鎌にしちや駄目！ あ…ああ…！ いやああああああ…！！

「イブキ、マジでスマン。でも…言う必要無くなったから良いよな」

「貴様も腕を簡単にばらすな…！」

「ぬおおおおお！！？ フェリスちゃあああん！！？ グボ
へア…！！」

「痛つつ……もうアイツらに隠し事は出来ない」

「怒った時のフェリスちゃん達の顔も……良いぜ……」

「この野郎……誰のせいで俺がこんな……」

「お前のせいでもある」

「ああくそっ！ 否定出来ねえ！」

その場にいた全員に強制的に全てを吐かされた。

レオンの腕の事はすんなりと皆受け入れてくれていた。

まったく、こう言うのは手順を踏んでからだな、時期ってもんがあるんだよ。なのにコイツは……！

「およ?」

「んだよ?」

レオンが立ち止り、あそこあそこ指を指した。

そこには茂みにスバル、エリオ、キャロ、別れたばかりのシャーリ―が何かを覗き見していた。

「ふふふ…事件の匂いがするぜ」

「…最近お前のキャラが分からなくなってきた気がする」

レオンはサササツと四人に近付き、そつと覗いた。

俺も気になるので、後続き覗き込んだ。

「父さん!?!」

「じっ！」

エリオの口を塞ぎ、皆が見ているものを見た。

「……なのはに……ティアナ？」

海に面している場所に腰を掛けていた。

「じゃあ、分かってくれた処で、少し叱るところかな」

なんだ……やっと話しあってるのか。

「あのね、ティアナは自分の事凡人で、射撃と幻術しか出来ないって言うけど、それ間違ってるからね」

「そっだそっだ」

「レオン黙れ」

「ティアナも他の皆も、今はまだ原石の状態。デコボコだらけだし、本当の価値も分かりずらいけど……」

「ただ、磨いていく内に、どんどん輝く部分が見えてくる。」

「エリオはスピード。」

「キャラは優しい支援魔法。」

「スバルはクロスレンジの爆発力。」

「三人を指揮するティアナは、射撃と幻術で仲間を守って、知恵と勇気でどんな状況でも切り抜ける。」

「そんなチームが理想形で、ゆっくりだけどその形に近付いていってる。」

「模擬戦でさ、自分で受けてみて気付かなかった？ ティアナの射撃魔法って、ちゃんと使えば、あんなに避け難くて、当たると痛いんだよ。」

「あっ……」

「一番魅力的な所を蔑ろにして、慌てて他の事をやるうとするから。だから危なっかしくなっちゃうんだよ。って、教えたかったんだけど…」

「……」

「ま、ティアナが考えた事、間違っではないんだよね」

なのははティアナのデバイス、クロスミラージュを手を取った。

「システムリミッター、テストモードリリース」

「<ハイ>」

なのははティアナにデバイスを渡した。

「命令してみて、モード2って」

ティアナは恐る恐る受け取り、言われた通りに命令した。

するとクロスミラージュが変形し、グリップと銃口からオレンジ色の刃が出てきた。射撃を失くし、完全な接近戦を想定したモードへと。

「これ……」

「ティアナは執務官志望だもんね……。此処を出て、執務官を目指すようになったら、どうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はしてたんだ」

「ッ！」

それを聞いたティアナは涙が溢れてきだした。

「クロスもロングも、もう少ししたら教えようと思ってた」

なのははそっとティアナの肩を抱き寄せた。

「だけど、出勤すぐにもあるかもしれないでしょ？ だから、もう使いこなせてる武器をもっともつと確実なものにしてあげたかった。だけど、私の教導地味だから、あんまり成果が出て無いように感じて、苦しかったんだよね？」

ごめんね。

その一言でティアナは涙を堪える事が出来ず、なのはに「ごめんなさいと、泣き付いた。

何度も、何度も……ティアナの謝罪にうんと、なのはは頷いて抱きしめた。

860

「……良かったな、二人とも」

「はい……」

レオンとシャーリーがハンカチを片手に感動していた。

ああ、良かった。本当に……。

「よし、無事解決した事だし、見つからない内に行くぞ」

レオンが背中を押してきた。

珍しいな。レオンなら見たいって言いそうだったんだがな。

「じつ言つのはきつと立ち去るのが、カッコイイ男なんだよ」

レオンらしいや…。

俺達は二人に気付かれずにその場を後にした。

「……そう言えば、なのはに腕の事何時話すんだ？」

「……………成せばなるぞ」

「いや意味分かん」

ま、精々トラウマになるなよ。

イブキ side out

レオン side

翌朝、スターズとライトニングは隊舎前に集合していた。

今日も訓練だ。とは言っても、俺は副隊長だから教える側だけだな。

で、今はティアナが来るのを待っている……っと、来た来た。

「「おはようございますー!」」

「うん…おはよう」

エリオとキャロに苦笑しながら挨拶をした。

それから俺とフェイトちゃんの方を向いた。

「おはようございます」

「うん。良く眠れた？」

「はい」

ティアナの表情は何時もの、いや何時もより爽快だった。

「良い顔だぞ、ティアナちゃん」

「レオンさん…ありがとうございます」

「じゃあ行くっか」

フェイトちゃんが歩きだし、俺達も後に続いた。

「技術が優れてて、華麗で優秀に戦える魔導師を、エースって呼ぶでしょ」

道中、フェイトちゃんがフォワード達に語りかけた。

「その他にも、優秀な魔導師を表す呼び名があるって、知ってる？」

フォワード達は分からず、首を傾げた。

何だったけな？ えーと、確か……。

「その人がいれば、困難な状況を打破出来る、どんな厳しい状況で

も突破出来る」

足を止めて子供達を見た。

「そういう信頼を持って呼ばれる名前…」

何だか分からず、首を傾げる子供たちに頬笑み、フエイトちゃんはこう口にした。

「『ストライカー』」

ああ、そうだったストライカーだったな。……そう言えば兄さんが目指してるって言ってたっけ…。あの頃は俺も訓練ばかりしてたっけ…。

「なのは、訓練を始めてすぐの頃から言ってた。ウチの四人は全員、一流のストライカーになれる筈だって」

なれるな。なんたって俺達が教えてるんだから。必ずなれる。

「だからうんと厳しく……だけど大切に丁寧に育てるんだって」

大切に育てるか……なのはちゃんらしい言葉だぜ。

「なら俺もビシバシ鍛えてやるつか」

「あはは……レオン君、一応悪魔の力があるんだから手加減してあげてね」

「おう！ 了解であります！」

「ふふっ……それじゃあ、走ってなのはの所まで行くつか」

「……はい！／ああ！」「」「」「」

俺とフェイトちゃんが子供達の後ろを走り、笑顔で練習場所まで走っていった。

「おはようございませーす！」

練習場所に到着すると、そこにはなのはちゃん、ヴィータちゃん、シグナムちゃんがいた。

三人は笑顔で迎えてくれた。

シグナムちゃんも、昨日の事はもう気にしていない様子だった。

子供達はヴィータちゃんと楽しそうに、よく寝たとか、今日もやるぞとか笑顔が絶えなかった。

……良い笑顔だよなあ。俺はこの笑顔が大好きだ。だから守って行きたいと思う。

例えこの悪魔の力を使っても、この笑顔だけは大切にしたい。

その為には俺達がこの子達に教えられる事を全て教えて、仇なす者た

ちから守ってやらねえとな。

顔を上げると、なのは
と視線が合った。

俺達は同時に微笑んだ。

「さ〜てお前等！ 今日も頑張って行くぞ！」

「「「はい！」「」「」

俺の掛け声に付いて来てくれる……俺ってなんて慕われてるんだ……！

「その前に……レオン君？」

「なんだなの………は………さん？ どうしてそんなに怖い顔してるんですか？」

「シグナムから聞いたよ」

「何をですかい？」

「腕の事」

……シグナムさん……！？ ちよつ、何
ばびしちゃってんの……！？

「どうせ貴様はなかなか言わんだろ」

「それは時つてもんが……！」

「イブキもそう言ってたが？」

「……くそっ……！」

「さあ、レオン君。ちよつと向こうで……語り合おうか」

「そこはお話にして！ その方が生き残れる可能性が持てるから！」

「…?」

「ほう…私を目の前にして喋る暇があるのか?」

「のおおう!!!?」

Ｃ・Ｃの拳が俺とハクが一秒前までいた地面にめり込んだ。

いかん、いかん。今は俺とハク、Ｃ・Ｃと空幻のチームで戦ってたんだ。

「ハク!」

「はい!」

ハクがＣ・Ｃに向かって矢を同時に三本発射した。

「させん！」

しかしそれは、C・Cの前に現れた三体の紙人形に防がれた。

「！」

空幻が呟き、指先を俺達に向けた。

ガガガガッ！

「ッ！？」「

すると俺とハクが立っている地面に亀裂が入り、破裂した。

「くっ」

一歩早く飛び退いて回避したが、破裂した地面の瓦礫に不覚にも足を取られた。

「なあっ!?!」

「 後地の二 前地の五 後地の五 前地の八 ! 」

呪文を唱え、また指先を向けてきた。

すると瓦礫が空中に浮かび、全て俺に降り注いだ。

「うそおおおお!!?!」

マジで!?! 何それ!? そんなんあり!?! とにかく脱出……っ
て、ええっ!?!

「そこで寝転んでろ」

「がつ！？」

何時の間にいたのか、Ｃ・Ｃ・Ｃが俺の脚を蹴り払い、即座に退避した。

俺は当然、その場に倒れた訳で……。

ドガガガガッ！

瓦礫の下敷きになった。
バリアーを展開して全身が埋まる事は防いだが、脚が埋まってしまった。

「イブキさん！」

「心配してる場合か！」

「ッ！…」
「守フロテユりの引！…」

ハクが弦を引き、離すと、ハクの前に白い盾が現れた。

それはC・C・の魔力拳を受け止めた。

「相変わらず、都合の良い能力だな！」

「良く、言われますっ！」

しかしC・C・の攻撃の方が威力が高く、徐々に盾にヒビが入っていく。

「だがこれで！」

C・C・がもう片方の拳を叩き付けた。それでハクの盾は砕け散ってしまった。

「きゃあっ!?!」

「ハクツ！」

「トドメだ！」

C・Cが魔力を込めた右脚で回し蹴りを入れた。

「ぐうっ！？」

「フツ……ッ！ なにっ！？」

しかし、C・Cが蹴ったのは一本の矢だった。矢は真っ二つに折れ、消滅した。

「分身だと！？ 何時の間に！？」

「地面が破裂した時です！」

「ッ！ しまった！」

ハクはC・Cの下に潜り込み、C・Cの腹に弓矢を構えていた。

「C・C！」

「行かせるかつ！」

C・Cを援護しようとした空幻を、ディメンション・オブ・エンペラー皇の次元武でそれを阻止する。

「喰らいなさい…カラトホルク螺旋矢！」

「ッ！」

カラトホルク螺旋剣を完全な矢で再現した攻撃を零距离で放った。

実は一度、ハクに弓矢のトレーニングをした事があり、その時に一

度放ったのだが、それを一度見たハクが真似して編み出したのだ。
つくづく思う。ハク的能力はチートだと。

まあそれはさておき、放った矢はC・C・に直撃し、大爆発を起こした。

おいおい…非殺傷設定だよな？ いや、C・C・は不老不死だし…
大丈夫だよな？ ……バラバラになってたらどうしよう…。

「C・C・！ くっ、このお！」

空幻が大きく腕を振り払うと、綺麗な青い狐火の波が俺に押し寄せた。

「うあちちちっ！」

次元武の展開を止め、空を飛んで回避する。

あちー…コートが焦げたじゃんかよ！

「イブキさん！」

「まだだっ！」

「えっ！？ きゃああっ！？」

爆発によって発生した煙の中から魔力弾が飛んできて、ハクに命中した。

それは小規模な爆発を起こし、ハクにダメージを負わせた。

「ハク！？ …ッ！」

煙の中から何か飛びだし、黄緑色の粒子を散らして、何処かへと消えた。

「何処に…！」

「後だ」

「！」

咄嗟にファオルネス魔皇刀を後ろに振る。

すると刀はC・Cの拳にぶつかった。

「なんでっ…!?!」

「あの時、矢が直撃する部分に魔力で出来た鎧を作ったんだ。まあ、爆風は防げなかったがな」

「んなアホなっ!」

「空幻!」

「！」

空幻がC・Cの合図で、俺とC・Cを囲む巨大な狐火の台風を出現させた。

「馬鹿かつ!? 自分もやられるぞ!?!」

「そんな事する訳が無いだろう」

「なっ!」

C・Cの身体が振れたと思ったら、煙の様に消えた。

「分身だとおおお!!?!」

「予め大量の魔力を込めた分身を作り、如何にも本物が攻撃している様に見せる、高度な技。その気になれば、分身だけで戦う事が出来る……かもしれない」

「ふっ!」

空幻の息を吐く声が聞こえた瞬間、狐火が俺を握り締めようとせんと迫ってきた。

熱い……。炎に触れる前にダウンしそうだ。

空幻、天狐と言っただけある。C・Cも格闘技の天才に相應しい技だ。だからこそ、負けられない。俺がこんな所で負けてたら、あの悪魔に勝てず、何も守れない。俺は……。

「勝つつー!!」

瞬間、魔力が溢れだした。

何故かは分からないが、今まで以上に魔力を身体の底から溢れ出てくる。

……いける!!

刀を鞘に納め、抜刀の体制を取る。

魔力を刀に送り込み、気を落ち着かせる。

そして勢い良く抜き放った。

「魔人　　斬破ッ！！」

頭に浮かんだ技を放った。

赤黒い魔力が斬撃の塊となり、狐火を切り裂いた。

斬撃はそのまま下にいたC・C・と空幻に向かって飛んで行った。

二人は驚きながらも空を飛んで回避し、斬撃は地面を切り裂いて抉った。

「馬鹿な！　その技は訓練を受けなければ　　！」

「驚いている暇があるのかC・C・」

「ッー！」

俺はC・Cの後ろで居合いの構えを取っていた。

「何時の間に　！」

「『サイハーデン刀争術、水鏡渡り』だ」

お蔭で魔力と剄の同時進行が大変だったけどな。

刀には既に魔力を込め終えている。後は放つだけ。

「C・C・！」

「デクリイアロウ老いの矢！」

二本の矢が、C・Cと空幻に命中した。

「なに？」

「からだが」

「お二人の時間を衰えさせていただきました。この矢に当たると、当たったものは全て、衰える」

「ナイス援護だ、ハク」

「いえ！」

これで、チェックメイトだ！

俺は刀を抜き放った。

「魔神黒衝斬！！」

魔人衝斬の強化版。直に魔力の斬撃と刀の斬撃を与える奥義。

そしてそれはC・Cの身体を

切り裂いてしまった。

「え……?」

「C・C……さん?」

馬鹿な……。俺の魔力は人を傷付けられない様に、嚴重に封印術を施した筈……。なのに……。

「C・C……うううう!!!!」

刀を投げ捨て、傷ついたC・Cを抱きかかえる。

丁度矢の効果も切れ、時間が元に戻った。

「C・C……! しっかりしろ! おい ツー!」

手に生温かい感触がし、恐る恐る確認すると、それは真っ赤な液体だった。

嘘だろおい……。俺が、俺がC・Cを斬った……？ そんな……そんな……！

「ハクツ！……！」

「はいつ……！」

俺はC・Cを下にいるハクの元に連れて行き、傷口を診せた。しかし……。

「あ、あれ……？」

「どうしたんだっ！？ 早く傷をっ……！」

「そ、それが……！」

傷が無いんです…。

……………え？ 無い？ そんな筈…。

「…っ」

「ッ！ C・C・C・！」

C・C・Cが呻き声を上げ、ゆっくりと目を開いた。

「C・C・C！ 大丈夫がああっ!？」

「このドアホが。加減を知れ」

いきなり鼻を殴られた。

何で殴る…いや、殴られる覚えはあるが…。

「C・C…お前、怪我は…？」

C・Cは俺から離れ、斬られた背中を見せた。

「私は不死だぞ。首を刎ねられても傷口を合わせれば治る」

「…………良かったあ…………！」

脚が崩れ落ち、その場に腰を着いた。

いや良かった。危うくC・Cを殺したかと思ってしまった。

「しかし妙だな…………」

空幻が顎に手を当てて俺を見てきた。そして近付いて来て、俺の口を掴んで胸元を肌蹴させた。…ってこらっ！

「何しやがる!?!」

「動くでない。それとインナーを捲れ」

「こんな処で何をするつもりだ!?!」

「さっさとしろ」

「へぶっ!?!」

突然、頭に強烈な衝撃が走り、蹲った。何事かと後ろに視線をやる
と、そこには剣を握ったフェリスが立っていた。

「状況は理解した。私が取る行動は一つ…!」

フェリスは息を胸一杯に溜めこみ、空に向かって声を上げた。

「管理局の人……っ……!!!!　ここで逆レイプされてま……すっ……!!!!」

「「「やめえええい!!!!」」」

ゴンッ×3

「~~~~ツ!!!？」

俺達三人の拳が叩きこまれ、フェリスは地面に蹲った。

まったく！　昼間っから何叫んでんだよ！　こっちは大変なのによ！

「だ、大丈夫ですか……？」

「へ、平気だ……。出だしは掴めた……」

「は、はあ……」

ハクは心配してフェリスに寄るも、フェリスの対応に少し困った。

「さあ、早く脱げ」

「だから何で!？」

「封印を確認する」

「……ああ!」

そうか、そうか。そう言えば、俺の身体に術式を刻み込んだんだつたな。あ、いや、魔力で刻んだから、ホントに刻んだ訳ではないかな？ そんな事したら痛いからな。

俺はコートを脱ぎ、中に着用していた黒いインナーを捲り、腹を見せた。

……なんか恥ずい。

そんな気持ちも露知らず、空幻は指を腹に当ててボソボソと何かを
呟いた。

すると腹の辺りに五芒星の印が浮かび上がってきた。その周りには
訳の分からない文字が書かれていた。

「……………」

「ど、どうだ？」

空幻は印を凝視したまま動かなかった。暫くしてやっと俺の目を見
た。

「印が乱されてる」

「へ？」

「術式もバラバラになってるし、何だこれは？ 一体何をやらかしたんだ？」

「し、知るかよ。俺は何にもしてないし、そもそも弄れないだろ」

「兎に角、もう一度封印を施す」

空幻は五芒星を消し去り、また新たな印を刻もうとした。だが…。

バチンッ！

「っ…！」

「はっ？」

空幻の指が腹に触れようとした時、紫の閃光が走り、指を弾いた。まるで拒絶するかのようだ…。

「……………」

「ち、違う違う！俺は何もやってない！」

「どうしたんですか？」

ハクが何事かと、顔を寄せた。

「拒絶された…」

「何故だ？」

「知るか。だが、イブキの魔力が膨大になり過ぎている…」

「俺の？でも何で？」

「知らん。だがこれでは少々骨が折れるな……………おい」

「え？」

空幻が手で合図した瞬間C・C・とフェリスが頷き、俺の腕と脚を押さえ、地面に張り付けた。

「お、おい！ 何をする気だ！？」

「少しキツイ封印を掛けるだけだ。なに安心しろ、ほんの少し……死にかけるだけだから」

「安心できるかっ！！」

「ハク」

「いじめんなさい」

パシュパシュッ！

ハクが謝りながら二本の矢を放ってきた。それに命中した俺は途端に身体が動かなくなってしまうた。

「身体を麻痺させる矢ですから、安心を……」

「流石だ。剣先で脚を刺してるのに、全然気付いてない」

このヤロウ……。ってか、ハクもなに意志疎通してんの？ 空幻が要
求した事、よく分かったね。

「さて、始めるか」「ワキワキ

頼むからその動きは止めてくれ。なんか怖いから。

ぎゃあああああつ！……！

「痛い…痛いよ…」

「男のくせに我慢しろ」

「いや、あんなに痛そうなのは見た事ありませんよ…」

ハクは若干引いていた。

確かにアレは無い。幾等なんでもアレは無い。してはいけない。恐
い、怖い、嫌い…。

「イブキ、腕を出せ」

「ひいッ!?!」

「……………今度は違うから」

何が違うと言うんだ…。ほらっ！ 扇子を出して刀に変えた！ 何かするんだろ!?!

「……………」

ばさ…。空幻自分の髪を掴み、刀で切り裂いた。それから髪の両端を持ち、ブンブンと回し始めた。

すると、髪の毛が綺麗な金の毛の腕輪に成り変わった。

「これを付けている」

「……………痛くない?」

「当たり前だ」

「……………」

腕輪を受け取り、左手首に通した。

綺麗だな…。髪で出来てるなんて思えないな。

「それは封印の力を強める。これからも魔力の成長がありそうだからな。念の為だ」

「……………そうか。ありがとな」

「気にするな」

そう言っつて空幻は笑った。

うん、もう完全に狐じゃないな。完璧に一人の女性だ。だってさ、笑った時少しドキってしちまったんだもん。

「んッ！ 私の事、忘れて無いか？」

「え？」

「え？ じゃない。どうしてくれるんだ。折角の服が台無しだ」

C・C が背中を向けて、白くて綺麗な肌を見せた。

「弁償してくれるんだよな？」

「……ハク？ お前の力で……」

「無理です（二二）」

「ですよー」。…はあ、仕方が無い。

「トレース
オン
投影・開始」

投影で同じ服を作った。更に俺のコートと同じで、消えないようにした。

「……………」

「どうした？」

「お前は服さえ戻れば良いのか？」

「勿論、怪我させたお詫びは別に何かするが」

「……………約束だぞ」

…？ 変なC・Cだな。

C・Cは服を受け取り、大切そうに抱きしめた。

そんなに大切にしなくても…。

「…そろそろ昼だ。向こうと合流するぞ」

フェリスがそう言い、歩き出した。
俺達も歩き出し、なのは達との合流場所に向かった。

「その前に着替えて良いか？」

「………何処で？」

「茂みで」

「……早く早く」

訓練（前書き）

作者「これでストックも残りわずか……」

イブキ「でも話が滅茶苦茶じゃ意味無いよな」

作者「滅茶苦茶！？ あうう……そうだったらごめんなさい」

訓練

俺達がなのは達の所へ着くと、丁度訓練が終わった所だった。

「よお、皆お疲れさん」

「イブキ君？ そっちもお疲れ様」

「「「「お、お疲れ様です……」「」「」

ははは……。大分疲れてる様だな……。

子供達は地面にへたり込み、息を切らしていた。レオン達は教える側なので疲れてはいないようだ。

「朝の訓練はこれで終わり、午前からはデスクワークを頑張ってもらうからね」

「「「はい…！」」」

鬼ですか…。こんなに疲れてるのにまだ働かしますか。

「あゝやだな、机に向かうなんて俺に合わねえし…」

レオンが空を見上げて嘆いた。

ふん、安心しろレオン。貴様にはとっておきを用意してある。

「レオンはこれから隊長達と会議だ」

「うへえ…益々嫌だ…」

「ほう、ならその悪魔の腕の事はどうでもいいと。なら今すぐ斬り落としてしんぜよう」

「わあー会議だ嬉しいなあー！」

チツ、変わり身の早い奴だ。

「ほら、時間が惜しいから行くぞ」

「へぶっ！」

レオンの襟を掴み、鞆を肩に掛ける要領で引き摺っていった。

ヤレヤレ、今日もまた忙しくなるな…。

六課会議室。

ここには部隊長こと八神はやと、リインフォース・ツヴァイ、スターズ部隊長高町なのはと副隊長ヴィータ、ライトニング部隊長フェ

イト・T・ハラオウンと副隊長シグナム、そしてエンペラード隊全員、おまけにザフィーラがいる。

ここでレオンの腕の事と、六課に奇襲を仕掛けた悪魔の事に付いて、今後どうしていくか話し合うのだ。

「ウチが先ず確認したい事は一つや…」

重い空気の中、はやてが口を開いた。

「レオン君の腕は、今後も大丈夫なん？」

「問題無い。訓練次第で更に強力になり、制御も出来る」

それに答えたのはフェリスだった。フェリス達は悪魔の事に付いて、俺達より遥かに詳しい。

「ほな心配いらへんな」

「はやてちゃん！ 俺の事をそんなに心配してくれるなんて…！
愛してるぜ〜！」

「今はシリアスな場面だ」

「ふっっ！」

取り敢えず煩いレオンを殴って静める。

「それで、スラストの訓練は誰が行うのだ？」

「私達しかいないだろう。自分で出来る事ではないしな…」

シグナムの問いにC・Cが背中を摩りながら答えた。

うう…まだ気にしてるのか…。こっち見てくるし…。

「よし、レオン君の事についてはこれでええやろ。ほな次行くで。
ライン」

「はいです」

ラインが端末を弄くり、画面が投影された。

「先日この六課を襲撃してきたこの人物。フェリスさんが言うには
悪魔らしいねんけど…」

画面に映ったのはフード付きの黒いマントを纏った人間の形をした
ものだった。

「突如六課上空に現れ、模擬戦中のフォワード達に攻撃。ウチらの
攻撃は全く通用せず、フェリスさんとレオン君の攻撃で、なんとか
撃退。レオンくんが暴走している隙に消失」

……間違いない……コイツだ。俺の家族を殺して奴だ。

「…イブキさん？」

「…何でも無いよ」

必ず見つけ出して、この手で殺してやる…！ レオンよりも先に！

「こいつの目的は何だったんだ？」

空幻がフェリスに聞いた。

「知らない。あの方の命令だとか言っていたが…」

「あの方？…奴ら悪魔は組織を作っている？」

確かに、あの方と言う言葉から命令する悪魔がいると言う事が分かる。

…なら俺の家族を殺したのもソイツの命令…？

「もしかして、魔皇が向こうにいるとか？」

フェイトが閃いた様に言った。

魔皇か…その可能性も否めない。この魔皇刀がもし本物ではなく、ファオルネス近い似た様な物の場合もある。

その場合、これは何なんだと言う話なんだが…。

「俺達の誰かを狙ってた訳でもないし…やっぱり六課が狙われてんのか？」

「いや、俺達エンペラード隊が狙われている可能性の方が大きい。フェリスやC・C、空幻達天使は、悪魔と戦争状態にあるからな。狙って来てもおかしくは無い」

だとしたらいい迷惑だな。戦争相手を間違えてるんだからな。…いや、この世界を狙ってる時点で戦争相手か…。

「…纏めると、この悪魔の狙いはウチら六課、若しくはエンペラー
ド隊…でええな？」

「ああ、そうだな」

「ならウチらが取るべき道は一つ」

はやてが立ち上がり、俺達を見渡す。

「皆で協力して、悪魔を撃退や！」

……ふっ。

「ははははっ！ もの凄く簡単で良いな！」

「そうだな！ 俺が選ばれし者に選ばれたからには、その魔皇って奴をぶっ飛ばしてやる！」

「そうだね！」

「うん！」

はやてのとてもシンプルで分かりやすい道に、俺達は賛成した。

だがなはやて、俺はコイツだけは俺の手で殺す。家族の苦しみを味合わせて後悔させてやる。

「そうと決まれば、早速行動開始や！ 皆、頑張ってな！」

「おうよ！ って、先ずは何をすればいいんだ？」

「レオンは俺達と訓練の地獄だろうな」

「そやね。他の皆はこれまで通り、頑張っっていつてな！」

「了解！」「」

「ほな解散！」

はやての合図で、会議は終了した。皆は各自持ち場に付き、それぞれの役割をこなし始めた。

「さてと、レオン。やるか」

「ああ！ 宜しく頼むぜ！」

練習所の一角。フィールドは廃棄ビル群。

「さて、先ず私が担当する事になったが…」

フェリスが剣を握って、レオンの前に立つ。

「やる事はとてもシンプルで、大胆で、繊細な方法だ」

「ほっほっ……」

レオン、頼むから面白くない事はしないでくれ。

フェリスは剣先をレオンに向けた。

「私の剣を避け続ける。さもないと……死ぬぞ」

「……………へ？」

「はい俺達は撤収ー。ビルの上で見物してましょー」

俺はC・C・達を連れてビルの上に立った。

「お、おいイブキ！」

「レオン、一時間後にまた会えたら良いな」

「ちょっと!?!」

「行くぞっ!」

「ほあっ!?! マジでええええ!?!」

次、C・C。

「その腕の特徴は第二の腕が存在する事だ」

「!」
「!」

レオンは左腕の隣に魔力の塊のような腕を肘から下まで出現させた。

「そうだ。力が覚醒すれば、魔人を使役出来るようになる」

「マジで!？」

「但し、それにはお前に眠る力を表に引き出さなければならぬ」

「ウツス！」

「とは言っても、それには特別な魔具が必要なのだが…それが何処にあるかは分からない」

「ええ…」

「だが安心しろ。こう言うのはピンチになると覚醒するものだ」

「……嫌な予感が……」

「と言う訳で、腕の力を引き出しながら私の相手をしろ」

「……ベッドの上なら」

「天連掌!」

「ぎゃあああああつ!」

次、空幻。

「いいか、人間が扱う魔力と、俺達が扱う魔力は異なる」

「う、うっす」

「よって先ずは人を傷付けない様に魔力をある程度封印する」

「……その手に持っている刀はどうするんですか？」

「気にするでない。ただちょっと腹を斬るだけ……」

「い、いやああああアアアアアああ……！」

「で、やっと俺か」

「ヒック……おれ、もう……婿に行けない……！」

「ご愁傷様。俺に言える事はそれだけだ。」

「一体どんな事をしたのか……。それは俺の口からは言えない。と言っ
か言いたくない。何なんだアレは……。もう何処からどう見てもリン
チと殺人未遂にしか見えなかったぞ。」

「さてと、こっからは俺との模擬戦だ。お前がこの半日で手にした
力を俺にぶつけてこい」

「偉そうに言いやがって…。お前これがどんなに辛かった事か分かってんのか!？」

「侮るな。俺は毎日こんなだ」

そう、毎日…。俺はフェリスの剣を弾き、C・Cの拳を流し、空幻の狐火を消化し、ハクの矢雨やぐれを避けて…。良く生き残ってると思っ

「なんか……スマン」

「いや良いさ。お前で憂さを晴らしするから」

「やっぱりお前もそっち側かっ!？」

はっはっは!。何を言う、俺は最初からエンペラード隊だ。

「では行くぞ。言うておくが、俺も色々と力の使い方が分かって来

「たからな」

「ハッ！ いいぜ、何時かの決着を付けようじゃねえか！」

レオンはギレンを構えて俺と向き合った。俺も刀を抜刀し、下段に構えた。

「……」

「……」

「……行くぞ」

先に動いたのは俺。俺はレオンに向かって走った。

「左腕の使い方その……」

レオンは左腕を引いた。

「第二の腕で敵を殴る！」

左腕を伸ばし、青い腕を伸ばしてきた。

だが俺は冷静に腕の横に出て、腕を交わした。

「甘いぞレオン！俺がそう簡単に捕まるか！」

刀を下段から振り上げ、レオンを斬り付けた。

「甘いのはテメエだ！」

しかしレオンは左腕で刀を受けた。

「なっ！？ もう腕を戻したのか！」

「使い方その二」

「ッ！！」

レオンの左腕の青い光が増した。

「魔力で強化！」

「なっ！？」

急にレオンの力が強まり、刀を弾かれた。

「打つべし！ 打つべし！」

そしてそのまま殴りかかってきた。

「チイツ！」

俺も左手で拳を防いでいき、隙を見てパンチのラッシュから飛び退いた。

レオンは勢い余って拳を地面に叩き付けた。すると叩き付けられた地面は、拳を中心に碎け散った。

なんつー威力だよ！ ええい、C・C・め！ レオンに何を教えた！

926

「そろそろそろあー！！」

レオンが腕を伸ばし、俺の足元の地面を掴んだ。そしてレオンは俺の目の前に飛んできた。

「お前はル〇か！？」

「俺の相棒は腕だけじゃねえぜ！」

ギレンを突き出し、俺の腹を突いて来た。だが俺は身体を捻り、槍をかわした。

「あまり調子に乗るな！」

蹴りを放ちレオンを吹き飛ばす。しかしレオンは左腕で受け止め、ダメージを半減にした。

927

「取った！」

「ッ！ しまっ…！」

脚をレオンに掴まれ、そのまま地面に何度も叩き付けられ、上空に投げられた。

「うああああっ!?!」

「ほいさー!」

レオンは俺の身体を伸ばした左腕で掴み、自身を上空へと引き寄せた。

「ギレン! エクスプロージョン!」

「<OK! 行くぜ!>」

ギレンが赤く光り出し、炎を纏い始めた。

「爆炎爪槍!」

そして炎の爪の如くギレンを振るい、俺の身体に叩き込んだ。

「がはっ!?!」

爆発と共に斬られ、地面に叩き落とされた。しかし…。

「まだまだ!」

レオンの左腕に捕まえられ、地面にぶつかる前にまた上空に引き戻された。

「火炎車!」

レオンはギレンに炎を纏わしたまま高速回転し、炎の回転刃となった。

俺はそれに巻き込まれ、何度も斬られた。

今度こそ地面に叩き落とされたが、伸ばされた左腕が巨大化し、俺を抑えつけた。

「爆炎・天落槍!!」

レオンは爆発の勢いを利用し、俺に向かった落ちてきた。そしてギレンを俺の腹に叩きつけ、同時に大爆発を起こした。

「そらっ！ テメエの力はそんなもんじゃねえだろ！」

レオンは距離を取り、ギレンを肩に立て掛けた。

「ゴホッ、ゴホッ……。ペッ……。ンなる〜!!」

「ハッ！ やっぱそうだよな〜！ こんなもんで終わる筈がねえよな！」

「つたりめえだこの調子者が。こんなんでやられてちゃあ、アイツにすら勝てねえんだよ…！」

「レオン…」

「あ？」

「避けるよ」

ディメンション・オブ・エンペラー
皇の次元武…。

「……………そう来ねえとな」

俺の半径五百メートルに数百の魔方陣を展開。

これでもう、レオンは俺の中だ。

「行くぞレオン。火薬の貯蔵は十分か？」

全砲門、射出開始…。

「チツ、反則だろ……」

全ての陣から剣、槍、戟、鎌、斧、ありとあらゆる宝具をレオンに向かつて射出。無限と言う数の武器の雨がレオンに襲いかかった。

「だがアメエな……。使い方その三……」

レオンは左腕に魔力を溜めこみ、天に掲げた。

「魔力の……障壁！」

瞬間、レオンを中心に青い光に柱が天を貫いた。

「うおおおおっ……！」

それはレオンに襲いかかる全ての宝具を弾き飛ばす。

馬鹿な…！ 宝具の中には真名を唱えなくとも強力な物も存在する！
なのに、全て無傷で弾き飛ばすだと！？

「おおあああつ…！」

「ッ！？」

レオンが柱の中で左手を俺に向けた。まるで何かを放つような……！

「まさかつ！？」

「使い方その四！ 魔力砲 発射ッ…！」

レオンの手から青い魔力砲が発射された。それは全てを呑みこむような強大な砲撃だった。

「ハア…ハア…！ 射出が止んだ…？ 勝ったのか…？」

レオンは肩で息をし、額には汗が粒になって流れていた。

「くそっ…もうバテたのかよ…。体力付けねえと…」

「そうした方が良さそうだな」

「ッ！ ……ハハッ！ そう来ねえと…！」

レオンが後ろを振り向いた時、俺は……。

「…おいおい、何所まで反則野郎なんだよ…!?!?」

無傷で次元武を開いていた。

「レオン、お前は確かに強い。だがな…」

次元を照準…完了。

「……………」

連結…………完了。

「俺の方が強い」

次元道、開通。

「見せてやる。ここが俺の次元である事を…！」

ゲート
解放。

目の前に次元武と同じ陣を一つ展開させ、俺はそれに飛び込んだ。

「消えた!？」

「こっちだ」

「ッ!？」

レオンの後ろに展開された陣から飛び出し、蹴りを放った。

「ぐっ!？」

レオンは上に飛び上がり、威力を半減にしたが…。

「何処を見ている」

「何っ!？」

「またもやレオンの背後に陣を展開し、そこから飛び出て蹴り落とした。」

レオンに今度こそ蹴りを喰らわせ、地面に叩き付けた。

「くそっ! 一体どうなってやがる!?! 瞬間移動か!?!」

「違うな。俺はただ空間…次元を渡っているだけだ」

「次元?」

そう、俺の皇ディメンション・オブ・エンペラーの次元武は、その名の通り次元の武だ。何処かの次元から宝具を取り出し射出する事も、物体を次元の中に収納する事も、次元と次元、空間と空間を渡る事が出来る。宝具生産は二の次だ。

「半径五百メートル以内に二つ以上の門である魔方陣を設置し、その二つの次元を連結、道を作るわけだ」

全方位に、ありとあらゆる所に陣を展開、門を設置した。

「お前が何処に逃げようとも、お前の後ろに出る事が出来る」

「チツ…厄介な…」

「そうか？ それとこんな事も出来るぞ」

次元から一本の紅い槍を取り出した。それを門である陣に突き刺した。すると……。

ズドンッ！！

「ぐうっ！？」

レオンを取り囲んでいた数十の門から紅い槍が一斉に突き出た。

「同じ物を同時に複数の門へ通じさせる事が出来る」

いくら悪魔の力を得ようとも、レオンは腐っても人間なので大きな傷を負わず事は出来ないが、何十という槍ゲイボルグ：刺し穿つ死刺の槍の突きをまともに喰らえば、相当の威力だと思っ。

「クソッ、マジで反則だな。この反則王！」

「案外そうでも無いぞ」

「嘘こけ」

「俺さ、魔力がアホ程有るんだがな、一気に減ったんだよ。こう、グンって」

「……つまり？」

「……次が最後だ」

くそ、まさかこの技がこんなに魔力を消費するなんて思いもしなかったぞ。いや、良く考えたら普通はそうか。こんな滅茶苦茶な技なら、代償が大きくて当然か。

俺が後使えるのは……ギアスが一回と真名解放が一回か強力な剽技が一回ぐらいか……。チツ、小さな魔力でチマチマやってもレオンには敵わない。この大技が限度か……。さて、どうする俺。

「……ギレン、『ブリューナク』だ」

「<OK!! 派手に行こうぜ!>」

レオンはギレンを変化させ、五叉の槍へと姿を変えた。

来るか、レオンの切り札が。なら俺は…！

「
トレース・オン
投影、開始」

刀を次元に納め、残った全魔力を右腕に叩き込む。

思い浮かべる、あの大剣を。あの強大で巨大な剣を。

右腕を掲げ、まだ現れぬ剣の柄を握り始める。桁外れの重力感が感じられる。だが、今の俺ならば容易に扱える。

「ギレン、左腕の魔力を纏え」

レオンはギレンを左腕に持ち替え、更に強力な悪魔の魔力を込める。

これでは今の状態の俺の魔力では届かない。

なら限界を超えた魔力による投影でなければならぬ。ならば

「
トリガー・オフ
投影、装填」

後先考えない、身体中にある全ての魔力を一滴残らず投影に叩き込む。

これでもう歩けはしない。それどころか一日は意識が無くなるかもしれない。

だがそれでも俺は、レオンに負けたくない。

復讐云々以前に、ライバルに、親友に負けたくない。

「…行くぞギレン」

「くブチかませ! ! ! >」

狙うは五本の槍。

しかし点での攻撃では安易に避けられる。

なら点ではなく面で。

全てを薙ぎ払う壁による攻防一体の攻撃。

「ブリーユーク」

「セツト全工程投影完了」

「イブル当たれ!!」

「ナインライフスブレイドワークス是、射殺す百頭!!」

状況、対象によって形を変える宝具。嘗てヘラクレスが使用していたヒドドラを殺した宝具。

投擲された五本の雷槍を、一枚の視えない壁で押し返す。

「おおおおおおお!!」

「でやあああああああ!」

しかし、伝説の悪魔の力は伊達じゃなかった。

俺の全ての魔力を叩き込んでも尚、槍は壁を貫こうとする。

しかしまだだ。

俺にはまだ手がある。

身体を蝕んでいく諸刃の力が。

左目のスイッチを入れる。

そして視る。

我が繰り出し不可視の壁を。

「破壊せよ　　ギアスよ!」

赤い光が走り、大剣を、不可視の壁を赤く染めた。

「でりゃあああああああ！！！」

脚を踏みこみ、更に一撃大剣を振り払う。

壁は五本の槍を全て砕いた。そしてレオンに迫った。

「……負けたぜ」

レオンの眩きは、爆音と共に消えた。

「……じゅ……じゅ……」

「あ……」

「二人とも、静かにしてね」

「あゝい……」

シヤマルに注意されて気の無い返事を返す。

あの後、模擬戦に勝ったのは良かったが、体力、魔力共に底を突いてしまい、再起不能になってしまった。

身体中が痛み、おまけに左目も痛くなって満身創痍だ。レオンも同じような状態で、俺と一緒に医務室へと運ばれた。

「くそ……今度は俺が勝ったと思ったのによ……」

「世界を救うと言う使命を持っている以上、負ける訳にはいかないんだよ……」

「良いじゃねえかよ、負けたって。その分俺達がいるじゃねえか」

「……そうだな」

何も俺だけが世界を救える訳じゃないしな……。レオンの言う通り、皆で協力し合うと言う手段も良いかもな。

けど……。家族の仇だけは俺が……。

「レオン」

「んあ？」

「……負けねえからな」

「……へッ！ 望む所よ！」

俺が、レオンの分まで仇は取る。絶対にだ。

この日は医務室のベッドで夜を明かす事になった。

魔王と魔女（前書き）

作者「はいはい、投稿だよー！」

イブキ「……お前さ、前書き面倒になつてきただろ？」

作者「……次行ってみよー！」

イブキ「逃げるなよ……」

魔王と魔女

レオンの模擬戦から二週間ちょっと。

俺達は何事もなく、訓練に励んでいた。

俺とレオンは力に慣れてきだし、魔力切れも余り起こさなくなった。と言っても起きる時は起きるが。

悪魔もアレから一向に姿を現さず、まるで消えたかのように静けさを醸し出している。これがアイツらの狙いかもしれないがな。

何にせよ、力を蓄えられる時間が出来たと言う事には感謝だ。

そして今日も朝の訓練が終わり、俺達前線メンバーは一か所に集まっていた。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様」

なのはが疲れて地面に座っている子供たちを労った。

レオンは普段と変わらずピンピンしている。

「でね、実は何気に今日の模擬戦が第二段階クリアーの見極めテストだったんだけど……」

「「「「ええ!?!?!?!」」」」

ありゃま、抜き打ちテストか。なのはもやる事やるな。

なのははフェイトとヴィータに確認を取った。

「「どつでした?」」

「合格」

「「「早ッ!?!?!?!」」」

フェイトの可愛らしい即答にスバルとティアナがツッコんだ。

「ま、こんだけみっちりやってて問題あるようなら大変だってこつた」

さも当然の様にヴィータが肩を竦めた。

まあ確かに、俺達の訓練よりは断然平和的だが、アレは濃い訓練だったな。一度だけしか見た事無いような気がするけど…。

「そうだが、なんたって俺相手に二撃入れたんだからな」

「どうせスバルやティアナに見惚れてたんだろ」

「失敬な！俺はちゃんと区別を付けるっちゅうに！」

「レオン副隊長、後で話し合いますよね？」

「……あい」

なのはのブラックスマイルによって敢え無く撃沈。

レオンよ、お前は尻に引かれるタイプだな。

「私も良い線言ってると思うし、じゃあこれにて二段階終了!」

「……やったあー!」「」「」

四人は跳びはねて喜んだ。

うんうん、やはり子供の笑顔が一番だな。……なんか爺クサ。

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーの所へ行っ
て来てね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして練習すつからな」

「」「」「はい！」「」「」

ほうほう、明日の練習は見学に来ようかなーと……ん？ 明日だと？

「え？ 明日？」

キャラも気が付いたようだ。

「おう。訓練再開は明日からだ」

「今日私達も隊舎で待機する予定だし」

「皆、入隊日からずっと訓練付けだったしね」

「ま、そんな訳で……」

「今日は皆、一日お休みです」

なにいいいいいい！！？ 休みだとおおおお！！？ お、俺
なんか休みを取ろうなら剣と拳と火と矢の嵐なのに！！ 不公平だ
あ！！

「よっしゃあッ！！ 久しぶりにナンパ行くぞおおお！！」

「レオン君は私の仕事に付き合っただけだからね」

「ガーーーーンッ！！！！」

ハッ！ ザマアねえな！ 貴様だけ幸福を味わおうなんて一万年と
二千年早いわ！！

「……………」

「ん？ どうしたティアナ。浮かない顔して」

ティアナがレオンとなのはを見詰めて少し表情を暗くしていた。

「あ、いえ……」

「はは〜ん……嫉妬か？」

「ッ！？／／／／／」

ティアナの耳元で囁いたら顔をこれでもかと言つぐくらい真っ赤に染め上げた。

「なに、安心しろ」

「えっ？」

「レオンはハーレム目指してからな、一夫多妻制の権限を狙ってるらしいぞ」

「……それって狙える物なんですか？」

「立場が上になるか、上の奴に功績を糧に交渉すれば良いらしい」

「…そうですね」

「それともあれか？ レオンさんの隣は私の物か？」

「んなあッ！？／／／／／」

やべ、滅茶苦茶可愛い！ 弄り甲斐があつて楽し！

「どした、イブキ。そんなに楽しそうな顔をして」

「おお、レオン。実はな…」「なんでもありませんよ！！」「ガフッ！
「？」

て、ティアナ……お、男として大事な所は……反則だろ…。

「そ、そうか…?」

「そ、そうなんです！　と言う事で行きましょう!」

「お、おう…」

ティアナはレオンの背中を押して隊舎へと戻っていった。

気が付けば他の皆もぞろぞろと戻って行っていた。

ちよい……言ってくれたって良いだろ。

『以上、芸能ニュースでした。続いて政治経済……』

食堂で俺達大人組は食事を取っていた。

今回の訓練で空幻は魔力を予想以上に消費したらしく、元身の狐の姿になり、狼のザフィーラと同じように食べていた。但し、ドックフードではなく俺達と同じパンとスープだが。

『当日は首都防衛隊の代表、レジアス・ゲイズ中將による管理局の防衛思想に関しての表明も行われました』

ニュースキャスターの言葉に、その場の全員がテレビに視線を向けた。

『魔法と技術の進歩と進化、素晴らしいものではあるが。しかし！それが故に、我々を襲う危機や災害も十年前とは比べ物にならないくらい危険度を増している！』

「あ、松ぼっくり」

「ぶっ！……フェリス、頼むから俺の前で言わないでくれ。ツボにはまる」

『兵器運用の強化は進化する世界の平和を守る為である!!』

その言葉に、演説を聞いていたその場の局員は拍手を上げた。

『首都防衛の手は未だ足りん。非常戦力においても、我々の要請が通りさえすれば、地上の犯罪も発生率で二十%、検挙率においては三十五%以上の増加を、初年度から見込む事が出来る!』

「このおっさんはまだこんな事言ってるのな」

ヴィータが呆れた表情で食事を進める。

「レジアス中將は古くから武闘派だからな」

「そうだ。私の意見にも同意を表してくれるとても良い奴だ」

「……………なんかすんごい事を意見してる様な……………」

それは気のせいと思いたい。でなければ管理局が大変な事になる気がする……。

「あ、ミゼット提督……」

「ミゼット婆ちゃん？」

なのはの言葉にヴィータがなんか可愛らしい反応を示した。

レジアスの後ろを見てみると、三人の老人が鎮座していた。

「あ、キール元帥とフィルス相談役もご一緒なんだ」

「伝説の三提督そろい踏みやね」

三提督……響きがかっこいいな。どれ、俺も何時か作ってみるか？

「でもこうして見ると……普通の老人会だ」

「「ぶふっ！」「」

俺とレオンがヴィータの発言に嘖いてしまった。

老人会って……！ 老人会って……！ ヴィータ、お前案外冗談が上手いじゃないか！

「ダメだよヴィータ。偉大な方達なんだよ」

「何かしたのか？ この三人は」

フェイトに尋ねてみた。

「管理局の連盟期から、今の形まで整えた功労者達だよ」

「ふうん……。それは…凄い…のか？」

政治とか良く分からんからな…。多分、もの凄く凄い事なんだろう。

「ま、あたしは好きだぞ。この婆さん達」

「なんだ？ 孫の様に可愛がられたからか？」

「うっせーな。文句あんのかよ？」

「いや別に。流石は幼児体型」

「アイゼン！」

「おっと！ はいはい、お婆ちゃんに会えない間はあそこにいるし
オン兄ちゃんが相手になってくれるよ」

「ホントか！？」

「うへえ！？ 俺え！？ 仕方が無い、お兄ちゃんがあそんであげよう…！」

「ヤッター！！！」

ふっ、所詮子供よのう…。期待を裏切らない。

「イブキ」

「ん？ なんだC・C・？」

隣でピザを（何故か食堂のメニューに乗っていた）食べていたC・C・が話かけてきた。

「この後暇だな」

「何故確定なんだよ」

「私に付き合え」

「そして話を聞け」

「ん……」

C・C が背中を指さして俺に見せた。

……ああ、そうかい。

「……分かった。昼からな」

「よしよし」

「……ちよつと待った!!」「……」

フェリス、フェイト、ハク、空幻が制止を掛けた。

「私の従者のくせになに楽しく休暇にしようとしている!」

「イブキ、貴方だけそんなズルイよ」

「イブキさん、私は貴方の補佐です！ だから片時も私から離れてはいけないんです!」

「ズリイー!! ズリイー!! 俺も連れてけー!! と言っか俺だけ連れてけー!!」

「お、おい！ 落ち付け！ 何でお前等がそんなに怒るんだよ！俺はフェリスの従者じゃないし、俺は溜まった有給を一つ使うだけだし、そこまでの補佐はいらないし、今回は俺に決定権は無いんだ」

ベラベラと一人一人に理由というか言い訳を話す。

そうだ。今回は俺がC・Cに怪我をさせてしまったお詫びなのだ。だから俺には一切の拒否権が無い。だから一年間ピザ食べ放題と言われても拒否できないのだ。

「そういう事だ。今回は私と行くんだ」

「「「くっ……………」」」

……………そんなに何か奢って欲しかったのか？ だったら言えば良いのに。あまり度を超えて無いものなら奢ってやるんだが…。

「親友よ…」

「なんだ？」

「この抜け駆け野郎がッ！！」

「がふっ！？」

隊舎、ロビー。

あゝ痛て……。レオンの野郎、いきなり殴りやがって。まあお返しにエロ本を灰にしたから別に良いがな。

にしても、C・C・C。遅いな。女性の準備は時間がかかると言うが、C・C・Cにそんな感性があったとはな。やはり不老不死の魔女でも一端の女って訳か。

「待たせたな」

「ん、いや別に……」

はい、デジャブ来ましたよ。何時かあったなこんな展開。俺が女性達（今回はC・C・Cだけ）の格好をみて固まったのは。

C・C・Cの格好は、白のYシャツに白のラインが入った黒い長袖の上着、黒のミニスカ、黒のニーソックスに黒の靴と、殆どが黒で構成されていたが、それがC・C・Cのスタイル抜群の魅力を引き出していた。

「どうだ？ 女の格好を褒めるのも、男の仕事だぞ」

「……似合ってるよ。……モデル顔負けにな」

「そうか、そうか では行くでしょう」

スツと俺の右腕に絡ませてきた。

「………何で腕を組む？」

「男が女をエスコートする時はこれがマナーだ」

「そうなのか？」

「そうだ」

なら仕方が無いか。どの道、俺には拒否権がない。

俺はそのままロビーをでて外に出た。

そこにはなのはと手を振っているフェイトがいた。

「あ、イブキ君にC・C・さん」

「えっ……」

「よう、何してんだ？」

「スバル達を見送ってたんだよ」

二人は街に出かけた子供達を見送っていたらしい。なんて健気な隊長達だろう。その心意気をフェリス達にやってはくれないだろうか。

「二人はこれからデートなんだね」

やたらとなのはがデートの部分強調して言ってきた。

と言っか、これはデートなのか？ まあ、異性が二人で出かけるのがデートならそうなのだろうが…。俺がデートをした時はもっとニヤニヤンしていたんだが……。

「そつだ。なのは、お前もアイツとしたらどうだ？ あいつなら速攻でYESと言うだろう」

「うん……でも私が独り占めしたら、皆が怒りそつだし」

C・Cの言葉に首を捻りながらなのはが答えた。

「確かに。あの変態は何だかんだ言つて、他の女共に人気があるしな」

確かに、あの顔だもんね。まるで二次元の男みたいにかっこいいしな…。性格はアレなのに、顔が良い奴は何をしても許されるしな…。

例えば、レオンが女性の部屋に不法侵入しても、寧ろ嬉しいって言われそつだし。

「……イブキ」

「ん？」

フェイトが神妙な顔付で話しかけてきた。

「絶対、絶対に間違わないでね！」

「な、何を？」

「なんでも！ 絶対に騙されちゃ駄目だからね！ 私、ずっと見てるかね！」

「怖いなおい！ お前はストーカーにでもなるつもりか！？」

「イブキをよろこば……守る為ならなっ……てあげる！」

「今絶対に喜ばすと言って言おうとしたら？ 俺はそんなんで喜

ばなからな！ それに何から守るんだよ！？」

「それは勿論、おん」はい、フエイトちゃん、そろそろ行くこつね
「あ、待ってなのは！ まだ話は…！」

フエイトはなのはに引っ張られ、隊舎に戻っていった。

いったい何が言いたかったんだろう。

「おい、行くぞ。他の女に目を取られるな」

「取られてない。おい、引っ張るな！」

街に出て、取り敢えず俺達は歩いた。C・Cはそれだけでも楽し
そうな表情をして、街を見ていた。

「平和だな。悪魔がこの世界を狙っているのにな」

「とは言っても、未だ表だって現れてないからな。悪魔の存在を知っているのは、レジアス以上のクラスだけだからな。俺達の存在も、管理局ではただの囑託らしいしな」

「そうだったのか？」

「知らなかったのかよ…」

「興味が無い事は頭に入れない主義なんだ。…あ、あそこにピザ屋があるぞ」

C・Cは俺の腕をグイグイ引っ張って歩き出した。

注文し過ぎるなよ、と言いかけたが、C・Cの楽しそうな笑顔に口を閉じた。

今日、この日はあの時みたいに存分に付き合っか…。

「んん〜！ この新メニュー、中タイケるではないか！ 今度からはコレを宅配してもらおう」

「ひ〜ふ〜み〜…………二十枚…………！？」

「おい、ここに入るぞ」

「ん…………おい、ここって…………」

「下着屋だ」

「見れば分かる！ 俺も入るのか！？」

「何を言っている。男の意見を聞かないと、下着を着ける意味が無い」

「お前は下着を何だと思っている」

「欲情の為の道具。第二目的で身体の保護」

「逆だ!!」

〓〓店内〓〓

ヤバい……色々とヤバい。

ただ飾つてある下着を見るのはそんなに恥ずかしくない。マネキンを見て興奮もしない。ジロジロと店内の人に見られるのはまあ、少し苦だが問題無い。

俺が問題と言っているのは、この後の展開だ。

俺の前には試着室がある。中にはC・Cが入っている。

もうお分かりだろう。そう、C・Cが中で下着の試着をしているのだ。俺はそれを待っている。なんでも、俺に感想を聞かせて欲しいとか。

何故俺なのかはこの際どうでも良い。問題なのは、ここが何処で、周りには何がいるかだ。

ここは女性専門の下着店、当然周りには女性ばかり。見渡した限り、

この店内にいる男性は俺一人。その中で下着姿で出てきたC・Cを見て感想を言ってみろ、どんな視線を送られるか！ 憐れみ？ 同情？ 軽蔑？ 変態？ 恐らく後者二つだろう。

俺はまだ死にたくない。けど公開処刑される。

『よし、着れたぞ』

来た！ 覚悟を決めよう！ せめて鼻血が出ない様に！

「どうだ？」

「……………」

くっ！ インパクトが強過ぎる！ さあ、どうする！ 馬鹿正直に言っつて、周りの奴らに軽蔑されるか、何も言わないでC・Cに不快な思いをさせるか、二つに一つ！

「……………結構良いぞ……………魅力的で……………／／／／／」

「「「……………」」」

…………くうく、視線が痛い。悪かったな！ 下着姿をマジマジ見詰めて！ 仕方が無いだろ！ 俺だって男だ！ C・C・みたいな美女の、しかもほぼ紐の様な黒の下着姿に反応しない筈が無いだろ！

「ふふふ…そうか。なら次はTバックで…」

「C・C・は色っぽい下着が一番良い！ だからそれ全部買おう！
そして早く出よう！ それが良い！」

「あ、おい！」

俺はC・C・が試着している奴以外の選んでいた下着を全てかごに入れ、レジに直行した。

今思えばもの凄く恥ずかしかった。女性物の、しかもエロい下着を買っ男の姿って…。

「むっ〜！」

「はあ…恥ずかしかった…」

まさか俺が下着店如きで恥ずかしくなるとは…。あの頃はそんな事無かったのに…。と言つか更に先に行っていたのに…。耐性が無くなったのか…？

「むむっ…！ あっ！ ええい！ もう十回目だぞ！ 何故取れん！？」

C・C・は今ゲーセンにあるUFOキャッチャーで、何かを取ろうと頑張っていた。

「何を取ろうとしてんだ？」

「アレだ！ あの白のウサギの様な奴だ！」

どれどれ……………おい、アレは確か某異世界を旅する物語に出てくるモコ○もど○じゃないか！ 何故この世界にある！

「……………アレが欲しいのか？」

「ああ！」

「……………任せな」

お金を入れてスタート。

俺はこの類は大の得意だ。過去に全ての景品を取った事もある。

俺は的確なポイントにクレーンを操作し、いとも簡単にモコナをゲットした。

「ほらよ…って、思ったよりデカイな」

モコナの大きさは約四十〜五十ぐらいの大きさで、抱き付くのに最適な大きさだった。

「……凄いな。良く簡単に……」

「まあ、慣れだな」

「……礼は言わんぞ。当然の事をしたんだからな」

「はいはい、分かっていますよ、魔女様」

「なら次だ。まだまだ時間はあるぞ」

C・Cはまた腕を絡めてきた。俺はもう諦めているので、何も言わない事にした。

その後も、映画に行ったり、ショッピングしたりと、ごく当たり前の事をやり通した。

それでもC・Cは満足してくれたのか、終始笑顔でいてくれた。

そして、今はカフェで休息を取っている。

「それにしても、やはりお前はデートに慣れているな」

「まあ、昔は毎日の様にやっていたからな……」

「……寂しいか？ 会えなくて」

「……寂しくない、と言ったら嘘になるな。けど……もう乗り越えた」

「……？」

「もう三年前に死んでんだ……」

「……そうか」

あの時は辛かったが、俺はもう乗り越えている。……いや、まだ乗り越えていないのかもしれない。俺のこの復讐心を消さない限り、本当に乗り越える事は出来ないのかもしれない。

「ま、今はお前等がいるし、寂しいと思う事はないな」

「……どうせそう言う意味じゃないのだろう」

「ん？」

「何でも無い」

何でちよつと不機嫌なんだ？ やっぱりこう言った時に他の女の名前を出すのは不味かったのか？ いや、それって恋人同士の時だよな？ あれ？

「それで？ その女はどんな女なんだ？」

「は？」

「どんな女だ。容姿は？ 性格は？ 歳は？」

「な、何でそんなに興奮してんだ？」

「良いから！」

「は、はい！」

俺は財布から一枚の写真を出した。これは俺がこの世界に来た時に、唯一肌身離さず持っていた代物だ。

「この女か……」

その写真には、座っている俺に後ろから抱き付いている写真だ。

「……日本人か？」

「日本人だ、れっきとした」

彼女の容姿は、日本人とは懸け離れている。

薄いピンクの長髪に、薄紅い瞳。身長は女子の平均ぐらいだが、胸はハクや空幻並に大きい。白く綺麗な肌で、誰が見ても美人と言う程だ。

「お前も目が青色だな。何でだ？」

「さあ？ 突然変異らしい」

「この女もか？」

「ああ。えっと、名前は」

「それは言わなくていい。聞きたくない」

「そうか。ならいいが」

Ｃ・Ｃは写真を俺に返して、飲み物を飲んだ。

「どっちだ？」

「あ？」

Ｃ・Ｃが唐突に聞いてきた。

「何が？」

「その女と私、どっちが美人だ」

「え……」

え〜っつと……これはどう答えたら良いんだ？ C・C・C・って答えたら彼女に悪いし、かといって彼女と答えたらC・C・C・に悪い……。正直、どっちも美人なんだが……と言うよりどちらも俺の好みのタイプだし……。

「どっちなんだ？」

「い、いや……それは……」

誰か、誰でも良い！ 俺を救ってくれ！

プープープーッ……！

救世主はきた。最悪なおまけ付きで。

「キヤロから全体通信…？」

俺は通信を開いた。

『こちら、ライティング4！ 緊急事態につき、現場状況を報告します…！』

「……………」

『サード・アヴェニュー、F23の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見。ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人』

「おめ、もうすぐよ。もうすぐ始まる。貴方の復活が…！」

影はそこまで来ていた。この平和を壊す、最悪が。

俺はまだ、その事に
気付く由もなかった。

動きだすもの(前書き)

作者「いやあやあ、順調に更新しているよ〜!」

イブキ「これが続けばいいんだがな」

作者「ですよね〜」

動きだすもの

エリオ、キャロの所に集まると、丁度部隊全員が集まった。
シャマルとリインも同行しており、シャマルとハクはエリオ達が見つけた女の子を診た。

「バイタルは安定していますね」

「うん。危険な反応も無いし…心配無いわ」

取り敢えず、女の子の命に別条はないようだ。

「ケースと女の子はこのままヘリで搬送するから、皆はこっちで現場調査ね」

「……はい!」「」「」

その後、なのはは女の子を、フェイトはケースを持ってへリに向かった。

「レオン、お前はフォワード達と一緒に調査しろ」

「んあ？ ああ……お前は？」

「……今回も悪魔が出るかもしれない。俺達はそれに備えて待機しておく」

もしこれでガジェットと共に出てきたら、スカリエツティと悪魔の繋がりがほぼ確定する……。

「分かった。だが、こっちの近くに現れたらお構いなしに殴るからな」

「……息子と娘と妹を頼んだぞ」

「任された」

俺達とレオン達はそこで別れ、俺達はフェイト達に付いて行った。

「その白いぬいぐるみは何だ？」

「ふふん…デートの証だ」

「……斬る」

「……貫く」

「……燃やす」

「……刈る」

こらこらこら！ 人のプレゼントに何しよるかッ！？ その剣と矢と火とバルディッシュをしまいなさい！！

へりに到着し、暫くした頃、六課よりガジェットが出現したと連絡が入った。

『ほんならヴィータは、リインと合流。協力して、海上の南西方向を制圧』

「南西方向、了解です」

『なのは隊長とフェイト隊長はあ北西部から』

「了解」

『へりの方は、ヴァイス君とシャマルに任せてええか？』

「お任せあれ」

「しっかり守ります」

『ギンガは、地下でスバル達と合流。道々、別件の方の話しも聞かせてな』

『はい』

はやてが話している相手、名前はギンガ・ナカジマ。スバルの実姉らしい。どうやらこの事件の他に、関連性がありそうな事件が発生したようで、この事件に参加する事になったみたいだ。

……スバルの姉と言う事は、歳によって俺に妹になるのか？ ……
…ん？

『イブキ隊長は……』

「……………悪い、今仕事が出来た」

来たな……………悪魔が…。だがこれはザコだな。

『悪魔か？』

「ああ。だが大した事は無い。俺一人で向かうから、ハク副隊長以下をガジェットに向かわす。いいな？」

四人に確認を取ると、静かに頷いた。

『分かった。ほな、ハク副隊長と空幻さんはリインと一緒に、フェリスさんとC・Cさんはなのは隊長と一緒に行動してくれる？』

「……「ああ／了解」「……」

『ほな、作戦開始や！』

さて……刈りの時間だ。

イブキ s i d e o u t

レオン side

俺達は今下水道の中を走っている。
副隊長と言う事で、俺がこの場の指揮を取る事になった。

「ギンガさん、お久しぶりです！」

『うん、ティアナ、現場リーダーは貴女でしょ？』

「いえ、リーダーは…」

「ギンガちゃん、リーダーは俺だ」

通信に割り込んでギンガちゃんに言った。

『その声……ええっ！？　れ、れれれレオン隊長！？』

「今は副隊長だけだな」

『ど、どどどどどっ！……？』

「今はそれよりも南西のF・94を目指してくれ。そこで合流しよう」

『は、はいっ！』

ギンガは荒々しく返事をした。

ありゃ……相変わらず初な奴よのっ……くっくっく……。

「ギンガさんって、スバルさんのお姉さんなんですよね？」

なぬっ！？　　そうなのか！？　　スバル・ナカジマ……ギンガ・ナカジ

マ…………ホントだああああ!!？

「そう！ 私のシューティング・アーツの先生で、歳も階級も二つ上」

そうだったのか…………くそう、そうだったらイブキに取られる前に手を出しとくんだった…………！ 初の姉m<自主規制>を味わえる所だったのに!!

「レオン副隊長は、ギン姉と知り合いだったんですか？」

「ん？ ああ。陸にいた頃、よく飯とか食いに連れて行ってたな」

「…………ナンパ目的ですか？」

「違うな…………間違っているぞティアナ！ ナンパではなく、きゅ「ギンガさん、デバイス同期で総合位置把握と独立通信が出来ます。準備良いでしょうか？」ちよっちゅ？ 無視っすか？」

まったく、嫉妬かよ。心配すんなって。俺は平等に愛をばら撒くからさ。ティアナもちゃんと愛してやんよ！

「んで、ギンガちゃん。そっちの事件、話してくれるか？」

『はい。私が呼ばれた事故現場にあったのは、ガジエットの残骸と、壊れた生体ポットなんです。丁度、五、六歳の子供が入るくらいの』

生体ポットだ？　なんかきな臭え感じがしやがるな……。

『近くに何か重いものを引き摺って歩いた様な跡があつて……。それを辿って行こうとした最中、連絡を受けた次第です』

成程……確かに関連性がありそうな感じだな……。五、六歳の子供に発見した女の子、重い物にレリックケース……。ほぼ間違いなさそうだな。

『それからこの生体ポット、少し前の事件で似た物を見た覚えがあるんです』

『私も…な』

ギンガちゃんとはやてちゃんにはこのポットに覚えがあるようだ。

『人造魔導師計画の素体培養器…』

人造魔導師だあ…！？　おいおい、そりゃやべえな。

『これは悪魔で推測ですが、あの子は人造魔導師の素材として作り出された子供ではないかと…』

「人造魔導師って…？」

「優秀な遺伝子を使って、人工的に生み出して子供に、投薬とか機械部品の埋め込みで、後天的に強力な能力や魔力を持たせる。それが人造魔導師」

「倫理的な問題は勿論、今の技術じゃどうしたって色んな部分で無理が生じる、コストが合わない。だからよっぽどどうかしてる連中

でもない限り、手の出したりしない技術の筈なんだけど……」

スバルちゃんとティアナちゃんがキャロに説明していく。

確かにこんなモンに手を出す奴はどうかしてる。そんな人権を捨てた技術なんか頼って、完璧な物が出来る筈が無い。いや、それどころか完璧なんて物は……。

「来ます！ 小型ガジェット六機！」

キャロちゃんのデバイスが反応し、俺達に教えてくれた。

「さあて、今はバカリエッツィの玩具の相手をしますか！」

「「「はい！」「」」

レオン s i d e o u t

イブキ s i d e

別行動を取ってから、俺は悪魔の反応がした方向に向かっていった。
そこは街の裏通りだった。

マズいな……もしかしたら一般人に被害が出ているかもしれん……。

俺は一先ず地面に降り、悪魔の反応が無いか散策した。すると……。

きゃああああっ!!!

「ッ!?! 悲鳴っ!?!」

甲高い女性の悲鳴が聞こえた。

俺はすぐに聞こえた方向に向かった。
すると、向こうのから女性が走ってくるのが見えた。

「た、助けてええ!!!」

「『ギヤハハハ』」

二体の悪魔、袋に手足を取りつけた様な悪魔、スケアクロウが女性を襲っていた。

「くっ!」

俺は悪魔の目の前に皇の次元武を展開し、ディメンション・オブ・エンペラー宝具の雨を喰らわせた。
スケアクロウを意図も簡単に消え失せた。

その後、俺は地面に蹲っている女性の元に駆け寄り、安否を確認した。

「おい! だいじょう

!?!」

な……んで……？

「た、たすけて……」

なんで……なんで……！

「桃……香……？」

「……え……？」

嘘だ……！ 何で桃香が……！？ 桃香はアイツに！ アイツに殺され……！

「……っ」

「…ッ！？　おい！」

彼女は突然力を失った様に崩れ落ちた。俺は彼女が地面にぶつかる前に彼女を受け止めた。

「おいっ！　しっかりしろ！」

「うっ……」

容態を確認すると、どうやら気絶しただけのようだ。

俺は改めて彼女の顔を見た。

薄いピンクの長髪に、気を失う前に見えたルビーの様な紅い瞳、整った顔立ち……。

あまりにも酷似し過ぎている……。

「桃香………なのか……？」

ザッ…。

「…ッ！」

数体の悪魔が俺達を囲んでいる気配が感じられた。しかも気配から狙いは俺じゃない。彼女のようだ。

「……スケアクロウ十体、マリオネット七体……。何だって彼女を…」

…いや、何だっついていい。俺が今するべき事は……。

「来い…。俺が貴様らを破壊する…！」

それを合図に一斉に飛びかかって来た。

先ずは鎌を持ったスケアクロウが三体に両手に三日月型のギロチンを持った赤いマリオネットが二体飛びかかって来た。

「死ね」

だが視界に入った事でそいつ等は破壊された。

残り十二体。

後ろからスケアクロウが二体斬りかかって来た。

それを次元武で刺殺。

残り十体。

一体のマリオネットが上からギロチンを飛ばしてきた。

それを彼女を抱きかかえ前に回避。同時に次元武で殺す。

残り九体。

残りのマリオネットがギロチンをショットガンに切り替え、俺達を取り囲み発砲。

次元道を開き上空に移動。目標を失った弾丸はそのまま取り囲んだ

マリオネットに直撃。悪魔は消え失せた。

残りスケアクロウ五体。

姿が視える数二体。残りの三体は
いた。ビルの壁を蹴って
俺の前に跳んでいた。

「撃ち抜け」

次元武を悪魔の目の前に展開し、宝具を掃射。

これで全て
！？

ドス…！

「がっ…！？」

突如、右の脇腹に激しい痛みが走った。見てみると、何かが貫通し
穴が開いていた。

しまっ…！　まだいたのか…！？　何処から…！？

辺りを見渡したが、悪魔の気配すらも感じられなかった。

またあの仮面野郎か…？　だがアイツならこの程度では…。

「くっ…これ以上の飛行は無理か…」

おかしい…。体がグラつく……。まさか…毒か何かか…？

俺はふらふらしながら、抱えている彼女を落とさない様にビルの上に着地した。

…血が顔にかかちまつてるな…。

彼女の顔には俺の血がかかっていた。俺は投影でタオルを出し、血を拭った。

それから彼女をこのままには出来ないので、ハクに通信で連絡を取

った。

『どうしま イブキさん!?!』

「大声を出すな。ここのポイントを送るからすぐに来てくれ。……
一般人が悪魔に襲われた」

『…ッ! 分かりました』

通信を切り、辺りを警戒しながらその場に寝転んだ。

くそ……何なんだ……。頭がボーっとしてきた……。やはり毒か……? ?

ドオオオオン!!!

「……?」

遠くの中で爆音と共に白銀の光が広がった。

ああ……俺、なんか視力上がってるのか……？ 遙か遠くの筈なのに
はやての顔がくつきり見えるぞ……。

どうやらはやてが魔法をぶっ放しているようだ。

ああ……だめだ……意識が……。

『寝ないで』

「……ッ！……」

今の声……桃香……!?

失いかけた意識が戻り、身体のたるさも嘘のように消えた。

俺は起き上がり、隣で気を失っている彼女を見た。しかし彼女は先程と変わりなく気を失っていた。

……気のせいか？ いや、だが確かに……。

「イブキさ……ん!!」

「ん……?」

空から声がかして見上げると、ハクが流星の様に飛んできた。

「大丈夫ですかっ!?!」

「あ、ああ……たぶん」

腹の傷も何時の間にか塞がってるし……。前から気になってたんだが、俺の怪我、この世界に来てから治りが異常じゃね？ 魔力が高いのと何か関係してるのか？

「この女性ですね！」

「…ああ、たぶん気を失ってるだけだと思っが…。ハクはこの人を連れてへりに向かってくれ」

「イブキさんは？」

「もう少し悪魔が居ないか確認する。どうやら気配を消す事が僅かながら覚えたようだ」

「…わかりました」

「頼んだぞ」

ハクは女性を抱えてへりへと向かった。

さて、周りを調べるか。それに、何か嫌な予感がするしな……。

イブキ side out

レオン side

ギンガちゃんと合流し、ガジェットを破壊しながらレリックを探して数十分。俺達は広い空洞に出た。

「…あ！ ありました〜！」

どうやらキャロが見つけたようだ。

「よし、ならさうそく」

ガツ、ガツ、ガツ！

「…ッ！ 何この音…」

「…ッ！ キャロちゃん！ 後ろに跳べ！」

「えっ…！ きゃあッ!？」

突如、キャロちゃんの上から赤黒い魔力弾が飛来し、キャロちゃんの足元で爆発し、キャロちゃんが吹き飛んだ。

「でやああああ…!」

エリオが魔力弾の飛んできた方向に飛んで槍を振るった。すると何かを弾き、エリオの肩が少し切れた。

「エリオ君！」

エリオがキャラちゃんの前に立ち、目の前を見据えた。

そこには黒い人型の昆虫みたいな奴が立っていた。

悪魔か！？ けどイブキが言っていたような変な気配はしねえぞ！？

「……………あつ！」

キャラちゃんが吹き飛ばされた際に離れたレリックケースを紫の髪をした少女が拾った。キャラちゃんは急いで取り返そうと少女の目の前に走ったが…。

「……………邪魔」

強力な紫の魔力砲で、咄嗟に展開したバリアーを破壊してキャロちゃんを吹き飛ばした。そのままエリオにぶつかったが、勢いは止まらずエリオ共々飛ばされ、柱にぶつかった。

「エリオ！！ キャロちゃん！！ くっ！」

俺は二人に駆け寄り、安否を確認した。エリオは大丈夫なようだが、キャロちゃんは気を失っていた。

あの小娘……！ ちょっとくらす説教が必要なようだな……。イブキに任せられてんによ……！

「おい！ そのお嬢さん！ それは危険な物なんだ！ お兄さんに渡して、ちょっとお話ししようや！」

「……」

無視か。まあいい。気は逸らした。

少女の目の前にクロスミラーージュのモード2が現れ、それからティアナちゃんが現れた。ステルスモードになって少女に近付いたのだ。

「ごめんね乱暴で。でもね、これ本当に危ない物なんだよ」

よし、これで確保は出来た。あとはレリックを封印してあの子を取り調べるだけだな。……………ん？

「……………ッ！ 皆伏せろっ！」

その直後、赤い閃光と爆音がこの空間を支配した。

チイツ、仲間が居たのか！ これでは逃げられる！

光が収まると、ティアナちゃんに拘束されていた少女は難なく拘束から逃れ、ティアナちゃんから離れていた。

ティアナちゃんは少女を撃とうとしたが、人型昆虫に蹴り飛ばされた。

しかし転がった先で魔力弾を放った。が、またしても人型昆虫が間に入り、盾となった。

「ったくも、あたしたちに黙って勝手に出掛けちゃったりするからだぞ、ルーラーもガリユーム」

「アギト…」

そう呼ばれたのは、リインちゃんと同じサイズで、赤い髪に赤い羽根をはやした女の子だった。

「おう、本当に心配したんだからな。ま、もう大丈夫だぞルーラー。なにしろこのあたし、烈火の剣精、アギト様が来たからな！」

と、魔法が何かで周りに小さな花火を出して決めた。

馬鹿なの？　ねえ馬鹿なの？　馬鹿だな。

「おらおら！　お前等纏めて、かかって来や〜！」

ほっほう…なぐんかムカついた。こっちは親友の娘さん傷付けられたり、ギンガちゃんとの会話が無いわでカッカしてんのによう……調子こいてんじゃないぞ、小娘ちゃん。

「でもアンタを相手にするのはちょっと厳しいかな？」

「ハッ！ 分かってんじゃないか。なら大人しく降参するか？」

「……ねえスバル。レオンさんって、六課じゃこつなの？」

「え？ うん。いつもこんな感じだよ」

「……そう……（そんな……陸じゃあ騎士様だったのに……）」

なぐんか、女の子が悲しんでる気がする……って、今はこつちだ。相手は降参するきはねえみたいだし……少女相手は気が悪いが仕方がねえ。

「なら行くぞ、赤髪少女に紫髪少女！」

「来いやー！ー！』おおっと、それはいけませんね』なにっ！？」

「ッ！？」

攻撃を仕掛けようとした瞬間、頭に声が響いた。

この声……！ アイツの……！

『貴女では荷が重すぎますよ、アギト』

「うっせ！ テメエに指図される覚えはねえ！」

「では好きなようにさせてもらいますね？」

「…」

後を振り向いたら、ソイツはいた。
フード付きの黒マントを纏った奴が。兄さんの仇が。

「場所を変えましょうか、おうぎ皇騎士よ」

瞬間、俺は飛ばされた。

因縁（前書き）

ウドウの名前が編集ミスで、直せていませんでした。

因縁

どこかのビルの屋上。

そこに二人の少女がいた。

一人は茶髪で何か長い物を布に隠して持って、空を見ている。

もう一人は同じく茶髪で眼鏡をかけた少女。こちらはただ座っているだけ。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

眼鏡をかけた少女がもう一人に尋ねた。

「ああ。遮蔽物も無いし、空気も澄んでる。…よく見える」

その少女、ディエチが見据える遠くの空。
そこには機動六課のヘリが飛んでいた。

「でもいいのかクアットロ。撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃう事になる」

「うふふ……ドクターとウーノ姉さま曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫、だそうよ」

「ふん……」

そしてディエチは布を剥ぎ取った。出てきたのは長い砲身だった。

それから眼鏡の少女、クアットロに通信が入った。

『クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギトさんが捕まったわ』

「ああそう言えば例のチビ騎士に捕まってましたね」

『今はセインが様子を覗ってるけど……』

「フォローします？」

『お願い』

通信は切れた。

そしてクアットロは念話を先程でたセインに繋いだ。

『セインちゃん』

『はいよ、クア姉』

『こっちから指示を出すわ。お姉さまの言う通りに動いてね』

『了解』

クアットロはセインとの念話を切り、今度は捕まった少女、ルーテシアに繋げた。

『はあい、ルーお嬢様』

『クアットロ……』

『何やらピンチの様で……お邪魔でなければクアットロがお手伝い致します』

『お願い……』

『はい。ではお嬢様、クアットロの言う通りの言葉をその紅い騎士に』

紅い騎士……即ちスバル達の援護に当たったヴィータだ。

へり付近

そこにへりに向かって飛行する、四つの影があった。

それはなのはとフェイト、C・C・とフェリスだった。

「見えた！」

「良かった、へりは無事」

なのはとフェイトはへりの安全に安堵した。
だが……。

ロングアーチ

「市街地にエネルギー反応！」

「大きい！」

「そんな、まさか!？」

「砲撃のチャージを確認……物理破壊型、推定Sランク！」

ビルの屋上

そこで砲身を持った少女、デイエチがチャージしていた。

「インヒューレントスキル、『ヘヴィバレル』発動」

デイエチの横でクアットロガルーテシアに指示を出していた。

「逮捕はいいけど……」

「逮捕はいいけど……」

「……………」

「『大事なへりは放っておいていいの?』」

「なっ!?!」

ルーテシア……クアットロの言葉にその場にいた全員が息を呑んだ。
必死に何処かへ通信を開こうとしていたティアナまでも……。

「後十二秒…十一…十…」

「ああ、お嬢様？ もう一言追加いいですか？」

「『あなたはまた守れないかもね』」

「…ッ!？」

「発射」

デイエチの声と共に、砲身から紅いビームが放たれた。
それはとても大きく、なのはの魔力砲と大差無かった。
そしてそのビームは真っ直ぐへりに向かい……

ドガアアアン！！

見事直撃した。

「砲撃……へりに直撃……」

ロングアーチで誰かが呟いた。

「そんな筈ない……状況確認！」

「ジャミングが酷い！ データ来ません……」

「……そんな」

「ヴァイス陸曹とシャル先生、ハク副隊長が……」

フォワード達は絶望に呑まれた。
自分達の仲間が撃たれた事に……。

「テメエエエ……」

「ふ、副隊長！ 落ち着いて！」

ヴィータがルーテシアに掴みかかった。
それをスバルが止めようとした。

「うるせえ！ おい、仲間がいんのか！？ 何処にいる！？ 言え
！！」

しかしルーテシアは感情の無い表情で佇むだけだった。

「……ッ！」

ギンガが何かに気付いた。レリックケースを持ったエリオの足元に腕があつたのだ。

「エリオ君！ 足元に何か！」

「えっ！？」

と、エリオが地面を見た直後、地面からまるで自ら飛び出てきた様に水色の髪をした少女が飛び出てきた。

そしてエリオが持っていたレリックケースを奪い取り、また水に潜る様にして地面の中に隠れた。

隠れた少女を探していると、今度はルーテシアの前に現れ、ルーテシアごと地面に潜った。

そして、ルーテシアと共に捕まっていた赤髪のアギトも、一瞬の隙を突いて逃げ出していた。

そう、完全に逃げられたのだ。

「反応…ロストです」

「くそっ！ ロングアーチ、ヘリは無事か？ あいつら、墜ちてねえよな！？」

ヴィータは叫んだ。僅かな希望にすぎないように。

「つつふつつのぷ。どう？ この完璧な計画」

ビルの屋上でクアットロが満足げに微笑む。

「黙って。今命中確認中」

デイエチは爆発の煙の中、目の倍化率を上げた。

「……あれ？ まだ飛んでる」

「あは？」

煙が徐々に風で流される中、ヘリは未だに飛んでいた。

「……………」

デイエチはへりの横に何かがいるのが見えた。
デイエチは目の倍化率を上げ、その正体を確かめようとした。

「……………ッ!？」

その正体は、左目を赤く光らせた男だった。

「こちらエンペラード1、へりの防御に成功」

危ねえ……………あと少し遅れていたら間に合わなかった。

俺は悪魔を捜している時、へりに向かって赤いビームが向かってい

るのを確認し、次元道で射線上に移動した。
宝具で相殺しようと思ったが、間に合わないと思いギアスを使用した。

幸い、ギアスで破壊できる力の大きさだったから、なんとか破壊できた。

その後、フェイトがこのビームの発射位置に向かってプラズマランサーを放った。フェイト達はそのままビルに向かい犯人を追った。

あとはあいつらが何とかしてくれるだろ。

「くっ…！」

左目が…！ これ以上のギアスは危険か……。

強力な攻撃をギアスで破壊した代償は大きかった。
体力の激しい消耗、身体への負担が予想以上に大きかった。
おまけに左目からは血が流れ出ていた。

「イブキさん！ 大丈夫ですか!？」

「だ、だいじょう……ぶだ」

ハクが通信を繋げてきた。
正直、もう体力の限界だが、まだ敵がいるかもしれない。警戒は怠れない。

左目を押さえ、辺りを見渡した。
犯人を追った四人は、はやての空間魔法で犯人を追いつめ、四方を囲んでいた。

そしてフェイトとなのはは特大の魔力砲を。フェリスは黒い魔力を剣に纏わせ、斬撃波を放った。

C・Cは遠距離攻撃が無いから待機。

向こうは何かかなりそうだな……。だが、まだ嫌な感じが拭えない。
何なんだ、これは……。

『い、イブキ隊長!』

「ッ! どうした!？」

ティアナからの突然の通信。ティアナは何故かとても焦っていた。

『レオン副隊長に通信が繋がらないんです!』

「何!?!」

『あの時の、六課を襲撃した敵と遭遇して!』

「!?!」

『何度も救援要請をしようとしたんですが、何故か通信できなくて!』

ドオオオン!!!

「ッ!?! 何だ!?!」

あれは!?! まさか……レオン!?!

街中のビルが次々と倒壊していき、青い光の爆発が起こった。その中心にレオン魔力反応があった。しかもドンドン膨れ上がっていつている。

俺は通信を切り、レオンの元に向かった。

レオンの元に向かうと、そこはまるで地獄絵図だった。
悪魔の雑魚の死体があちこちと転がっており、血の匂いが鼻を突いた。

「『アアアアアアアア！』」

「ッ！ ……レオン？」

何処だ！？ 何処にいるレオン！

「『オアアアアア！』」

くそっ！ この獣のような声……レオンが悪魔の力に吞まれてるの

か！？

俺は上空からレオンを捜すが、魔力反応がするだけで姿が見えない。と、また一つのビルが爆発し、倒壊した。そこから青い光が飛び出してきた。

「レオン！」

それはレオンだった。レオンは全身から青い魔力を溢れださせていた。

「レオン！ 無事か！？」

「『イブキか！』」

レオンは二重音声で喋った。どうやら意識はしっかりしているようだ。

「レオン敵はどこだ!？」

「『あの瓦礫の中だ! だがアイツ、まるで実体がねえ! 攻撃が全部すり抜けたり、跳ね返してきやがる!』」

……間違いない……あの男だ。あの時も……!

「『だが絶対に何かある筈だ! 兄さんは一度あの野郎に一撃与えた!』」

「だったら俺達にも出来るな。レオン、まだ力を出せるか?」

「『つたりめ だ!』」

上等、それでこそレオンだ。

俺は次元武を展開し、全方位を囲んだ。
そして魔皇刀ファオルネスを抜き、瓦礫の中を見据えた。
しかし中々敵は姿を現さない。

不思議に思った俺は近付こうとした。その瞬間、後ろから声が聞こえた。

「おや……獲物が一人増えましたね」

「『ツ！？』」

「しかも……貴方、そこいらのとは違いますね……」

この声……。

過去が蘇る。家族を殺された時の記憶が鮮明に蘇ってくる。

「しかし、いくら変わったものが加わろうと私には傷一つ付きませんよ」

父さんが殺され、母さんが殺され、兄さんが殺され、姉さんが殺され、桃香を目の前で殺され、俺には憎しみを植えつけられた。

「『ハッ！ こいつが来たからにはもう終わりだぜ！』」

「ふはははっ！ そうですか！ では精々楽しませて
おい…」
…何ですか？」

膨れ上がる。俺の身体から憎悪が溢れだしてくる。

「三年前、地球の日本である一家を殺しただろ」

「『イブキ…？』」

「……何を言っているんです？」

「そしてその一家の一人を生かしただろ」

「……何故それを知って……ッ！ まさか
！」

「そのまさかだ！」

「レオン！ やはりお前は下がってる！」

「『何言つてやがる！ 俺も…』」

レオンの言葉を待たず、次元武から一斉に宝具を発射した。
しかし宝具はまたしてもすり抜け、俺とレオンにも襲いかかった。

「『おい！ 何を考えて……聞いてんのか！？』」

「うるさい…」

ギアスで破壊を試みるが、敵の魔力が大き過ぎるのか、何も変わり無かった。

「やはり、ただの人間ではなかったんですね！ あの時殺さずに取っておいて正解だった！」

「うるせえ！ 貴様は！ 貴様だけは！ 苦しみを味合わせて殺す

「！」

「やって見せて下さい！ 私を快樂の頂点へ！」

敵も攻撃を始めてきた。

何も使わず、素手での攻撃。

ただそれだけなのに、恐ろしく威圧感があった。

「ぐっ！」

顔面を殴られ、地面に叩き付けられる。

「ははははっ！」

奴はそのまま地面に急降下し、俺の腹に足からのしかかった。

「ぐぶっ！？」

「まだです！ まだですよ！」

そのまま何度も何度も踏みつけてくる。

「『イブキ！』」

「煩いですよ！ 今は引っ込んでてください！」

「『ぐあっ！？』」

レオンは奴の片手から出た紫の波動により吹き飛ばされた。

「さあ！ 私を楽しませて下さい！」

「『黙れ！！ この下衆が！！』」

「ッ!？」

怒りからか、俺の全身から魔力が爆発した。その衝撃で奴は離れた。その隙に体勢を立て直した。

「『貴様は殺す! どんな手を使っても!』」

声もレオンの様に二重音声になって、まるで悪魔のような声だった。

「ははっ……あはははははははっ! なんですかそれは!? まるで悪魔じゃないですか!」

「『悪魔は貴様だろ! “ウドウ”!』」

「おおっ! 私の名前まで覚えてくれたのですか!? これはなんと嬉しい!」

虫唾が走る……殺したい……切り刻みたい……へし折りたい、砕きたい引き裂きたい燃やしたい殴りたい切り落したい絞め上げたい!
! 俺の憎しみ全てを奴にぶつけない! だから……魔皇刀!
ファオルネス

俺に力をよこせ！！ 奴を殺せるのなら悪魔だつて何だつていい！！ 力をくれ！！

そう願った時、俺の想いに呼応するかのように魔皇刀から赤黒い魔力が溢れだし、全身を覆う魔力が更に濃くなつていった。

「ああ、いい！ いいですよ！ その力！ 私を快樂の頂点へ導いてくれるでしょう！」

「『ダメレ！ キサマニミチビクノハジゴクダ！』」

「あはははははっ！！」

ウドウは紫の波動を放ってきた。俺はそれを手から放った赤黒い魔力で消し去った。

「『デアアアアアアア！』」

次元武を使う事も忘れ、ただ刀で斬りにかかる。

何度も刀を振るうが、その度にウドウの身体をすり抜ける。

対してウドウも拳で殴りかかり、何度も俺に当ててくる。

「ははははっ！ 私の拳を喰らっても吹き飛ばない！ やはり貴方はいい！」

「『アアアアアア！』」

「ぬうつ！？」

魔力を大量に込めた拳が、ウドウの顔面にヒットした。当たったのだ。

ウドウは吹き飛び、幾つものビルを貫通していった。

「『ハア

ハア

』」

マズイ……カラダガ……ゲンカイ……アツイ……クルシイ……。

「ガハアツ……………！」

魔力が消え、その場に血を吐いて蹲った。
目がかすみ、頭がボーっとし、息も出来なかった。

「ふふ…ふははははっ！ まさか偶然とはいえ私に触れるとは……………。
いやはや、何百年振りに痛みというのを感じた事でしょう」

「ッ！」

「おや？ どうしたのですか？ まさかもう力尽きたとか言わない
でしょうね？」

ウドウは傷一つ付いておらず、被っていたフードが取れ、素顔が曝
け出されていた。

スキンヘッドで赤の瞳、不気味な人形のような無表情に近い表情。

「ハア

ハア

！」

「……ああ！ まだ力が完全ではないのですね？ なら仕方ありません。またの機会に」

「『ディアアアアアアア！』」

レオンが槍を突き出して上からやって来た。
ウドウはそれを難なく避け、空に浮んで行った。

「致しましょうか。その時を楽しみにしていますよ」

そう言い残し、ウドウは塵気楼のように消えて行った。
残ったのは今にも意識を失いそうな俺と、魔力を押さえこみ怒りの表情を俺に向けたレオンだった。

「……………でだ」

「ハア ハア 」

「何でだっ!？」

「ぐっ !？」

レオンが俺の胸ぐらを掴み、持ち上げた。

「何でだイブキ! 強力して倒すんじゃないのかよ!？」

「ガッ !？」

「なのに勝手なことばかりしやがって! 危うく死ぬところだったんだぞ!？」

「ハッ ウ !」

「……チッ!」

レオンは俺を下ろし、通信でへりを呼んだ。

レオン……やはり俺は俺だけでウドウを殺す。だからお前は邪魔をするな。邪魔をするのなら俺は……。

薄れゆく意識の中、俺は仲間に向けてはいけない感情を向けた……。

ねえ、イブキ。

なんだ？

私の事、愛してる？

当たり前だろ。

恋人として？ それとも……。

どっちもだ。誰が何と言おうと、俺はお前を愛するぞ。

ありがとう、私も變してるよ。

桃香……。

「……桃香」

目を開けると、夕陽の光が部屋に挿し込んでいた。
首を動かし、辺りを見るとここは六課医務室…六課自体ではなかつた。

「……どこだ？」

「聖王医療院だ」

「……C・C」

ドアの前にC・Cが立っていた。

C・Cは今日俺が取ったモコナを抱きしめていた。

「……そんなに気に入ったのか？」

「ああ。抱き心地が良いからな」

「……それは良かった」

C・Cはベッドの隣にやってきて椅子の座った。

「……犯人は？」

「取り逃がした」

「……そうか」

あの状況でよく逃げられたな。拍手を送りたいよ。

「…………お前が助けた女」

「…………」

「お前の恋人にそっくりじゃないか」

「…………ああ」

何でそっくりなのかは分からない。ただの偶然というものもあるが、それにしては酷似し過ぎている。

「…………桃香」

「…………え？」

「確か妹の名前だったよな？」

「……………ああ」

「恋人の名前は？」

「……………桃香だ」

「やはりな……………」

……………ばれたか。でも何故だ？

「……………私とお前はギアスで繋がっている。しかも深く、精神も……………。こんな事は初めてだ」

「……………という事は、俺の記憶を見たって訳か……………」

「恐らく、ギアスが暴走したことで、一時的に私とお前の繋がりが強まり、精神が入り込んだんだろう」

「……待て、暴走……だと？」

そんな……このギアスが暴走したら、視界に入ったものを全部破壊してしまう！

「安心しろ。空幻の術がかかった眼帯をしている。外さない限り発動しない」

そういえば……左目だけ何かに押さえられてる感じが……眼帯だったのか……。

「……もうあまりギアスを使うな。お前の身体は……」

「そんなに蝕まれてるのか？」

「……いや、まだそこまではいっていない。ただ……」

「俺の身を案じてくれるのか？」

「……まだ契約を果たして貰ってないからな」

そうかい……。

俺はゆっくりと身体を起こした。身体の彼方此方が痛い。力も入りにくい。これは何日か安静だな。

「彼女は？」

「隣の病室で寝ている。少し怪我をしているが別段どうってことない」

「そうか……。レオンは？」

「カンカンだ。怒りで興奮し過ぎて左腕が常に光っている」

うわー……出会い頭に殴られそうだな。

「……私は記憶を見た。だから聞かない。だが今のお前では奴に敵わない」

「……ちょっと待て。お前、ウドウを知っているのか？」

「……私だけではない。アイツらもだ」

……フェリスと空幻も知っているのか？

「フェリスは何故知らないと言った？」

「その時は魔力が隠れていた。だから気付かなかっただけらしい」

「あの時は魔力を使っていたのだろうか？」

「ウドウは悪魔の中でも異端だ。魔力を使用しても反応を消す事が出来る。幽霊と一緒に」

幽霊……だからアイツの身体に触れられなかったのか？　だが最後には一回だけ触れたぞ？

「ウドウは謎だらけで、分かっているのは嘗ては人間だったという事だ」

「人間？」

「ああ。悪魔に魅了され、悪魔の力を手に入れた男……」

「何故悪魔の存在を……確かアイツ、何百年とか言っていた気が……」

「その頃にはもう悪魔が人間と接触していたのだろう。よくは知らんが」

「……………」

なら仇は悪魔になるのか……？　いや、悪魔に墜ちたウドウも仇だ。やはり変わらない。仇が増えただけだ。

「今日はもう休め」

C・C はそれだけ言うと椅子から立ち、ドアに向かって行った。

「C・C」

「ん？」

「……ありがとうな」

「……なんの事だ？」

C・C は笑みを浮かべ、部屋から出て行った。
俺は見送った後、ベッドに横になった。

今日はもう終わった。なのに何で……まだ胸騒ぎがするんだ？

何かが分からないまま、今日は幕を閉じた。

勝手と親友（前書き）

作者「いや、今回の出来は最悪やわ」

イブキ「何故に関西弁？」

作者「伝えたい事が全然伝わる気配ないわ。やっぱワイにはそんなたっかい文才無いわ。まあ分かってくれるよう願っとくわ」

イブキ「この……ダメ作者が」

勝手と親友

身体は一日眠ったらだいぶ良くなった。

全身の痛みは無くなり、代わりに軽い気だるさだけ残った。

そして今は俺が助けた少女がいる病室の前に立っている。

「……………どっしょ」

会ってみるべきか、会わないべきか。

だが会ったら桃香のことを思い出すし……………。思いだしてもし取り乱したらアレだし……………。

だが救出したからには気にかけての方が良いだろうし……………。

「うーん……………」

ガラ……………。

「あ……」

「え……?」

ドアの前で考えていたら、ドアが開いた。
そして薄いピンクの髪の少女と目が合った。

「……あゝ……」

「……あ、あの時助けてくれた……」

「え、覚えているのか?」

「はい。……えっと、中に入ります?」

「あ、ああ……」

俺は中に入った。
中は俺の病室と変わりは無かった。

「何も無いですけど……」

「いや、おかまいなく……」

……だめだ、調子が狂う。
声まで桃香とそっくりだ。

彼女は椅子を用意してくれて、俺はそれに座った。
彼女もベッドに座った。

彼女も怪我人だから寝ておいた方がいいと提案したが、恩人に失礼
だと言い張った。なんと律義な。

「あの、助けに来てくれてありがとうございます」

「どづいたしまして。まあ助けるのが仕事だし」

「それでもありがとうございます。あ、私の名前はミリア・エンビ

ルです。ミリアって呼んで下さい」

「俺はイブキ・ヤマトだ。まあ好きなように」

俺は差し出された手を握った。
その時、桃香が頭に浮かんだ。

……今は考えるな。ミリアに失礼だ。

「それで、具合はどうだ？」

「はい。怪我はありませんでしたから、明日退院できるみたいです」

「そうか、それは良かった」

「イブキさんも……大丈夫ですか？ その眼帯……私のせいで……」

ミリアは心配そうな表情で尋ねてきた。

「ああ、これは違う。また別のことでな」

「そうですね……」

「ッ……！」

今のミアの安心した表情……桃香と……。

「あの……どうしたんですか？」

ミアが顔を覗き込んできた。

「……何でも無いさ。それより、家族とは連絡は取れたのか？」

「あ……」

ミリアは家族という言葉聞いた途端、顔を落としてしまった。

「家族は……もう……」

「あ………すまない………」

「いえ………」

「………」

「気まずい………気まずいぞ。」「ここでミリアにかける言葉って何だ？
一体なんだ？ ああもう！ 俺のコミュニケーションの無さを恨む！

「えっと………俺もないんだ」

「えっ………？」

「あ、でも………家族のような仲間はあるな」

「そう……ですか……」

何を言っているんだ俺はー！？ ええ！？ 家族がないミリアに何を言っているんだ！？ 最低だな俺！

「あー、あー……あ、そうだ！ 君も「あの！」はいつ！？」

ずいっと、いきなり身体を寄せてきた。
そして顔を近付け、あと少しで触れてしましそうな位置で止まった。

「あの！ 私っ、ずっと独りで、友達もいないんです！」

「お、おっ……」

「それで、そのっ、もし良かったら！ わた、私もな、仲間に……」

「え？」

「図々しいのは分かっています！ だけど、あんな恐い思いして、これからもずっと独りぼっちなんて……」

「……」

独りぼっち……。俺も、家族が死んでからはずっと独りぼっちだった。

友達はおらず、親類もいなかった。

学校には通っていたが、ただじっとしていたくなかったから通っていただけ。

だけど俺は生きなくてはいけなかった。ウドウに復讐する為に。

けど、時間が過ぎて行く内にそれも忘れてきて、世間に馴染んできていた。この世界に来てまた復讐心が出てきたけど……。

それでも馴染んでもずっと俺は独りだった。

家に閉じこもって、テレビやゲームばかりして。そしてやっと働き出したかと思えば神にアホな殺され方して此処に来て……。

「……だめ……ですよね、こんな私……」

俺はこの世界に来て初めて家族以外の絆が出来た。

始めてアイツらに出会った時も、自分勝手に暴力ばかり振るう事に腹を立てていたが、内心はとても嬉しかった。久しぶりに俺の気持ちを外に出せたし、何より楽しかった。そんな気持ちを、ミリアには味わってほしい。

「家は？」

「え？」

「今住んでる家はどこだ？」

「えっと……どうして？」

「確か女性用の隊舎は部屋が余っていた筈だ」

「え？ え？」

「退院したら引っ越した」

「え？ ええ〜!？」

「但し！働かざる者食うべからずだ。君には寮母の手伝いをしてもらおう」

はやてには俺から頼んだら何とかしてくれるだろ。でなければ、エンペラード隊の世話係でもなんでもさせたらいいだろう。

「どうだ？職住も持てて仲間も出来る。いい案だと思うが？」

「……あ、ありがとうございます！私、頑張ります！」

ミアは笑顔になり喜んだ。

「喜んで貰えて良かった。……ところで、少し離れてほしいんだが……」

「ふえ？」

ミリアは俺に顔をずいっと近づけて下からのぞきこんでいる体勢だ。そしてこの入院服は浴衣の様な仕様になっていて、その……ミリアの体勢では襟の隙間から……。

「そのだ……俺は男であるから……その……」

「……ッ！／／／／／」

ミリアはそれに気づき、顔を紅くしてゆっくりと離れた。

何だ、この高揚感は……。まるであの時の、ハクヤC・Cの色香にノックダウンさせられそうになった時のような……。

「……えっち／／／／」

「んなっ！？／／／／ 別に俺は！」

「失礼します！」

ガラツつと乱暴にドアを開けて誰かが入ってきた。
その人物は紫のショートヘアで修道服を着た女性だった。

「あ、ここに居たんですね！ 部屋にいないから心配しましたよ！」

その人は俺を見るなりそう言ってきた。

「……………誰だ？」

「あ、申し遅れました。私はシャツハ・ヌエラと申します」

「イブキ・ヤマトです」

「ミリア・エンビルです」

俺とミリアは挨拶を返した。

「……って、いついつてる場合じゃないんです！」

「む？」

「実は……」

「むう……ほぼ悪魔ハンターになりつつある俺が、まさか子供捜しとは……」

「悪魔って……あの時ですか？」

「ああ。この世界を支配しようとしているらしい」

「そんなんですか……。イブキさんはその悪魔を倒すのが仕事なんですか？」

「まあな。神に選ばれし者だから。……強制的に」

今振り返れば、アレはちょっと強引だよな。

それに今更だけど萌え死にだけはどうかならなかったのかよ？

大和一颯、人類史上初萌え死につて新聞に載ってたらどうすんだよ？ 恥ずかしいだろ。

「神様に？ 凄いですね！」

「うん、普通はそんなに信じちゃ駄目だからな」

「…？」

ああ、何て純粹なんだ。

歳を聞いたら素直に答えてくれるし（歳は十九歳）、裏の無い笑顔だし、まるでハクが増えた感じだ。

「それにしても、何処にいるんでしょうね？」

「小さい子だったからな。そう遠くには行けないだろう。……と言っ

より、本当に大丈夫か？ 寝ておいた方がいいんじゃないか？」

さつきから何故子供を捜しているかと言うと、エリオとキャロが発見した子供が検査の合間に姿を消したらしい。

しかもその子は、人造生命体ということらしい。魔力は普通の子供の範囲らしいが、それでも危険があるかもしれないと言う。だから病棟にいる人を避難させ、子供を確保すると言う事だ。

そして、俺はもう動けるので一緒に捜す事にした。

しかしミアは避難しようとしなかった。あろうことか俺を手伝うとか言つて頑なに首を振った。

シャツハは当然それを認めなかったが、俺が付いて行くと言う事で渋々、渋々、仕方が無く、もの凄く妥協して、認めただ。

因みに、今も俺の格好は入院服である。いつもの姿だと、子供は何故か怖がるからな……。

「大丈夫です。働かざる者食うべからずなんですよね？」

それは向こうに行つてからの話なんですが……。

そうこう捜している内に、中庭に辿り着いた。

ここにもいないか……。ん？ あれはなのはか？

「イブキさん、あれ……」

ミリアがなのはの前を指さした。

そこには金髪の少女がいた。

まぎれも無くエリオとキャラロが発見した子だった。

「行くっ」

俺達はなのはの所に近付いた。

と、その瞬間、なのはの前にトンファーのような剣を両手に持ったシャツハがバリアジャケットを纏って現れた。シャツハは幼女に構えていた。

「ってコラコラコラッ！ 何をしている！？」

俺はシャツハの前に天の鎖で柵を作ってそれ以上前に行かない様に

した。

「ヤマト隊長！？ 何をするんですか！？」

「そのセリフそのままそっくり返すわ！ なに子供に武器を向けているんだ！？」

「先程説明した通り、この子にどんな潜在的な危険を持っているか……」

「よく見る！ 怯えて泣いているだろ！」

幼女は座り込んで怯えていた。
抱いていたウサギのぬいぐるみも地面に落としていた。

「あ……」

「頭冷えたか？ だったら武器を引け」

「は、はあ……」

シャツハは武器を下げた。

俺は鎖を消して、幼女を見た。

幼女にはなのはが駆け寄っていた。

「立てる？」

なのはが優しく聞くと、幼女はゆっくりと立ち上がった。

「初めまして、高町なのはって言います。お名前、言える？」

なのはは目線を合わせて聞いた。

「ヴィヴィオ……」

幼女……ヴィヴィオは小さく呟いた。

「ヴィヴィオ……いいね、可愛い名前だ。ヴィヴィオ、何処か行き
たかった？」

「ママ……いないの」

「っ……」

ママ……この子は人造生命体……。なら母親はいない筈……。

なのはは一瞬戸惑った表情をしたが、すぐに笑顔を向けた。

「それは大変。じゃあ一緒に探そうか」

「……うん」

ヴィヴィオは静かに頷いた。

俺も付き合おうとして、なのはとヴィヴィオに近付いた。

「それじゃあ、お兄さんも探してやるよ」

「ヤマト隊長……」

「……」

……ん？ 何故ヴィヴィオは俺をじつと見つめてくるんだ？ そして何故徐々に泣きそうな顔になっていくんだ？

「あ、俺はイブキ・やま……」びええええん！！「ええっ！？」

ちよっ！？ 何で泣き出すの！？ 今はコート着てないぞ！？

「え、え、何でだ！？」

「ほ、ほらヴィヴィオ。このお兄さんは恐くないよ。私のお友達なんだよ?」

「びええええん!!!」

「……うそーん……」

家族が生きてる頃はよく子供に懐かれてたのに……。

結局、俺は最後までヴィヴィオに恐がられ、俺とミリアは部屋に戻りましたとさ。めでたしめでたし。………はあ。

フェイス side

「臨時査察って……機動六課に?」

「うーん……地上本部にそついう動きがあるみたいなんよ」

私ははやてと部隊長室で話し合っていた。
今度、六課に地上本部が査察に来るかもしれないという。

「地上本部の査察は、かなり厳しいって……」

「うっ……。ウチはタダでさえツッコミどころが満載な部隊やしな
……」

「今、配置やシフトの変更命令が出たりしたら、正直、致命的だよ」

「うっ、なんとか乗り切らな」

はやてと私は頭を抱えた。

もし問題とか発見されたら、機動六課の存亡が危なくなるし……。
そうなったらスカリエッティの件も、何よりはやての想いが潰され
てしまう。

……そう言えば、これってまだ詳しく聞いて無かった。

「……ねえ、これ査察対策にも関係して来るんだけど、六課設立の
本当の理由……そろそろ聞いても良いかな？」

「……そやね、まあええタイミングかな。今日、これから聖王協会本部、カリムの所に報告に行くんよ。クロノ君も来る」

「クロノも？」

「なのはちゃんと一緒について来てくれるかな？　そこで纏めて話すから」

「うん。……あ」

だったらイブキも来た方がいいかもしれない。

「どないしたん？」

「イブキも呼んだ方がいいんじゃないかな？　悪魔の事も報告した方がいいし」

「ああ、そやね。あ、だったらレオン君も呼んだ方がええね」

「レオンも？」

「そや。レオンとカリムって、実は知り合いなんや」

知り合い……どうしてだろ？ 何かレオンが女の人と知り合いって聞いたらアレしか思い浮かばないんだけど。

「もしかして……アレで？」

「ブツブー！ 違いまーす」

「え？ そうなの？」

「うん。レオン君のお兄さん、ダレイス・スラスト一等空尉がカリムと知り合いだったんよ」

「ダレイス・スラスト……」

あれ？ どこかで聞いた事あるような……。
確か凶悪犯専門の部隊で……。

「ねえ、もしかしてダレイスって、『蒼騎士』のダレイス？」

「そうや。聞いた時は驚いたわ。陸で名を馳せたエース・オブ・
エースがお兄さんやねんから」

……騎士と言われてる人の弟があんな軟派な……。人って不思議だ
ね。

私はそう思いながらなのはに通信を繋いだ。

『わあああああっ！！』

「……？」

通信が開いたらそこには金髪の少女がなのはにしがみ付いて大泣き
していた。

「あの、なんの騒ぎ？」

『あ、フェイト隊長。実は……』

『やあだ！ 行っちゃああだああ！！』

何やら大変そうなので、私とはやてはなのはの所へ行く事にした。

なのはがいる部屋に入ると、そこには今だ苦戦しているなのはと、フォワード陣、そしてエンペラード隊がいた。………イブキはソファアでももの凄く落ち込んでいた。周りに暗い影を出現させて。

「ど、どうしたの？」

近くにいたティアナに尋ねたところ……。

「えっと……帰って来てからずっとなので……」

「そう……」

私は心配しながらも、今はあの子の事を先決する事にした。

フエイトside out

イブキside

取り敢えず俺は戻ってきた。

検査も問題なしなので退院してきた。

ミアは明日退院するから、今日はまだ残っている。

……で、どうして俺がこんなに落ち込んでいるのかと言うと……
ここに来るまで、俺はシグナムとなのはが乗ってきた車に乗って帰
ってきたんだが、そこにヴィヴィオも乗っている訳で、終始恐がら
れていた訳よ。

恐がられない様に見つけたコートは着ないで、ズボンとインナーだ

けにしていたんだが、もの凄く恐がっていた。

「何で恐いんだ俺は何もしていないのに何で恐いんだ俺は何もしていないのに何で恐いんだ何もしていないのに何で恐いんだ俺は何もしていないのに何で……」

「し、しっかりして下さい!」

「安心しろ、理由は分かっている」

「本当か!？」

フェリス、お前には分かるのか!? 子供が恐がる理由を!

「当然、それはお前から漂う幼児虐待、強姦魔、ロリコンという犯罪の匂いがプンプンと……」

「そうなのか!？」

「えう？」

「俺からはそんな匂いがしてるのか!？」

「あ、ああ！ そうだ！ お前は気付いていないだろうが、殆どの
社員はそれを恐れているんだ」

「そう…だったのか……」

俺からはそんな匂いが……。だからレジアスに会いに行った時、あんなに恐がられてたのか……。はっ！ まさかここにいる皆はそんな俺を監視する為に!？」

「イブキさん……落ち込み過ぎて頭が回って無い……」

「ういーっす!」

俺は自身の危険を認識して更に落ち込んでいる時、レオンが部屋にやってきた。

「おろ？　なのはちゃん、その子は……」

「レオン君……実は……」

「……パパ？」

「ほへ？」

……ぱ……ぱ……？　今ヴィヴィオ……パパって言ったのか？　レオンにパパって言ったのか！？　レ

「ヴィヴィオ？　パパって……レオン君？」

「パパ！」

「…？　おっ！？」

ヴィヴィオはレオンに飛び付いた。その瞬間……。

パリンッ……

「うごはあっ！！」

俺の心が砕け散った。

レオンが、懐かれた。

レオンが、パパと言われた。

レオンに、飛び付いた。

よりによってレオンに……。

あの軟派なレオンに……！

「死のう……。フェリス、俺の首を切り落としてくれ」

「よし任せろ」

「わあ——！！ 駄目ですって！」

ハクよ、止めてくれるな。俺はもう生きていけん。
俺は、軟派なレオンに負けたんだ。武力ならまだしも、人徳で負け
たんだ。
こんな俺、生きていても意味が無い。

「パパ！ パパー！」

「お、よしよし。どうしたんだ？」

「レオン君、実はさっきまで私から離れてくれなくて……」

「そうかそうか。お名前は何て言うんだい？」

「ヴィヴィオ！」

「ヴィヴィオか、いい名前だな。俺はレオンって言うんだよ」

「レオンパパ！」

「ぐはっ！？」

何故だ……何故なんだ！？ レオンだって所構わず女性に手を出す奴じゃないか！ なのに何故！？

「アイツからは邪な気持ちは感じ取れないからな。問題無いんだろ
う」

「邪！？ 俺には邪な気持ちが表れているのか！？ そんな……」

確かに、俺は美人を見たらドキドキしたりもするが、それはそれだけ
で、何も無いのに！

「ああ、駄目だ。空幻、俺を灰にしてくれ」

「ええー？ メンドい」

「……ふっ、俺は殺されることもメンドがられる存在なんだ。どう
せ俺は……」

「ならその窓から飛び降りたらいいだろ」

C・Cが窓を指さした。

そうか……それがあつたな。

剣で斬ったら俺の肩のような存在の血で汚れるし、外で死ねばいいんだ……。

「今行くぞ、救済の窓口よ」

「ええ加減にせいや！」

「あいた」

あと一歩で窓に届くところでハリセンが俺の頭を叩いた。叩いたのははやてだった。

「何をする」

「自分、やっといて悲しくならへん？」

「……現実逃避くらいさせてくれよ」

「ええから、さっさと行くだ」

はやては俺のコートの襟を掴んで引き摺りだした。

「なのはちゃん達も行くでー」

「はい」

「さっし」

「おっすよ」

……あれ？ レオンにくっ付いていたヴィヴィオは？

「それならフェイトちゃんがあやしてくれたよ」

「……やはり俺は……」

「はいはい、もうええから」

そのまま俺ははやてに引き摺られ、へりに乗つけられた。

へりに乗つけられて数分。へりの中は重い空気が漂っていた。主な原因は俺の向かいに座っているレオンだ。俺を睨んでは左拳を握りしめ、目が合えば更に鋭い目つきになり、逸らせば舌打ちしの繰り返し。俺の隣に座っているフェイトも、レオンの隣に座っているなのとはやても、気まずさ故か表情が暗い。

「……えっと……そんなに睨まなくても……」

フェイトが勇気を振り絞って場を治めようとするが……。

「……………」

「ふう……………」

レオンの雰囲気呑まれ敢え無く沈没。
いつものレオンなら女性の気遣いを無視することはしない。それ程
俺に怒りを覚えていると言っ事なのだろうか。

「もうええ加減にしいや。こないな状態でカリムに会いたくないね
んげど」

「……………」

「……………」

「まあまあ、はやてちゃん」

「せやけど、いつまでもこんな状態やったら皆の士気も下がるし、迷惑や」

はやての言葉はもつともだった。

いつもでもこんな雰囲気醸し出していれば、六課の士気が下がり、後の戦闘にも影響を及ぼしかねない。

俺は意を決して口を開いた。

「……………レオン」

「ああ…?」

……………相当ご立腹のようだ。フェイト達が泣きそうになっている。手袋で隠している左腕からも青い光が漏れだしている。

「……………お前が怒っている理由は理解している。そして俺が全面的に悪いとも理解している」

「……それで？」

「許してくれとは言わない。見逃してくれとも言わない。ただ……」

「……」

「ただ……俺はアイツにそれなりの怒りを持っている。それだけは分かってほしい」

「……」

レオンはただ俺を睨み続け、何も言わなかった。
たぶん、レオンの性格なら何か言う筈だ。それが今か後か分からないが。

俺は話題を変える為になのはに話しかけた。

「なのは、ヴィヴィオはこれからどうするんだ？」

「え？ えっと、取り敢えず私が当分預かるつもりだけど……」

なのはは突然の質問に狼狽しながらも答えた。

「当分預かるか……ならチャンスかもしれないな。」

「なあ、はやて」

「なんや？」

「俺も一人こちらで預かりたい人がいるんだが……」

「預かりたい？」

「ああ。勿論、寮母のアイナさんの手伝いをさせる。なんなら他の雑用も」

「ちょ、ちょい待ち。何言ってるの？」

俺はミリアの事を話した。

ミリアは今まで独りで寂しい思いをしているから、それを取り除きたい。俺もつい最近までは同じ思いをしていたから、ミリアの気持ちが届くほど分かるから。

「せやけど……」

「良いだろ？俺も孤独の気持ちは知ってるからさ……」

「……ざけんなよ」

「なに……ぐっ!？」

レオンがいきなり俺の胸元を締め上げた。

「昨日は自分勝手な行動で味方の事も考えないで敵に負けて、今度は人を預かりたいだあ？ふざけるのもたいがいにしろ！」

「何い…!？」

「同情したからって勝手に預かるつとかすんじゃないやねえよ！」

「違う！俺はただミリアを」

「それが勝手にしてんだよ！」

「ッ！？」

「れ、レオン君！？落ち着いて！」

なのはがレオンを止めようとするが、レオンはそれを無視して突っかかってきた。

「それになあ！機動六課にいるお前が預かるって事は、その一般人を俺達の事情に巻き込むって事なんだぞ！」

「何……？」

「ヴィヴィオは仕方がねえ。レリックを持っていた上にどっかの組織に命狙われたんだ。今だって狙われてるかも知れねえ。幼い子供

だから安心できない所で不安にしたくねえからな。だがなあ！ そいつはどうなんだよ！？ たかだか悪魔に襲われて負傷して、寂しがつているから預かるだあ？ 理由が軽過ぎんだよ！」

「なっ……！」

何だと……コイツ。ヴィヴィオは未だ狙われているかも知れないから仕方が無い？ 幼いから安心できる所に置きたい？……なら独り寂しく、悪魔に襲われた恐怖を抱いて過ごさせてか？ ふざけるな！ 独りという寂しさを知らないくせに！

「お前に独りの辛さが分かるものか！ 肉親も親類も友もない世界で、ごく普通の女の子が恐怖に怯える気持ちを！」

「ならてめえには分かるってのか！？」

「分かるさ！ 俺だつてずっと独りだったんだよ！ 目の前で家族を殺されて、友もない！ それどころか向こうから去っていく！ 俺が近付こうとしてもその手を叩いて突き飛ばす！ まるで世界が俺を拒絶している様に！ そんな世界で彼女に生きていけと言っのか！？」

「だからと言ってお前の私情で六課に連れて来ようとするな！ あそこは戦う人が集まる場所だ！ ただの仲間集めの為にあるわけじゃないやねえ！」

「なら俺達は何の為に戦っている!？」

「あん!？」

俺はレオンの手を振り払い、逆に絞め上げた。
フェイト達が小さな悲鳴を上げたが、構わずへりに叩き付けた。

「俺達が戦っているのは人を守る為なんだから!？　なのに恐怖で怯える彼女一人助けられないでどうする!？」

「それとこれとは訳が違う!」

「違う筈がない!　守るのは人の体だけじゃないだろ!　心も守らずしてどうする!？　お前もそうして救われた筈だろう!？」

「ッ…!？」

レオンだって兄が死んで心が落ち込んだ筈だ。だったら今のレオンがあるのはその心を助けられたからだ。肉体を救っても精神を見捨てては意味が無い！

「ならそいつが事件に巻き込まれたらどうするつもりだ！？ お前の同情で、危険に攫われたらどう責任を取る！？」

「俺達が守ってやればいい話だろ！ 俺達は『正義の味方』名乗ってんだろ！？ なら守るしかないだろ！」

勝手な物言いだが、そう言う事だ。彼女が危なくなったら守ればいい。

彼女が寂しがれば皆といれば良い。彼女が悲しめば慰めれば良い。少なくとも、俺はそうする。偽善だ口先だけだとか言われても良い。俺は絶対にする。

「そんな人は世界に無数という。その人達一人一人にそうしていたらキリがねえ。お前がやろうとしている事は一種の贖罪だ」

「だからどうした」

「何…?」

「ミリアを救う事が鼻肩だと言うならそれでも良い。だが俺はミリアを救いたい。それには皆の協力が必要なんだ。だから頼む」

俺はレオンを離し、数歩下がって土下座した。

「ミリアを救ってくれ」

「……」

「……レオン君」

なのはが心配してレオンに声をかけた。
声には出していないが、フェイトとはやてからもなのはと同じような気持ちを感じられた。

「……チツ、最初からそう言えってんだ」

「…………え？」

レオンから怒りの雰囲気が消え、座席に座りこんだ音が聞こえた。

「俺はただお前が勝手ばかりしてんのが気に喰わなかっただけだ」

「ばかりって……………そんなにしたか？」

「じ、こいつは……………」

レオンは頭を抱えた。

勝手ばかりって……………まあ昨日のはそうだとして、今回は……………勝手なのか？

「……………んん！ 結論から言つと、レオン君は別にええんやね？」

「あゝ」

「やってさ。まあウチも構わんわ。アイナさんも助かるやろっし」

「そ、そうか……」

いきなりの展開で俺も読者の皆様も付いて行けてない。もっと正確に言っと作者も戸惑っております。

「せやけど、レオン君が言う通り、イブキ君がやろうとしている事は鼻肩やで？　ヘタしたら逆にそのミリアさんを苦しめる事になるで？」

「……なら、全員を救える力にすればいい。……夢物語だが」

「そりやすんごい夢物語やわ……」

笑うな。俺だって分かってんだからな。

「でも良かった。ここでイブキとレオンが喧嘩したら、ヘリが墜ちちゃうところだったよ」

「そうっすよ〜！ もっと言ってやって下さいよ〜！」

あ、居たのかヴァイス。そりゃそうか、このヘリヴァイスが操縦してたもんな。

「すまなかったな、レオン。絞め上げて」

「そりゃお互い様だ」

そう言ってもらえると助かるな。

「とじろじよ……」

レオンが席を乗り出して顔を近付けてきた。

「そのミリアって娘……美人か？」

「「「「「……」」」」」

おいレオン……やっと元に戻ってきた雰囲気をブチ壊すなよ……。
いや、これが元に戻った証拠か？

「レオンくん？ 何を聞いているのかな？」

「いやだって気になる」「ああ？」「のではないでしょうっかはい……」

レオンはなのはのひと睨みで恐縮してしまった。

仕方が無い、ここは乗ってやるか。

「美人だぞ、とびきりのな」

「「「「えっ……………」」」」

はっはっはっはー、なして皆は俺をあり得ないような目つきで見てるのかな？

「い、イブキ……………まさか俺が締めすぎて頭がおかしくなっちゃったのかー？」

「あり得ない……………フェイトちゃんという人がいながら……………」

「嘘や……………今までこんな話しに乗り気じゃ無かったイブキ君が……………」

「とびきりの美人……………ああ、またライバル出現……………！？」

「イブキ……………お前も男だったんだな……………！」

……………どうやら俺はそんな目で見られていたらしい。それとなのはの言っている事が分からない。何故フェイト？

まあ、俺が誰かを美人だとかあまり言わないしな……。

「……俺に紹介してくれる？」

「手を出したらお前が隠し持ってるエロ本と映像からムキムキの男が出てくると思え」

「それは勘弁！」

「レオン君……」

「わっ！？　なのはちゃん！？　なにハッチ開けてんの！？　ちょっと！？　なしてバインドを……って止めて……！！！」

「……見なかった事にしよう。」

取り敢えず、レオンとの問題は解決、ミアアの件も解決つと……。レオンが言っていた意味はまだ分からないが、今は良しとしよう。

その数十分後、俺達は教会に着いた。

レオンは後で泣きながら空からやってきた。

トラウマ飛行は相当きつかった様だった……。

預言（前書き）

作者「ごめんなさい、順番間違えました。こっちが先です。変な場所があったらごめんなさい。後々直していきます」

預言

聖王教会

これからここのお偉いさんと会う。という事はだ、少しでもエンペラーだ隊の隊長、対悪魔戦専用部隊の隊長としての威厳というか何かを示さなければならぬよな……。ここはビシツと決めておかないとな。

身だしなみを整え、失礼な部分がないかどうか確認していたら、なのはが扉をノックし、中から声が聞こえてきた。

『どつぞ』

女の人か……。どうでもいいが、基本、六課の周りって女しかないな
いような気がする……。

俺達はは声に従って扉を開き、中に入った。

「失礼致します。高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・T・ハラオウン執務官です」

えっと……この場合の俺の肩書は……。

「囑託魔導師、イブキ・ヤマトです」

俺達三人は目の前にいる人、金髪の女性と黒髪の男性に敬礼した。

……何だ、ちゃんと男もいるじゃないか。

「いらっしゃい」

金髪のシスターのような女性が席を立って前まで来た。

「初めまして。聖王教会教会騎士団騎士、カリム・グラシアと申し

ます」

あらまあ……これまた美人な……。類は友を呼ぶってか？ 何で六課の周りには美人ばかり……。見る、レオンが喜んでるじゃないか。

「どうぞ、こちらへ」

カリムの案内で用意されていた席に座る。

「失礼します」

なのは礼儀正しくし席に座った。

俺も見習った方がいいのかな？

「クロノ提督、少しお久しぶりです」

フェイトが黒髪の男性に向かって少し変わった挨拶をした。

「ああ、フェイト執務官」

その男性も何か変な感じで返した。

何かこう……違和感がある様な……。

「うふふっ、お二人ともそう固くならないで」

と、カリムが笑顔で言った。

おお、何て心の器が大きい人なんだろう。こう言った上司が世の中には必要かもしれん。限度はあるが。

「私達は個人的にも友人だから。いつも通りで平気ですよ」

そっちかい！ ただ友人だからかい！ ってか俺は会ったこと無いし！

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで……」

「平気や」

「じゃあ、クロノ君、久しぶり」

なのは達とも知り合い、レオンもどうやらカリムと知り合いなよう
で……あれ？ 俺孤立してる？

「お兄ちゃん、元気だった？」

ああ、フェイトはクロノって言う人の妹か。

……お兄ちゃん！？！？

「ぐぼはあっ！？？」

「レオン!？」

「フェイトちゃん……今のは反則だぜ……」

た、確かに反則だが……問題はそこじゃない! お、お兄ちゃん。即ち兄という事で……。まあどうでもいいか。俺がただ一人他人という事には変わらない。

「あらあら、レオンったら相変わらずね。……それで、貴方があのヤマトさんですか?」

「え、ええ……たぶん」

「ってか『あの』って何ですか? また変な噂、悪人面とかそういうのじゃないよな?」

「そうですね。いつもレオンがお世話になってます」

「あ、いえ。こちらはいいい訓練相手ですから。……あの、どうして私の事を？」

「変に固くならなくて結構よ？ 実ははやてから聞いてたのよ」

「……………何と？」

神様仏様女神様、どうかおかしな事をはやてが言ってますんように。つてか言つてたら神を殺し仏に墮落を与え女神は悪魔に差し上げる。そしてはやてには狸の群れに放り投げる！

「えつと、この世界に来てすぐ女性を押し倒して強姦と間違えられ、フェイト執務官に男性の威厳たるものを潰され、目が覚めたら美女に欲情し部屋に連れ込んでベッドに押し倒し、休日には五人の美女を連れてデートしたり、あとついでに悪魔を退治している、イブキ・ヤマトだと」

「……………」

「あはは……………」

お、終わった……。何か誤解している様な感じもするが……。終わった。

そうだ……。確かに初めの頃の俺はこんな馬鹿な事をしていたな……。異世界に来て浮かれていたのだろう。今はそんな気が全くしないが……。

「イブキ……。後者については知っている。だが……。前者二つは何だ！？俺の知らない所でそんないい体験……。もといいけない体験をしていたのかー!？」

「うん……。もうどうでもいいぞ……」

「ま、まあまあ……。君達がそれでも共に行動していると言つ事は、信頼できる人なんだろう」

「クロノ提督……」

アンタ……。なんていい奴なんだ……。

誰のせいだ……誰の……。
はああ……これで俺も牢獄行きか。ははっ……俺は悪くない。俺は無実だ。確かに理性が破壊されて危ない事をしようとしたこともあるが、それはまだ何もやっていないんだ。
それにデートだ？ あれは普段世話になってたから礼に連れてやってただけだし……。

「ま、まあ大丈夫だよ。イブキ君、とても頼もしいし。先日的事件でも、仲間を助けてくれたんだよ」

「あ、白から灰色に戻りよった」

「そ、そうだよ！ イブキはエリオとキャロにも好かれてるし、悪魔の相手も軽々とやってくれてるもん！」

「お、グレーになってきたぜ」

「そやね。スバルにも兄のように接してるし、何やかんやで助かってるしな」

「まあ俺は当たり前な事をしてるだけだ」

俺、復活。もう白はいらないぜ。……ん？ 何を呆れているレオン。人間、褒められたら嬉しいものだろ。

「んん！……さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて機動六課設立の裏表について、それからこの世界に現れている悪魔についてと今後の話や」

はやてが場の雰囲気を変え、真面目な顔つきになった。それに従い、俺達も頭の切り替えをした。

クロノ提督がカーテンの操作をして部屋を薄暗くした。

「六課設立の表向き理由は、ロストロギア『レリック』の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例」

クロノ提督は端末を操作し、空中にディスプレイを出した。

「知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフエイトの母親で上官、リンディ・ハラオウンだ」

ほほう、この緑の名がい髪の人が母親……やはり美人。
レオン、目を輝かすな。

「それに加えて、非公式ではあるが、彼の三提督も設立を認め協力の約束もしてくれている」

これには俺達は驚いた。

三提督はフェイトに聞いたところ、管理局の伝説的な存在だから。

「その理由は、私の能力と関係があります」

騎士カリムが立ち上がり、テーブルから離れた。
そして何かのボロい紙きれの束を取り出した。

「私の能力、
『プロフェーティン・シユリユフテン預言者の著書』」

紙きれの束が金色に光り出し、騎士カリムの周りをグルグルと回り

始めた。

「これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書きだした預言書の作成を行う事が出来ます」

それはまた……めんどくさい能力だな。詩文って……俺、古典苦手なんだよな。

「二つの月の魔力が上手く揃わないと発動出来ませんから、ページの作成は念に一度しか出来ません」

騎士カリムの周りを周っていた紙切れの内二枚が俺達の前にとんできた。

「預言の中身も、古代ベルカ語で解釈によって意味が変わることもある難解な文章」

紙の表面に訳の分からない文字が現れた。

「世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割と良くあたる占い程度。つまりはあまり便利な能力ではないんですが……」

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの預言には目を通す。信用するかは別にして、有識者による予想情報の一つとしてな」

「因みに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップが、この手のレアスキルとかお嫌いやからな」

「レジアス・ゲイズ中将、だね」

……ん？ そうなのか？ そんな素振りには全然見せなかつたがな……。

「そんな騎士カリムの預言能力に、数年前から少しずつある二つの事件が書きだされている」

騎士カリムは自分の目の前に二枚の預言を出した。

「『古い結晶と無限の欲望が集い交わる土地、死せる王の元、聖地より彼の翼が蘇る。使者たちが踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに、数多の海を守る法の船も砕け落ちる』」

「それって……！」

「まさか……！？」

「……どういう事だ、レオン」

「あゝ、何かが壊れるって事じゃないのか？」

「いや、それは分かるって」

ああ、古典嫌い。こんなことなら古典サボらなければよかった。

「つまり、ロストロギアを切欠に始まる、管理局地上本部の壊滅と、

そして管理局システムの崩壊……」

……オーケー。つまりだ……。

「世界の崩壊ってか？」

「いや、世界征服だろ？」

「それも違うんじゃないか？」

「二人とも、もっと真面目に出来んのか？」

「「「すみません」「」」

クロノ提督に怒られた。

俺は素直に疑問を持っただけなんだがな。

「それで？ もう一つの預言は？」

レオンが次を寄越せと急かす。

騎士カリムはそんなレオンに苦笑しながらテーブルの真ん中に預言を移動させた。

「実は、この預言はまだ完全に解釈出来ていないのです」

「カリム姐さんも完璧ではないってか？」

「レオン、今はお仕事中よ」

「はいはい……」

「……話を戻しますが、この預言はどうも解釈しづらく、この数年で分かった事も、先程の預言と関係があると言つ事なのです」

関係ね……。……あれ？

俺は浮んでいる文字を見詰めた時、頭に何かか浮んできた。

「『無限の欲望に隠れる深き闇、法に埋まる闇を曝け出し、共に太陽の元に現れる。そして無限の欲望、法、そして大地を喰らい尽くす』。なんとか解釈出来たのがここまでです」

「……………違っ」

「え……………?」

俺は騎士カリムの預言を否定してしまった。だが、これは違っ……………。

「イブキさん?」

「今の解釈はあなたが間違っではないが、少し違っ。この文字は……………」

「お、おい? どうしたんだ?」

「『無限の欲望を使いしは魔。そして法に埋もれた魔はその魔に引

き寄せられ魔を引き連れ全てを喰らい、また新たな全てを喰らい続ける」

何だ……頭に直に呼びかけられるような……。俺を……呼んでいるような……。

「……おい！ どうしたんだよ！？」

「……え？」

気付けばレオンが俺の肩を揺さぶっていた。

俺は……今何を？

「どうしたんだよ？ いきなり人形みたいに喋り出して……気味が悪いぞ？」

「……るせえ。それは流石にくるぞ」

「いてっ!？」

レオンを突き飛ばして深呼吸した。

俺は今何をしたんだ？ 確か預言の文字を見て……それから……。

「大丈夫？ 顔色悪いよ？」

「ああ……大丈夫だ」

フェイトに心配ないと伝え、前を向いた。
前には驚いた顔の騎士カリムとクロノ提督がいた。

「どうして詠めたんですか？」

「詠んだ？ 何を？」

「今お前がこの預言を詠んだんだじゃねえか」

「え？」

「え？　じゃねえよ！　ホントに大丈夫か？」

「……………たぶん」

「いや、たぶんって……………」

たぶん、大丈夫だと思う。ギアスも常に発動状態だが、それはスイッチが入ってる状態だけで、使おうとしない限り発動しないし……………。
まさか無意識のうちに記憶を破壊したとか？

「えっと……………何やら変な事を口走ったようで……………すみません」

「いえ、お気になさらずに」

騎士カリムは気にしてないと言ってくれたが、心のどこかで何か思っているようだ。

「んん！……では次にここ最近出現している悪魔の事なんですが」

……つと、頭切り替えなくちゃな。

「ここ、ミッドチルダでは今まで数件、悪魔らしき痕跡が発見されている」

クロノ提督がまた空中にディスプレイを出した。
そこには魔力の反応データ、建造物の瓦礫、そして……人の死体。
しかもその全てがどれも惨い。

「酷い……」

誰かが呟いた。

酷いな……これは。体を弄ばれて殺された感じだ。

「この死体は全て局員の人間だ。しかも全てリンカーコアが無くなっている」

「リンカーコアが？」

「ああ。それと男女で違うことが分かった」

違う……？ そんな事が？

クロノ提督は次の画像を出した。それは死体が並べられた画像だった。

「リンカーコアは男女全て無くなっている。だが唯一違うのは殺され方だ」

次に映し出されたのは一人の男性と一人の女性。

全身血まみれで思わず目を逸らしてしまいそうだった。

「男性は皆、喰い殺されたり、引き裂かれたりされている。だが女性には……内部から殺されている」

「内部？」

俺は女性の画像を見詰めた。

女性の腹を見ると、まるで何かが飛び出してきたような感じで大きな穴が開いていた。

しかもよく見ると、全ての女性がそうで、臓器らしきものが写っていないかった。

「……クロノ提督、これには臓器が写っていないようですが……」

「ああ、女性は全員、臓器が無かった」

「全員……！？」

「嘘……」

「チッ……」

まるでエイリアンの赤ん坊だな……。もしかし強ち間違っていないかも。

もし悪魔の誕生の方法の一つに、女性の身体に種子か何かを植えつけて産ますのかも……。帰ったらフェリス達に聞いてみるか。

「悪魔専門の目から見て、どう思う？」

クロノが俺に聞いてきた。

専門と言っても、俺はただ戦ってるだけのような気がするが……。

「推測ですが、もしかして女性の身体に種子を植えつけ、悪魔を産ましているのではないかと。悪魔で、私が勝手に考えた事ですが」

「う、植えつける……？」

「悪魔のを……」

「身体に……」

「……………交尾？」

「「「……………いやあああつ！」「」」

「ぐぼつ！？」

レオンの一言でフェイト達が気持ち悪い何かを想像したらしく、レオンを殴った。

「まあ、今日帰ってもっと詳しい人物に聞いてみます」

「頼む。それと、君は前にレジアス中將から正式に依頼を受けていたね？」

「ああ、はい」

あの事か。その場面が無かっただけで、俺達はちゃんと行っていた

からな。

「その時はどうだったんだ？」

「雑魚の悪魔が数匹いただけで、特にコレっと言って異常な物は何も見当たりませんでした」

「そうか……」

「レオンの腕も、悪魔になってしまったんですね？」

「ああ。だが問題ねえよ。安心してくれ、姐さん」

「そう……」

「……」

騎士カリムが俺を見てきたので、本当に大丈夫だと頷いて答えた。
騎士カリムは安心したのか、笑顔になった。

「なら、ここからは六課の今後について……」

それから話は進んだ。終わって帰ってきたのはもう夜だった。

フェリス、C・C、空幻の部屋。

ピーー！

「起きてるか？」

『イブキか？ 性欲の処理なら一人で』

「するか！」

『だったら団子でも持ってきたのか？』

『何を言っている、ピザだろう』

『俺は何でもいいぞ』

部屋の向こうで勝手な事ばかり言っておりますな……。

「何も無い」

『そうか。じゃあな』ピッ！

「……………」

ピ………

『誰だ？』

「……明日買ってやるから、団子も、ザも甘い物も」

『よし入れ』

このアマ……いつか泣かす。

俺は怒りを感じながらも鍵の開けられたドアを開く。
そして最初に目にした物は最悪だった。

「……なんだこの部屋は」

辺り一面ゴミゴミ下着ゴミゴミ服ゴミゴミ雑誌ゴミ
ミゴミ下着下着下着ゴミミミミ……。
もう一度言う……何だこの部屋は!?

「私達の部屋だ」

「嘘付け! ただのゴミ捨て場だろ!」

「レディの部屋に向かってゴミ捨て場とは……最低だな」

「レディだと思つのなら片付ける！」

「よく見る。私のゴミは無い」

「何……？」

そんなの分からんだろうが。えっと……ピザピザピザピザピザピザ
菓子袋菓子袋ピザピザピザピザタッパータッパピザピザピザピザ弁当
弁当ピザピザ……。

「……因みにそこらへんに落ちている下着は？」

「私のだ」

Ｃ・Ｃがベッドに寝転びながら手を上げた。

「因みに全て履いたもので洗ってない。そしてその内一枚は脱ぎただ」

「へえ〜……で、俺がそれを探すと思いか？」

「探さないのか？」

「探さんわ！」

貴様らは俺を何だと思っているんだ！？ 変態か？ HENTAIなのか？ ザツケンなチクシヨウ！

「それとなんて格好してるんだ！？」

フェリスは良し。インナーを寝巻に着ているから。だがC・Cはワイシャツだけだった。しかも胸の下のボタン一つしか閉じてない。故にアレがチラチラと……。そして空幻は狐の姿かと思いきや、浴衣姿で寝転んでいた。しかも浴衣は乱れ、煽情的な色気を出していた。

「私達は寝る時は何時もこの格好だぞ。空幻は狐の時もあるが」

フェリスは団子を食いながらソファアに座っていた。そのソファアにもピザのゴミと下着が散乱していた。

「フェリス、お前は片付けようとか思わないのか？」

「私のゴミは無い」

「……なら大量にある筈の団子の串は？」

「……」

「おい……何故黙る」

「……」

C・C・Cがベッドの下を捲った。そこにはぎっしりと詰め込まれた団子の空き箱やゴミがあった。

「フェリス？」

「過去は振り返らない主義だ」

「振り返れよ！ 過去の残骸ぐらい処理しろよ！」

「イブキ」

「何だ！？」

C・C・Cに呼ばれそっちの方向を見ると、魅惑的な寝方をしてこちらを向いていた。

「部屋が汚い？ だったらお前が片付けたらいいのだよ」

「俺は雑用係か！？」

「わふっ!?!」

ちよつとムカついたので近くにあった何かを両手に取り、片方を投げてC・Cの顔面にぶつけた。

「おのれ……私の美しい顔にピザの箱をぶつけよって……しかも内側……に……」

「自分で言うな! 確かに美人だが!」

……あ? なんでそんな驚いた眼で見てんだよ? それに何か左手に握った奴が妙に暖かい……。しかも布のような感触が……。

俺は恐る恐る握ったものを見た。

「……紫の……Tバック」

「……脱ぎたてだ」

「……」

「「「……」」」

「……部屋を片付けさせていただきます」

「「「うむ」」」

チクシヨウ！ 俺のマヌケがああああああ！！

少々お待ち下さい。

「お、終わった……」

クソ……何でこんな時間帯に大掃除しなくてはならないんだ……しかも俺一人で……。

「だるい……寝たい……八十年くらい寝たい……」

「永久に寝かせてやるうか？」

「許して、ほんの冗談です」

「つまらん」

この……なにかと剣を抜いては俺を斬ろうと……今度団子を人質にして後悔させてやるうか？

「それで、何しに来たんだ？」

Ｃ・Ｃがピザを食べながら聞いてきた。

その箱、ちゃんとゴミ箱に捨てるよな。

「ちょっと聞きたいことがあってな」

「……スリーサイズは教えんぞ？」

「聞きたくもない」

ピザばっか食っている奴のスリーサイズなんざ知れてる。

「何か今失礼な事を考えただろ」

「さあ？ で、本題だが……悪魔はどうやって生まれる？」

「……何故そんな事を？」

俺は教会での事を話した。あの文字の事は伏せて。すると三人は少し考えて答えた。

「大体は力の強い悪魔が己の魔力で作り出すか、悪魔同士で子を成すかだな」

空幻が思い出す様にして口にした。

という事は悪魔も雄雌と分かれているのか……。

「大体というと、他もあるんだな？」

「ああ。自ら邪な魔力を取り込むか、別の生物に種を植え付けるか

だ

「ならあの画像は産まされた後ってわけか」

フェリスの言葉で納得した。

早速クロノ提督に報告した方がいいな。
でも俺連絡先知らないしな……フェイトにでも聞くか。

「あ、もう一つあるぞ」

「何？」

C・Cはピザを食べる手を休めた。

「胎児に悪魔の力を注ぐことで、その胎児は悪魔として生まれてくる」

「胎児に？」

「そうだ。だがこれは生まれる前に死ぬことが多い。成功しても、母体の腹を食い破って出てくるしな」

わお……まんまエイリアンだな。うわ……想像しちまった。

「サンキュ。夜遅くすまなかつたな」

「礼は……分かってるだろ？」

「ああ。……あ、そうだ。言い忘れるところだった」

ミリアの事を言っておかないとな。出会いがしら早々、警戒されては困るし。

「明日、新しい仲間を連れてくるから、喧嘩するなよ？」

「仲間？……ま、まさか……あの女か？」

よく分かったな。C・C・とはギアスで繋がっているから思考がばれるのか？ だったらちよつと嫌だな。

「ああ。じゃ、そう言う事で」

何かを言われる前に俺は退散した。

後ろでC・C・に何かを言っている様な声が聞こえたが、そこはまあなんとかするだろ。

俺は自室に戻り、爆睡するレオンを蹴り飛ばしてから眠った。

レジアスの心（前書き）

作者「やべえ……絶対変な所ある。俺の発見できていない変なところがあるぞ……！」

イブキ「いや作くるなよ」

作者「黙れ女つたらし！」

イブキ「ちよっ、お前なあっ！」

レジアスの心

朝、それは平穏で気持ち良く、二度寝したくなるものだ。少なくとも、俺はそうであってほしいと願う。

しかし、その願いは必ず打ち崩される。

「だから！ 何故いつも貴女はここに来るんですか!?!」

「イブキさんは私にとって命の恩人です！ だからお世話をさせていただくのが恩返しというものです!」

「それは私の役目です！ 貴女はアイナさんのお手伝いでしょう!」

「それも兼ねてです！ 一人暮らし舐めないで下さい!」

「.....」

お分かりだろうか？ 毎朝、俺は何故か毎回壊れる目覚まし代わりにハクに起こされている。

しかし、ミリアが来て数日。ハクより先にミリアが起こしに来るのだ。そしてハクが現れ、今の様な状況になる。

しかも、競争でもしているのか、起こしに来る時間がどんどん早まって、今では五時に起こされている。喧嘩という騒音で。

「……イブキよお」

「言つな……」

「いいや言わせてもらつ。毎回毎回、煩くて眠れないんだが？」

「それは俺に言つな。この二人に言え」

俺は布団に包まり、もう一度寝ようと試みた。

「おい……はあ、俺も寝よう」

そうそう、寝れば全て解決するんだ。

「「起きて下さい！」」

「「イエッサー!!」」

解決はしなかったか……。

今日の予定、朝はエンペラード隊での訓練。昼からは何故かレジア

スに呼ばれた。また悪魔関連だろうか。はやてが気をつけてとか言っていたが、はやてが思っているよりレジアスは良い奴だと思う。

そして今は昼。俺は地上本部に来ていた。因みに俺一人だ。またアイツらを連れてきたら絡まれる事が目に見えてるしな。

「おい、あれ見ろよ……」

「え？ お、おいアレって魔王かよ？」

「マジで？ 本物……」

殺していいですか？ 誰が魔王だ、誰が。俺はそんな極悪人ではないぞ。ただ戦闘が楽しくて楽しくて仕方ないだけだ。……ウソだ。別に楽しくない。ただ少しハイになるだけだ。

俺は周りから来る（主に男から）ヒソヒソ話しにイライラしつつレジアスの部屋にやってきた。

「失礼」

「おお、来てくれたか。どうした？ 何故そんなに不機嫌なのだ？」

「別に。ただ俺が魔王だとか変な噂が流れている様でな……」

「はははっ！ 良いではないか、悪魔を狩る魔王。面白いではないか」

「……」

いや、カッコいいとか思っていないぞ。うん、絶対。そんなことないからな。

「で、何で俺を呼んだんだ？」

俺はソファーに座り、レジアスに聞いた。

「まあそう慌てるな。機動六課に査察を出したのは知っているな？」

「ああ。はやてがとても焦ってたな。マズイところを見つけれられて潰されるんじゃないかってな」

「ははは、やはりそう思われていたか」

レジアスは笑い、頭をかいた。

「別にそんな気は無かったんだろ？」

「ああ。あそこはまだ不安定な所だからな。問題が見つかればそれを指摘し、無くさなければならんからな」

「だったら別に悪ぶってないで素直にそう言えよ」

「これまで意見の対立で溝が深まっている。なのにいきなり優しくしたら変に怪しまれるだろう」

「あつそ……」

面倒くさい性格だよな、この二人って。

トップに立つ者同士、腹の探り合いとか諸々で注意深くなるのは分かるけどさ。

「なあ、聞いたところによると、お前は教会の預言を信じてないらしいな」

「別に信じていない訳ではない。ただ、預言だけでどうこうする訳にはいかんのだよ」

「まあそうだよな。それと、質量兵器の導入も押ししてるんだってな？」

「ウム。表向きは戦力強化ということにしているが、本当は魔法を扱えない者たちでも戦う力を与え、守りたいものを守ってほしいのだ」

「ほう……」

「我々局員が弱き者を全て守れば、それはとても理想的だ。だが、現実はそうではない。今ではガジェットという物が出現し、AMFなる魔法を無効化する代物まで出てきた。ならば、魔法だけでは無

理ならば質量兵器も使用し、この世界の平和を守りたい」

「それは立派な志だな」

力が無い者にも力を与え、守りたいものを守ってほしい……か。

それはいい。俺は大賛成だ。だがリスクもある。

今まで黙ってきたゴミ共がそれを手にし、弱き者に牙を向けるだろう。

そうなれば、また新たな争いが生まれる。

「リスクがあるのも理解している。だが、それを気にしては何も出来はしない。悪魔も出現し、今は局にしか被害は出ていないが、いつ市民に被害が及ぶか……」

「そうだな……」

「悪魔の事は我々ではどうにも出来ない。君たちにしか頼れない。だが、せめてそれ以外の事は我々が守りたい。だから、手を貸してくれ」

レジアスは立ち上がり、頭を下げてきた。

地上本部のトップが頭を下げた。それほど事態は切迫しているのか？

「預言は知っている。次の公開陳述で管理局が襲われる事は。しかし我々だけでは守りきれないかもしれん。だから、どうか私に手を

貸して欲しい」

「…………レジラス」

…………何を今更言っているんだ？ 俺が管理局にいる限り、手を貸すのは当然。なのに態々呼びだしてまで頭を下げるか？ ましてやトップの者が…………。これは、なにか特別な…………。

「レジラス、一つ聞きたい」

「何だ？」

「お前は、何と戦っている？」

「…………君と同じだ」

「…………そうか」

そうか…………そう言う事だったんだな。

「分かった。エンペラード隊隊長、イブキ・ヤマト。及ばずながら、助力を尽くします」

「…………ありがとう」

この時俺はまだ分かっていなかった。俺の敵は、あまりにも恐ろしく、強大で、勝てない敵という事に……。

レオン side

朝、俺はイブキの野郎をブン殴りたかった。だから俺はフェリスちゃん達にイブキが街にナンパしに行ったって言っというてやったのさ！
ふはははっ！ ザマア見やがれってんだ！

そして、只今の俺はフォワード達と訓練をし終わり、なのはちゃんと後始末を終え、朝食を取りに行くところである。

「あっ！」

「ん？ どした？」

なのはちゃんがある場所を見て声を上げた。俺はその場所をみた。

ありゃあ…：ヴィヴィオちゃんとフェイトちゃんではないか！

「ヴィヴィオー！」

なのはちゃんは二人に向かって走り出した。俺もなのはちゃんの後を追いかけた。

「おやよう、ヴィヴィオ。ちゃんと起きられた？」

「うん！」

「そうか、偉いな」

うりうり、褒美に撫でてやるう！

「おはよう、フェイトちゃん」

「おはよう！ 我が愛しいでででッ！！」

「レオンくん？ 何を言っているのかな？」

「すいません……」

おお～いてえ～……。しかし！ これは嫉妬されているからこの痛み！ つまり！ なのはちゃんは俺に恋してる！ ……等であつて欲しい！

「あははは……朝から元気だね」

「元気がないと夜のお相手は
はようつて」
「ヴィヴィオ、なのはさんにお
分かってましたよ」

君がイブキー筋だつて事は。だが、だが俺は！ それでも奪つてみ
せる！ 世の中の美女はこの俺！ レオン・スラスト様の…いてっ
！？ ご、ごめんなさい！ 調子に乗りました！ だから槍投げな
いで…！

「おはよー」

「おはよう」

「パパもおはよー」

「おはよう、ヴィヴィオちゃん！」

フツ…聞いたかイブキ。俺もとうとう子供を持ったのだ！……まだ
してないけど。

「朝ごはん、一緒に食べられるでしょ？」

「うん」

おおっ！ フェイトちゃんからの誘い！ これは受けん訳にはい

かんだろ！

「朝ごはん？」

「そう。さ、行くじ」

なのはちゃんがヴィヴィオちゃんの手を引く。

ああ、良い母親だな……。

「パパもいこ」

と、ヴィヴィオちゃんは俺に手を差し出してきた。

やべ……俺、何か泣けてきた……。

「よし、行くじか」

「うんー！」

俺はヴィヴィオちゃんの手を掴んでなのはちゃんと並んだ。

……やべえ……マジで泣けてきた。子供って、こんなに嬉しい事してくれるんだな……。

現在は昼。俺はC・C・ちゃんと格闘の訓練をしている。
左腕の力はエンペラード隊としか訓練出来ないからだ。

「おらああああー！」

「……………」

「でえりやああああー！」

「……………」

「ぐじぐじやああああー！」

「……………」

「……………」

C・C・ちゃんはピザを片手に俺の拳を簡単に受け流していた。

「遅い、遅すぎる。お前、態々私が動いてやってるんだから、もっと私を楽しませろ」

「……おう、そのセリフ、もう一度言ってくり？」

「死ぬか？」

「スンマセン！」

だからその拳を退けて下さい！ 俺の顔が潰れちゃう！

「まったく、その腕から溢れる魔力を身体全身に廻らせると言っているだろう。そうすれば自ずと身体が強化される」

「しかしよお……」

「口答えする暇があるなら身体を動かせ。そら」

「うぎゃっ!?!? C・C・ちゃん、もうちょっと優しく……あ、でも君が望むなら俺はマゾにでも……」

「キモいから死ね」

「アギヤーーーー!」

冗談通じないね。いや、これがC・C・ちゃんなりの馴れ合いなのな? くう〜! 可愛いねえ!

「お前はアイツよりも強くなっているんだからな。これぐらい出来

「当然だ」

「アイツ……？ イブキか？ けど俺は……」

「忘れたのか？ お前はリミッターというものを付けているんだろ？ その状態で伝説級の悪魔の力を身に付けた。ならただ魔力が桁違いのイブキに勝てない道理はない」

「いや、桁違いの時点で俺とアイツは同レベルなんじゃ……」

「今の状態ではほぼ均衡を保っているんだろ？ ならリミッターを解除したら勝てるだろ」

あゝ……そりゃ確かにそうだね。うん、イブキと俺はほぼ互角。だが俺はハンデを付けてる。という事は俺は実質的にイブキより強いと言う訳だ。

「だがまあ、それでもアイツに勝てるかな……」

「ほっほー……えらくイブキの肩を持つじゃないか」

「当然だ。イブキは私と将来を約束した仲だからな」

「なぬうつ……！？」

将来……？ それはつまり……婚約？ 結婚！？ ウツハウハ！？

「おくのくれ〜！ この俺を差し置いて自分は美人に囲まれてパラ
ダイスか！？ ハッ！ だがそうは問屋がおろさないぜ！ ここで
俺がカツコいい所をC・C・ちゃんに見せてC・C・ちゃんを俺の
虜にしてやる！」

「面白い。アイツより上だったら乗り換えてやるっ」

「おっしゃー！ 燃えてきたー！！！」

結局負けました。

ハーレムへの道は険しいか……だが、それでこそ、やりがいがある
ってもんだ……。

レオンside out

イブキ s i d e

本部から帰ってきたのは夕方だった。ついでにフェリス達にお土産の品々を幾つか買ってきておいた。

ま、偶には俺だって優しくなるさ。

俺は隊舎に入り、ロビーを抜けようとして……。

「ふんっ！」

「がはあっ!?!」

剣で殴られた。

「お　お　!?!」

「この歩く性犯罪兵器が。今ここで私が制裁を下してやる」チャキ

「待て待て待て！　何だいきなり!?!」

フェリスが剣を俺の喉仏に向けて振り払おうとし、俺は寸前で避けた。

「私達がオフィスで書類整理している間に、お前は街にナンパしに行っていただと？ 私のボロ雑巾のくせにいい度胸ではないか」

「な、ナンパ！？ ちょっと待て！ 俺はレジアスに呼ばれてたんだぞ」

「嘘を付け。レオンが言っていたぞ」

「その時点で嘘だと気付けよ！？ レオンだぞ！？ いつもふざけてるレオンだぞ！？」

「だがお前より清らかなオーラが出ている」

「なワケあるか！」

「つてことはアレか？ 俺はレオンより穢れていると？ それだけは認めねえ！」

「さあ、潔く己が罪を償え！」

「待て！ それ以上剣を動かすと、この団子が消え失せるぞ！」

団子を取り出し、魔力を団子に向ける。

土産に買ってきた団子がこんなところで役に立つとは……侮れんな。

「くっ……卑怯な！」

「さあどうする？ お前がその誤解を改めるならば、この団子を解放しお前に渡そう」

「チツ……団子の為だ。今回は見逃そう」

だから誤解だと言ってんだろ。

フェリスが剣をしまったので、俺は団子を渡した。

「ほらよ。本日限りの限定だつてさ」

「おお！ 限定……なんて良い響きだ」

「で？ レオンのウルトラハイパーゴールデンスペシャルクソ野郎はどこにいる？」

「ああ……医務室だ」

「医務室？ なして？」

「C・Cと訓練していて燃え尽きた」

あれま、御愁傷様。せめて骨だけは拾ってやらんぞ。逆に捨ててやる。

「お前も、遊んでないで強くなれ。さもないと何も出来んぞ」

「……………ああ」

強くなれか……………簡単に言ってくれる。だがそうだよな……………。ミアアという新たに守るべき者が出来て、俺より遥かに強い奴も現れて……………この世界を守るにしても、仇を討つにしても今の俺の力ではどうしようもないしな……………。

「フェリス」

「何だ？」

「俺は強くなるぞ」

「……………？」

「強くなって、全て守ってやる……………」

「……………そうか」

やってやる……………もう目の前で失うのはご免だ。
相手が悪魔だろうが魔皇まおうだろうが神だろうが、守りきってやるぞ。

平和の日常（前書き）

作者「今回は何にも無いよ。ただイブキがキモくなるだけ」

イブキ「おい……」

作者「にしてもエクシリア最高だね！ ミラは反則だよ。でも俺の中ではティアが一番かな？」

イブキ「どうでも良いよ、お前の事なんか」

平和の日常

本日、新しい人物が機動六課にやってきた。

一人はスバルの姉、ギンガ・ナカジマ陸曹。今日から暫くの間、六課に出向する事になった。そのギンガはどうやらレオンに恋しているみたいだ。レオンの顔を見た瞬間、ギンガの顔が真っ赤になり、拳動不審になった。

彼女のデバイスはスバルと同じもので、スバルと同じくウイングロードも扱う。容姿はスバルと同じ髪色で腰まで長く、瞳も同じ色。但し、ギンガの方が大人だ。

もう一人はマリエル・アテンザ。隊長陣のデバイスを十年近く診ている人で、地上に用があるから暫く六課に滞在する事になった。容姿は緑の髪のリョートヘアで、青い制服に白衣で眼鏡をかけている。

ふむ……六課も人数が増えてきたな……。

「もらったあつ！」

「やるか」

ひらりとレオンの突きを避け、蹴りを放つ。レオンはそれを避け茂みに隠れる。

ふう〜……今は戦闘中だったな。

今俺は何をしているかと言うと、俺対俺以外の模擬戦だ。

んな無茶な、という俺の叫びはなのはとフェリスの黒笑みにより掻き消された。なのはが子供たちに悪魔の力とも戦わせておきたいと、俺に頼んできたからだ。

俺は悪魔じゃない！ そう反論したが、悪魔と戦ってる時点で悪魔と同じだよと強引に決めつけ、更にフェリスの面白そうだの一言で今の様な状況になった。

「ったく、俺は悪魔じゃないっての。まあ、良い訓練にはなりそうだよな」

下手したら死ぬけど。それがまた、いいんだよな。

「うりゃあああつ！」

「っと、スバルか」

「はあああつ！」

「ギンガね」

スバルの正面からのパンチ、ギンガの後からのパンチ。それを掴み、上へブン投げた。そこに……。

「左右からの同時射撃……」

その場から後ろに跳ぶと、ピンクと青の魔力砲がぶつかり合った。

レオンとなのはか……っ！

考える暇を与えないようにか、着地した全方位からオレンジ色の魔力弾が飛来してきた。

「チツ！」

俺は拳と脚に魔力を纏わせ、その全てを叩き落とす。

この模擬戦、俺はハンデとして体術しか使えない。加えて空も飛べない、次元も使えない、一撃でも喰らえば負けという恐ろしく不利なハンデだった。それなのに、相手は何でもありときた。

俺はそんな超人じゃないってのに。確かにそうなりたいけどさ。

魔力弾を叩き落としていると、今度は白く輝く矢が何十本も降ってきた。

「おいおい……」

俺は前方の魔力弾を集中して叩き落とし、一気に前に跳び出した。何とか弾丸と矢の地獄から抜け出せたと思ったら、今度は二本の剣が視界に入った。

「のおっ!?!」

マト○ツ○スの○オさんのように避け、鼻先を剣が通過した。

「クソっ!」

俺は一旦ダツシュし、その場から離れようとしたが、目の前にC・Cが現れ、掌底を与えてきた。俺は両手で防ぎ、後ろへ飛ばされた。

マズッ……後は……!

後ろには先程避けた、シグナムとフェリスが剣を構えて待っていた。恐らく剣で一閃。ならばその剣を手で掴みさよなら。出来る、俺には出来る!

「ハアアアッ!」

「やられるものかあああっ!」

バク転の様に後ろを向き、手で剣を掴んだ。勿論、指で剣の腹を掴んだ。

そしてこのままバク転！ 更にバク転の繰り返しで離脱！

「フハハッ！ 喰らう」

「おりゃああああっ！」

突如、上からヴィータがイイ笑顔でハンマーを振り下ろしてきた。

なんつー良い顔だよ！？

俺は両脚を上挙げ、ハンマーを蹴り飛ばした。

これしきの事で打たれるかつ！

喜ぶのも束の間、俺の両脚は巨大な魔力の手に掴まれた。

「……………へ？」

「一名様、空中遊泳にごあんな〜い！」

「しえええ才おおおん—————！！！」

俺は空高く放り投げられた。そして上にはフェイトが何かどデカイ剣をバットのようにつまんでいた。

「ごめんね」

「謝るなら打つなよおおお!？」

大きくスイングされた大剣。それを秘技・真剣白刃取りで受けようとした。しかし……。

「はれ？」

確かに掴んだ筈の大剣は塵気楼のように消え去り、そのすぐ後に胴体を大剣で打たれた。

「俺を忘れてはいなかっただろうか？」

「くっ……げ……ん……」

幻術か……クソう……。

俺は地面に突き刺さった。

「やった！ 私の勝ちだね！」

「あゝあ、まさかあの砲撃が避けられるとはね〜」

「イブ兄、何であそこで防いじゃうかな〜」

「流石はレオンさんに勝つ人ね。侮れないわ」

「って言うか、私の弾丸を手足で叩き落とすって何よ？ もう人間じゃないでしょ」

俺の横で好き勝手言ってくれる、女共。そしてあいつらは俺とは別の何かの勝負をしていた様で、フェイトがとても喜んでいた。

「まったく、だらしない。私の下僕なら、アレぐらい避けたらどうだ？」

「何故あそこで私の掌底を防いだ。防がなければ私の勝ちだったのに」

「俺は幻術で惑わしたから、俺も勝ちだよな？ な？ な？」

「むう〜、イブキさんは反則です。どうしてあのような避け方するんですか？」

理不尽、理不尽極まりない。どうして俺がこんなに責められなければならぬんだ。俺はただ、死にたくなかっただけなのに……。

「アツハツハ！ イブキよお、ザマアねえな！ 最近調子に乗ってるから天罰が下ったんだよ！」

ダメレ、カミコロスゾ？

と、言い返したかったが、そんな体力も無い。いや、それ以前に……。

「フフンハフハへホ！（早く助ける！）」ジタバタ

俺は未だに地面に刺さっていた。唯一外に出ている足をバタつかせ、誰かに助けを求める。

「あつ！ ご、ごめんね！」ズボツ

「ゴホツ！ ゴホツ！」

フェイトが慌てて引つ張ってくれた。

「大丈夫？」

「だと思っなら打つなよ……」

「ごめんね。イブキに一撃当てた人が、何でも言う事を聞かせれるつて、勝負してたから」

「フェイト、お前だけは信じていたのに。失望したよ」

「ふええ〜っ!？」

俺は売られたのか。誰にとは言わない。俺は売り物にされたんだ……。

「と、父さん。僕とキャラはそんな事考えて無かったからね!？」

「そ、そうですね！ だからそんなに恨めしそうな顔で見ないで下さいー!」

「エリオ……キャラ……。そうか、だから攻撃に参加していなかったのか……」

俺にはまだ希望があったんだ……。息子と娘という希望が……。

「あ、でもフェイトさんが勝ったんだったら良いかな？」

「うん、そうだね。他の人だったらちよつとね……」

世界は俺を見捨てた。俺はこの世界でも独りなんだな……。

「なあなあ、フエイト」。俺の幻術のお蔭で一撃入れたんだから、俺も勝者だよな？」

「え？ ど、どうかな？」

「そうだよな？」

「い、痛いよ。ねえ、痛いよ」

あ、これはもしかして勝負を有耶無耶に出来るかも。ってかしない
と。

「勝者は二人もいらん。よってこの勝負は無効だ」

「ふむ……そうだな。強者は一人でいい」

あつと、ここでフェリスからの予想外の援護射撃。

「……という事は「チャキ

「奪えば良いんだな？」ボウ

あれ？ 何でお前等は臨戦態勢に入ってた？ あ、ちよい！
こら！ 二人で戦い始めるな！ 被害がこつちにも
！！

「ママーー！」

「ヴィヴィオー！」

あん？ ああ、ヴィヴィオか。しかし、子供の笑顔は凄いな。フェイトと空幻の戦いを瞬時にして止めたぞ。

「危ないよー。転ばないでね？」

「うん ふぁー！」

フェイトが言った傍から転んだ。しかも顔から。

あちゃー、アレは子供には痛いだろうな。

「あ！ 大変！」

「大丈夫」

フェイトが駆け寄ろうとして、なのはに止められた。

「地面柔らかいし、綺麗に転んだ。怪我はしてないよ」

「それは、そうだけど……」

「おいおい、スパルタにも程があんだろ。子供にはもっと優しくだな……。」

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

なのははその場にしゃがみ、ヴィヴィオに呼びかけた。

「ふえ……ぐす……あ……！」

「うわ……今のも泣き出しそうだよ。」

「怪我してないよね？ 頑張って、自分で立ってみようか」

「……ま……ま……！」

「うん、なのはママはここに居るから。おいで」

「ふえ……あああ……！」

ダメダメ！ もう泣くぞこれ！ フェイト、ゴー！

「なのは、駄目だよ。ヴィヴィオ、まだちっちゃいんだから」

俺の思いが通じたのか、フェイトは慌ててヴィヴィオに駆け寄り、抱き上げた。

「フェイトママ……」

「うん、気を付けてね。ヴィヴィオが怪我なんかしたら、なのはママもフェイトママもきつと泣いちゃうよ」

「ごめんなさい」

「もう、フェイトママちょっと甘いよ」

「なのはママは厳し過ぎです」

「……なあイブキ」

「何だ、レオン？」

「アレを端から見れば……」

「ああ……」

「百合だ」

危ない関係の出来上がりだよ。男同士じゃないのが唯一の救いだよ。

「パパー！」

「おお、はいはい」

レオンがヴィヴィオに手を振って近付いた。

レオン……。何だろ、この敗北感。俺にも息子娘がいるが、この敗北感は一体なんだろう……。

「エリオ、キャロ」

「何ですか？」

「母親って、やっぱり必要か？」

「ええっ!？」

「そ、それって……!？」

レオンに負けてる要素……。ヴィヴィオを見る限り、両親が揃ってるよな……。あ、でもエリオとキャロにはフェイトという保護者いるし、その点では一応クリアしてんだよな……。ならこの敗北感は何？

「おい、ヴィータ」

「何だよ？」

「レオンにあつて、俺に無い父親要素つて何だ？」

「……一応聞こう。何で私に聞く？」

「子供じゃないのか？」

「あたしは大人だ！」

チツ、他に六課にいる子供は……。リインフォース？だけか。昼食の時にでも聞いてみるか。

因みに、スバルとティアナに聞いてみたところ、レオンと比べて俺は黒い、そつだ。

何故だ？ もの凄く悲しくなった気がする……。

食堂。

ミリアも合流して俺達は全員で昼食にした。

「で、何でお前はここにいるんだ？」

「我慢してくれヴィータ。これは俺の死活問題なんだ」

「何言ってるんだ？」

俺はただ一人、八神家のテーブルにお邪魔している。フェリス達には好物を渡して静かにさせている。

「しっかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわね」

「スバルのちっちゃい頃も、あんなだったわよね」

「うえ？ そ、そうかな？……／＼／＼」

スバルはギンガの言葉に顔を赤くした。

幼い頃か……俺の幼い頃って、どんなだったんだろう……。やんちゃ？ それとも人見知り？ 今となっては確認の仕様がないけど

な。

「リインちゃんも」

「え〜！？ リインは初めっから割と大人でした〜！」

シヤマルの言葉に、俺の隣にいるリインが否定した。

「嘘を付け」

「身体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねえか」

リインの否定は、シグナムとヴィータに否定された。

「うう〜、はやてちゃん、違いますよね？」

「ふふっ、どうやったかな？」

「え〜！？」

という事はリインも昔は赤ん坊だったという訳だ。ならばリインなら親がどういふものか分かるかもしれない。

「なあ、ライン？」

「何ですか？」

「お前にとって親とはどんな存在だ？」

「ほへ？」

「いきなり何を言ってるんだよ、キモい」

「ロリは黙ってる」

「ああん？」

「ほら、これで好きなデザートでも買って来い」

「おっ、サンキュー」

「ヴィータ、お前……」

喜ぶヴィータを放って置いて、俺はラインに向き直った。

「どうなんだ？　ラインが子供の時、どのように接しられた？」

「え、えつと……」

「こらこら。そんなにがつつい取ったらラインが怖がるで？　ただ
でさえ子供に怖がられとるねんから」

はやてが俺を制して来るので、少しだけ自重した。

「すまん。だがこれは重大なんだ」

「何でや？」

「何故かヴィヴィオの父親になったレオンに、同じ父親として負けた気がするからだ」

「……あー……」

「何なんだ、この敗北感は？ 俺はそれが知りたい」

「一体俺は何に負けたんだ？ やはり母親とペアじゃないといけないのか？ 共に子を可愛がれと言っのか？」

「なあ、教えてくれ。リインをこんなに可愛く育てたお前なら分かるだろ？ 俺は父親として何が足りない？」

「か、可愛いですか……／＼／＼／＼」

「さり気なくウチのリインを口説かんといってくれるか？」

「だが事実だ！ リインは仕事も出来る、その可愛さで仕事場の士気を上げる！ ヴァイスに聞けば、リインは六課のアイドル的な存

在になつてゐる！ 勿論、他の人もそんな存在にもなつてゐるがな！ だから！ そんなアイドルを育てたはやて！ お前なら分かる筈だ！ 親とは何か！ 父とは何か！ さあ！ 教えてくれ！」

「お、落ち着きいや！ キャラ崩壊してるで！」

「アイドル……えへへ、そうなんですか……／＼／＼」

さあ教える！ 俺の何が悪い！ 一体何が！？」

「やっぱり、母親と共に子供に与える優しさ、かな？」

「やはり母親か！？ なら俺は……だがそれならエリオとキャロにはフェイトという母親代わりがいる！ それでは駄目なのか！？」

「そりゃそうや。レオン君となのはちゃんほら、アレやる？」

「ああ、アレだな。……待てい、ならば俺はフェイトと……？」

「そや。それが一番の方法や」

そ、それは……。いいのか？ そんなことでいいのか？ だが、それでは……。

「……仕方がない」

「おっ？」

「俺は俺で父親を貫こう」

「何でやねん。何でそないな考えになんねん」

「俺はレオンに負けたくないだけだ。そんな理由で無理やりフェイトを巻き込めるか」

「あ、そう……（それでもフェイトちゃんは受け入れると思うけどな……寧ろバッチコイやな）」

母親が必要というのなら、諦めよう。俺はシングルファザーで生きてやるっじゃないか。

「頑張つて、フェイトちゃん」

「うん……。私、頑張る……」

「流石親友だけ……。それでこそ漢だ」

「家畜の存在で……」

「この、浮気者が……」

「なんなら俺が母親になっても良いのに……」

「今度、惚れる矢でも作ってみようかな……」

「イブキさん……」

頑張ろう。レオンに負けない立派な父親になろう。その為には子供
という時間も増やさないと。

午後。俺は仕事部屋で書類整理をしていた。といっても、もう終わ
ったので、昔の事件の報告書を眺めていた。

「……ん？」

これは、あの時の……。

目に入っただのはあの時の、仮面を被った蒼コートとの戦闘。たぶ
ん、なのはかフェイトが書いた報告書だと思う。

そう言えば……こいつの声、何か聞き覚えがある様な……。それに
幻影剣って、アレだよな。デビルハンターの兄貴の……。それにあ
の大剣もそいつが黒騎士になった時に使ってた剣と似てたよな……。
偶然？ 実はソイツですって訳ないよな……。

「何を見てるんだ？」

「空幻、後ろから抱き付くな」

「良いではないか、こう体重をかけたら楽なんだし」

「それはお前だけだろ。つてか体重なんて感じないぞ」

空幻が女姿で抱き付いてきた。男の身にもなっしてほしい。その……アレだ。アレが反応するんだよ。

「お、これは……」

「新型ガジェットが襲来した時に現れた奴だ。ほぼ高確率で悪魔だろうな」

「……」

「……どうした？」

空幻は瞳が獣のソレに変わり、画像を見ていた。

「……まさか」

「……知ってるのか？」

「いや……。でもウドウがいたから「イツも……」

「おい」

「へにやっ!?!?」

一人で考えていたから空幻の鼻を捻じった。

「一人で進めるな。コイツを知ってるのか？」

「う、うむ。と言っても、話しか知らないが」

「どんな？」

「魔王まおうと魔皇まおうに従う、最強の魔剣士・ゼオン。そいつが使う剣は世界を斬るとも言われている。所謂、伝説の悪魔だ。そいつの姿は蒼い衣を纏い、蒼い大剣を持つと言われている」

「まおうと……まおう?。」

「魔の王と魔の皇帝の事だ。俺達の世界ではどちらも王（皇）と呼んでいる」

「……どう違うんだ?。」

「魔の王は全てを魔に染めようとした。魔の皇帝は全てを破壊しようとした。一見同じように見えるが、前者は世界を残す、後者は世界を無くす」

「つまり、皇帝の方が恐ろしいってか？」

「そんなところだ」

厄介な設定だなオイ。何で同じように呼ばないんだよ？

「自らがそう名乗り、同じ時代に産まれたからだ」

「心を読むな。つーことは、その二人は敵対していたのか？」

「いや、殆ど共に行動していた。まあ、最後は皇帝が王を殺したが、詳しい文書は残っていないんだ」

「何千年生きた大天狐様でも分からないのか」

「その伝説はもう何千億年も前だからな。人間の感覚で言えば」

随分と大昔じゃないか。そんな大昔の悪魔が何で今になって現れるんだよ？ やっぱ魔王が現れたかもしれないからか？

「失礼します。お掃除に……来ました。イブキさんを」

「物騒な事を言っちなよ!？」

ミリアが掃除機片手に入ってきた。ミリアは俺と空幻の状況を目の

当たりにした瞬間、目からハイライトが消え、掃除機を俺に向けてきた。

「何だ貴様？ 俺とイブキの時間をそれで吸い取る気か？」

「そうですね……それも面白そうですね」

「それ以前に掃除は最低でも昼休み中にするんじゃないのか？ 職業怠慢だな」

「むっ……」

ミリアは空幻の言葉に反論出来なかった。

「まあそう責めるな。昼食に誘ったのは俺なんだから」

「イブキさん……」

「甘いぞ。そう甘くするから、こういった輩はつけ上がるんだ。ちやんと躡をしないといかんだ」

「分かった、分かった。次からはそうするから、その狐火を消せ」

空幻は手に灯していた火を消し、机に座りこんだ。

「悪いな。気にしないでくれ」

「分かりました」

「すまん」

「いえ……」

ミリアははたきを取り出し、掃除を始めた。

「もうここには慣れたか？」

「はい。皆、優しくしてくれて毎日が楽しいです」

「それは良かった」

「これもイブキさんのお蔭です」

「そうか」

照れるな……そう面と向かって言われると。

「この女誑し」

「なっ、別に誑しては無いだろ」

「ふん……」

空幻は何故か不機嫌になり、窓の外を見た。

「……あの、イブキさんと空幻さんって、どういった関係ですか？」

「ん〜……家族で頼りになる相棒かな」

「……」

「いてっ！ 何だよ？」

「もっと気の利いた事が言えんのか？」

「恋人とかか？」

「ツ！？／／／／／」

「……」

「まあそれは言い過ぎか。兎に角、完全に信頼できる相棒だな」

「……」

何だよ、その呆れた目は。俺になにか変な事言ったか？ おい、蹴るなよ。ひっかくなよ！

「イブキさん……鈍感です」

「まったくだ……」

だから、いったい何なんだよ？ 納得いかねえよ……。

その日の空幻はちよっぴり不機嫌で一日を過ごしたとき。

ガンマン、参上（前書き）

作者「さて、この小説……もう俺の自己満足の小説になりつつある。何故ならアニメで気に入ったヒロインを登場させたからだ！ しかもこの作品のヒロインがまた揺らいで消え失せた！ 誰を本命にしよう！？」

イブキ「しっかりしろよ！？　せめて話の構成だけはしっかりさせようぜ！？」

作者「ああ……。あ、それと、因縁の話しを修正させていただきました」

ガンマン、参上

とある山。ここは人が滅多にはいらぬ大きな山。この山の中には一つの、集落があった。ミッドチルダには珍しい、木造建築の建物が並んでいた。しかし、そこにはもう誰も住んではいなかった。昔は立派だったであろう住宅も、今やもうボロく、天井には穴が開き、壁は崩れ、水道は通っていなかった。

そんな集落の近くの森に、一人の女性がいた。

その姿は美しく、女の象徴ともいえる胸は大きく、誰しもが羨ましがらるスタイルをしていた。

服装はこれもまた珍しく、胸元を大きく曝け出した赤い半袖に白のちょうど胸下辺りまでの羽織の様な布、下は白いロングスカートかと思いきや大きな布を腰に巻いた様なもので、右足が深いスリット上になり、彼女の下着である赤い紐の結び目が見えている。手には親指と人差し指が出ている赤いグローブに、肘に届かない赤いアームガード。長く美しい脚には、膝下までの赤いブーツに銀の膝当てをしている。長く美しい金髪の前には赤いリボンが付いたカウボーイハットを被り、右腰には銃が入ったホルスターが付けられていた。

そして、彼女の金の瞳には、あるものが写っていた。

「あゝ、そこを通してくれませんか？」

「『コトワル』」

「何ですか？」

「『ココハワレワレアクマノスミカデアル』」

「そうなんですか。でしたら、お願いがあります。お風呂を貸して頂けませんか？」

彼女は目の前の如何にも悪魔ですと、言っている黒い人の形をした悪魔に頭を下げた。

「『イイダロウ』」

「本当ですか！？ ありがとうございます！ 汗かいちゃって気持ち悪かったんです！」

「『タダシワレワレノイエキブロリアルガナ！』」

悪魔は一斉に彼女に跳びかかった。悪魔は口を大きく開き、彼女を喰らおうとした。

ズトトトトトトッ！

しかし、悪魔の食事は銃弾の雨により阻止された。その銃弾は彼女の腰の銃ではなく、彼女の後ろから飛んできた。

「えっ……?」

彼女は銃弾に撃たれ、消え行く悪魔を見て大きく目を見開いた。

「そんな……」

「ふう〜、危なかったな。しかし、銃の腕も上がったな、俺」

驚く彼女の後ろから、黒いコートを着た男が両手に銃を持って現れた。彼の銃からは煙が出ていた。

「さて……おい、その人。ここは危ないから、俺と一緒に

」

しかし、彼の言葉は一発の銃弾によって遮られた。銃弾は彼の右頬を掠め、後ろの木を貫いた。

「は？」

「……して」

撃つたのは助けられた筈の彼女。彼女の手には某黒猫が持っている様なりボルバー（形だけ少し似ている）が握られており、真っ直ぐ彼に向けられていた。

「お、おい……?」

「どうして……」

「何?」

「どうして殺したんですか!?!」

またしても撃ち出した。銃弾は彼の足元に着弾し、彼を威嚇した。

「なっ……!?!? 何のつもりだ!?!」

彼は驚く。助けた筈の女性から銃を向けられているのだから。

「せっかく……せっかくお風呂に入れてもらったのに……!?!」

「はあああああ!?!」

どうやら彼女は自分が喰われそうになっていた事を知らなかったようだ。

イブキside

「そこになおりなさい！」

ダダンッ！

「ウソだろオイ!？」

俺は木の後ろに隠れた。

何でだよ!？ 何で俺がこんな目に合うんだよ!？ はやてに「悪魔が出た見たいやから退治してきてな」って言われて来ただけなのに、何で俺が助けた相手に攻撃されなくちゃいけないワケ!？

「出て来なさい!！」

ダダンッ！

しかも相手は実弾使ってやがるし！ 質量兵器は犯罪だったよな！？

「おい！ それは実弾だな！？ 質量兵器は犯罪だぞ！？」

「知りません！ 人の親切を殺した貴方に犯罪がどつこのつこの言われる覚えはありません！」

ダダンッ！

「あぶッ！？ 人って、あれは悪魔だぞ！？ 明らかに人じゃなかっただろ！？」

「でも私をお風呂に入れようとしてくれました！」

「それは喰われかけたんだ！」

「そんなワケありません！」

ええい！ あの女は天然か！？ どうしてナイスバディの女には天然キャラが多いんだ！？ 悪魔で俺視点だけどな！

「そつちがその気なら……！」

俺は飛び出し、彼女に発砲した。酷くても傷は打ち身ぐらいだ、死

にはしない。

しかし、魔力弾は当たらなかった。

「何!？」

彼女はなんと避けたのである。しかもその場にいなから。

偶然か？

俺は更に連射した。が、彼女は驚くべき方法で回避を取った。

「か、回転!？」

彼女はその場を片足を軸にしながら回転し、弾を避け続けた。軸部
分を狙っても、少し移動して避ける。

んなアホな!？

俺は驚きつつも撃つのを止めない。彼女が避け続ける隙に、どうし
ようかと対策を練る事にした。しかし……。

「……ッ!」

「ぶっ!？」

彼女はいきなりその大きな胸をふるると揺らし、谷間から六発の銃弾が飛び出してきた。そしてリボルバーの弾奏にリボルバーを振り払ってリロードした。

ま、まさか！？ あれが伝説の“おっぱいリロード”！！？

「ハッ！」

ダダダダダッ！

「何ッ！？」

そして彼女は回転しながら早撃ちクイックドロウで撃ってきた。

俺はとつさに魔力障壁を展開し、弾を防御した。が、次の瞬間、俺の後頭部に銃が突き付けられた。

「終わりです。観念して下さい」

「……何者だ、貴様」

「ただの旅人です。お風呂大好きな」

「……そうか」

「コイツ……天然のくせに強い！ どうする？ どうすればこの状況を打破出来る？ そうだ！ この手だ！」

「……あ！ あそこに露天風呂が！」

「え！？ どこですか！？」

「隙あり！」

俺は彼女の腕を掴み、一本背負いで投げて地面に叩きつけた。

「かはっ ……！？」

そしてそのまま彼女を腕を捻り、抑えつけた。

「形勢逆転だな、美人さん？」

「うっ ……！！」

「取り敢えず、寝てな」

俺は彼女に手刀を与え、気絶させた。

さて……そろそろやりますか。

「出てこいよ。全て撃ち抜いてやる！」

瞬間、茂みの奥からザコ悪魔が飛び出してきた。

「見え見えだ」

そこからはワンサイドゲームだった。

「いや、本当にごめんなさい。まさか助けていただいたとは」

「……別にいいさ」

「あ、そう言えば名前まだ言ってませんでしたね？ 私は天道琉朱菜と申します。貴方は？」

「……イブキ・ヤマト」

「イブキ・ヤマト……じゃあいつちゃんですね！」

「……そう」

「何か元気ないですね？」

「ヒント、俺の今の状況」

「状況……？ お風呂番？」

「正解！ 何で俺がこんな事してんだよ！？」

持っていた薪を地面に叩きつけた。

「だって誰もいないですよ？ どうやってお風呂沸かすんですか？」

「自分でやれよ！ 何で俺が汗かきながら薪割って水敷いて火付けてお前のちょうど良い湯加減に調整しないといけないんだよ！？」

「汗かいたの？ それじゃあご一緒しませんか？」

「しねえよ！ 後で入るよ！」

何なんだこの女は！？ 俺はさつさとこの集落を調査して帰りたいのにさ！ この女を集落にいったん運んでから調査しようとしたら起きてまた襲ってきたしよ！ 誤解を何とか解いたら汗かいたからお風呂入りたいとか言い出しやがって！ そんなで何で俺が風呂を沸

かすのを頼まれなくちゃならんワケ！？ 意味分かんねえし！ っ
てか何で釜風呂なんだよ！？

「まあまあ、そんなに荒れないで」

「誰のせいだ！？」

「誰でしょう？」

ム力つく！ ものっ凄くム力つく！

「大体、何でお前はこんな場所に近付いたんだよ？ この世界じゃあ、ここは滅多に人が入らない辺境の地だぞ」

「えっと、棒を立てて倒した方向に歩いてたら……」

「馬鹿じゃねえの！？ 馬鹿だろ！？」

「むっ！ 失礼ですね。こう見えて勉強できますよ！ 二十六次方程式なんか余裕です！」

「何か分からんけど凄いな！？」

それでこの性格！？ 天才と馬鹿は紙一重だとか言うのが正しくその通りだな！

「それと、あの銃は何だよ？ 明らかに質量兵器じゃないか」

「それ、さっきから気になってたんだけど、質量兵器って何？」

「ん？ お前この世界の住人じゃないのか？」

「違うよ。すっごく遠い所から来たんだ」

……何処か違う管理外世界から来たって事か？

「質量兵器ってのは、魔法を使わない兵器って事だ。それを所持してるだけで、この世界では犯罪だ」

「ええ〜！？ アレは私の大切なパートナー何ですよ！？」

「あつそう。なら見つからないように隠しておけ。決して人には向けるなよ。ましてや、無実の人間にな」

「あはは……」

壁の向こうから乾いた笑い声が聞こえてくる。

……今思えば、壁の向こうは琉朱菜が裸でいるんだよな？ 立てば柵で隔てられた窓口から間違いないで見れるな……。

「……覗こうとしてみませんかー？」

「……ソナナコトハナイヨ？」

「覗くのは駄目だけど、一緒にお風呂を満喫するなら良いですよー」

「……遠慮しときます」

何故か、今一瞬間な予感がしたから。帰ったら何か起こりそう。

「なあ、ここは危険だから、風呂上がったら俺と共に山を降りてもらうぞ」

「どうして？」

「どうしてって……さっきの奴らがまだいるかもしれないからだ。お前の銃じゃ効かないしな」

「そんなこと無いですよ。私、強いんですよ？」

「それは人間の間でだろ。悪魔とは訳が違う」

「そんなこと無いですー。私、悲しかったけど前に同じ悪魔倒しますー」

「だとしてもだ。お前に……今何て言った？」

「だから私も倒しましたー」

「本当か!？」

俺は驚いて思わず立ち上がり、窓口から中を見てしまった。

「本当だけど？ それでも駄目？」

「……」

嘘……じゃないよな？ 嫌でも嘘の可能性だって……しかし、嘘を言う様な性格じゃないよな？ 悪魔の誘いに純粹に有難く思ってたし……。

「……なら、これからここの調査をするから、お前も来い」

「うん！ あ、その前に……」

「……？」

「「飯ない？」」

「……その辺の雑草でも食ってる」

「あ、熱い!? 熱いよイブちゃん!？」

そのまま茹で女になっちまえ。そうしたら変態レオンの土産にしてやる。

琉朱菜は風呂から上がり、俺が不本意ながら洗濯させて戴かせて貰った服を着た。まさか、この俺が赤の他人の下着まで洗うとは思わなかった。しかもコイツ、結構際どい赤の紐パンだったし。……何で俺が洗ったって？ 投影で出せだと？ ……そうか！ その手があったか！？

「どうしたの？」

「自分の頭の悪さに、ちょっとな……」

あゝあ、これは楽な仕事じゃないな……。

「さてと……さっさと終わらしますか」

「そうだね。早くご飯食べたいし」

「……お前って、もしかして大食い？」

「さあ？ いつも一人で食べてますから」

それでも多いかどうかわかるだろ。

「ってか何で旅をしてるんだ？」

「世の中、何かと物騒だよな？」

「ああ……」

「だから私は皆に笑顔を与える為に旅してるの！」

「笑顔？」

「だって、皆笑ってたら争いごとなんて起こらないでしょ？」

「いやまあ……恐らくは起こらないが……それでも争いの種は出来るだろう。」

「笑顔って、どうやって皆に与えてんだ？」

「さあ？ その時によるかな？」

「ふん……」

つまり無計画かよ。何か他人のことなのに心配になってきたぜ。

「それより早くやりましたよー！」

「少しは周りに気を張れよ。それと、敬語有りか無し、どっちかにしてくれよ」

「じゃあ、無しで。行くよ、いつちゃん！」

「……良い性格してるよ」

という訳で、天道琉朱菜という金髪美女と調査する事になってしまった。

はあ……はやてにどやされるよな、これ。

集落の正体（前書き）

作者「あれ？ これ違う作品？」

イブキ「泣けるぜ……」

集落の正体

まず俺達は集落を歩き回った。そこで分かったのが、この集落の中心には教会があり、それを取り囲むようにして家が建てられていることだ。

この劣化の度合いから、かなり前、数十年程前から人は住んでいないみたいだった。

まるでバイオハザードだな……。チエーソン男とか出てきそうだ。

家の中を周り、時には白骨化した人までいたりした。

「酷いね……」

「ああ……。これも悪魔の仕業なのか？」

「ねえ、今度は教会に行ってみようよ」

琉朱菜が指差した協会は、何故か未だに形を完全に保っていた。まるでまだ使用しているように……。

「そつだな。油断するなよ？」

「任せて」

俺達は教会に向かい、中に入った。
中も多少汚いが、聖堂の椅子もちゃんと並べられており、聖壇もちゃんとしてあった。

「ここだけ綺麗……」

「……」

悪魔の反応は無し……。しかし気配を消す事が出来る悪魔もいる……
…油断できない。

俺達は銃を手に中へ慎重に進んだ。辺りを慎重に調べ、この部屋の聖壇を調べた。

「……ねえ、これって……」

「ん？」

琉朱菜が聖壇に置かれた箱の中に何かを発見したようだ。俺は琉朱菜に近付き、それを見た。そして後悔した。

「……胸糞悪いな」

「心臓……だよな？」

箱の中は心臓が幾つも詰め込まれていた。決して動物のものじゃない。絶対に人間のだ。

「まさか、悪魔が裏で行動してるとはな。どうりで表立っての行動が無いわけだ」

しかもまだ真新しいものまであり、真っ赤な血で染まっていた。

しかし、聖壇に供えるなんて、悪魔も何かの信仰をしてるのか？

俺は気になり、聖壇をくまなく調べた。

聖壇に掲げられているのは白い翼を生やした巨人の像、それに何かの紋章。三つ目に一對の翼を生やした様な紋章だった。

「悪魔の宗教か……。どうも、俺の考える悪魔とは違うようだな……
…って、あれ？ 琉朱菜？」

隣にいた筈の琉朱菜がいなくなっていた。

「琉朱菜どこだ？」

何処にもいない……。まさか……。

ガラン！

「ッ！？」

何かが倒れる音がして、その方向に銃を向けた。

「……………何やってんだ？」

「ん〜しょっ！ ん〜しょっ！」

琉朱菜はちょうど聖壇の裏にあった扉を開けようとドアノブを引っ張っていた。

「開かない〜！」

「鍵でもかかってんだろ。こんなもん、蹴ればいんだよ」

そう言つて琉朱菜を退かして扉を蹴った。扉は木っ端微塵に砕け散り、道が開いた。

「おゝ！ 凄いね〜！」

「凄かない。進むぞ」

「りょうか〜い！」

なんて締りの無い返事だ……。

俺は呆れながら通路を進んだ。中は暗く、何も見えない状態だが、古いランプが転がっていたので、それに火を付けて灯りにした。

まったく、まさかりアルバイオハザードを体験するとはな……。これで敵が悪魔じゃなくてゾンビだったら完璧なんだが。

「暗くて何も視えない……」

「そう言う割にはズンズンと進んでんじゃん」

「気のせいだよ？」

あっそう……。

そのまま奥に進み、一つの扉に辿り着いた。

鍵は……そりゃ掛かってるか。それっ！

また扉を蹴飛ばして、中に入った。中には何も無く、古いタンスが

置いてあつただけだった。

「何も無いね」

「どう見てもあのダンスが怪しいだろ」

部屋の一角にぽつーんと置いてあんだから。

俺はダンスに近付きダンスを開いた。

「……空っぽ」

ますます怪しい。実はカラクリ扉ですとか？ 実際はエレベーターで
すとかか？ 何にせよ、動かしてみるか。

「取り敢えず、ダンスの下に」

「いやあああつ！？」

バキバキバキッ！

「何だ！？」

琉朱菜の叫び声と、木が割れるような音がした。琉朱菜の方を見ると、琉朱菜の姿は無く、床に大きな穴が開いていた。穴を覗き込むと、琉朱菜がパンツ丸出しで転がっていた。

「……」
「ちそうさん」

そう言ってしまう俺はどうかしている。

「もう！ いっちゃんのスケベ！」

「よっつと」

俺は穴に飛び込み、ランプで辺りを照らした。

「でかした、隠し通路だ」

「へ？」

その穴はちょうどこの通路の入り口だったようだ。

「これはただ事じゃないな。何かヤバい気がする」

「大丈夫！ その時は笑顔を振り撒けばいいんだよ！ニコッ」

「ニコッ…じゃない。お前、よくそれで生きてこれたな」

「えっへん！」

胸張るなオイ。でっかいんだよ、谷間見え過ぎなんだよ、弾力あり過ぎそうなんだよ。止めてくれ。

「とにかく、進むぞ」

「うん」

俺達は奥に進む事にした。奥に進むにつれてひんやりとしたし、何かの気配まで出てきた。

……これは……悪魔？ いや、人間？ どっちだ……？

「いつちゃん、灯りが見えてきた」

通路の先に僅かだが光が見えてきた。気配もその先からする。俺達は少し急いで進んだ。そしてやっと長い道が終わると、広い空間にでた。まるでドームのように広く、人工的に作られたかの様だった。

「いつちゃん、あれ！」

琉朱菜が下を指した。そこには大勢に人間がいた。まるでこれから集会でも開くのか、老人から子供まで大勢集まっていた。

おいおい、本当にバイオハザードかよ！？ まさか大統領のエイジエントがいたりしないだろうな！？

俺達は岩陰に隠れ、様子を見る事にした。

「
！！」

大勢の人間の前で一人が何かを叫んでいた。しかし、その言葉は俺達が使っている言葉ではなかった。英語でもなく、訳の分からない言葉だった。

「はは、こりゃ完全にバイオだ」

「何か言った？」

「いや」

俺の予想、たぶんグロイ事が起こると思う。

「……!!」

叫んでいる人が後ろの何かを指した。それは女性だった。女性は手首と足首を縛られ、口に布を巻かれ声を出せなくさせられ、壇上に寝転がされていた。

「……!!」

するとその場にいた全員が一斉に土下座するように祈り出し、頭を何度も上げ下げしだした。

「ねえ、助けなくちゃ!」

「分かっている。待ってる」

俺は眼帯を外し、女性に集中した。

このギアス、破壊する時にその対象の全ての情報が頭に入るのだ。それを破壊の一步手前で止め、情報だけを頭に入れる事も出来る。

まずはあの女性が生きてるか、それとももう……。

「……どうしたの? 早くしないと……」

「……無駄だ」

「え？」

「あの女性はもう、死ぬ」

女性の腹の中に、悪魔がいる。それももう、起き出す。

「　　ッ！？　ああッ！　あああああッ！！！！」

女性はカツと目を開き、口に巻かれている布を噛み切り叫び声を上げ出した。

「ッ！　見るな！」

「きゃっ……」

俺は琉朱菜の頭を抱え込み、最悪な光景を見せないようにした。

「あああああああああああッ！！！！！！！！」

女性は自分の身体を捻じり、何かから逃れようとしていたが、ビクンと身体が大きく跳ね、腹から腕が出てきた。

「　　ッ！！！！」

女性は声にならない断末魔を上げ、腹を引き裂かれながら息絶えた。そして腹からは白い羽を生やした悪魔が出てきた。

「『『オオ……！』』」

人間たちはその光景に歓喜のような声を上げ、頭を下げた。

狂ってやがる……！

「グルウ……」

出て来た悪魔は、己を産んだ女性の身体を掴み、自らの口へ運び、嫌な音を立てながら喰らいだした。

「ッ！」

「……大丈夫だ」

琉朱菜は俺の腕の中で少しだけ震えだした。ただ強くて純粹な少女

なのだ、震えるのは仕方が無い。

……ここはヤバいな。全て、消さないと。だが相手は人間……いや、もしかしたら……。

俺は頭を下げている人間をギアスで覗いた。すると……。

「……人間、じゃない」

分かる。あれは人の皮を被った悪魔だ。

「琉朱菜」

「……？」

「俺はこれからここに居る悪魔を殲滅する。だから隠れてる」

「殲滅？」

「ああ。危険だからお前は岩陰に隠れて、目と耳を塞いでる」

「でも……」

「いいな、絶対出てくるなよ」

俺は琉朱菜を離して、武器の選択をした。

この場所じゃあ、宝具級は使えないな。使えば衝撃で崩れるかもしれない。なら次元武で射出か。

俺は両手に銃を持ち、次元武の展開を準備した。

先ずはあの羽付きを殺す。それから残りの下衆を殺す。油断なく、慎重に、一時の時間を敵に与えないで滅する！

「……出る！」

俺は岩陰から飛び出し、羽付きの眉間に魔弾をブチかました。羽付きは避けれず、頭が弾け飛んだ。しかしまだ油断は出来ない。俺は次々と弾丸を喰らわせ、穴だらけにした。

「！？」

「貴様もだ、屑が」

その場から飛び降りながら指導者らしき人物を撃った。

「失せる！
ディメンション・オブ・エンペラー
皇の次元武！！！」

宝具を射出し、弾丸の雨も加え、悪魔共を殲滅していった。

しかし、向こうも黙ってはいない。突然の事に一時混乱していたが、徐々に状況を呑みこみ、攻撃を仕掛けてきた。

おいおい、まさか皮を被ったまま戦うとか言っんじゃないよな？
後味が悪いんだよ！

しかし、その心配は消え失せた。一体が突然苦しみ出し、皮膚が変質していき、完全な悪魔に変化した。それを引き金に、全ての奴らも変化していった。

「それが貴様らの正体か。随分と醜いな」

奴らの顔は人のそれだが、頭からは二本の小さな角が生え、瞳は赤く血走り、鋭い牙が生えていた。手からは鋭く長い爪が、そして肉体は強靱になり、着ていた服はビリビリに破けた。中には大きな角と翼を生やした悪魔もいた。

「そんな醜い奴らに、俺の家族は殺されたってか……。憎くてしょうがねえな！」

宝具と弾丸を射出し、悪魔共を射抜いて行った。だが変化した悪魔は反応速度が速く、動きも速かった。

「チッ！」

中々当たらねえ！ 動きが速い！

「『ガアアアアツ！』」

「ツ！」

後ろから五体の悪魔が襲ってきた。

「そう簡単に……！？」

「『ブオオオオツ！』」

「なっ！？」

前から巨大な身体の悪魔が突進してきた。上に回避しようとしたが、上からも悪魔が降ってきた。

しまった、囲まれた！？

悪魔は身体を貫かれても少しも怯まず、ただ爪と牙を向けてきた。

「くっそおおおっ！！」

剣に持ち替えて迎撃しようとしたが、それよりも速く巨大な悪魔が牙を向けてきた。

「しまっ
」

ダダダダダダッ！！

六発の銃声が響き、巨大な悪魔は頭を弾き飛ばされ、地に落ちた。

「いつちゃん！」

「琉朱菜！？」

琉朱菜がリボルバーを構えて走ってきた。

まさか本当に悪魔を攻撃出来るのか！？

「『アアアアアアッ！』」

「そんなに叫んだら煩いよ！」

琉朱菜は胸から弾丸を出し、銃を振ってリロードした。そして撃ち、

悪魔を殺した。その間、僅か一秒にも満たない。

「『ジャアアアアツ!』」

「ツ! 引っ込んでろ!」

向かってきた悪魔の口に銃を突っ込み、引き金を引いた。それで悪魔の頭は弾けた。

俺は銃と宝具を駆使し、琉朱菜の背中に立った。

「何で来た!?!」

「だって心配で!」

「だとしても危険だぞ! もし弾丸が通用しなかったらどうするつもりだったんだ!?!」

「通用したでしょ!」

「結果に過ぎない!」

「でもした!」

「『ギシャアアアアツ!』」

「『煩い!?!』」

二人同時に悪魔の頭を弾き飛ばした。喋っている間も、悪魔の接近を許さなかった。

「来てしまったのは仕方が無い！ 助けられたのも事実だ！」

「そっだよ！」

「後の悪魔、頼めるか？」

「勿論！ ちょっと悲しいけど、撃っちゃおうよ！」

「なら任せた！」

右手に魔皇刀を取り出し、左手にアイボリーを持ち、群れに向かって突っ込んだ。

「斬る！」

刀身に魔力を纏わし、横に振り払った。すると魔力の斬撃が放たれ、前方にいた全ての悪魔は上半身と下半身に分かれた。

「えいつ！」

琉朱菜は襲ってくる悪魔をまるで羽が生えているかのように軽やかに避け、クイックドロウ早撃ちで悪魔を撃ち抜き、また胸から装填し撃ち抜いた。

「『天の鎖』! !」

鎖で悪魔共を絡め取り、その隙を銃で撃ち抜く。近付いてきた奴には刀で斬り付け、両断する。

「『ウオオオオオオツ! !!』」

「『ツ! ?』」

低い声が空間に響いた。俺が撃ち抜いた筈の白い羽の悪魔が立ち上がり、雄たけびを上げていた。その悪魔は俺達を視界に入れると、周りにいる悪魔共を薙ぎ払いながら接近してきた。

「琉朱菜!」

「うん!」

それだけで十分だった。俺は刀を握り羽付きに向かってジャンプし、琉朱菜は羽付きの脚を貫いた。

「ッ!?」

「ハアアアッ!」

脚を貫かれ、怯んだところを俺の刀が頭を斬りおとした。

「イヤアアアアッ!!」

そして俺と琉朱菜は背中合わせになり全方位に銃弾の嵐を与えた。銃弾は悪魔共の頭と体を撃ち抜き、銃声が止む頃には全て終わっていた。

「はあ、はあ、はあ……」

「はあ、はあ、終わったか……?」

当たりに目をやり、全ての悪魔が死んでいるのを確認した。

「はあ……」

脚から力が抜け、背中合わせのまま座りこんだ。

「やべえ、こんな乱戦初めてだ」

「もう汗べつとり〜！ お腹もすいたし疲れた〜！」

「仕事が全部終わったら風呂でも食事でもやるよ」

「本当…!?!」

「ああ……。それと、助けてくれてありがとな」

「いえいえ〜！」

息も絶え絶えに喋り、少しの間俺達は座りっぱなしだった。

「ふう〜……よし、最後のひと仕事やりますか」

「あと何するの?」

「ここにいた悪魔が何をしていたのか調べる」

俺は立ち上がり、喰われた女性の死体があるところまで近寄った。

「酷い事に巻き込まれたな……」

女性はもう、人の姿さえ残っていなかった。

「……………」

俺は女性が寝かせられていた台を見た。そして気付いた。

「……………文字？」

台には文字が書かれていた。

「ッ……………！」

文字に触れた瞬間、頭に頭痛が走った。それから頭に文章が浮んできた。

『魔神ヒュルスに栄光あれ』

「ッ……………」

「大丈夫っ！？」

琉朱菜が俺の肩を揺さぶってきた。

チツ……！ 何だよこれ！？ 何で意味が分かるんだよ！？

「だい、じょうぶだ。少し頭痛がしたただけだ」

「ほんと？」

「ああ……」

俺はゆっくりと立ち上がり、壁を見た。そこには壁画が書かれていた。

羽を生やした巨人が小人に何かを落としている描写だった。

「……そう言う事が」

「え？」

「こいつらはここで子供を作ってたのか。それも魔神の」

「子供？」

だとしたら大事だな。ミッドの人間……主に女性が狙われている。はやくに知らせないと。

「琉朱菜、俺と来い」

「え？」

「旅は一旦中止だ。お前の腕を見込んで、協力してほしい」

俺は腕を差し出した。

「どうということ？」

「この世界で悪魔が何かを企んでいる。それを阻止するにはまだ力が足りない。だから天道琉朱菜、俺達に協力してほしい」

「……………」

琉朱菜は俺の差し出した手を見て黙った。そうだろう、いきなり悪魔と乱戦になって、世界を救うのに協力してほしいと言われたんだ。混乱するだろう。

「……………」

「……………それってぞ」

「ん？」

「ちゃんと皆笑顔になれる？」

「……フツ、なれるんじゃない、させるんだ」

「……そう」

琉朱菜は笑みを浮かべて俺の手を握った。

「じゃあ私はいつちゃんに付いて行くよ！」

「ありがとう、琉朱菜」

ここに、俺と琉朱菜の協定が結ばれた。

これが、後に世界の存亡にかかる出逢いとは、俺達は思わなかった。

増える仲間（前書き）

作者「もう、知らん」

イブキ「逃げんなや！ 最後までやり遂げろ！」

増える仲間

「という訳で、この集落にいた悪魔は殲滅してきた」

「そっか……。まさか人を攫ってるとはな」

「他にも行方不明者がいないか調べてくれ。高確率で悪魔関連だと思う」

「分かった、任しとき。……で、その顔の傷の数々は何なん？」

「……何故か帰ってきた時にフェリス達に殴られた」

何でだろう……。？ 土産も買ってきたし、黙って出て行った訳でもないのに……。

「……まあ、何や、そないに気落とさんとき」

「ああ……」

正直、ちょっとショックだ。今までは冗談の様な感じだったけど、今回は何故か本気で怒ってたような気が……。

「それで、一つ聞いてええか？」

「……何？」

「その人、誰？」

「……」

「こんにちは」

「……お風呂大好きなガンマン」

「そう……。アンタが悪い」

「何故に!？」

何で俺が悪い!? 俺はただ頼もしい仲間を連れてきただけなのに!
何でそんなに俺が責められないといけないワケ!? なあ!?

「まあ、わかつとったことやけど。ほんで、名前は? あとバストは?」

「天道琉朱菜です。バストは104、かな?」

「ほほう……。それはまた、揉み応えのありそうな……。じゅるり」

「はやてちゃん、駄目ですよ」

リインが手をワキワキさせたはやてを制止した。

うん、そついやはやてっておっぱい星人だったな。この前もハクとミリアの胸を鷲掴みしてたし。

「琉朱菜は悪魔に対抗出来る存在だ。それ故、協力を求め、共に行動してくれる事となった」

「そんな勝手に決められてもな。こつちにも立場つてもんがあるし……」

「それぐらい分かっている。だからクロノ提督とレジアスに頼んで許可貰った。俺の直接の部下にな」

「……イブキ君、今どんな地位？」

「その気になれば地上本部を動かせる………かもしれないかも？」

「そつ……」

いや実際、レジアスに真剣に相談したら出来るかもな。

「まあええわ。ああ、でも流石にその銃はアカンな。犯罪や」

はやては琉朱菜のリボルバーを指した。

「ならばやて、俺は犯罪の塊だが？」

「アレは魔力の塊なんやろ？」

「なら琉朱菜の弾丸を俺の魔弾にしたら問題無いな」

「出来んの？」

「琉朱菜が持っている弾丸を参考に、俺の力で魔弾を製作する」

「ならまあ……ええか」

何故弾丸なのかと言うと、銃は絶対に譲らないと、琉朱菜が断固拒否したからだ。

弾丸を投影しまくったら問題無いだろ。

「そのかわり、胸揉ましてや」

「む、胸ですか？」

「それが条件や」

はやては両手を琉朱菜の胸に向けて動かす。

そうは問屋がおろさん。

「黙れはやて。自分の胸でも揉んでろ。……ああ、無いから他人のを揉むのか」

「……なんやと？ このススワタリ」

「事実を言ったまでだが？ 言つとくが、もう琉朱菜は俺の大切な仲間だ。邪道に墮とす気はさらさら無いぞ」

「この女誑し！」

「誑しではない！ この痴女ダヌキ！ 貴様にはタヌ耳がお似合いだ！」

タヌ耳を投影し、はやての頭に瞬間接着剤で張り付けた。

「ギャー！ ツス！？ 取れへーん！！」

「あっははははっ！ お似合いではないか、はやダヌキ！」

そのまま山に帰れ！ そして腹でも叩いてろ！

「おいーっす！ 貴女のレオン様、華麗に登場！ って、何の騒ぎだ？」

レオンが呑気にやってきた。

ってかそのセリフはお前が言ってはいかん。

「レオン君！ この女誑しどうにかして！」

「女誑しの王に誑しをどうにか出来るか！ それ以前に俺は誑しではない！」

「あー……はいはい。そうか……なるほど」

「そして何を納得している!？」

「要するにアレだろ？ イブキがまた美女を連れてきたんだろ？」

「何か色々と間違ってるそうだが、一応そうだ」

「天道琉朱菜です、よろしく！」

琉朱菜は笑顔で挨拶した。その瞬間、レオンのエッチ眼が発動し、琉朱菜の身体を頭から足まで目を通した。

「……お嬢さん、私と「させんぞレオン。琉朱菜は俺のだ」この馬

鹿野郎！ 俺のだって言ってるがそれは部下とかそういうものだろう！
？」

何を言っかね、無論だ。俺が女を作るなど、あり得ん。

「兎に角、琉朱菜は俺の所で行動するからな。いいな？ 分かったら返事、分からなくてもはいだ。……行くぞ」

「あ、待ってよー！」

「はあ〜……どうしてイブキ君はあなんや……」

「仕方が無さ、イブキだからな」

「本当ですよー！」

「あれ、リイン？ 何でそんな不機嫌なんや？」

「何でもありません〜！！！！／／／／」

「……つの野郎う……！俺のハーレムの一角を！」

はやての部屋から飛び出して、向かった先はハクの部屋だ。今、あいつは一人で部屋を使用している。琉朱菜をそこに住まわせようと思っただのだ。

「……へえ……」

「何故ハクもそんなに不機嫌なんだ……！？」

何故だ……！？何故エンペラード隊は全員怒っているんだ……。俺は何かしてしまったのか？

「だから、そう言う訳で……宜しく」

「いいですよ？」

「ほ、本当か？」

「ええ……貴方の穴という穴に矢を刺しても良いのであれば」

「ごめんなさい」

あれえ〜!?! ハクってこういうキャラだったっけ!?! 何かもの
凄く怖い。本当に射してきそうで怖い。

「あの……ご迷惑でしたら、いつちゃんの部屋でも……」

「駄目です!! ここにいなさい!!」

「は、はい〜!」

怖い! 怖すぎる! こんなハクじゃない! ハクはもっとう
……他人に尽くす感じで、唯一の良心だ。なのに今のハクは……夜
叉だ。

「私は副隊長ですから、隊長の命令なのであれば良いです。しかし
ですね、どうしてイブキさんは何かと女性ばかり連れて来るんです
か? そんなに女性に囲まれたいんですか? レオンさんと一緒に
んですか?」

「滅相も御座いませぬ。私めはただ強力な仲間を集め、それが女性
だったという訳で御座いましてハイ」

「別に良いですよ。そんな事だろうと予想は出来てました。分かり
ました、天道さんは私と同室で良いです」

「ありがとうございます」

「それじゃあ出ていってください。女性同士の取り決めとかありませんから」

「はい」

俺は早足で部屋を出た。

何故だろう……ハクってこんなに怖かったのかな？ 俺、涙出てきたよ。

今日の晩は、枕を濡らした。

イブキ side out

ハク side

まったく、イブキさんは本当に女の人と何かと関係を持ちますね。良い迷惑です。

「あ、あの……」

「何ですか？」

「え、えっと……これから宜しく願いしますね」

彼女……天道さんが手を差し出してきた。

「……はい、宜しくお願いします。礼義は心得ているようですね」

「勿論です！ じゃないと旅は出来ませんから！」

「ずっと一人ですか？」

「はい。でも、とっても楽しいですよ！」

一人が楽しい……。そんな筈はない。一人はとても寂しくて、怖くて……何も感じなくなつて……。

「あ……？」

「……何でもありませんよ。私はハク・スペリアー等空尉。イブキ・ヤマト率いるエンペラード隊の副隊長をやっています」

「いっちゃんの友達なんですね！」

「とも……本当はそれ以上の関係を……」

「……？」

「……気にしないで下さい。では部屋の説明をしますね」

私は天道さんに部屋の取り扱いを説明した。

私的に彼女の事は、部屋にはシャワーしか無い事を知ると、いきなり泣き出し、お風呂が良いと駄々をこねたり、なら下のフロアにあると教えたら友達の話として一緒に入ろうとか、とにかく忙しい娘だと言っただけは分かった。

どうしてイブキさんはこんな人を……ハッ！まさか胸ですか！？
大きい胸だから連れてきたんですか！？ だったら私にもチャンスが！

「私だってあるんですからね！」

「わっ！？ な、何！？」

「い、いえ……何でもありません……／＼／＼」

お、落ち着きなさい。そうと分かれば胸で攻めれば瞬く間にイブキさんを落とせる。そう、今夜にでも夜這いを行えば……。レオンさんは……ゴミ収集車に乗せていれば問題ありませんね。よし、思い立ったが吉日。さっそく勝負下着を新調しなくちゃ！

「あ、明日はいつちゃんが銃撃戦を教えてほしいって言ってたから、

もう寝ますね。お休みなさい」

ピシッ……。

「……………ふふっ……………ふふふふっ……………。その時にはぜひ私にも……………。射止めます」

明日は忙しくなりそうですね……………主に後始末が。

ハク s i d e o u t

イブキ s i d e

翌日の朝。俺はレオンと共に食堂で朝食を取っていた。

「……………」

「おい、イブキよお。何難しい顔で考え込んでるんだよ？ 折角の飯が不味くなるぜ？」

「む、スマン。実は今日から琉朱菜に銃の扱いを教えてもらう事になってるんだが……」

「ゴホツ!？」

「どんな技を教えてもらおうかと……どうした、レオン？ 喉にでも詰まらせたか？」

レオンの前に水を差し出した。レオンはそれを掴むと、一気に飲み干し、乱暴にグラスをテーブルに叩きつけた。

「お前な！ このハーレム王を差し置いてなに一人で楽しもうとしてんだよ!？」

「別に楽しもうとは……いや、銃は好きだから楽しみはしたいな」

「テメエの趣味なんざどうでもいいーんだよ！ 俺が言いたいのは朝から美女と二人きりってか!？」

「う……む……。そうなるな。だがレオン、お前にもなのはやティアナやギンガ、この際ヴィータも入れよう。そいつらがいるじゃないか」

「ああいるさ！ だが全ての美女美少女は俺の攻略対象なんだよ！」

知るかよ……。そもそもお前はもっと周りに目を向けるべきだ。なのはとティアナとギンガは完全にお前に惚れている。王と名乗って

るんなら早く抱いてやれよ。

「……なーんか、今お前だけには言われたくない事を言われたよう
な……」

「何を馬鹿な事を……。それより、もうそろそろ時間だぞ。またな
のはOHNASIを越えた“語ろうか”が来るぞ」

「行つてきまーすっ！ー！」

ふむ……あの様子じゃあ、相当キツイお仕置きだったんだな。南無。

「さて、俺もそろそろ……」

「いつちゃん、おはようー！ー！」

琉朱菜がハクと共に食堂にやってきた。

今日はハクは起こしに来なかったな……。琉朱菜を気に掛けてくれ
てたのかな？ それと『いつちゃん』は公然の前では遠慮してほし
いな……。

「おはようございます、イブキさん」

「お早う、二人とも」

「イブキさん、今日の練習、私も付き合いますから」

「へ？ いやだがハクには他に色々……」

「付き合いますから」

「だけど……」

「ますから」

「あい……」

やっぱり今日もハクは何か怖い……。見る、食堂にいた局員が全員……アレ？

「フェイト……？」

さっきまで賑わっていた食堂はガラリとし、フェイトが何時の間にか食堂の入口に立っていた。

「おはよう、フェイト。何だか元気が無いぞ？」

「……ぐすっ」

「ええっ!?!?」

顔を上げたフェイトは泣いていた。

何故だ！？ 何故フェイトは泣いている！？ なのはと喧嘩でもしたのか！？ それともレオンにとうとう襲われたのか！？ それかアレか！？ エリオとキャロに嫌われた！？

「どうして……」

「な、なに？」

「どうして女の人ばかり集まるのお！？」

「何が！？」

「私の気持ちも知らないでえ〜！！ イブキの誑し魔ーー！！」

「ちよっ！？ フェイト！？ だから何なんだよおおおおっ！？」

走り去ったフェイトを追い掛けて食堂を後にした。

その後、フェイトには一日買い物に付き合う事で泣き止んでもらった。

……何故泣くんだった……仲間を連れて来ただけなのに……。

本日の訓練地設定は森の中。その中に俺とハクと琉朱菜の姿はあった。

「それじゃあ、行つくよ〜！」

「待て待て！ 何をするんだよ？」

「何って……只管弾を避けてね？」

ダダダダダダン！！

そう言うなりいきなり撃ち出してきた。

嘘だろ！？ 俺の魔力弾だからって言っても相当痛いんだぞ！？

「くっ！」

俺は弾を避けようと回避行動に移った。が、上手く避けれるのはマンガの主人公ぐらいだ。

「あべし！ ぶべし！ ぼべし！ はぶし！ ぐべらあああっ！」

当然、俺は全弾命中させられた。

「もうっ！　ちゃんと避けなきゃダメだよ！　もう一回！」

「な、何言っつてやがる！？　いきなり避けれるか！」

「えゝそう？　私は五歳の時にはもう目を閉じても避けれたけど…」

人間か！？　コイツは！？　否！　違う！

「天道さん」

「ハクさん？」

おおっ………！　止めてくれるのかハク！

「私もお手伝いします。この矢で」

「えええっ！？」

「お願いしますー！」

「うえええええっ!?!」

「「行きますよ〜!?!」」

「これは、処刑だあああああっ!?!」

それから昼食の時間帯まで俺は只管避け続けた。が、結果はそう簡単には出なかった。

悪魔襲来(前書き)

作者「どうしよう……パソコンが壊れた」

イブキ「おいおい、じゃあ何も出来ねえじゃんかよ!!」

作者「ゴメンナサイ……!!」

悪魔襲来

琉朱菜が六課に来て数日。俺はその間、只管琉朱菜が放つ弾丸を避ける訓練をし続けた。

そう言えば、何故俺がこんな訓練をしているのか訳を言っただけで無かったな。

銃の腕前を上げるのもある。だがそれ以前に、銃弾を見切る動体視力が身につければ、あの蒼コートの攻撃を見切る事が出来るかもしれないからだ。

あの速い攻撃……アレを攻略しない限り勝機は無い。だが、今の俺なら……！

ダダダダダダッ！

六発の銃弾が俺に向かって撃たれる。

それが身体の何所に、何時当たるかを判断。それを最低限の動きで避ける。

弾は俺を通り過ぎ、後ろの木に着弾した。

「すごい！ もう習得できたんだ！」

「……………」

「どうしたの？」

「もの凄く目が疲れる……………」

だって片目だぞ？ 右目が使えないんだぞ？ 利き目が封じられてんだぞ？ そら疲れるわな。

「いつちゃん、何で眼帯してるの？ 別に怪我してなかったよね？」

琉朱菜はあの時に俺の目を見ているから、怪我をしていないと言う事は知っている。

「ちょっと訳ありでさ。気を抜くと、視界に入れた物は全部破壊しちゃっんだ」

「なにそれ怖い」

「……………おい、木の後ろに隠れるな」

琉朱菜は離れた木の後ろに隠れ、俺の視界から消えようとした。

「今は大丈夫だ。空幻がこの眼帯に特別な術を施してるから、外さない限り問題無い」

「……嘘じゃないよね？」

「ウソついて何になる……」

しかし、よく弾を避けられるようになったもんだな。これも神がくれた身体能力故か……。

「で、次のステップは？」

「ん？ もう無いよ？」

「……は？」

「だから、もう無いんだってば。合格、無事卒業！ おめでと〜！」

琉朱菜はパチパチパチと拍手を送り、満面の笑みを見せた。

「待て待て！ 撃ち方とかは！？ ワザとかあるんだろ！？」

「ぶーぶー！ 技は琉朱菜だけのもんだもん！」

「ざけんな！」

「じゃあ病院に行つて、性転換してくる？ 胸も大きくしないと駄目だよ？」

「……遠慮させていただきます」

ぬかった……琉朱菜の基本には胸が必要だったのか……。あのリロードの仕方は俺には、男には無理だ。それによく考えたら俺の銃、リボルバー式じゃなかったわ。

「後はまあ、その動体視力を生かして、瞬時に判断して撃つしかないよ」

「あ……成程」

そうだな……動体視力も上がった事だし、気配察知能力とか体術とか組み合わせて使ったら、色々と使えるな……。

「サンキユ、琉朱菜。これでまた、強くなれた気がしたわ」

「いえいえ〜！ それより汗かいたからお風呂に入りたい！ お腹も空いたな〜！」

「ちょうど昼だしな……。よし、今日は俺が奢ろう。ささやかなお礼だ」

「やたっ！　じゃあ丼とサラダとパスタ全部ね！」

「ぜ、全部！？」

「あ、あとドリンクもね！　じゃね〜！〜！」

琉朱菜は手を振りながら先に行ってしまった。恐らく風呂にでも入りに行ったのだろう。

「……………そんなに食ってよく太らないな」

この世界の住人は太らないのか？

考えても仕方が無いので、俺も戻る事にし、シャワーを浴びてから食堂に向かう事にした。

夜。俺は自室でレオンと共に過ごしていた。

偶々仕事が全部片付き、暇を持て余しているのだ。

「……………」

「……………おお」

俺達は部屋着に着替え、俺は机でコートの改造の真っ最中で、レオンは如何わしい雑誌をベッドの上で読んでいた。時折、興奮したレオンの声が漏れるが、俺は耳栓をして音を少しでも遮断している。

「おおっ！？ イブキこれを見る！ ハクにそっくりな娘だぜ！」

と、俺の目の前にその雑誌を広げた。

む……確かに似て……いやいや。

「レオン、絵で興奮してどうすんだよ。それでもハーレム王か？」

「仕方ねえだろ。まだその段階の相手がいねえんだよ」

レオンは口を尖らし、ベッドにドカッと座りこんだ。

「そついや今更だが、何でハクだけ呼び捨てなんだ？ 他はちゃん付けだろ？」

俺は暇つぶしに聞いてみた。

「あ？ そんなもん、付き合いが長いからだろ」

「だよな……。確か兄の副官をしてたんだよな？ そんで出会ったって」

「おうよ。……けどさ、ハクって実は兄さんと出会う前は、家も身分も何も持っていなかったんだぜ」

「そうなのか？」

レオンから聞いた意外な事実にも、俺は改造の手を止めた。

「ああ。ボロボロの姿で倒れてるのを兄さんが見つけて、それでハクを引き取って、才能を見つけて、自分の副官にしたんだよ」

「そうだったのか……。その兄さんは何歳だったんだ？」

「そんな時は二十六だったな。それから三年後に死んじまった」

「……………ウドウ……………」

あの男は……。一体何がしたいんだ……。ただ破壊を、殺しを求めるのか？

「あん時のハクは、もの凄く泣いてたな」

「ハクが？」

「ああ。もしかしたら、恋心でも持ってたんじゃない？」

レオンがニヤニヤした顔で俺を見てきた。

「何だ？」

「……面白くねえな」

レオンはつまらなさそうな顔になり、雑誌に視線を戻した。

「……」

恋……か。愛してた人が突然居なくなったら、泣きたくもなる。俺だってそうだったし……。

「……そう言えば、あいつ変なこと言ってたな」

「……何を？」

「確か……『私の所為で……ごめんなさい』ってな。あの時、ハクは非番だったから現場には居なかった筈なんだがな……」

「……優しいハクの事だ。守れなかったとでも思ってたんじゃないのか？」

「……たぶんな」

ハクも……守れなかったんだな……。

俺は改造を終え、コートをクローゼットにしまい、ベッドに寝転んだ。

「ああ、そうだレオン」

「何だ？」

「ヴィヴィオにエロ本が見つからないようにしとけよ？ 俺が少し遅かったら見つかったぞ」

「……マジで？ ってか入って来たの!？」

「パパーってな。……俺の顔を見た瞬間泣いて出て行ったけどな」

「ぶはははっ！ なっさけねぶっ!？」

「お休み、レオン」

レオンを気絶させ、エロ本を隠し場所にしまってやり、俺も寝る事

にした。

深夜の六課。そのとある場所に、誰かの影がそこに存在した。

「……………こっちの準備は出来ました。後は……………ええ、任せます。こちら
らは時を見て発動させます。……………あの男にやらせては？ どうせも
うそろそろ用済みですし……………。ではそうしてください」

声は女性の様な声であり、誰かと連絡を取っていた。

「……………もうすぐね。早く会いたいわ」

暗闇に浮かび上がるのは、紫色の眼だった。

翌朝、イブキとレオンは眼を覚まし、今日もハクの目覚ましが出来ない事に違和感を感じるも、別段気にせず午前中を過ごした。

そして、事は突然起こった。

突然の緊急アラート。原因は悪魔の大量発生。しかも発生場所は、六課から少し離れた海上付近。数百もの悪魔が六課に向けて進行して来ている。

「エンペラード隊とレオンで悪魔を殲滅する。他は六課で防衛に徹しろ。間違っても戦おうとするな」

「了解や。……頼むで」

「任せておけ」

俺ははやてに指示を出し、レオンと共に管制塔から出た。

「しかし何でいきなり？」

「知らん。だが悪魔を殲滅することには変わらない」

ヘリポートへ向かう途中、俺とレオンは何故悪魔が今になって行動を開始したのか考えた。

「そうだけども……」

「今は現場に向かおう。到達されたら、ここに居る皆を守るのは難
しう」

「だな。いつちよやるか！」

「その意気だ」

俺とレオンはヘリポートに到着し、ヴァイスが準備しているヘリに乗り込んだ。

中には既に全員揃っていた。

「ヴァイス、出してくれ」

「あいよ！」

ヘリは浮かび上がり、目標へと向かって行った。

俺達はヘリの中で作戦の確認をした。

「確認した限り、悪魔は全て空を飛んでいる。今までは人形モドキや死神モドキだったが、今回の悪魔は俺と琉朱菜が戦った羽付きの悪魔だ。奴らは素早く動ける。そして恐らく中には再生能力が高い奴もいるだろう」

「関係無い。全て斬る」

フェリスが余裕たつぷりな発言をした。
実に頼もしい。

「頼もしいな。……作戦だが、琉朱菜はヘリからの後方射撃。ハクと空幻はヘリの付近で援護、C・Cは敵右翼、フェリスは敵左翼。そして俺とレオンは中央をやる」

「そんな簡単でいいのかよ？」

「フェリス達の力はお前も知ってるだろ？ 十分だ」

どうせ気が付けば無双でもしてんだろ。それ程の実力なんだから。

「たぶん、何処かに敵の親玉的な存在がいる。そいつを発見したら全員に報告。近くににいる者と攻撃。もしくはやれると判断出来るのならば、報告した後、一人で攻撃だ」

「……了解」「……」

全員が俺の指示に返事をした。

「皆！ 到着したぜ！」

「よし……。掃討作戦、開始！」

ハッチが開かれ、俺達は一斉に飛び立った。

ヴァイスは琉朱菜が撃てる位置に移動し、ハクと空幻はヘリの近く

で戦闘準備に入り、残りは悪魔に突撃した。

結構な数だな……。だが統率は出来ていないな。
ふっ、まるで魔王の侵攻だな。

「レオン、準備はいいな？」

「ああ。ちとトラウマで飛ぶのは不安定だが、なーに、問題無いぜ
！」

「なら……。やってやるうぜ！」

俺は両手にエクスカリバーを投影した。

こちらはずっと特訓はしている。これぐらいの投影は問題無い！

「レオン、合わせる！」

「まっかせい！」

「約束された
」

「はあああああっ！」

「勝利の剣――！！」

「消し飛ばええええっ！！」

二つの光りの斬撃と、青い魔力砲が敵の中心を貫いた。
飲みこまれた悪魔は全て塵と化した。

「一気に決めるぞ！」

「つたりめーだ！」

俺は次元からゲイボルクを取り出し、更に空中に五本投影した。

「ギレン！ ブリューナクモード！」

『オーケイ！ レッツゴー！』

レオンはギレンを光り輝く五又の槍に変化させ、左手で投擲の構え取った。

「刺し穿つ」

「ブルーナクー！」

「死翔の槍！」

「当たれ！」

計六本のゲイボルクと、五本の閃光が悪魔の群れを襲った。

ゲイボルクは神話では投げれば三十の鏃となり降り注ぐ。それが六本で百八十の数になる。その内百五十の威力は一つ下だが。

レオンの槍はイブルと唱えて投げれば必中、また唱えれば手元に戻る太陽神・ルーの槍。

そしてレオンは、その槍を左腕で強化させ、槍というよりも砲撃という方が正しいモノへと変えた。

それらが悪魔を一斉に消し飛ばした。

「チヨロイな」

「甘いな」

「「チヨロ甘だぜ」」

しかし、悪魔の数は一向に減らなかった。

「どっかから湧き出てんのか!？」

「やはり親玉を倒さないと終わらないか」

「チツ！ 厄介だな！」

「っと、次はあちらさんからだ」

悪魔共も攻撃を仕掛けてきた。

ある悪魔はその速さで接近し爪を立て、またある悪魔は突進を、またある悪魔は持っている鎌や錆びた剣を振るってきた。しかし、悪魔は俺達に近づく前に頭を刎ね飛ばされた。

「馬鹿が。俺とレオンだけじゃないんだよ」「さっすがハクと琉朱菜ちゃんだぜ！ あんな離れた所から撃ち抜くなんてな」

へり付近からはハクと琉朱菜の矢と弾丸が次々と飛来し、悪魔共を撃ち抜いていく。

そして両隣でも黒い斬撃と緑の魔力が輝き、全体を蒼い炎が覆った。

「うひょー！！ 皆やるねー！！」

「感心するのは良いが、気を抜くなよ？」

銃を投影し、後ろ越しに悪魔を撃ち抜いた。

「けっ、誰が抜くかよ！ おらおらあ！ このハーレム王・レオン様と！」

「その親友・イブキ様が！」

「相手になってやんよ!!」

さあ、イカれたパーティーの始まりだ!!

明かされた事実(前書き)

作者「……………まあ、何も言つまい」

イブキ「何か不安だなオイ！」

明かされた事実

機動六課隊舎前。

そこに白いバリアジャケットと黒いバリアジャケットを着た二人が立っていた。

白い方は高町なのは。

黒い方はフェイト・T・ハラオウン。

二人はエンペラード隊が悪魔と交戦している間、この機動六課で留守番をしている。

エンペラード隊とレオンにしか悪魔に対抗出来る魔力を持っていないからだ。

「すごいね、レオン君達」

「うん……。でも、無事に帰って来てくれるかな……」

「大丈夫だよ。皆強いから」

「でも心配だよ。イブキ、前は何時も大怪我して連れて帰って来られたんだよ？」

「でもほら、今は皆と一緒にいるじゃん」

「そうだけど……」

フェイトは皆が戦っている空を見詰めた。

何であそこに自分が入れないのか、何でイブキの助けになれないのか、フェイトはそれが嫌だった。

「なのはは心配じゃないの？」

「もの凄く心配」

「だよな……」

「まだデートの約束果たして貰ってないもん。レオン君、怪我して帰って来たら許さないからね」

笑顔でそう言うのはだが、彼女の拳は震えていた。

本当は傍に居てあげたいのだろう。でも力になれないから傍に居れない。居たら邪魔になるだけ。
なのはもそれが嫌だった。

「今は信じて待っているしかないよ。皆が無事に帰って来るように」

「……そうだね。イブキはちゃんと帰って来る。それでまた鈍感スキルで私達を悲しませてくれるよね」

「そうだよ。沢山の女性に声をかけるレオン君をちゃんと叱らなき

「やね」

二人は戦っている空を見詰めた。

彼らの魔力光が空に輝き、彼女達に彼らの無事を教えてくれる。

「ちゃんと帰って来てね、レオン君」

「おやおや、何とも素敵な想いですねえ……」

「「ッ!?!」」

突然、二人の後ろから男の声が聞こえた。

二人は咄嗟にデバイスを構えて、後ろを振り返った。

「ですが、その想いは消し去らせて貰いますよ?」

彼女達の前に現れたのは、イブキとレオンの家族の仇、ウドウだった。

「チツ、キリが無い!」

あれから悪魔共を殲滅していつているが、一向に数が減らない。
それどころか、どんどん数が増えていつている。

「くそ、親玉は何処にいったよ!？」

レオンも悪魔を薙ぎ払いながら相手のボスを捜すが、一向に見つか
らない。

「レオン！ 魔力の方は大丈夫なのか!？」

「当たり前だ！ そっちこそどうなんだよ!？」

「当然、行けるさ!」

だがこのままではいくら魔力があっても持たない……。早く見つけ
ないと。

「レオン！ ここは俺に任せてお前は探すのに専念しろ!」

「はあ!？ 乱闘し過ぎて頭狂っちゃったのか!？ こんな数の相
手が出来るわけねえだろ!！」

「だがそうしないと終わらない！ 俺に任せ
」

「彼の言う通りにした方が良い、愚か者よ」

「ッ!？」

いきなり後ろから声が聞こえ、更に青白い光が見えた。俺は本能的に身体を大きく反らし、その光から避けた。

「何だ!？」

「ふん、反射速度は上がったか」

「ぐっ　　!！」

その正体を掴む前に腹を蹴られ、吹き飛ばされた。

「イブキ!!！」

「邪魔だ、裏切りの騎士よ」

「がはっ!？」

レオンがこちらに駆け付けようとしたが、何者かに殴られ、俺と同様吹き飛ばされた。

「まったく、あれから暫く立つが全然成長していないな。少しは期待していたのにな」

「貴様……!!」

俺はやつと奴を眼で捉えた。

銀髪の髪をし、鬼の様な面を着け、青いコートに大剣を背負った人影。

「そう睨むな。まったく恐れを感じないな」

そいつはただ腕を組んで俺を見下ろしているだけなのに、何故かとても恐かった。

何だよ畜生……!! 全然追いつけてないじゃないか! こんなにも震えが止まらない……!!

「ほらどうした? 早くここを終わらせないと、貴様たちの家が無くなるぞ?」

「え……?」

その時、六課の方向から、紫色の光りが爆発した。

「あ」

「貴様にとっては因縁のある色じゃないのか？ このままではまた因縁が増えてしまうな」

「……ウドウ……！」

「おっと、何処へ行くこうと言うのかな？」

ここから飛び立とうとした時、四方を蒼い幻影剣で囲まれた。

「貴様には、そこで見学していないといけないのだよ」

「ふざけるな……！ 退け！」

「断る。大人しくしていれば何もしないさ」

「退けえええっ……！」

俺は幻影剣を魔皇刀で砕きながら六課へ

「忠告はしたからな」

「っ！？」

向かえなかった。

数本の幻影剣が一瞬にして俺の身体を串刺しにした。そして釘で打たれたようにその場から動けなくなってしまった。

「あああああああつ！！！！」

「安心しろ、急所外してある。それ以前に貴様はその程度では死ねんだろっ」

奴は俺を一瞥し、そしてヘリが飛んでいる方向を見定めた。

「お　い　」

「てめええええっ！！！」

レオンが槍を突き出して奴に迫った。

しかし奴はレオンに見向きせず、槍を片手で掴んだ。

「邪魔だと言っただろうが。死にたいのか？」

「はっ、死にたくないねえ！　まだ女を抱いたこと無いもんでな！」

「そうか。ではそこでじっとしている」

幻影剣が、今度はレオンの四肢を串刺しにし、同じように動けなくした。

「ぐっ、があああっ！！！！」

「では貴様らは見ている。自分たちが信じていた者の正体を」

「な、なに……？」

信じていた者の正体だ？ 何の事だよ……？

奴は俺を一瞥してから蒼い炎を出して消えた。

何処に行きやがった！ まさかへりを！？

俺は首だけを動かし、へりの方へと視線を向けた。

しかしへりには何の異常も無かった。あつたのはへりの近辺ハクが居る場所だった。

その場所が蒼い炎で包まれ、ハクの魔力反応がその場から消えた。いや、俺の目の前に移動した。奴に抱えられて。

「て めえ ！」

「……っ！ イブキさん きゃっ！？」

「勝手に口を開かないで下さい」

ハクが俺の名前叫んだら、蒼コート野郎がハクの頭を殴った。

「テメエ！ ハクを離しやがれ！！」

「貴様は黙ってる。俺はこの男に用がある」

そういつて俺の方に目を向けて来た。

「さて、何故俺がハク・スペリア嬢を連れてきたか、分かるか？」

「し　　るか　　！」

「そうか……。ではその右目でよく見てみる」

右目の眼帯が展開された幻影剣で斬られ、右目が露わになった。俺は咄嗟にハクを視界に入れないように眼を閉じようとしたが、それよりも速くハクが視界に入ってしまった。

「　　え？」

何だ……。これ？ 何の冗談だよ？ 何で……。何でハクに……

悪魔の反応がするんだ？

「これで分かっただろう？ お前が今まで優しく接してきたのは、お前が憎むウドウと同じ存在、『悪魔』なのだよ！」

「う　　そだ　　！」

「っ……………」

俺はハクを見たが、ハクは俺から眼を逸らした。

何で逸らすんだよ？ お前は悪魔じゃないんだろ？ お前はウドウと同じじゃないんだろ？

「しかもただの悪魔では無い！ この方は『魔神ヒュルス』の令嬢、『ハクウエルア・バル・フィンドウーク』様だ」

「魔神……………だあ！？ ふざけた事ぬかしてんじゃねえぞ！！！」

娘……………？ 魔神の……………あの教会の……………？
人間に子供を産ませてる……………？

「数年前に魔界を飛び出して行方不明になっていたのだが……………まさかこんな所にいようとは」

「……………」

ハクは顔を伏せたまま何も喋らない。ただジツと、奴に抱えられたままだった。

「さあ、貴女の国へ帰りましょう。お父上が心配されていますよ」

「っ、嫌……………」

「……………」

ハクは連れて行かれるのを拒絶した。だがそれを奴が聞き入れる筈がなく、蒼い炎に飲まれてどちらも消えてしまった。

「ハクウウウウツ！！」

レオンの叫び声だけが、俺の耳に聞こえた。

奴が消えたからか、幻影剣も消え、俺とレオンは動けるようになつた。と言いたい所だったが、俺は身体の至る所を、レオンは四肢を貫かれているから満足に動けやしなかった。

正直、生きて空を浮んでいる方が可笑しく感じる。

「おや……………あの方は先にお帰りになられたのですね」

俺とレオンの前に、ウドウが何処からもなく現れた。
その腕には誰かが気を失って抱えられていた。

「な、なのはちゃん!？」

なのはだった。どうやらウドウに襲われてやられたようだ。

「テメエ、なのはちゃんを離しやがれ!!」

「お断りしますよ。この方はヒュルス様への貢物にするのですから」
「ざけんじゃねえ!!」

レオンはギレンを構えようとするが、大きな怪我によりギレンを握ることすら満足に出来なかった。

「……ああ、イブキさん。貴方も貢物にしてあげましようか？ 貴方ほどの魔力なら、ヒュルス様もお喜びになられるでしょう。尤も、死んで頂きますけどね!」

ウドウが空いている右手の爪を立てて俺に向かってきた。
そして後数センチの所で誰かが俺を押してウドウから逃してくれた。

「この大馬鹿者が！ 何ボーっとしているんだ！」

フェリスだった。いや、フェリスだけじゃなかった。よく見れば悪魔はいなくなっており、ウドウしかおらず、皆がウドウを囲んでいた。

「おい！ 聞いているのか！？」

「……ああ」

「だったらさっさとその怪我を治して立て！ あの気持ち悪いハゲからなのはを取り戻せ！」

……無茶言つなよ。こんな怪我すぐに治る筈が無いだろう。
けど……そう言ってられないよな。

俺は魔力を身体全身に流し、ほんの少しでも怪我の痛みを和らげようとした。

ハクが悪魔？ なのはが貢物？ 魔神ヒュルス？
もうどうだっていいさ。ああ、今はそんな事どうでもいい。
今はただ、ウドウをここで殺す。そしてなのはを助け出す。

ゆっくりと立ち上がり、魔皇刀を握りしめた。

「レオン……戦えるか？」

「上等……！ 惚れた女取り戻すのに一々怪我なんざ気にしてられつか！」

レオンも立ち上がり、ギレンを握りしめた。

「おやおや、満身創痍の貴方達に何が出来るというのです。それ以前に、貴方達の攻撃は私に掠りもしないのですよ？」

「知るか。俺はただ斬るのみ」

「俺はなのはちゃんを助けるのみ」

「……いいでしょう。では私に勝てたら、この女は返しましょう」

ウドウはなのはを離し、空中に浮かべた。そしてなのはの周りに紫色の光が表れ、なのはを宙に固定させた。

「では始めましょう。悪あがきというなのお遊びを！」

「やれえ……！」

俺の声にフェリスの斬撃、空幻の火、琉朱菜の魔弾、レオンの魔力

砲、俺の宝具の雨を同時にウドウに向けて放った。

「ふはははっ！ 無駄です！ 無駄ですよ！」

しかしウドウの身体をすり抜けてしまい、全くダメージを与えられない。

「はああっ！！！」

「ふふっ！」

遠距離攻撃を止め、C・Cがウドウに拳を叩き込むが、やはりすり抜け、逆に腕を掴まれてしまった。

「ハアッ！」

ウドウはC・Cの腹に手を当てて紫の波動を放った。

「くうっ！」

C・Cは掴まれていない方の手でウドウの腕を腹から逸らしたが、今度は掴んでいる腕から波動を放ち、C・Cの腕にダメージを与

えた。

「うあああつー!!」

「はああああつー!!」

俺は次元道でウドウに近付き、C・C・のを掴んでいる腕に刀を振り下ろした。

「だから当たらないと言っているでしょうー!!」

「誰も当ててる気は無い!!」

「ぬっつー!?!」

攻撃した時には何故か蜃気楼のように触れなくなる。なら掴んでい
るC・C・の腕も掴んでいられない筈だ。

「くっ!」

予想通りC・C・の腕はすり抜け、その場を脱出した。
俺は宝具を射出しながらウドウから離れた。

「くそ、いったいどうやれば攻撃が当たるんだ！？ フェリス！何か知らないのか!？」

「知らない。というか知りたくもない」

「……フェリス？ 貴方、フェリス・エリスですか？」

ウドウがフェリスの名前を呟き、何かを思い出す様にして尋ねた。

「何故名前を知っている。悪魔のストーカーなど、殺す」

「……ふふ、ふはは、んはーはっはっはっはっ!！」

ウドウが突然、天を仰ぐようにして大笑いしだした。

「まさか、まさかまさか！ このような事が二度も起こるなんて！私は何と幸運なのでしょう!！」

「何だ、アイツ？ 狂ってんのか？」

レオンが警戒しつつウドウの様子を覗うが、狂っているようにしか見えなかった。

「貴女ツ!！」

「……！」

ウドウが笑つのを止めると、フェリスに指をさした。

「貴女、産まれた時一族の死体の上で産声を上げたでしょう!？」

「なっ!？ 何故それを知っている!？」

ウドウが言った事は嘗てフェリスが俺に明かした過去の事だった。天界で生まれたのにもかかわらず悪魔の力を持って生まれたと。

「そうですね!？ そうですね!？ やはり正しかった!！」

「答える!! 何故貴様が知っている!!！」

フェリスが今にも飛びかかりそうな勢いでウドウに問うた。ウドウは拍手しながら笑い、そしてこう言った。

「何故って!？ それは“私が貴女を作りだした”んですから!!！」

「なっ……!!？」

「何!？ どういう事だ!？」

空幻がウドウに尋ねた。フェリス自身も訳が分からないのか、大きく目を開いてただただ驚いていた。

「貴女の一族を襲撃し、妊婦の腹に私の魔力をありつたけ注いだのです！　そして貴女は悪魔の力を授かり、母体を食い破って誕生！　そして私が捉えた一族を餌と見なし、満足するまで喰らい続けた！」

「……………！！！」

「そして私は貴女を連れて帰ろうとしましたが、運悪く神がやって来ましてね……………仕方なく諦めたのですよ」

「……………んな……………」

「言うなれば私こそが父親！　貴女という最強の存在を作りだした父なのです！」

「そんなワケあるかああああああつ！！！」

フェリスが怒り狂い、黒い魔力を体中から溢れださせた。いや、それだけじゃない。瞳が真っ赤になり、素肌には紅い線の文様が浮び出し、頭からは二本の角が生えてきていた。

「フェリス！！　止せ！！！」

「あああああああああつ！！！！」

俺の制止を聞かず、ウドウに斬りかかった。

「いいですよ！！ 貴女の力、見せて下さい！！」

ウドウは両腕を交差させて、フェリスの剣を“受け止めた”。

ウドウに触れた！？ 何故！？

「成程、これが貴女の力ですか。受け止めてみて貴女の素晴らしさが更に解りました」

違う。アイツはワザと受け止めたんだ。フェリスの力を知りたいが為に。

「あああああああつ！！！！」

「しかし……些か知能が欠けていますね。狂気に吞まれましたか？」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！！！！」

「……残念です。どうやら欠陥品の様ですな」

ウドウがフェリスの剣を片手で掴み、剣を握り潰した。

拙い……！ あのままではフェリスが！

「フェリス逃げろ！！」

「嘘だあああああつ！！！！」

フェリスは俺の声が聞こえないのか、拳を握りしめてウドウに殴りかかるうとした。

「止めるおおおつ！！」

もう残り僅かな魔力を絞って次元道を開き、フェリスとウドウの間に移動した。

そしてフェリスを殴り飛ばし、ウドウに向かって刀を

「 遅い」

「 ツ」

何かが俺の右胸を貫いた。

「 かはっ」

「ふうむ……この程度ならば避けられると思ったのですがね……。
どうやら過大評価し過ぎたようですね」

ウドウの腕が俺の右胸を貫き、背中を貫通していた。

何だよチクシヨウ……。訓練して、強くなったと思ったら全然追いつけてないし……。ハクが悪魔だわ、仇にはいい様にされるわ、何なんだよ……。

「貴方ほどの力ならば私を愉しませてくれると思っていたのに……
失望しましたよ」

「ぐっ……！」

「その刀も貴方には勿体ない。私が使つてあげましょう」

ウドウが腕を伸ばして魔皇刀を俺から奪い取った。

ふざけるな……！ それは俺の力だ……！ 悪魔を殺す為の……！

「とても良い刀です。これでその欠陥品も斬り落としてあげましょう。ですが……」

「がはっ！」

貫いている腕で俺を持ち上げ、赤い瞳で俺の眼を見詰めた。

「その前に貴方から殺してあげましょう」

「イブキツ！！」

レオンがウドウに向かってギレンを投擲した。が、ウドウは見向きもせず波動で弾いた。

レオンは左腕でウドウに掴みかかろうとしたが、空間から黒い鎖が表れ、レオンを絡め取った。

「何ッ！？」

「それは魔の鎖ヴァイネという私の獲物ですよ。魔力があるモノを見つけ、縛り取り、破壊する鎖です。ですが安心を。今は殺しはしませんよ」

「くそッ！」

レオンは鎖を外そうとするが、腕一本動かせず、苦痛の表情をするだけだった。

「イブキを離せ！ このハゲ野郎！」

「いっちゃん！」

空幻と琉朱菜がウドウを攻撃するが、全て波動で打ち消され、全く近付けなかった。

そう言えば、フェリスは……？ 後ろに殴り飛ばした筈なんだが……。

今にも飛んでしまいそうな意識の中、俺は後ろにいる筈のフェリスを確認した。

フェリスはそこにいた。C・C・に腕を借りて今だ黒い魔力を溢れださせているが、瞳の色と肌は元に戻っていた。

ただ二人とも信じられない様な表情でこっちを見ていた。

ああ……元に戻ったのか……。悪魔嫌ってたからな……。あの姿のまんまじゃ、正気を失って自殺しかねんしな……。良かった。

「……何を笑っているのです？」

……笑ってたのか、俺？ はっ、笑いたくもなるさ……。一気にあり過ぎて頭パンクしそうだしさ……。身体感覚が無くなっていくのって、何か変だしな……。

「……もう喋られないのですか。いいでしょう、せめて一付きで終わらせてあげましょう」

そうかよ……。この……

「……クソ野郎……」

「さようなら」

ドスッ。

奴に奪われた魔皇刀で俺の左胸　　ああ、これは心臓だな　　を刺された。

二度目の死。それは俺の仇に殺される、クソツタレな最期だった。最期に見えた光景は、フェリスが叫んで手を伸ばしてくる光景だった。

「おめでとう」

ドスッ。

「……………え？」

何だ、これは？ イブキが……………刺されてる？

何だ？ 何なんだ？ 何でイブキが刺されて、私はここにいるんだ？
私は確か奴を殺そうとして……………イブキに庇われた……………？

「少しは楽しめましたよ。イブキ・ヤマト」

ウドウが刀を抜き取り、イブキの胸から夥しい量の血が噴き出した。
ウドウはその光景を笑って見た後、イブキを海に蹴り落とした。

「駄目だああああっ！！！！」

私はイブキを掴もうと腕を伸ばしたが全く届かなかった。

いや、大丈夫だ。アイツはどうせすぐに起きて戻って来る。
海に打ち付けられる前に飛んてくる。

だってアイツは私の奴隷で、小間使いで、雑巾で、茶飲み

ドボンッ
！

イブキは海に叩きつけられた。何の抵抗もなく、頭から、海に沈ん

でいった。

何をしてるんだ？ アレか？ 敵の目をごまかす為か？ そうだ、絶対そうだ。

イブキにしては考えるじゃないか。そら、早く奴に一矢報いる。そうすればちゃんと友達として扱ってやるから。

だがイブキが上がって来る気配は無かった。海は静かに波を立てているだけだった。

「なに？」

「……………どうした？」

私に肩を貸していたC・Cが右目を押さえて驚いた様な顔をしていた。

何だ？ あ、イブキからギアスを通じて何か伝えられたんだろう？

「おい、何て」

「ギアスが……………きえ……………た……………？」

「……………なに？」

「そんな……………！ イブキが……………死んだ……………？」

「馬鹿な事を言うな!!」

C・Cの首元を絞め上げて揺さぶった。

「出鱈目を言うな! アイツが死ぬはずが無いだろう!!」

「だが……ギアスは命と同じ……。それが……消えた……」

「嘘だつ!!」

「嘘ではありませんよ。私は確かに彼の心臓を破壊しました。この膨大な魔力を帯びている刀です。たとえ彼であつても、再生は不可能です」

ウドウが刀を向けてきて気味の悪い顔を向けて来た。

嘘だ、違う、嫌だ。アイツが死ぬなんて嘘だ。間違いだ。

でも何で上がって来ない? 死んだから? 違う、疲れたからに決まってる。ちょっと休んだら来る。きっとそうだ!

「EEEEEEEEEEEEEEEE!!」

「煩いですよ。貴方はまだです」

「ふざけんなああああっ!! イブキを、俺の親友をおおおお

!!」

「ッ！ ああっ！？」

C・C・Cが飛ばされた。ウドウに波動を当てられて飛ばされ、レオ
ンと同じように鎖で絡められた。

「さて、貴女の番ですよ。欠陥品とはいえ、貴女は私の作品。精々
美しく散って下さい」

ウドウが刀を上振り上げて私の首に振り落とした。

「……………？」

「……………何ですと？」

だが刀が私の首に触れることは無かった。

イブキが止めてくれた？

だがイブキは何処にもいなかった。
いや、刀は誰にも止められていなかった。刀“自身”が止まってい
た。

「何ですかこれは？ 刀が動かない？」

ウドウが押ししても退いても刀は少しも動かなかった。

ズズズズ……。

突然、大地が揺れるのを感じた。それと同時に今までに感じた事の無い強大な魔力を感じた。

何処から？ 下？ 海から？

私達は全員、海を見下ろした。

「な、何ですかこれは!？」

ウドウが驚きの声を上げた。

私達が見た光景。それは、荒れ狂い始めた海に、巨大な魔方陣が描かれ始めたのだ。

何だこの魔方陣は？ イブキが使う魔方陣とは全く違う……。

魔方陣が完全に描かれ、強烈な光を発した。

ドパアアアンツー!!

魔方阵の中心、私とウドウの真下から巨大な水しぶきが上がった。

『ディアアアアアッ！！！』

黒い影と共に。

影はウドウに突撃し、ウドウを吹き飛ばした。

「なあっ!?!」

『ハア……ハア……』

やがて水しぶきが止み、私の前に現れた影の姿が見えた。

「……イブキ？」

イブキだ……。生きていた！ 死んでいなかった！

「イブキ！ 馬鹿者が！ 心配」

変だ。何か変だ。姿はイブキなのに、イブキの気配がしない。
目の前にいるのにイブキの気配がしない。

これは……この気配は……『悪魔』？

『グオオオオオオオツ！！！！！！』

イブキが天に向かって雄たけびを上げた。すると私の視界が赤黒く染まり、一瞬だけ眼を閉じた。そして開くと、そこにはイブキの姿は無かった。あつたのはとても恐ろしく感じる悪魔の姿だった。

「な……！！？」

強靱な黒い肉体。肉体に走る複数の赤いラインは、胸の中心で一つの塊に。三対の巨大な黒い羽の生えた翼。鋭い爪。鋭い牙。鬼の様な、しかし人間味がある顔。垂れ下がるようにして生えた二本の角。そして、紫色に光る眼だった。

「な、何ですかその姿は！？」

ウドウが驚きと喜びが混ざった声を出し、その悪魔を見た。

「嗚呼、素晴らしい！！ 感じる、感じます！！ この禍々しい力！！ この力は……は？」

喜びに満ちていたウドウの顔から笑みが消え失せた。
代わりに出て来たのは信じられないというような顔だった。

「そんな……まさか……！ あ、ありえない！ その力は貴方み
いな人間に宿る力では無い……！」

ウドウが怯える姿を見たのは初めてだった。

恐怖で震える手で悪魔を指差し、身体を震わせていた。

『ウオオオオオオツ……！！』

悪魔の雄たけびが響き渡る中、私達は一体何が起こったのか解らず
にいた。

魔皇覚醒(前書き)

作者「さて、物語もやっとなんと中盤。けどまだ終わらない。もう、やれるだけの事はやるぞ」

フェリス「キモッ……」

作者「……」

魔皇覚醒

『ウオオオオオオツ！！！！』

目を疑った。海に落ちた親友が戻ってきたと思ったたら訳の分からない悪魔の姿に変わってしまった。

「そ、そんなっ！？ 何故人間の貴方がその力を！？」

ウドウはアレを知っている様で、もの凄く取り乱していた。先程までの余裕はなく、恐怖の表情を露わにしていた。

「おいおい……… 一体何がどうなってんだよ？」

『……………』

「ひっ……………！！？」

悪魔がウドウを睨みつけた。ウドウは怯え、徐々に後ろに下がっていった。

『アア……アアアアアアツ!!!』

まるで世界を呑みこむように黒い翼を広げ、ウドウに突っ込んだ。

「ひいつ!!」

ウドウは怯えながら奪った魔皇刀を振るうが、悪魔はそれを難なく掴み、握りつぶした。

「そんなっ、ひいつ!?!」

ウドウは思わず背を向けて逃げ出そうとするが、悪魔は瞬間移動をしたみたいにウドウの目の前に現れた。

『ガアアアアアアツ!!!』

大きく腕を振りかぶり、ウドウの顔面に拳を叩き込んだ。

当たった!? ウドウには触れも出来ない筈だろ!?

「ぶはぁっ!!」

大きく吹き飛ばされ、血を吐き出した。

「ああっ……！？ わ、わた、私に触れた！？ こ、殺される！」

ウドウは自分が吐いた血を見て一層恐怖を表し、何を血迷ったのか、ちよつど近くにいたなのはちゃんを盾にしだした。

「なのはちゃん！」

「こ、来ないで下さいっ！ この女がどうなっても……！！？」

ウドウは言葉を失った。何故なら悪魔が空中に大量の武器を魔方陣から取り出し、射出体勢に入っていたからだ。

あれはイブキの次元武……！？

「チイツ！」

俺は飛び出し、なのはちゃんの前に出た。その瞬間、大量の武器が射出された。

「おおおおおっ！……！」

俺はギレンでなのはちゃんに当たる武器だけを見定め、その全てを弾いていく。

だが全てを弾く事が出来ず、一、二本俺に突き刺さってしまった。

くそっ、あの蒼コート野郎に負わされた傷があるっていつのに……！
全身血だらけになりながら武器を叩き落とす。

「い、今の内に……！」

「なっ！？ 待ちやがれっ！」

後ろでウドウがなのはちゃんを盾にしながら、共に何処かへと消えてしまった。

「なのはちゃ　　ぐう！」

ギレンを持っている腕に剣が刺さり、一瞬の隙が出来てしまった。
そして大量の武器が襲ってきた。

やられる　　……！！

しかし、当たる前に横から誰かに掴まれ、その場から離脱した。

「いっつー……ふえ、フェイトちゃん!？」

「はあ、はあ、間に合った……」

全身傷だらけのフェイトちゃんが俺を助け出してくれたようだ。

「フェイトちゃん、六課は!？」

「大丈夫、皆怪我はしてるけど、そこまで酷くないよ。……なのはは？」

「っ……フリイ……攫われた……」

「……なのは」

フェイトちゃんは一瞬だけ悲しい表情を見せたが、すぐに引き締めた。

「なら助け出さなくちゃ。……イブキは何処？」

イブキ……あの悪魔はイブキなのだろうか？ 次元武も使ったし、何よりイブキの姿からあの姿に変わった……。

「あの……悪魔……だと思っ」

「え……？」

俺は今までの事をフェイトちゃんに教えた。

フェイトちゃんは驚いていたが、すぐに頭を切り替えて、現状を受け止めた。

「あれがイブキだとしても……私の攻撃は効かない。ならレオン達
が何とかするしかないよ」

「わーってるよ」

俺はフェリスちゃんの下に移動した。あの悪魔はこちらをただ睨みつけているだけで何もしてこない。だが、安心はできない。さつきからずっと俺達に向けて殺気を放っているからだ。

「フェリスちゃん、俺達でアレを何とかしよう」

「……………」

「……………フェリスちゃん！」

放心状態にあるフェリスちゃんの胸ぐらを掴み、一発ピンタを入れ

る。

「認めたくないのは分かるがなあ！ 今はアイツをどうにかするのが先だろうが！」

「……………」

「しっかりしろよ！ やれるのは俺達しかいないんだからな！」

フェリスちゃんは俺をジツと見ていたが、徐々に元のクールな表情に戻り、俺の手首を掴んだ。

「私に気安く触るな。妊娠する」

「するかっ！」

「だがまあ……………今はどうでも良いか」

フェリスちゃんは剣を悪魔に向けて、不敵に笑った。

「あの訳の分からない姿になった大馬鹿者を叩きに行くか」

「……………そう来なくっちゃな」

左腕の裾を捲り、爪を立てた。

この腕で目え覚ましてやんよ！

「私とC・C・とレオンはアレに突撃。空幻は封印術の準備を。琉朱菜は援護射撃」

フェリスちゃんがテキパキと指示を出し、俺達はそれに従った。

「フェイト、六課に戻って怪我人の手当てをしている」

「う、うん……」

フェイトちゃんはすぐに離脱し、六課へと戻っていった。

「……行くぞ！」

それを合図に俺達はイブキに突っ込んだ。

『ヴオオオオオオツ！！』

翼を広げ次元武を展開し、武器を射出してくる。が、俺達は剣と槍

と強化した拳で弾いて行き、悪魔へと近付く。
琉朱菜ちゃんの援護射撃により、悪魔が気を取られそちらにも武器を射出する。

そのおかげでこちらの命中率が下がり、隙が出来た。

「でやあああつー！」

魔力で出来た左腕を伸ばし、悪魔の身体を掴んだ。

悪魔は抜けたそうと俺を狙ってくるが、その前にフェリスちゃんとC・Cちゃんが接近し、剣と拳を叩き込んだ。

『ウオオオオオツ！！！』

しかし全身から発した赤黒い魔力により当たる寸前に止められ、俺の腕も弾かれそうになる。

「このっ、獣みたいに叫ぶな！」

「煩い男は嫌いだ！」

負けじと剣と拳を押し込み、叩き込もうとする。

悪魔は次元武を展開し、武器を射出しようとするが、その前に琉朱菜ちゃんが全ての武器に弾丸を当て、二人に当たる前に弾いて行く。

「二人とも、下がれ！」

空幻ちゃんの声が聞こえ、二人はすぐに下がった。そそして俺も手を離し、次の瞬間には悪魔の周りに金色に光輝く札が無数に出現した。

「ふっ　　！」

空幻ちゃんが手で印を刻むと、札同士が光りの線で結ばれてゆき、悪魔の身体に絡みついた。

『ギガアアアアッ！！』

悪魔はそれを引きちぎろうとするが、すかさず琉朱菜ちゃんの弾丸が飛んでくる。

「ハアアアアアッ！！」

空幻ちゃんが手をパンッと叩くと、札が更に輝きだし、二つの五芒星の陣が悪魔を挟んだ。

「アアアアアアああああ」

すると赤黒い魔力がどんどん消えてゆき、そして悪魔の姿が人間の、イブキの姿に戻った。

「っと……」

落ちる前にイブキを掴み、肩に抱えた。

「まったく、世話が焼け　　!?!」

首を絞められ、今にも折られそうになった。

「がっ　　!?!」

「フーッ！　フーッ！」

イブキが俺を睨みながら牙を見せる。イブキの瞳は紫色に変わっていた。

「い……ぶ……き……!」

「っ……！ ああ…… ああああああああああ……っ！！！！」

俺を放り投げ、頭を抱えて叫び出した。

「くうっ！」

空幻ちゃんその隙に光りの鎖を出してイブキをグルグル巻きにし、
C・Cちゃんが首に手刀を当てて気絶させた。

「……どうなっちまったんだよ……」

ハクとなのはちゃんが攫われ、イブキもおかしくなり、この戦いは
終了した。

六課は建物は無事だったが、外は滅茶苦茶だった。

木々は薙ぎ倒され、地面には穴が開き、美しかった光景は無残な姿
になっていた。

怪我人は多数。フォワード陣、その他の隊員全て負傷。 幸いな事に
死者は出ていなかった。

「あいたっ!？」

「我慢してください。……はい、終わりましたよ」

「うう、おおきに、シャマル」

医務室では重傷者、その他は医務室には入りきらないので各自の部屋で診察を受けて治療してもらっている。

部隊長であるはやては重傷ではないので部隊長室で診てもらっている。と言ったものの、腕が一本に全身を傷だらけにしている軽いとは言えなかった。

「大丈夫かよ、はやてちゃん」

「こんぐらい、どつって事無いよ。それより、レオンくんの方が心配や。手足刺されたんやないの?」

「ん、気付いたら治ってた」

「なんやそれ……」

ホントなんだよな。あんだけ痛かったのに、こっちに戻って来たらもう治ってたからな。

「……なあ、イブキくんは……」

「……空幻ちゃんが封印術ってのをかけた部屋に閉じ込めてる。…
…アイツ、俺達の事見て殺そうとしてきやがった」

六課に戻って来た時、イブキは目を覚ましたが、俺達を見るなり武器を取り出して斬りかかって来やがった。

必死に呼びかけても止まらず、俺達全員で抑えかかってもう一度気絶させた。だから念の為に部屋に閉じ込める事にした。

「そうか……」

「それにしても、何でウドウは全員殺さなかったんだ？ あいつなら喜びながら殺すと思っただけだな」

「……そういえば」

「ん？」

「あのハゲ、変なことを口にしとったな」

「どんなだ？」

「『もうすぐ我が主の悲願が達成される！ その時の為に生きていてください！』って。なんや、ウチらをお祝いの品にするつもりかいな」

主……あの蒼コート野郎か？ いや、ハクの事や魔神って奴に敬語

使ってたしな……。なら魔神が主か？

「なのはちゃんたハクちゃんは連れ去られるし、イブキくんはどうにかなつてもたし、ミリアちゃんは部屋に閉じこもりっぱなしやし、もう何でこんなに問題ばっか起こんの？」

はやてちゃんは頭を抱えた。ここ最近はスカリエツテイの事件も悪魔の事件もあり無かったのだが、今日に来てこんな大事な事件が起きてしまった。

平和は束の間の休戦とは、よく言ったものだ。

「んじゃま、報告も済んだし、俺は皆の所へ顔を出してくるよ」

「ん、分かった」

俺は部隊長室を後にして、六課内を歩き回る事にした。

廊下を歩いていると、休憩所にフォワード陣が座っていた。だが様子が変わった。

「おーい、どうした？」

「あ……レオンさん」

ティアナちゃんは返事をしたが、スバルちゃんはギンガちゃんに抱かれ、キャロちゃんはエリオに肩を抱かれて泣いていた。

「……………」

「スバル達……イブキさんに会いに行っただんですけど……………」

「え、アイツ起きたのか!？」

「…………『貴様らみたいな下衆が近寄るな』って、扉越しに……………」

「なっ……………!？」

まさか…………アイツがそんな事言う筈が…………! 俺達を襲ったのは錯乱してたんじゃ…………。

「それでスバル達泣いちゃって…………。何があったんですか? あの男が現れて、気付いたら全部終わってて、なのはさんやハクさんが居ないし…………何なんですか、これ…………!」

ティアナちゃんも座り込み、とうとう泣き出してしまった。
エリオも涙を堪え切れずに流し出した。

「…………すまねえ。俺が弱いばかりに……………」

俺はその場から離れた。今の俺にはこいつらに何も出来やしない。俺はそのままイブキを閉じ込めている部屋に向かった。

イブキがいる部屋に到着すると、フェリスちゃん達エンペラード隊がいた。
だがその表情は焦っていた。

「おい、もっと魔力を強めろ！」

「分かっている！」

フェリスちゃんとC・Cちゃんと琉朱菜ちゃんは扉を身体で押さえ付け、空幻ちゃんが手で印を結んで何かをしていた。

「っておい！ どうしてんだ！？」

「ちょうど良い！ おいナンパ男！ お前も押さえる！」

「お、おう！」

フェリスちゃんに言われ、俺も扉を押さえた。すると向こう側から凄い衝撃が扉を叩いた。

『ここから出せ屑共！！ 今すぐに塵と化してやる！！』

「なっ……」

イブキが向こう側で扉を叩いていた。

誰だ、こいつは……？ イブキじゃねえ……一体誰だ？

「起きてからずっとこうだよ！ 扉をガンガン蹴って壊そうとしてくるんだよ！」

琉朱菜ちゃんがきつそうな表情をしながら背中を押さえていた。

「おいっ！ 落ち着けて！ 冷静に」

『黙れ下郎！！ 誰に向かって口を聞いている！！ 貴様らは大人しく扉を開き屑肉となれ！！』

一層強い衝撃がきた。扉が歪み、僅かな隙間が出来てしまった。その隙間からイブキの顔を一瞬だけ見えた。

「……………!?!」

鬼の形相。それに尽きる。気迫も、目も、身体も鬼の様だった。身体も筋肉が発達し、前よりも大きく見え、目は紫に変わり、こちらを強く睨んでいた。

「 よし! 」

空幻ちゃんの声が聞こえ、扉と壁に陣が浮かび上がりだした。

『ぐっ……………おおおおおっ!?!!』

イブキが苦しみ出した。その隙に琉朱菜ちゃんが隙間から銃を構えてイブキに向かって発砲した。弾は麻酔弾らしく、喰らったイブキはこちらを恨めしそうに睨みながら眠りに着いた。

「何なんだよ……………?」

俺は扉から離れ、床に腰をついた。

アレはイブキじゃねえ……………それどころか人間にも感じねえ……………。ア
レは……………アレはまるっきり悪魔だ。

「なあ、一体全体何が起こったんだよ？」

俺は皆に尋ねた。だが皆は顔を伏せて答えない。琉朱菜ちゃんは分らないのか困ったように首を傾げていた。

「……………魔皇^{まけい}」

「え？」

空幻ちゃんが口を開いた。

「認めたくないが……………イブキが魔皇だ」

魔皇…魔の皇帝・ファルネス。嘗て魔王と共に天界、魔界を滅ぼした伝説の悪魔。この左腕の悪魔の友であり裏切った敵。

それがイブキだと？ だけどイブキは……………。

「やはり魔皇^{ファオルネス}刀が出た時点で警戒するべきだった。あれは魔皇の力を受け継いだ者にしか現れない」

「だが！ アレはイブキ自身が潰したじゃないか！ 本当に魔皇刀

なら、傷一つ出来やしない！」

フェリスちゃんが反論するが、空幻ちゃんは首を振った。

「ならあの姿はどう説明する？」

「そ、それは……」

「……もしイブキがこのまま牙を向けて来るのなら、俺はイブキを殺すしかない」

空幻ちゃんが冷たい目つきでそう言った。

殺す……イブキを殺す。親友を、初めて出来た親友を殺す。

「馬鹿な事を言っな！ イブキは錯乱しているだけだ！」

「だったら良いがな」

「なん」

「もうそこまでにしろ！」

C・Cちゃんが言い争う二人の間に入った。

「今ここでどうこう言っても時間の無駄だ。今は様子を見るしかない」

そういつく・く・ちゃんは肩を震わせていた。目にも涙が溜まっていた。

「……………」

フェリスちゃんと空幻ちゃんは言い争いを止め、黙って何処かへ歩いて行った。

「……………」

「…………イブキが魔皇なら、オルファ皇騎士の俺が殺さないといけねえのか？」

「…………知らん」

そう言い残し、く・く・ちゃんも立ち去っていった。

くそ…………力があるのに何も出来ない自分が歯痒い。何が選ばれた英雄だ。何がエースだ。俺はこんなにも…………小さい。

畜生風情が……俺を閉じ込めやがって……！
身体に力が馴染めば
こんな鉄屑　　！

「うっ……！？」

くそおっ……！　人間風情が俺を拒むな……！
貴様は黙って俺に
身体を渡せ！

「ぐっ　だれ　が！」

渡さねえ……！　渡して……たまるか　　！

渡せ……！　俺は……我は皇なるぞ！

しらねえ……！　これは……俺のだ！

「ぐはっ　　！　はあ……はあ……はあ……」

「へえ……まさか人格が残るなんてね」

だれ……だ？

顔を上げるとピンクの髪が見えた。

「まあ、これで覚醒したし、ウドウも用済みね」

「……………ミリア？」

「いいえ、もうそんな女はこの世にはいないわ」

「……………！ きさま……………ミリアを……………殺したのか……………！？」

「……………呆れた。まだ気付かないなんて」

カツン、という音が部屋に響き、辺りが光りで照らされた。すると相手の顔もはっきり見え、良く知っている顔が目に入った。

「……………ミリア……………？」

「だから違つって言っているでしょう。……………仕方ないわね。この口調なら分かる？ “お兄ちゃん”」

「……………！？」

嘘だ……………桃香は死んだ。俺の目の前で。ウドウに殺された！

「そうだよ。確かに私は死んじゃったよ。けどそれは人間としての私^ががね」

「にん…げん……?」

「そう。何処から説明しようかな。まずは…私達の家の話からしようか」

桃香は俺を担ぎ、部屋にあった椅子に座らせ、向かい側の椅子に座った。

「先ずね? 私達大和家は、全員“悪魔”なんだよ」

「なに……?」

何を言い出すんだこいつは。俺達が悪魔? 家族全員が?

「そう。お父さんとお母さんが魔界生まれで、人間で言う貴族だったんだよ。でもね、魔界での暮らしが飽きて、人間界に移り住んだんだ」

「そんな馬鹿な話が…」

「あるんだよ。でね? お父さんとお母さんは人間界での生活がとても気に入ったらしくて、そこで私達を産んだの。悪魔の力を隠して、普通の人間のように育てられたの」

桃香は嬉しそうに笑顔で話します。まるで久しぶりに話せて嬉しいように。

「でもね、完全には隠せなかったの。ほら、私の髪やお兄ちゃんのととか。迅お兄ちゃんや蓮お姉ちゃんも髪を染めたりして隠してたんだ」

「……父さん達もか？」

「うん」

「なら何で俺とお前は……」

「だって、お兄ちゃんがこの髪が大好きだって言ってくれたから！」

桃香は顔を紅くして照れるように言った。

懐かしい……こんな状況で俺はそんな姿に懐かしみを感じてしまった。

「それに、お兄ちゃん覚えてないかな？ お兄ちゃん、人間を皆見下してたんだよ？」

「俺……が？」

「うん！ カッコ良かったなー！ 何時も冷たい眼で見て、皆を恐がらせてたんだよ！」

まさか。俺にそんな記憶は……まさか。

「記憶が……無くなる前の俺？」

「正解！ それじゃあ何で記憶が無くなったでしょう？」

「それは……小学校の事件で……」

「ん〜半分正解。じゃあその事件を起こしたのは誰でしょう？」

「知らん……。どこの凶悪犯なんだろ……？」

「ブブー！ 正解は、“お兄ちゃんが殺した”でした！」

「……え？」

俺が、殺した？ 子供を、教師を？ 俺が？

「言ったでしょ、私達が悪魔だって。お兄ちゃんは悪魔の本能を抑えきれずにみーんな殺しちゃったの」

「嘘だ！ そんな事する筈が無い！」

俺は思わず立ち上がった。体中が痛かったが、頭の中は混乱していて気にする余裕は無かった。

「嘘じゃないよ。それでね？ お父さんとお母さんはお兄ちゃんの方が大き過ぎるから、成長するまで力を封印しようって決めたの。私達の力を使ってね。だから封印が解かれるまで私達はただの人間みたいになっちゃったの」

「それで何で俺の記憶が無くなる!？」

「記憶も封印しなきゃ自分が殺したってパニックになっちゃうよ。お父さんたちはそれを避けて記憶も封印したんだよ。けどもう覚醒しちゃったから、戻ってる筈だよ?」

その言葉で記憶が流れ込んできた。いや、思い出した。泣き叫ぶ子供達を引きちぎる俺。身体に穴をあける俺。喰らう俺。捻じる俺。踏みつぶす俺。その全ての俺は笑っていた。血に塗れて笑っていた。

「あ……ああ……あああつ!!」

「落ち着いて。私達は悪魔なんだからそれが当然なんだよ」

桃香が俺を抱きしめて来た。子供をあやすように背中を摩り、俺を落ち着かせた。

「俺は……俺は……！」

「お兄ちゃん」

桃香が俺の顔を両手で包んで目を合わせた。

「もう戻ろう？ あの楽しかった時間に。私と愛し合った日々に。ねえ、 “一颯”」

「っ ……！！」

戻る。あの楽しかった世界に。父さんがいて母さんがいて兄さんがいて姉さんがいて桃香もいる。もう戻れないと思っていた世界に戻る。

「父さん達も……いるのか？」

「うん！ 皆待ってるよ！」

「……そうか」

いるんだ。全員……皆生きてるんだ……！！

「桃香……」

「……一颯」

もう、戻ろう。悪魔だったって良い。俺は、大和一颯に……戻る。

「イブキ……!」

扉をブチ破り俺は中に転がり込んだ。そしてイブキの手を取っている女に悪魔の腕を伸ばした。

「ふん」

が、それはイブキに弾き飛ばされた。

「貴様……その穢れた腕で我が妹に触れようとするか。死にたいよ
うだな?」

「イブキ!」

「戯けが！ 我が名を気安く口にするな！」

何もしていない。イブキは何もしていなかった。なのに俺は吹き飛ばされた。

「があっ！」

壁に打ち付けられ、肺の中の息が全て吐きだされ、床に倒れた。

「漸く元に戻ったか。成程、元の人格に戻ったのか」

「良かったあ！ 変な風に残ったら大変だったよ！」

「感謝するぞ桃香。流石は俺の女だ」

「もう、照れるよ〜！」

くそっ……遅かった！

俺は立ち上がりギレンを起動した。

ここでイブキを止めないと、もう二度と元に戻れねえ！

「……何だ貴様？ 力の差が分からない訳ではあるまい」

「ウルセエ、ここでお前をつれて行かれる訳にはいかねんだよ！」

「……レオン。最初で最後の忠告だ」

俺の名前を呼んで俺を見詰めて来た。しかし、次元武を展開してだ。

「お前は俺の友であった。だから言おう。大人しく退け。せめてもの慈悲だ」

「……はっ」

「何が可笑しい？」

「お前がまだ友と言ってくれるだけで戻せる可能性が出て来たぜ！」

俺はギレンを突き出してイブキに迫った。

「……残念だ。“失せる”」

たった一言。それだけで俺の世界は反転した。

響く轟音、身体が焼ける感触、激しい痛み。それらが俺を襲いかかった。

「あ……」

何をされたのかも分からない。気付けば部屋には大穴が空き、俺は瓦礫の中に埋まっていた。

「行くぞ、桃香。場所を案内してくれ」

「うん！」

「ま　　て　　」

ぼやける視界の中、俺は必死に手を伸ばそうとしたが手は上がらなかった。

イブキは女を抱き寄せ、次元道を開いた。

「……………」

一度だけ俺を一瞥してから二人は次元の中に消えて行った。

「イブキ……」

薄れゆく意識の中、フェリスちゃんの声が聞こえた。

目を覚ますと、そこはベッドの上だった。
身体中が固まったように動かず、動かそうとすれば痛みが走った。

「レオンさん！ 起きたんですね!？」

ギンガちゃんの声が聞こえた。眼だけ動かすと、ギンガちゃんが慌てて駆け寄ってきた。

「ああ、動かないで下さい！ 今シャマルさん呼びますから！」

そう言いギンガちゃんは通信でシャマルちゃんを呼びだした。

……くそう。

思い出すのはイブキが行ってしまった時の事。
ミリア、いや、大和桃香がイブキを悪魔に戻してしまい、何処かへ消えてしまった。

親友のくせに、俺は何も出来なかった。

「くっ……！ チクショウ……っ！」

「レオンさん……？」

涙が溢れてきた。女の子の前でみっともない。けど俺は泣いた。友達を連れて行かれた。何も出来なかった事に泣いた。

もっと強く……！ もっと強くならねえと……！ 絶対、連れ戻してやる！

「レオンさん……」

「ああ……あああ……っ！」

今は、泣いじ。

「……」

「やあ、よく来たね！」

「……どういう事だ、桃香？」

「ごめんね。今、父さん達はちょっと用事に出ているの。それと私達は今このスカリエッティのアジトを拠点にしてるの」

「そういう事だから、宜しく」

「……まあ、桃香達がいれば良い。世話になる」

魔族（前書き）

作者「え〜と、今回は説明会……みたいなモンかな？ どれくらい」となってる気がするけど」

一颯「ふん、貴様の才が無いからだ」

作者「……どうしてこうなった」

魔族

俺の全てを取り戻してから早数日。何ら身体に問題は起こらず、魔皇としての力も完全に取り戻せた。神によって与えられた力も、最早全て俺の者だ。

「しかし、ふん……人間であった頃の俺と、悪魔であった頃の俺とでこんなにも性格が違つとわな」

悪魔であった頃の俺は冷酷で、家族以外の生物を見下し、邪魔だと感じたら力で取り除き、己の気が済むまでいたぶっていた。

しかし人間であった頃は、その逆。他人を労わり、気遣い、助け、周りにいる者たちに偽善をしていた。

だが一つだけ。共通することがあった。それは桃香を妹として、そして恋人として接していたことだ。

桃香は俺の傍を決して離れず、常に俺の心を癒していてくれた。

「……俺は幸せ者だったのだな」

俺の隣で眠っている桃香をそつと抱き寄せた。

どちらも何も纏わず、生まれたままの格好なので、直に桃香の肌の温もりを感じ取れる。

「んっ……うん……」

「……お前には感謝しきれないな」

そつと桃香の唇に自分の唇を当て、俺はベッドから起き上がった。

服装は……あのままで良いか。元に戻った俺ですら気に入っているからな。

何時ものコートを身に纏い、俺と桃香の部屋から出る。

今日はとうとう家族全員に会える。兄についてはもう確信がある。だが父と母、姉とは死んでから初めて会う。

桃香も成長していたな。まあ、三年も経てば成長はするか。

「……誰だ？」

建物の中を歩いていると、誰かが俺を気配を消して覗いていた。

「この我を覗き見するとは、死ぬ覚悟は出来ているんだろうな？」

拳を握り何も無い空間を小突く。すると三人の人影が転がって出てきた。

「くっ、何だ!？」

「誰がそんな言葉を口にしろと言った」

続いて右足の踵を少しだけ上げて地面に叩きつける。
すると一人の人影の腹に衝撃が叩き込まれた。

いたって簡単な事だ。ただそこにいる人間の腹の座標に衝撃を入れただけだ。

魔王である俺自身の力は次元・空間を扱うのだからな。

「もう一度問うてやる。誰だ、貴様らは？」

三人の内一人、銀髪で眼帯を着けているチビを睨みつけた。

「も、申し訳ない。私の名はナンバー5・チンク。戦闘機人であり
ます」

「同じくナンバー3・トーレです」

「……………」

銀髪、紫は名前を名乗るが、残りの赤髪は俺を睨むだけで口を開かなかった。

「おい、ノーヴェ！ 名を名乗れ！」

「……ノーヴェだ」

「です、だろ。小娘」

「ぐあっ!?!」

右肩に衝撃を当て、地面に叩きつける。

「口の利き方に気をつける。さもなければ死ぬことになるぞ」

「くっ……!」

赤髪は肩を押さえながら立ち上がり、俺をまた睨みつける。

いい度胸だ。だがそれが死に急ぐことになったな。

「……ん？」

ふと、とあることに気がついた。赤髪の首元に一本の切り傷が出来ていた。

俺がつけた傷ではない。そもそも俺がこんな汚い傷のつけ方はしな

い。

「貴様、その傷は何だ？」

「誰がつ！」

「さっさと答える。いや、もう良い」

赤髪に一瞬で近付き、髪を掴んで傷を見えるようにする。

これは……そうか、下等種の仕業か。

「ふははは、何だ貴様。たかが機人のくせに悪魔に刃向かったのか
！」

「なっ、てめえ……！」

「喚くな。事実であろう」

これは傑作だ。刃向かって無様にやられたか。真に愚かなことだ。

「それは違います！」

「……何？」

銀髪が横から口を出してきた。

「ノーヴェは刃向かったわけではありません！ 何も危害を加えたわけでもありませんのに、向こうから突如襲ってきたのです！」

「ほう………」

「ですから我々は魔皇である貴方に助けを請う為に来ました！ 先ほどの事は貴方がどんな悪魔なのか確かめるために致し方なく！」

「もうよい、口を閉じよ」

銀髪は頭を下げ跪いていた。

俺の存在を本能で感知し、相応の態度を示したのだ。

「何故我が貴様らを助けなくてはならん」

「このままでは我々は悪魔に殺されてしまいます。もう、貴方しかいないのです！」

「答えになっておらん。何故、我が助ける？」

「……貴方は許せない筈です。その尊厳、その剛毅、その資質。全てが皇に相応しい貴方が、ただ自らの欲を満たす行為を許せるはずが無い。それが同じ悪魔ならなおさら」

銀髪は俺の目を見てそう告げた。

なるほど、面白い回答だ。だが二つ違うな。

まず一つは悪魔という存在には三大欲求が存在する。

殺人衝動。人間を殺す事でその欲を満たし、自らの力に酔いしれる。食欲。肉を食らう、魔力を食らう。そうして己の腹を満たす。

性欲。基本的に悪魔には性別は無い。だが高位の存在になるにつれ男、女と別れる。性行為によって魔力の循環を良くしたり、ただ快楽を求めたり、始祖繁栄に尽力したりと様々だ。

こいつらが口に出している悪共はただ悪魔の本質により欲を満たしているだけにしか過ぎん。

そしてもう一つは。

「俺とあのような屑共と一緒にするな」

俺は皇だ。下種ではない。この差は歴然だ。下の者は上に従い、上に全てを差し出す。何故俺が下と同じにされなければならん。

「だが……俺の住処でもある場所でそういった愚行は許せん。それに、父たちが戻ってくる場所に存在することは許せんな」

俺は赤髪の傷に手を触れ魔力を成した。

「これは一度限りの詫びだ。ありがたく受け取っておけ」

手を離すとそこにあった傷は無くなっていた。

「なっ………!?!」

「もう傷つきたくなかったら悪魔の近くに寄らないことだな。まあ、その悪魔ももう死んだがな」

先ほど、このアジト全てに存在している悪魔どもを、次元越しに潰した。

掃除はスカリエッティに任せておけばよいだろう。

俺は再び足を動かし、その場から立ち去った。

「何なんだよ、アイツ………!」

「ノーヴェ、口を慎め。先程はあの男の気まぐれで助かったものだ」

「だけどトーレ! アイツも悪魔なんだろ!? あんな得体の知れない奴を、よく博士は!」

「だが、あの者のおかげで我々に襲い掛かる悪魔は排除された。先ほど、クアットロに確認が取れた」

「チンク姉……」

「姉としては、あまりあの者を怒らせないほうが良いだろう。一瞬で殺される」

アジト内の何処かにある広場。そこに俺、桃香、スカリエッティ、戦闘機人…ナンバー1のウーノとか言う紫の長髪女の四人が待機している。暫くの間その場で待っていると、奥の通路から複数の足音が聞こえてきた。

「一颯、皆が帰ってきたわ」

桃香は途端に身に纏う雰囲気を変え、俺と同じく王としての空気を纏った。

理由は知っている。桃香の悪魔としての体質が、性格をそんな風に変えてしまうのだ。何故、と聞けばまだ秘密とはぐらかされた。

「……………」

「……………どうしたの？」

「……………そこか」

剣を投影し、右後ろに振るつ。すると蒼い魔力で生成された剣とぶつかった。

「……………やるな」

「やはり……………貴方が兄上だったか」

蒼コートに蒼い大剣、銀髪。俺とレオンを完膚なきまでに打ちのめした相手。

俺が魔王に戻った際、戻った記憶にあった兄の魔力と声で、この男が俺の兄だと確信できた。

「こうして会うのは久しぶりだな、一颯」

「ああ。あの時はよくも世話になったな」

「ふん、弱かったお前が悪い」

剣を消し、握手を交わす。大和迅。俺の兄で、能力こそ少ないがそれを最大まで極め、この俺と同等の力を持つ男。銀髪で紫の瞳を持ち、俺よりほんの少しだけ背が高い。

「しかし兄上、何故貴方の技にゲームの技がある？」

「ああ……似たような力だったからな。参考にさせてもらったただけだ。便利だろ、これ」

そういつて蒼い魔力の剣：幻影剣を空中にいくつも出現させる。

もともと兄の力は強大な魔力と驚異的な身体能力だ。
膨大な魔力を操り、身体能力を生かした剣技で敵を滅ぼす、謂わば
豪なる力である。

「それより一颯、その口調は何だ？ 昔のように呼べ」

「ですが今は」

「呼べ。俺たちは家族だ。立場などどうでも良い」

「……わかった、迅」

「それで良い。それと、そろそろ逃げたほうが良いな」

「…？ どういう」

「いーーーーぶーーーーきーーーー！！」

後ろから俺の名を大声で叫びながら、誰かが飛びついてきた。

「ぐおっ……!?!」

「逢いたかったよおおおおっ!! さあ! さあさあっ! 早くベッドに」

「何をしているのですか、姉様?」

必要以上に抱き締めてくるそいつを、桃香が俺から引き剥がし、首を絞める。

「ぐえっ!? ちょ、ギブっ」

「一颯は私のものです。抱き着くのは良しとして、そこから先は許しません」

「な、何でよ!? 私も一線越えたいい!」

「なら迅兄様と越えなさい」

「嫌よ! あんな堅物となんて御免だわ!」

そう言われた迅は少し、若干、些か落ち込んでいるように見えた。

大和蓮。俺の姉であり赤髪の長髪で、紫の瞳をし、濃いピンクのチ

ヤイナドレスで、深く入れられているスリットから、スラリと美脚がチラチラ見えている。

「はぁ……蓮、いい加減にしる。今はそれどころではない」

「ウツサイ、童貞！」

「処女が！ ほざくな！」

こんな風に喧嘩ばかりしているが、本当は仲が良い。

「ああ、もうっ！ どうして迅はこんなにも堅物でクールぶって童貞なのよ!?!」

「童貞で何が悪い！」

「二十五の癖に！」

「貴様だつて！」

「私はいいのよ！ そろそろ一颯が貰ってくれるから！ でも貴方はくれる相手なんて居ないでしょう!?!」

「今はな！ だが事が全て済み次第何十人でも出来るさ！」

「出来るわけじゃない！ 奥手の癖に!?!」

「黙れ！」

「何よ！？ やるっての！？」

……こんな風に槍と幻影剣を取り出しても本当は仲がとても良い。その筈だ。少なくとも、俺が知っている三年前までは。

「止めなさい」

二人が今にもぶつかりそうになった時、低い男の声が響いた。その声は二人をピタリと止め、武器をしまわせた。

「三年振りに我が息子が戻ったのだ。そう喧嘩するでない」

「……父上」

現れたのは二人の男女。俺の両親だ。父の方は大和シリウス。金髪のオールバックにサングラス、黒のコートと、ウロヴオロスでも落しに行くのかとツッコミたい格好だった。

「まあまあ、大きくなったわねえ」

「母上……」

母は大和セレイナ。紫の瞳、白銀の長髪に肩から胸元まで露出させた白のドレス、薄いピンクのケープを身に着けている。

「……………」

……そうか、だから俺はあの時……。

「どうかしたの？」

「……………いえ、何でもありませんよ、母上」

「もう、前みたいに母さんって呼んでも良いのよ？」

「そうだぞ。いくら皇として戻っても、我々家族にそんな態度は不要。何時ものようにしなさい」

「……………ああ。父さん、母さん」

「……………お帰りなさい」

母さんが俺を優しく抱きしめてきた。

懐かしい……………。もう、感じる事が出来ないと思っていた温もり……………。それが今日の前にある。

「ただいま……」

抱きしめ返してもう一度温もりを心に刻んだ。

もう絶対に失わない。絶対に失うものか。

「……さて、そろそろ話を始めるか。……スカリエッティ」

「ああ、では此方へ」

父さんがスカリエッティに指示し、スカリエッティは何処かに案内しだした。

俺たちはそれに従い、やがて俺たちが全員入る部屋に到着した。中にはテーブルとモニターがあった。

俺たちはそれぞれ席に着き、スカリエッティはモニターの操作を始めた。

「さて一颯よ。お前は自分が何者か分かっているな？」

父さんがサングラスを外し、紫の瞳で俺を見つめてきた。

「ああ。俺は魔皇の力を継ぐ悪魔。次元・空間を操ることができ、

無尽蔵な魔力と異様な身体能力。それに加え、神に貰った力と結合し、俺だけの力に変わった」

「ウム。お前は神に殺されこつちの世界にやってきた。では私たちはどうやってきたか分かっているか？」

「……俺の記憶を封じる為に自身の魔力と共に封じたが、悪魔としての資質は存在する。それ故、ウドウに殺された際に自己防衛の為に悪魔の力が目覚め、蘇り、何らかの理由でこの世界にやってきた。だが一つ分らない。遺体は俺の目の前で焼却された。なのに何故身体が存在する？」

「……確かに、私たちの身体は燃やされた。しかし、その身体がただの人形だったら？」

「どづいことだ？」

「何、簡単なことだよ。私たちはその時にはすでにこの世界に来ていたのだよ。ウドウがお前を瀕死に追いやり、お前が意識を失っている間に私たちは目覚めた。だが悪魔としてだ。このままではお前に影響を及ぼし、封印を破いてしまう。だから私たちはあの世界から飛び出し、この世界にやってきた。魔力で出来た偽の身体を残してね」

ということとは、俺はあの時ただの人形にすがり付いて泣いていたのか。滑稽だな。

簡単に要約すると、俺が生死の境を彷徨っているときに父さんたちは悪魔として目覚め、そのままでは俺の封印に影響を出してしまうから、偽の遺体を用意してこの世界にやってきたということか。

「しかし、それなら何故ウドウが居るんだ？」

「私たちが殺したんだから、駒になってもらうことにしたのよ。向こうは自分が選ばれたって喜んでるけど」

そう言ったのは桃香だった。

「しかし、いくら自分が殺した相手が魔族の“真の王家”だからと言って、簡単に従う奴か？」

「褒美に私たちの力を与えるって嘘言っただからじゃない？」

蓮がニヤリと笑いながら言った。

なるほど、欲に目が眩んだと。馬鹿な奴だ。

「でも、もう用済みですからねえ。言ってきましたよ、『もう貴方邪魔よ。ここで野たれ死んでちょうだい』って」

「……久しぶりに、セレンの腹黒さを垣間見たよ」

セレンとは父さんが母さんを呼ぶ時に使う愛称だ。

「だって、私はともかく、私の家族全員に手を出したんですもの。本当ならもつと死にたいと思わせて殺さないように拷問をしたかったのに……」

そんな美しい顔でなんと恐ろしいことを。これが我が母か。なんと頼もしい。

ここで真の 王家というのを説明しよう。といっても言葉通りだが、俺たち大和家は王族の血が流れている。だから魔皇の力を受け継いだといっても良い。

そして王家の証はこの瞳だ。紫色の瞳は王家にしか存在しない。だから俺たち全員は紫色の瞳をしている。

しかし、魔界では他に王族が存在する。俺たちが本家ならば向こう側は分家のようなものだ。

その一つが『魔神ヒュルス』。俺が協会で見つけた悪魔の名。この一族が今は魔界の王と名乗っている。

底が知れる力の分際で王を名乗るとは、片腹痛いわ。しかし、その娘の力は格別だったがな。

「さて、私たちが生きている理由は理解できたか？」

「ああ」

「ならば、もう一つの本題に入ろう」

父さんがスカリエッティに合図を送り、スカリエッティがモニター

を映し出した。

そこには何かの設計図のようなものが映し出された。

「一颯よ、私たちはこの世界を中心にある野望を成し遂げる」

「野望？」

「嘗て皇王（みかみ）が成し遂げようとした野望だよ」

「……まさか」

「そうだ。私たちは魔界、天界、人間界を滅ぼし、私たちの新たな世界に創り返る」

三界を滅ぼし創り返る……。俺が魔皇で俺以外の家族が魔王の素質を持っているのは解る。だが何故そんな事をする必要がある？

「一颯、魔皇と皇騎士の二大悪魔が同じ世界にいる今、世界の向かう先は無。何も残らない。二人の力がぶつかる時、その力の余波が世界を破壊し、腐らし、死を呼び込む。これは何度も繰り返されてきた」

「……だから、俺たちが世界を手に入れ、二度と破滅の道へ向かわないようにすると？」

「そうだ。これは謂わば救済なのだ。一颯よ、魔皇として立ち上がってくれるか？」

……救済。だがしかし、この道では人間であった俺と過ごしていた奴らは死に絶える。……いや、何を考えている。チツ、随分と人間に毒されたな。これはいい機会だ。人間を葬り去ることの出来る機会だ。

「無論だ。この力、破壊の為に使い、野望の礎にしてくれる！」

「……それでこそ我が息子だ」

「では、父さん。いつ決行で？」

「それはスカリエッティが行う管理局の崩壊に合わせて行う。それまでは……好きな様にしなさい」

それだけを聞き、俺は部屋から出た。

管理局の崩壊か……。ならば、近々局で大きな動きがあるとするれば……約一カ月後の公開陳述会議。恐らくそこで仕掛けるのだろう。

「お兄ちゃん」

「桃香……」

桃香が追いかけてきた。俺は歩く足を止めずに歩いた。

「お兄ちゃん、もしかして人間の人格が残ってるんじゃない……」

「残ってはいない。ただ……人間の臭いが染み付いてとり難いだけだ。その内悪魔の臭いで埋もれる」

「そう……。これからどうするの？」

「……俺は借りがある相手を殺さない。だから借りを返してくる」

足を止め桃香の方へ身体を向ける。

そっと桃香の頬を撫で、笑顔を向ける。

「安心しろ。もう俺が人間になることは無い。必ず戻ってくるぞ」

「うん……」

そっとキスをして抱きしめる。

数分の間抱きしめ、俺は次元の門を開いた。

目指すは機動六課、エンペラード隊。

魔界（前書き）

作者「バイトを探さなくてはいけないのに探す気が起こらない今日この頃」

C・C・「働け。そして私にピザを寄こせ」

魔界

いきなりだ。俺がフェリスちゃん達となのはちゃんの居場所をどうやって探すか話している時に、いきなり空間に魔方陣が現れて、そこからイブキが現れてきた。

「イブキ……！？」

「貴様……！」

「フェリスちゃん！？」

フェリスちゃんがイブキの首下に剣を突きつけた。

イブキは瞬き一つせずに魔法陣を消して俺たちを見てきた。

「ふん、^お皇に向かつて剣を向けるとは……不敬だぞ」

「くっ！」

イブキが何かしたのか、剣が大きく弾かれた。

「まったく、この俺がせつかく借りを返しに馳せ参上してやったと

いつのに……」

「借りだあ……?」

「人間であった俺と共に過ごしてもらった借りだ。皇として返しにやってきた」

「貴様はいブキではない。よってここで斬り捨ててくれる!」

「やれるのか? この俺を……」

「っ……」

フェリスちゃんは剣を構えるが、それ以上動けなかった。頭ではイブキじゃないと思っけていても、心がイブキだと確信しているからだ。

それに、今の俺たちじゃイブキに敵わない。

「ふん、愚かな女だ。貴様も悪魔の力を持つ者ならば容赦なく斬れば良いものを」

「おい! イブキ、てめえ!」

「まあ良い。俺はこんな茶番をやるために来たのではない」

茶番だと……!?! フェリスちゃんが一番気にしている事を茶番だと!?!

イブキは全く興味無さげにし、俺たちに向かって口を開いた。

「レオン。高町なのはを助け出したいか？」

「何……？」

「助け出したいのか、否か？」

「……助けるに決まってんだろ」

「……良いだろう。なら手を貸してやる」

そういつて魔法陣を出現させた。イブキはニヤリと笑みを浮かべて口を開いた。

「このゲートの先は魔界……しかも魔神と自称する痴れ者の居場所に繋がっている」

「魔神……」

ウドウが言っていた奴か。ならそこになのはちゃんか……ハクもいる。

「助けたいのならば付いて来い。俺もそこでやる事があるからな」

「ま、待て！」

イブキが先に行こうとする所を呼び止める。

先に確認しておきたい事がいくつかある。それを確かめるまでは…。

「何だ？」

「……てめえは何を考えている？」

「それはこの件についてか？ それとも今後か？」

「どっちもだ！」

「ふっ……前者は答えてやろう。この俺を差し置いて魔神なぞぬかす愚か者を葬り去り、魔皇の力を理解させる」

「なら、ここにいる皆の事はどう思っている！？」

もう何も感じていないのか、何も思っていないのか、それともまだ……俺たちを仲間だと思ってくれているのか。

「知れたことを……」

「じゃあ……！」

「貴様らなんぞただのゴミとしか思わんわ」

「なっ ……！？」

「ゴミ……！？ 敵ならまだしもゴミ……！？ なんだよチクショウ……
…何でそんな事が言えんだよ……！？ フェリスちゃんやC・C・
ちゃんや空幻ちゃんやフェイトちゃんや他の皆も…… お前の事が好
きなんだぞ！？ なのにお前は……！」

「ああ、何だ？ まだこの俺が仲間だとも言うと思ってたのか？
片腹痛い……まあ、この俺を満足させる魔力や肉体を持つ者なら
ば傍に置いてやるがな」

「て、てめえ……！」

「ああ、だが貴様は別だ。裏切りの力を持つ貴様は、この俺が必ず
消し去る。……もう前のように友に戻れると思うなよ？」

「っ……！」

もう、戻せねえのかよ……！？ あの頃の時間は取り戻せねえのか
よ！ ふざけんな！ ぜってー取り戻してやる！ そんなもってぜ
ってー殴ってやる！

「もう良いだろう。俺は先に言っている。消えない内に入るんだな」

イブキは魔法陣に入り込み、姿を消した。

「……じゃあ、行ってくるわ。絶対なのはちゃんとハク、イブキを助け出してくっから！」

「待て！ 俺も行く！」

空幻ちゃんが前に出てきた。

「俺も行ってあの馬鹿を殴る！ また封じてやる！」

「駄目だって。今のイブキには指一本触れられねえって」

「知るか！ 燃やして引っ掻いて食ってくれる！」

空幻ちゃんは口から火が漏れ出し、眼も獣の目になっていた。

「ただ、涙も薄っすらと溜まっていた。やはり空幻ちゃんも悲しいんだ。イブキにあんな事言われて。」

「駄目だ。俺だけ行く」

俺はギレンをセットアップし、白い格好になる。悪魔の腕もいつでも使えるように外に出し、ギレンを肩に掛ける。

「んじゃま、行ってきますわ！」

俺は魔法陣に飛び込んだ。

その時、横に大きな衝撃が入った。

「んなつ!?!」

「邪魔だ。詰める」

C・Cちゃんが強引に入ってきたのだ……って、ええ!?!

「ちよ、うおおおいつ!?!」

そのまま俺たちは次元に飲み込まれた。

「……………おおおおい!?!」

来たか。随分と待たせる。……ん？

「何だ、二人で来たのか？」

ゲートから出てきたレオンの上に乗るようにして出てきたのは、俺と契約関係にあったC・Cだった。

だが今の俺に契約と言うものは存在しない。皇に戻った瞬間にギアスも消えたからな。大方、皇の力に耐え切れず消えうせたのだろう。

「ふん、私がどこに来ようが勝手だろう」

「まあ……確かに」

俺は歩き出した。俺の目の前には深い森である。辺り一面森。しかも邪な魔力に満ちた森。

ふん、こんな腐った魔力しか溜まらないのか。小物風情が。つくづく魔神の底が知れる。

「……女、俺の後ろで何をしている？」

「私の進行方向にお前がいるだけだ。それに女という名前ではない。C・Cだ」

「ではC・C、お先にどうぞ？ 俺の後ろに立って良いのは我が認めただけだ」

道を譲り先に行かず。しかしC・Cは不敵に笑いこっちを見てきた。

「何だ？ たかが女に後ろを歩かれて怖いのか？ 魔皇の名が泣くな」

「……何？」

「何だ、凶星を指されたか。魔皇も大した事ない！」

「あまり調子に乗るなよ？ 小娘」

首を締め上げ持ち上げる。

この俺を侮辱するとは良い度胸だ。その度胸に免じて苦痛を差し上げよう。

「貴様など、こうやって手を触れずに殺せる。口には気をつけたほうが身の為だぞ？」

「イブキ！ 止せ！」

「黙れ。……さて、どうやって痛めつけようか？ 体中に刺し傷を

負わせるか？ 一本一本骨を砕いていくか？ 肉を削ぐか？ それとも……ここに群れている悪魔どもに犯されるか？」

森に向かってC・C・を投げ捨てる。すると木陰に隠れていた悪魔どもがいつせいにC・C・に飛びついた。しかし、C・C・に触れる前に全ての悪魔は目の前に出現した魔力弾により死に絶える。

「ふん、分かったらもう二度と侮辱するな。次は無いぞ」

次元道^{ゲート}を消し、先へ進む。

「……………」

「……………まだ付いて来るか」

C・C・がまた俺の後ろを歩く。

何だこいつは？ 俺がまだ人間になるとでも思っているのか？

「私とお前は契約した仲だ。例えギアスが消えたとしても、それは変わらない。最後まで果たせ」

「ほう……………この俺に指図するか」

「……………」

「ふん…………レオン、そう槍を構えんでも良い。…………良かろう、今回限り歩くのを許そう」

俺はそれだけを言い、振り返らずに森に入った。

次元道で奴の目の前に出るのは簡単だ。だがそれでは面白くもクソもない。奴が自分の信じていた力を徐々に崩されてゆき、恐怖を植えつけていく。

それが、魔神と名乗った代償だ。何が王だ。王というのは絶対的な力を持ち、全てを従える絶対的な覇者だ。それを蔑ろにした罪は、重い。

「…………C・Cちゃん」

「心配ない。お前は自分の心配をしている」

森を歩き出して数分。その間、襲い掛かってきた悪魔どもには死をプレゼントしてやった。

「チツ、血で汚れる」

決して近寄らせないのだが、なにぶん一度に大量に殺しているから嫌でも血が飛びつく。

「ケツ、うじゃうじゃと鬱陶しいな」

レオンが槍を振って血を落しながら愚痴を零した。

「……ふむ、そろそろか」

「あん？ 何が」

レオンが聞き返そうとしたとき、突如目の前に全長二十メートルもある白い狼が現れた。

『貴様ら、ここを何処と心得る？ 魔神ヒュルス様の』

「喋る犬か。ワンちゃんコンテストにでも出てる。優勝間違い無しだ」

『 貴様、我を愚弄する気か！？ 』

狼が牙を剥き出しにして吼えた。

口を閉じてろ、唾が飛ぶだろう。しかし、この程度の力で俺に挑んでくるとは。勇敢なのか愚かなのか……どっちにしる無意味な事だ。

「おい！ 狼！」

レオンが槍を狼に向けて叫んだ。

「なのはちゃんは無事だろうな!？」

『フン、教えるわけが無かるう。知りたくば我を跪かせよ！ オオオオオオオオオオ!』

咆哮を上げ、周りの木々をその衝撃で薙ぎ払う。

レオンとC・Cは瞬時に防御魔法を展開し、俺はただ立っていた。

この程度、子犬が吼える程度にしか聞こえん。

「狂犬めが……誰に向かってその口を開く！ その愚行、万死に値する！」

『ムツ!？』

一瞬で狂犬の頭上に到達し、踵落しで地面に叩きつける。

『ガア！？』

「喚くな、臭う」

腹を蹴り飛ばし、上空へ打ち上げる。そして掌に魔力を溜め、狂犬に向ける。

「散れ、狂犬」

『又ウウ！ 嘗めるなああ

っ！』

狂犬が叫んだと思うと、狂犬の背中から白い翼が生え、空を飛んだ。

『我に本気を出させるとは、もう生きては帰れんぞ！』

「狂犬如きが、私の行く末を決めるか。片腹痛いわ！」

溜め込んだ魔力を狂犬に向けて解き放

「待て！」

レオンがそれを遮った。

「……邪魔をするな。死にたいのか？」

「待ってくれ！ アイツは情報を持つてる！」

そう言うとレオンは狂犬に向かって叫んだ。

「おい！ てめえ、さっき膝を着いただろう！ さっさとなのはちやんの事を話せ！」

『知ったところで無意味だ！ 今まで捕らえてきた人間共は、今日執り行われる姫の祝儀での貢物とされる！ そして貴様らはここで無様に死ぬのだ！』

狂犬は口に魔力を溜め込み始めた。
恐らく魔力砲を放つつもりなのであろう。
それより、今奴は気になる事を口にしたな……。

「祝儀？ 姫って……まさか!？」

「……ハクか」

C・C がハクの名前を口にした。

そうか……ハクウエルア・バル・フィンドウークの祝儀か。これは是非出席したいものだな。

『消え失せる人間共！ 我が最強の咆哮で』

しかし、それは放たれる事は無かった。何故なら……。

「我を人間風情と一緒にするな、この家畜風情が！」

俺が狂犬の首をもぎ取ったからだ。後ろで残った胴体から血が大量に噴出し、地に落ちていった。俺も地面に着地し、もぎ取った首を捨てた。

「祝儀か……ちょうど良い。確かめるにはもってこいだ」

待っている、この俺が直々に足を運んでやる。それまで精々悩め、苦しめ。そして答えを見つけている。

顔に付いた血を拭い、城にいるであろうアイツに向けて笑ってやった。

「陛下……フェンリルが討たれました」

「そうか。多少は力があると思っただが、所詮は家畜か」

「はっ、森を抜けるのも時間の問題かと」

「ふん、ならば魔剣騎士団を差し向ける」

「はっ。それと、城門前に人間の群れが集まっております。恐らく、反旗を翻したのかと」

「ふん、奴隷として生かしておいてやっていたのに、その恩を仇で返すか。もう良い、そ奴らも宴の足しにしる」

「はっ」

ふん、今日は特別な日なのだ。人間風情に邪魔をされてなるものか。

「さあて、我が娘よ。そろそろ準備は良いか？」

幕の向こう側にいる娘に聞く。

幕が開かれ、白いドレスに身を包んだ娘が出てくる。

「ふははは……流石は我が娘よ……よく似合っております」

「……………」

「今日でお前は隣国の領主のタナトウスの妻となる。そして力おある子を産み、私に仕えさせる。分かっておるな？」

「……はい」

「それと向こうは女という肉に餓えておる。少々行為に乱暴さが入ると思うが、別段問題ではないだろう」

「……………」

ふん、あの仮面を着けた男に連れ戻されてから口数が少なくて良い。無駄な会話などしたくないものだからな。娘と言えども、所詮は子を成す為の道具。それ以上でもそれ以下でもない。

「陛下、姫様、お時間です」

「うむ。では参るぞ」

「……………」

ふふふ……人間どもが辿り着けたとしても、もう全ては終わっておる。絶望を見せてから殺すと言つのも良いかもしれんな。

「ウドウはどうした？」

「はっ、先程から自室に閉じこもっておりますが、中からウドウ様の嘆き声が聞こえてきます」

「ふん、大方傷を負わされたのが悔しいのだろう。何、あ奴の事だ。直ぐに立ち直るであろう」

でなければ捨てるのみだな。

「あん？ あれは……人！？」

「ほお……」

まさか。魔界に人間どもが住み着いていたとはな。いや、格好からさっするに人間界から連れてこられて、奴隷にでもされているのか？

「おーいー！」

レオンが手を振りながら人間の群れに走った。

「ッ……！」

すると人間どもは目を鋭くし、レオンに持っていた武器になりそうな獲物を向けた。

鍬や鎌、包丁や斧、到底悪魔に太刀打ち出来るような武器ではなかった。

「お、おい！ 何すんだよ！？」

「この悪魔め！ ハク様を解放しろ！」

「あ、悪魔じゃねえって！ 俺は人間だ！」

「ふざけるな！ その左腕が何よりの証拠！ 皆、やっちまうぞ！」

「「うおおおおっ！」」

浅はかだ。なんと愚かだ。そんな貧弱な身体と武器で悪魔など傷つけられるはずがない。

「やめんかつ……！」

「ん……？」

愚か者どもに現実を見せてやろうとしたが、それより先に年老いた

大柄な男が止めた。

「村長！ 何故止めるんですか!？」

「何故じゃと？ 見て分からんのか!？ アレはデバイスだ！ それにあの者からは狂気さが感じられん！」

ほう……あの老人、ちゃんと見ているんだな。だが解せんな。何故そんな奴がガラクタを手に城に攻め込もうとする？

「お前さん、何故魔界におるのじゃ？」

「じいさん、俺たちは捕まった仲間を助けに来たんだけ」

「じゃがどうやって魔界に……。もう向こうでは魔界にこれる程文明が発達したのか？」

「いんや、こいつが連れてきてくれた」

そういつて俺を差す。老親は俺を見て直ぐに顔色を変えた。

この老人……過去に戦場を駆け回っていたのか？ 俺の殺気に感付いたか。

「き、貴様……悪魔じゃな!？」

「当たり前だ。人間などという劣等な種別に見えるか？」

「くっ……！」

老人は汗を流し、手に持っている斧を握る。

ふん、勝てないと分かっているか。

「ま、待てよじいさん！ こいつは敵じゃねえ！ 味方だ！」

「味方……じゃと？」

「ああ！ 俺も悪魔の力があるけど味方だ！ なっ？」

レオンが俺の肩に手を置いてこっちを向く。

「俺は俺の目的がある。無様に死にたければ勝手に死ね」

「おい……！」

「お前！ やはりハク様以外の悪魔は外道だ！」

「悪魔なんか死んじまえ！」

煩い外野だ。ここで殺してやるのか？ いや、人間などに構うほど、俺は寛大な心は持ち合わせていない。

しかし……気になるな。

「おい、何故貴様らはハクウェルアをそんなに慕っている？ あの女も悪魔だぞ」

「ふん……あの方は我々に救済の手を下さった。食料、怪我の治療……。しかも代価も無しにだ。ハク様は何時も仰っていた。ごめんなさい、ごめんなさいと。そのハク様が今！ 魔神のせいで道具にされておる！ 実の娘を道具にして、自分の力を伸ばそうとしておるのだ！ そんな事、許せるはずが無い！」

「だから、手にガラクタを握って立ち向かうのか？」

「そうじゃ！ 我らでハク様を」

「ならば、貴様らはここで殺す」

次元武を展開して人間どもに狙いを定める。

「おい！ 何やってんだ！？」

「見て分らんか？ 無駄な行為をする下衆どもを駆除するのだ」

「駆除って、馬鹿なことをするな！」

「黙ってる」

レオンを蹴り飛ばし、天の鎖で縛り上げる。

「我らの覚悟が無駄だと言うのか？」

「無駄どころか、貴様らは大きな過ちを犯そうとしている」

「何……？」

気づいていないのか。もやは救えん奴らだ。

「ハクウェルアはお前たちに何をした？」

「……我々を助けてくださった」

「なら、何故貴様らはここで無様に死のうとしている？ ハクウェルアが救った命を、何故無駄に散らそうとする？」

「そ、それは……！」

「そして、無様に死ねば、助けた本人は死ぬほど後悔するだろう。あの時助けてさえいなければ、まだ生きていてくれた筈だと」

「っ……！ 貴様に……何が分かる！？ 苦しんでいる我らに手を

差し伸べてくださったハク様が今苦しんでいる！ それを我らは指を啜えてただ見ているというのか！？」

「ああ、そうしている。地に根を生やして動かずにただ祈っている」

「何にじゃ！？ ここには悪魔しかいないのじゃぞ！」

「己が信じるものにだ。それぐらい、貴様らにもあるのだろうか？
もう良い、時間の無駄だ。我は先へ行く」

人間どもを押し退け、城の城門を蹴り壊し、中へと入る。

鎖から開放されたレオンも、人間どもに絶対助けるからと言って中に入った。

「勝手な事ばかり言いおって……！！」

「……お前たちは助けられたんだよ」

「何……？ 小娘、どういうことだ？」

「あいつは……ハクとお前たちを助けたんだよ。お前たちは死なず、ハクも後悔せずにすむ」

「じゃから、我らは……！！」

「分かっているのだろうか？ 自分たちでは敵わないということに」

「くっ……！！」

「魔皇の慈悲を、無駄にはするな」

「さて……どうやら婚儀には出席させてもらえないようだな？」

「だな。招待状もないしな」

俺たちの目の前には騎士の格好をし、大剣、槍、ランス、盾を持った悪魔がずらりと並んでいた。

どうやら歓迎はされていないようだ。まったく、魔皇が来てやったのに、この扱いは。

「仕方が無い。力という名の招待状を見せてやるっ」

「C・C・ちゃんは下がってな！ 直ぐに終わらせてやる！」

干将・莫耶を投影し、更にそれを強化し、黒と白の翼のような剣にする。

「跪け、騎士ども。我は魔皇なるぞ！」

一対の翼を騎士目掛けて振りぬいた。

皇騎士覚醒（前書き）

作者「はい、テスト期間ですので一週間はもう書けません。申し訳ない。欠点を取るわけにはいかない故に……」

皇騎士覚醒

剣を持った騎士が高速で向かってくる。それを強化で巨大化させた干将で迎え撃ち、胴体を切断する。後ろから二体の騎士が跳びかかって来るが、身体を回転させながら莫耶で切り伏せる。

他愛ない。この程度の雑兵、ただの石ころと変わらない。

「ふんっ

」

干将・莫耶を放り投げ、周りにいる騎士共を一掃する。帰ってきた干将・莫耶をキャッチし、消し去る。

「でやああああっ!!」

レオンの方を見ると、魔力で出現させた左腕を伸ばし、騎士の頭を掴んでいた。

「おおおらおおおおらああああ!!」

そのままブンブン振り回し、敵を薙いでいく。あらかた片付けると、掴んでいた騎士を床に叩き付けた。

「次はどいつだ!？」

横から来た相手の腕を左腕で掴み取り、稀少技能により爆発させた。そして隙が出来た腹にギレンを突き刺し、そのまま持ち上げて床に叩き付けた。

「フン! ハア!」

隣でC・Cも敵を殴り、蹴り上げ、潰していた。

「……………」

だが、何だあの様は。敵を何かに被せてそれを殺していつているよ
うな……。アレは戦いではない。ただの蛮行だな。

「ハアアアアツ!!」

拳を地面に叩きつけ、C・Cを中心に魔力の爆発が起きた。悪魔
共は爆発に巻き込まれ、跡形も無く消えた。

「はあ……はあ……」

「ふん、無様だな」

「っ……」

「目の前の敵と戦わず、自身がもつとも恐れている何かをそれに着せ、ガキのようにそれを追い払う。それではこの先生き残れん。そこで大人しくしている。邪魔だ」

悪魔の血で汚れた通路を歩き、目的の場所へと向かう。

しかし何だ、この程度の妨害しか出来ん愚か者に、態々足を使う事もないか。手っ取り早く出るか。

「危ねえ！ C・C・ちゃん！」

「っ……」

レオンに声に身体が無意識に反応してしまった。天の鎖でC・Cの身体を巻きつけ、俺の手元に手繰り寄せた。

するとC・Cが立っていた場所に、三つの顔と、六本に腕を持った巨人が落ちてきた。

『貴様ら！ ヒュルス様の城で何をやっとするか！？』

「祝儀に参加したいのだが？ 三つ首君」

『貴様！ この私を愚弄するか！ 拙者はこの城の守る阿修羅であるぞ！』

二本の剣、二本の槍、二本の弓を取り出し、俺に向かって斬りかかって来る。俺はC・Cを抱きかかえ、その場から飛び退き二階の通路に着地した。

「沸点の低い奴だ。レオン、この相手はお前に任す」

「は、はあっ!?!」

下にいるレオンに任せ、俺は先に進むことにした。

「ではな。生きていたらまた会おう」

「お、おい！ 待ちやがれボケ！ おいコラ！」

次元道ゲートを開き、中に入る。

そうだな……ダンジョンでいう中枢辺りにも行くか。

「馬鹿野郎！ マジで置いて行くなよ！」

『フン！ 尻尾を巻いて逃げおつたわ！』

「アアツ！？ はっ、イブキがテメエ見たいな脳筋に怯えるかってんだよ！」

『……………貴様あ……………今なんと言った！？』

あ、あり？ 何だかとても怒ってらっしゃる？ 殺気までこんなにピンピンに……………。

『脳筋という言葉……………拙者は一番嫌いなんじゃあ！』

「おおおおおっ！？」

二本の剣が振られて、咄嗟に身体を後ろに反らした。すると二本の剣は俺の腹の上を通過した。

「つぶねえ！？ おいコラ！ 死ぬとこっただたる！」

『貴様は禁句をぬかした。故にここで死んでいただく！』

剣と槍と弓を構え、俺に向かってくる。

はっ、上等！　こんな奴に負けてたら何時まで経っても今のイブキに追いつけたしねえ！

「やるぞギレン！」

『OK！　ガンガンGOO！』

『フンッ！』

上から剣が振り下ろされ、ギレンで受け止める。

『甘いわぁ！』

横からもう一本の剣が振られる。

「デメエこそな！」

ギレンをずらし、受け止めていた剣を向かってくる剣の方に受け流す。すると受け流された剣が向かってくる剣とぶつかった。

『甘いと言っておろっ！』

「んなっ！？」

左側から一本の槍が振るわれた。

しまった、こいつ手数が六本だった！

「ダラッシヤアアアッ！！」

槍が直撃する箇所に：即ち右半身に魔力をありったけ集めた。

「エクス」

『死ねえっ！！』

「ブロージョン！！」

槍が直撃した瞬間に合わせて爆発を起こし、ダメージを減少させた。しかし全て消せたわけではなく、衝撃が強すぎて俺は吹き飛ばされた。

『何と！？ 致命傷を逃れただと！？』

「ぐっ……！」

や、ヤベエ……こいつ、つえーぞ。あの蒼コート野朗とは別の強さだ。

俺は立ち上がり、ギレンを構えた。

『むう……貴様の見方を改めよう。貴様は全身全霊を持って当たるに足りうる存在だ』

「ケツ、そりゃどーも。こっちはそんな見方、持って欲しくなかったがな」

『ここから先は本気で参ろう。 おおあああああああつ！』

「っ……！」

いきなり気合を入れたかと思うと、阿修羅の全身から黒い魔力が溢れ出し、全身を纏いだした。

『魔劍騎士団副団長・阿修羅！ 全身全霊で汝を討ち滅ぼさん！』

「……機動六課スターズ隊副隊長レオン・スラスト一等空尉！ 八ーレム王に俺はなる！」

『いざ尋常！』

「勝負！」

……どうやら、向こうで動きがあったようだ。レオンの魔力がここまで感じ取れる。

「さて……C・C、貴様はそこで座って見ている」

「何？」

「邪魔だ」

C・Cの上から現れたソイツを拳で殴る。しかしソイツは拳を受け止め、俺達から離れた場所に着地した。

「ふん、不意打ちとは言え我に拳を使わせるとは……。喜べ、名を聞いてやる」

「随分と見下してくれないか、たかが人間風情が」

「ふん、その程度の奴って事なんだろ、貴様は」

目の前に現れたのは背中に大剣を背負った金髪の長髪男だった。服も白と金の装飾が施されているのを着ていた。

「今日は我らが姫の祝いの日である。場を弁えたまえ」

「だから、この我が祝いの言葉で得も授けてやろうというのだ。なのに貴様達はそれを受け取るどころか強制排除に移ってきたであるう。その愚かしさは万死に値する」

「下賤な者に対して極普通の対応をしたまでだが？」

どうもコイツは俺をどこかの蛆虫と勘違いしているようだ。魔皇たるこの俺を侮辱するとは、中々良い度胸だ。

「さあ、お引取り願いますようか？」

金髪が背中の大剣を握り締め、こちらに切っ先を向けてきた。

「そこのお美しいお嬢さん」

「ん？ 私のことか？」

金髪がC・Cを見てニヤリと笑った。

「そうです。私は美しければどんな種族でも愛でるのですが……この痴れ者を排除した暁には、貴女を愛でてあげます」

「……だそうだ」

「はっきり言って気持ち悪いな。金髪青目だからといってモデルとも思っているのか？」

「同感だ。レオンの方が……いや、あの阿修羅のほうが好感が持てる」

「まっただ」

あのバカのようなキャラで、自分に正直な素直なバカ。そうだな……部下にするならあんな奴が欲しいな。生き残っていたら問おうか。

「……いいでしょう。貴女は是が是非でも私の玩具にしてあげます」

「離れてろ」

C・Cはすぐに離れ、向かってきたナルシストは大剣を横から振ってきた。

「遅い」

一歩前に出てナルシストの懐に入り左腕にナルシストの腕が当たり、止まった。

「ふん……」

「んがつ!?!」

ナルシストの額に中指を弾いて当てて、ナルシストは後ろに吹き飛んだ。

「来い。貴様そのくだらん自尊心、木っ端微塵に砕いてやる」

「き、貴様あ……! この私をよくもおおお!」

ナルシストの姿が変化していき、両肩、額から角が生え、皮膚は黒く、肉体も強靱になり、鋭利な爪が伸びた。

『我が名はシユラーク・オルリアン! 魔剣騎士団団長である!』

「ふん、小物風情がたいそうな名を語るか」

『人間風情が、我が剣の錆となれ!』

「フハハハ……笑わせてくれる！」

投影でリベリオンを作り出し、ナルシストの剣を受け止めた。

『せいやああああ！！』

「はいやああああ！！」

ギレンと一本の剣が打ち合う。すぐさまもう一本の剣が振られ、それもギレンで受け流す。

『突きいいいい！！』

「何のこれしきいいいい！！」

突き出してきた一本N槍をかわし、もう一本の槍をギレンの突きで止める。

『どりやあああつ！！』

「でりやあああつ!!」

魔力が拮抗し、青い魔力と黒い魔力が迸る。

「せやつ！」

『ぬん!?!』

阿修羅の槍を弾き、開いた胸に魔力で出来た左腕を叩き込む。同時にエクスプロージョンを発動する。拳が爆発し、阿修羅は大きく後ろによろける。

『ぐおおおおお!!?!』

「チツ、図体がデケエから拳を叩き込みやすいが、その分タフだな」

命中した場所は黒く焦げていたが、それだけだった。

『ぬう……今の状態では同等か』

「どうする？ 俺としてはこのまま引き分けにしてまた今度にした
いんだが？」

早くなのはちゃんを見つけて助け出さないといけねーしな。ハクならイブキが助け出すだろ、多分……いや絶対。

『それは出来ぬ相談だ。貴殿にはここでご退場願う』

すると阿修羅の首が回り、もう一つの顔が正面にきた。先程の顔が仏頂面の武者ならば、これは……鬼神だ。

『アアアアアアッ!!』

「っ!？」

まさに一瞬だった。気が付けば俺は槍を叩きつけられ、壁にめり込んでいた。

「がはっ

!？」

『おおお……おおおおおおっ!!!!』

マズ。

壁から離れ、突き出された槍を避ける。しかしすぐさま剣が振るわれ、咄嗟に出したギレンで受け止める。

しかし力は阿修羅のほうが何十倍も上で、俺は高い天井に打ち上げ

られた。

この場所は大ホールであり、天井には大きな窓ガラスがあり、俺はそこを突き破った。

「ぐそつ　　！」

窓を突き破ると、どうやらそこは野外ホールであり、その中心に馬に跨り剣を掲げた騎士の巨大な像があった。それに左腕を伸ばして掴み、そこへ移動した。

「ゴハツ！　ちくしょう、やりやがったな！」

「ってか何なんだよ！？　顔が変わると凶暴化した上にパワーもスピードも上がってやがる！」

『ゼヤアアアアアアツ！！』

「んなっ！？」

阿修羅が突き破った窓から飛び出してきた。

「おいおい！　そんな巨体でよく跳べたな！？」

阿修羅は着地し、二つの弓を構えた。

「うそーん!!」

トラウマを我慢して空に回避した。阿修羅の弓あ独りでに弦が引かれ、光の矢がセツトされた。

『フンッ!!』

気合と共に放たれた矢はまるで砲撃だった。

「チィッ!」

左手を突き出し、魔力障壁を展開する。放たれた矢は二本とも障壁にぶつかり、障壁に罅を入れた。

「もたない!？」

とうとう障壁は破られたが、どうやら相殺だったらしく、死を逃れた。

「ギレン! モードチェンジ!」

『OK！ カモンベイビー！』

ギレンを変化させ、白く光り輝く五叉の槍となった。

「ブリーユーナク！」

『ッ ！』

「^{イッフル}当たれ」

投擲されたギレンは五つの光の閃光となり、阿修羅に迫った。

『 ガアアアアアッ！！』

阿修羅は二本の剣、二本に槍、二本の矢を一斉に放ち、五つの閃光を相殺した。

「なっ ！？」

『プロテクション』

残った阿修羅の矢がまっすぐ俺に襲い掛かる。

そして矢は手元に戻ってきたギレンが展開してくれたプロテクションを意図も簡単に貫き、俺に命中した。

腹が焼けるように痛く、更に地面に叩きつけられ、俺は立ち上がる
ことが出来なかった。

『……まさか、拙者の武器が砕かれるとは』

狂化が解けた阿修羅が砕かれた武器を見てそう呟いた。

『礼を言う。この戦いで拙者がまだ未熟者だと確信できた』

「ぐ　　」

声が出ない。よく見ると腹の半分が消し飛んでいた。どうやらプロテクションのおかげで矢が僅かにそれ、全身の消滅を防いでくれたとようだ。

『せめて拙者の手で楽にしてやるっ』

阿修羅がその巨大な拳を握り締め、振り上げた。

『去らばだ、レオン・スラスト。我が強敵よ！』

拳が振り下ろされた。

死ぬのか？ 俺はここで負けて死ぬのか？ なのはちゃんをまだ助けてねえぞ？ まだデートの約束果たしてねえんだぞ？ それに…
…まだハーレム王にもなつてねえ！

『レオン……守りたいものがあるのならば、どんな力を手に入れても守り通せ』

兄さんの言葉が頭を過ぎる。

これは……何時だったかな……。確かまだ俺が小さかった時だったか。

『世間ではそれを認めないが、それは手に入れた力を間違った使い方です。例え悪の力を手に入れたとしても、それを正義の為に使えばそれは正義の力となる』

『けどさ、正義ってんなモン人それぞれの価値観だろ？ いくら正義だっていつても、他人から見れば悪かもしんねーぜ？』

何言ってるんだろっな、俺は。これでもガキか？ 兄さんご困ってんじゃないか。

『そ、それはだな……。じゃ、じゃあこうしよう！ 己が信じる使
い方で使え！ 例えば好きな女を守るとか！』

『おお！ そんなでモテモテか！？』

はは……。己の信じる使い方が……。けど、結局力を手に入れてもこ
の様か……。
なのはちゃんも助けられず、イブキを止められもしなかった……。

諦めるのか？

「っ！」

イブキ……。？ 今の声は……。

諦めてしまうのか？

……。んな訳ねえだろ……。！ 諦めてたまるか！

「っ！……！」

『ぬんっ！……？』

すぐそこまで迫った阿修羅の拳を全身から爆発的に溢れ出た魔力で弾き飛ばす。

傷も全て塞がった。疲労感も無い。立てる。動ける。

その場を立ち上がり、阿修羅を睨みつける。

『何事だ！？ な、何故貴殿がその力を！？』

『ハア…………』

息を吐き、呼吸を整える。

みなぎってくる。悪魔の力が。皇騎士オルファの力が！

『貴殿は…………裏切りの騎士オルファか？』

『…………ああ。その力を持っている。これが、その証拠だ！』

体内のスイッチを切り換えるかのように、全身の魔力が変化した。

もう人間らしい魔力は感じず、身体中から…………特に左腕と背後から強大な悪魔の力を感じる。

左腕は強く青く光り輝き、俺の背後ではあの時　　アグスタで見た悪魔が青い魔力だけで上半身が出現していた。しかも俺の動きと同調するかのように動く。

『…………行くぞ阿修羅。表情の種類は十分か？』

『…………参る…!』

「…………ふっ」

『貴様、戦いの最中に余裕だな!』

「いやなに、嘗ての友の姿にニヤけてしまったんだよ」

『なに戯言を!』

大剣同士の打ち合いを続けながら、俺はにやけてしまった。

ふん、アレならば俺を楽しませてくれるだろう。その力は俺を……魔皇を殺す力なのだからな。

「やっ…………」

『っ！』

ナルシストの剣を弾き、蹴りを放つ。ナルシストは辛うじて避け、後ろに離れた。

「こちらもそろそろ終わりにしようか」

『何だと？』

俺は左手を出し、俺の身体の中に眠るある物を取り出す。

左手からは赤黒い魔力が溢れ出し、やがてそれは一本の棒となり、そして形作ってゆく。

黒く、禍々しい日本刀に

ファオルネス
魔皇刀に……。

『何だ……それは？』

「光栄に思え。我が最強の武器で貴様を葬ってやる」

圧倒（前書き）

お久しぶりです。テストも終了したので更新を再開します。

しかし……バイトも探さないと……。

圧倒

『行くぞ!』

今までの倍以上の速度で阿修羅に向かって走り出した。

『ぬんっ!』

阿修羅は残った二つの弓矢を放ってくるが、全てこの眼ではっきりと見える。

何処に、何時、何発飛んでくるのか全て手玉に取るように見える。

『ハアアアアッ!』

左腕を掬い上げるかのように振り上げ、背後にいる魔人…オルファ自身の腕で矢を掴み取った。

『何とっ!?!』

『アアアアアアアッ!!!』

もう一本の矢を跳躍してかわし、掴んだ矢を阿修羅に向かって投げつけた。

『拙者の矢を！？』

阿修羅はその場から飛び退いて矢を回避した。矢は地面の直撃し、したのホールまで貫通した。

『やるではないか！ しかし、拙者の武器が矢だけでは勝機はないな……。いたしかたない、最後の頭を使うか』

阿修羅がそういうと、狂化した顔とは別の顔が正面に回った。半分だけ目を開いた、悟りを開いたような表情……。

『拙者としてはこのような力は使いたくないが……。これを使った限りは、貴殿には死を見ていただく』

『……はっ、誰にものを言っている？ 俺はハーレム王……。なのはちゃんを救い出し赤い屋根の下で暮らす王よ』

『ふはははっ、では……。参る！』

阿修羅が弓を構えた。

『穿て！』

阿修羅から二本の矢が放たれた。俺は回避しようとその場から飛び退いた。が、飛び退けていなかった。

『何っ！？』

咄嗟にオルファの腕で矢を叩き落とし、直撃は免れたが、爆風の影響で後ろに大きく飛ばされた。

どういうことだ、さっき確かに飛び退いた。なのにさっきと位置が変わっていなかった……。

『不思議に思っておるな？ 何、簡単な事だ。貴殿が地面を蹴ったように感じさせたのだ。実際は動いてすらいない』

馬鹿な。幻術でも見せられたってか？ けど、俺は自分の意思で避けようとしたんだぞ？ なのにそんなタイミングよく蹴った幻術をかけられるのか？

『今度は二本ではないぞ？』

阿修羅が弦を引き、光の矢が放たれた。その数、数十本。

『っ……っ！』

俺は飛び退いた。だがまたしても位置は変わっていないかった。

『これで終いだ！』

『嘗めてんじゃねえよ！』

俺は左腕を前に突き出した。

ギレンは手元がない。阿修羅の攻撃を喰らわせられたときにどこかに飛んでいってしまった。なら、コイツの武器を使うまでだ。

『 来い！』

左手から魔力が大量に溢れ出し、形作った。

先が尖がり、大剣とランスが組み合わさった感じの刃。鏢は太陽のような形で、そこから延びる柄は剣にしては長く、槍にしては短い長さ。色は全てが黒っぽい金。

オルファの武器……魔槍剣・エクゾディア。魔皇を殺した、伝説の魔具。

『消し飛ばええええつ!!』

大きく剣を振るい、薙ぎ払われた魔力波が矢を掻き消した。

『何っ!?!』

『行くぜオラアアアッ!!』

上から振り下ろし、巨大な青い斬撃を飛ばす。それは地面を割りながら阿修羅へと迫った。

『ぬうッ!』

阿修羅は転がり斬撃を避ける。

よし、今度は幻術にかかれていない。いける!

そう思い、阿修羅に向かって駆け出した。

『何処へ行く?』

『 っ 』

阿修羅が真後ろにいた。

馬鹿な……さっきまでそこで倒れていたはずだ……！

俺は振り向くと同時に剣を

真上へ放り投げてしまっていた。

『 なっ ！っ 』

『 馬鹿め、拙者の掌中で転がっておるぞ？ 』

阿修羅に蹴られ、踏みつけられた。

『 がはっ！！ 』

『 これで本当に終いじゃ 』

阿修羅は俺を踏みつけたまま弓を構えた。

こいつ……自分の足ごと撃ち抜くつもりか！

『 冥土の土産に教えてやろう。拙者が使った技は、貴殿が心の内で

考えている事を読み取り、その考えを幻術で再現しているのだ』

『何……！』

『つまり、貴殿が今拙者の足を殴ろうと考えると、拙者はその考えを幻術でみせる。すると貴殿はあたかも拙者の足を殴ったように感じるのだ』

そうか、だからあの時飛び退いた筈なのに飛び退いていなかったのか。俺が飛び退く直前に幻術を発動し、飛び退いたと錯覚させる……。

『くそ、まんまと騙されてたって訳か』

『拙者も戦士。このような姑息な真似は使いたくはなかった』

『いやいいさ。俺がそれを見抜けなかったのが悪い』

『……そうか』

『だが勝つのは俺だ』

『何』

阿修羅は足を退けて後ろに飛び退いた。

今だ！

オルファの腕を伸ばし、阿修羅の足を捕まえる。そして上から向かってくるエクゾディアを左腕で掴む。

『そうだよなあ？ 逃げるしかないよなあ？ 何せ、上から降ってくる剣に意識を持っていく訳にはいかねえもんな？』

『……まさか、見破ったのか？』

『おうよ。俺が斬撃を放った時、お前は避けたよな？ 幻術をかけられた筈なのに。ただがお前はかけなかった、いやかけられなかったんだよ。お前の矢が全部掻き消された事に驚いてな』

そう、こいつが幻術をかけているときは必ず意識は俺に向いていた。だが矢を薙ぎ払った事で俺から意識を反らされ、次の攻撃に反応できなかった。

僅かほんの数回だったが、賭けに勝った。

『だが、分かったところでどうしようもない。今拙者は貴殿に意識を集中している。ここから先の行動は全て幻術になるかもしれん』

『ああ、俺だけならな』

『何　　ぐおおおおっ!?!?』

阿修羅が叫びだした。

ん？ ああ、足を握りつぶされたか。そりゃ痛いわな。

『な、何故だ！？ 今貴様は拙者との会話しか考えていなかったはず！』

『ああ、俺はな。だが、後ろにいる悪魔は別に俺と考えを共にしているわけじゃねえぞ？』

『何！？』

『こいつはな、俺と同じ動きをするけど、時には自分で動くんだぜ？』

例えば、俺が何かに集中しているときに、こいつが周りから来る妨害を防いでくれたり、例えば俺だけ動きを封じられてもこいつだけは動けたりとな。

『さつてと、俺は何をすっかなあ？』

『めう………』

『ギレーン、じつちーい！』

右腕を上げて叫ぶと、ギレンが飛んで来て手の中に納まった。

『異常は？』

『ノープロブレムだぜ、ブラザー！』

『結構。……で、あんたはもう足を動かさないみたいけど……降参するか？』

阿修羅にそう尋ねてみたが、阿修羅は笑って立ち上がった。

『何のこれしき。片足でも十分だ！』

顔も最初の顔に戻し、ニヤリと笑った。まるで楽しそうに。

『拙者がここまで追い詰められるとは、ヒュルス様以外では初めてだ』

『そうかい』

『だが退く訳にはいかん』

阿修羅は騎士の銅像に近寄り、騎士が掲げていた大剣を取った。

『次の一撃で終いだ。付き合っていたらごう』

『はっ、俺はレディとしか付き合わねえが、今回は特別だぜ？』

『かたじけない』

俺は右手にギレン、左手にエクゾディアを構え、阿修羅は弓を捨て、大剣を構えた。そしてオルファにも、右手にエクゾディアが握られていた。

『……………』

『……………』

動き出したのは同時。地を駆け、己の獲物を相手に届かせる。

『ハアアアアアアアアアアアツ!!!』

全てをかけた一撃は、振り下ろされた。

『……………』

『……………チッ』

俺は肩から流れ出る血を見て舌打ちした。

『やるな、阿修羅』

『……貴殿もな』

阿修羅は大剣を落とし、地面に大の字に倒れこんだ。
阿修羅の腹には三つの切傷が入れられていた。

『殺せ。もう拙者は十分だ』

「……………」

俺はオルファを消し、エクゾディアを上を持ち上げた。

『……………』

阿修羅は目を閉じ刃を受け入れる体勢に入った。

「……………止めた」

『……何だと？ 拙者を侮辱するのか？』

エクゾディアを消して阿修羅に笑いかける。

「ちげーよ。お前、俺のダチになれ！」

『……は？』

なんとも間抜けな声だ。笑える。

「なんかさ、お前と戦ってるときって楽しいんだ。イブキともそうだけど、お前も楽しい。だからさ、俺と一緒にいこうぜ！」

手を差し出し、阿修羅の反応を待つ。

阿修羅は少しだけ黙っていたが、やがて笑い出した。

『ふっはっはっはっ！ 拙者は悪魔だぞ？』

「大丈夫大丈夫！ 皆良い奴らだから！」

『だが拙者はヒュルス様に仕える身。裏切るわけにはゆかん』

「ん〜、でもなあ……」

『だが……』

「ん？」

阿修羅は起き上がり、俺に向かって跪いた。

「お、おい……起き上がって大丈夫なのかよ？」

『無論だ。拙者はまがりなき悪魔だぞ。止めを刺されん限り命は尽
きん』

「あ、そう……」

そついや、俺も肩が治ってやがる。便利だな……悪魔って。

『で、話を戻すが……拙者はヒュルス様に負け、僕になっている。
故に、ヒュルス様以上の力を持つ者ならば……』

「なる……ん？ じゃあイブキよりも先に行かねえと！ ってな
のはちゃんも助け出さなくちゃ！」

やべえよ、せつかくイブキ以外にも面白い奴がいるのに！ って、
俺は別にホモじゃねえ！ ダチが欲しいんだよ！ イブキ以外にも
よー！

「な、なあ！ここに連れられられた長い髪の茶髪で可愛い顔の女性を知らないか!？」

『む？ それならばそこから地下に連れら行かれていたな。何だ？ 貴殿の伴侶か？』

「そうなる予定だ！ サンキュー！」

よっしゃあ！ 待ってるよなのはちゃん！ 今、貴女の王子様が助けに行きます！

『ならば急がれい。恐らくその者達は今日の宴の為に料理されるだろっ』

「うおおおっ！なのはちゃんの女体盛りとは、何と羨ましい事かあああああっ!!!」

『お、おい!』

俺は全力疾走で地下の階段を走った。

この外道が！なのはちゃんの味は俺だけのモンじゃあああああ
っ!!

『……あ奴……基本的に馬鹿なのか……』

大剣が迫る。だがそれを刀で意図も簡単に弾く。
また迫る。無駄だという事が分からないのか、我武者羅に振り回してくる。

「つまらん……」

大剣を横に弾き、がら明きになった胴体を蹴り飛ばす。

『うづつ！？』

ナルシストを後ろに大きく吹き飛ばし、魔皇刀を鞘に収める。

『くつ……貴様は一体何なんだ！？』

「貴様では本来ならば目にする事も許されない皇だ」

魔皇刀に魔力を込め、神速をもって抜き放つ。

「魔人黒衝斬」

ナルシストの胴体に黒い波動の斬撃が叩き込まれる。

『がはっ !?!』

ナルシストはパツクリと斬られた腹を押さえて地面に膝をつく。

『そ、それは……魔剣士だけの技……!?! 何故貴様如き人間が使える!?!』

「……救いようもない屑だな」

ここまでされてまだ俺を人間だと言うか。一体どれだけ無能なんだ。

「貴様は生きている事すら目障りだ。その無能っぷりはイラつかせる」

再び鞘に収め、魔力を込めていく。

『ぐう ! あつて良い筈がない! この私が、高貴なるこの私が高が人間風情に負けるなどっ!』

ナルシストは立ち上がった。大剣を持ちあげて全身から魔力を溢れさす。

「そつだ！ 私は負けるわけにはいかないのだ！ ヒュルス様の期待以上の成果を残し、ハクウエルア様をこの手に」

「死ね」

魔皇刀を抜き放ち、斬撃の塊が地面を削りながらナルシストの右腕に迫る。

「は？」

右腕は大剣と共に消失し、夥しい量の血が噴出す。

「貴様……己の身を弁える。貴様のような下衆がハクウエルアを手に入れるだと？ 笑えんな。あの女は貴様が思い浮かべても良いものではない！」

もう一斬撃…魔人斬破を放ち、下衆の左腕を奪い取る。

『ギヤアアアアアツ!!』

「喚くな下郎。貴様に泣き叫ぶ権利はない」

『 つ!!!!』

一瞬で屑に近付き、喉を握り潰す。この程度では悪魔は死ねない。だから今こいつは痛みで地獄を見ているだろう。

「散れ。貴様はこの皇たる我に愚行を犯したのだ。苦しみながら懺悔し、無様に死ね」

屑の頭を掴み、真上へ放り投げる。そして魔皇刀の柄を握り、神速を持って抜き放ち収める。すると屑の全身を魔力の球体が包み込み、その中で幾つもの斬撃が走る。

『 ツ!!!』

空間を操り、奴の周りの空間を俺の魔力で出来た檻で包み込み捕縛、更にその中だけで斬撃を繰り返す。

「ふん、我的手で死んだことを誇りに思え」

屑はただの肉片となり地面に落ちた。

「行くぞC・C。さっさと終わらせて出るぞ」

「……ああ」

大人しく傍観していたC・Cを呼んで、先へと進む。

「……おい」

「何だ？」

C・Cが話しかけてきた。

「その刀……確かお前があの時破壊しなかったか？」

「あの時？ ああ、アレか」

俺が悪魔の姿になった時、ウドウに奪われた刀を、確かに握りつぶしたな。

「覚えているか？ あの刀を初めて出したとき」

「確か……投影で出現させたんじゃないかったか？」

「そうだ。本来なら閻魔刀を投影しようとしたが、この魔皇刀が“投影”された。つまりアレは……」

「魔皇刀の複製品……贋作というわけか」

「ああ。だがアレはアレで異常なほどの俺の本来の魔力を帯びていた。だから俺の心臓に突き刺さった際に、その魔力が引き金となり、悪魔の力が蘇った。……まあ、突然の事に意識が持っていかれたがな」

つまり簡単に言うと、あの時出たのは魔皇刀の複製品。しかし魔力は本来の俺の…魔皇としての魔力を帯びていた。

そしてその魔力が心臓に突き刺さり、体内を巡って悪魔の力が目覚めたというわけだ。

この点に関してはウドウには感謝だな。

「……なあ、お前の目的は何だ？」

「……取り合えず今は、六課に借りを返す。そして……」

「……そして？」

「……何でもない」

そして人間を完全に捨て去る。悪魔として、魔皇としてこの先を生きる。

俺達は進んだ。

俺達がこの魔界に来てから、まだ一時間しか経っていなかった。

魔皇と魔神とその娘（前書き）

作者「やあやあ！ どうもどうも！ アルバイトの面接に行ってきた作者です！ 採用されると嬉しいな！」

一颯「……滅」

作者「何でさっ！？」

魔皇と魔神とその娘

地下調理室へと続く暗い廊下に、猛ダツシユで駆ける白いコートの男がいた。

右手には黒い槍型のデバイス・ギレンを持ち、左手は悪魔の腕のをしている。

『キシヤアアアツ!』

その男に襲いかかる昆虫の様な姿の悪魔が多数。

「邪魔邪魔邪魔邪魔ア!」

しかし、その男がブンブンと振りまわすデバイスにより鎮められていく。

「何処だあああ!! マイ・ハニーイイイ!!」

男、レオン・スラストは駆ける。惚れた女を救いだす為に。

「何処ですかー！？」

くそう！ さっきからずっと走ってるのに延々と廊下が続くだけじゃないか！ やっぱあそこを右に曲がってたら良かったのか！？

「だがしかあし！ 俺のハーレムセンサーがバツチリとこつちを指している事ははっきりしている！ ならば、このまま進んでも問題無い筈だ！」

だけど不安！ 真っ暗で何も見えん！ って……あれは……。

奥の方から光が見えて来た。あれは確か松明って物だった筈。

ふむ……漸くゴールか。

灯りの場所に辿り着くと、そこはどうかやら牢屋みたいだった。中に入ると何かの気配がした。

悪魔じゃない……これは……人か！

「おい！ 誰かいるのか！？」

そう叫ぶと、暗い牢屋の中から徐々に物音がして来て、ボロボロの服を着た女性たちが出て来た。

「おい！ 大丈夫か！？」

近くの牢屋に駆け寄りそう声をかけると、女性は頷いた。

しかし、まさかここに居る全員を喰っちまうつもりだったのか？
まったく、そつちの意味での喰っちまうならまだしも、こつちの意味での喰っちまうだなんて……許せんな。

「なあ、最近ここに連れて来られた人っているか？」

おう尋ねると、奥の方を指差した。

あつちか……。待っててくれ、なのはちゃん。

「必ず助けに来るから。もう暫く待っててくれ」

そう言い残し、俺は奥へと進んで行った。

奥の方も牢屋が続いていたが、やがて広場に出た。人型で昆虫の姿をした悪魔が数匹いて、その広場の中心には巨大な釜戸があり、巨大な鍋がぐつぐつと音を立てていた。

何ともまあ…古典的な……。つて、あれは！

その広場の一角に、女性達が集まっていた。その中の一人に、なのはちゃんがあった。なのはちゃんは怯える女性たちを後ろに、悪魔を威嚇していた。

くそ、今助けっから！ 悪魔は……五体。その内リーダー格なのが一体。他は腕が四本なのに、アイツだけは六本ある。

『シヤムシヤ！』

『シヤァー！』

そのリーダー格の悪魔が何か指示を出すと、部下の悪魔がでっかいマナ板と包丁を持ってきた。

おいおいおい……まさかそれでぶった切ってスープにでも仕様ってんじゃないよな！？

『ジャァー！』

「い、いや！ 止めて……！」

一体の悪魔が一人の女性を掴み、マナ板に拘束しやがった。

「や、止めなさい!」

『ジャジャ!』

「きゃあ!」

なのはちゃん! この……外道がア!!

「でりやアアアツ!」

『ボオツ!』

ギレンを包丁を持った悪魔に投擲し、悪魔は串刺しになりそのまま壁に固定された。

「この虫けら共がアアア!」

オルファの腕を伸ばしてもう一体の悪魔を殴り潰し、左手で巨大な包丁を掴み、二体の悪魔に向かって投げた。二体とも両断され、残りのリーダー格の悪魔に向かって腕を伸ばした。

『ジャムジャ!』

悪魔を掴み取り、そのままこちらに引き寄せ頭を掴んだ。

「エクスプロージョン！」

頭を爆発で吹き飛ばし。残った胴体を蹴り飛ばした。

「なのはちゃん！」

「れ、レオン……くん？」

「ああ！ 助けに来たぞ！」

「レオンくん……レオンくん！」

「うおっ！」

ああ……！ 柔らかいお山さんがムギユって……！ ヤバい……起ちそつ。

「レオンくん……っ！」

「……もう大丈夫だぜ。俺が迎えに来たからさ」

「うん……うん……！」

なのはちゃんが落ち着くまでその身体を抱きしめた。周りの視線が
ちよいとキツイが、惚れた女に抱きつかれ、その人が泣いてたらど
んな時でも慰めるってもんだろ。

「落ち着いた？」

「うん……」

なのはちゃんは顔を赤らめて頷いた。

ういっい、なのはカワユス。

「皆も無事か？」

周りに居る人達の安否も確認して、これからどうするか考えた。

「ねえ、どうやってここに来れたの？」

「ん？ イブキがここに連れて来てくれたんだよ」

「イブキくんが！？ 帰って来たの！？」

「あゝ、いやそうじゃないんだ……。借りを返すって言って……。
また向こうへ行っちゃまう」

「そう……」

何でアイツは俺達と一緒に居てくれねえんだよ。こっちは一緒に悪魔を倒してんの……。

「でだ、取り敢えず皆をこの城から出そうと思う。外に人間の人達がいるから、一先ずその人達に預けよう。終わったらイブキが人間界に戻してくれると思う」

「うん……そうだね」

「皆心配してたぜ。ヴィヴィオなんか泣きっぱなしだ。帰ったらちゃんと甘えさせてやんな」

「うん……」

……やっぱり女の子には笑顔が一番だぜ。

「レオンくん」

「ん？」

「ありがとう」

張りきって行くぞオー！！

今、私の前には有力な悪魔達がこの大ホールに集まっている。
我々は体内の魔力を制御することで力の流れを穏やかにしている。
その為姿は人間と同じであるが、あのような下等な種族と決して同じではない。

「ヒュルス様、この度はおめでとございます」

「ウム。アレもやっと私の役に立つ時が来た」

隣に座っている娘を見やる。娘は顔を俯かせて目の前に置かれた料理にも全く手を出していなかった。

「……………ハクウエルア、どうしたのです？ 気分でも悪いのですか？」

「……………」

結婚相手にも口を聞かない。まったく、気を損ねたらこうなるのは母親とそっくりだ。まあ、アレはもう使い物にならなくなったから処分したかな。

「……おい、メインディッシュの方はどうなっている？」

隣に控えている従者に尋ねた。

今日は魔力質の高い人間の女の料理だ。アレらは実に良い糧となる。やはり人間は我らに身を捧げるべき存在だ。

「はい、もう運ばれてきます。ああ、ちょうど着きましたよ」

扉の向こうから大き目のテーブルカーが運ばれてきた。その上には人間が二人程入りそうな皿に蓋を被せている。

「さあ、皆の者よ。本日は人間界から連れて来た魔力質の高い女の料理だ。特別にくれてやろう」

おおーと、周りからざわめきが起こる。

運んできた僕に合図を出し、蓋を開けさせた。するとそこからは脚を組んで優雅に座っている女が現れた。

「えっ………!?!」

何だ？ 料理されていないではないか。いや………待て、この感じは………。

「貴様……天使だな！」

「いかにも。貴様ら悪魔の敵だ」

指を鳴らし、すぐさま警備の魔剣騎士団が女を囲む。
女は余裕な笑みを浮かべ、周りを見渡す。

「ふむ……これがお前の家か、ハク？」

「っ……」

ほう……この女、我が娘を知っておるのか。なるほど、人間界にいたときに知り合ったのか。

「随分とまあ……悪趣味な所だ」

「ふん、天使如きに我らの感性を理解されてたまるか。……殺れ」

一斉に剣を女に向かって突き刺す。が、女は手をテーブルについて脚を回して全ての剣を蹴り飛ばした。そしてまた脚を組んで不敵に笑った。

ほお……面白い事をするではないか。ふうむ……容姿も魔力も良い

……殺すには勿体無いな。新たな后にするのも悪くないな。

「おい、女」

「何だ？」

「私のモノにならないか？ 役に立ってくれるのであれば永遠の美と快楽を与えようぞ？」

「ふん……知り合いの母親になる気はない。それに……」

「それに？」

「私には既に相手がいる」

「ほう……ではその相手とは何処に？」

「そこに、いるではないか」

「何？」

女が指を差した方……つまり私の左後ろ。そこに黒いコートを着た男が娘の為に用意されていた酒を飲んでいた。

「貴様……！」

「……何だこの酒は。腐ってやがる」

王家だけに作られる特別な酒を腐っていると、あろう事かソレを投げ捨てた。

「まったく、皇にこのような酒を飲ますとは……敢えてその蛮行を
勇氣と認めて許そう」

「貴様！ 何も」

従者がそれ以上口にする事は無かった。何故なら口にする前に男が手に持っている銃で頭を吹き飛ばしたからだ。

「我にその臭い口を開くな」

「随分と……神の前で騒ぐな」

「神？ ふはははっ！ なかなか良いセンスしてるじゃないか！
この我を笑わせてくれるとは」

「！」

左腕を男に向かって振るったが、男はいつの間にか女の隣に立っていた。

「おいC・C……誰が貴様の相手だ？」

「お前だ。私とお前は契約関係にあるんだぞ？ 死ぬまで一緒にいるに決まっているだろう」

「……ふん」

奴め……この私を無視するか。よかろう、その愚かしさ、命を持って償え。

私が合図を出すと、ホールにいた奴らが一斉に力を解放した。姿は全て悪魔の姿へと変貌し、力を溢れ出さず。

「……汚いな」

「まったくだ。このような汚物に、我が宝具を使いたくは無いな。……C・C」

「何だ？」

この状況下に陥ってもまだそうであるか！ この愚か者共め！ 皆の者、殺せ！

『ジャアアアアツ！！』

一斉に二人に我が民が襲い掛かった。が、その民達は一斉に塵と化した。

「何……？」

「ふん、やはりこの力か。まさに我にピッタリだ」

男が目を此方に向けた。男の眼は先程まで紫色だったが、右目だけが紅く光っていた。

「破壊のギアス……一度我の力に吞まれ消えたが、新たに契約することで再発現。しかも今度のは我の方が力が上だからなのか、蝕まれている感覚が無いな」

「まさか、ここまで強力になるとは……」

何だ…何をしたんだこの男は……。

「さて……自らを魔神と名乗っているのだ、この魔皇まおうと精々遊んでくれよ？」

男は私に向かって不敵に笑った。

初めて魔神を見たが……なんともまあ、何処にでもいそうな顔だ。黒髪で紅目というただそれだけの顔。後は派手な衣装を着ているだけ。見た限り魔力も下。はっきり言って、そこにいる気持ち悪い顔をした悪魔のほうが強いぞ？

「貴様……何者だ？」

「魔皇と言ったであろう？ 我はただ、そこにいるハクウエリアの婚儀に参加しに来たのだよ」

「ほう……」

「……」

魔神は面白そうな表情をして席に座りなおした。

「貴様も我が娘を知っておるのか？」

「知っているのも何も、その女は俺と共に過ごした仲だ」

「……そうなのか？」

「……はい」

声が小さいな……。見た感じ、気力も感じられんな。大方、望まない結婚に無理やり出され、生きる希望まで失ったか？

「ふむ……魔力も良し、性格はともかく質は滅多に無いな……。どうだ？ 我が娘と子を成さんか？」

「なっ！？ 陛下！ それは私めが！」

今回の結婚相手であろう気持ち悪い顔の悪魔が講義した。

「黙れ。貴様よりあの男との間の子のほうが良いに決まっておる」

「しかし！ 奴は貴方様を侮辱なされているのですよ！？」

「ふん、どうせ私の力の前には為す術など無いわ」

「でしたら！ 私とあの男、どちらが上かはつきりさせましょう！」

そついうなり悪魔が俺の前に出てきた。

「さあ！ その目に焼き尽くせ！ 我がちか」

「喚くな、愚図」

悪魔の頭をもぎ取って黙らせた。

何だこの悪魔。たかがこの程度でハクウェルアに近付いたのか。
頭を後ろに投げ捨て、魔神を見据えた。

「で、だ……貴様、先程我が貴様に為す術無いと言ったな？」

「当たり前だろう。貴様程度、娘にも敵わんな」

「そうか……ではその娘とやらと一つ、殺り合わせてくれるか？」

「え……？」

「ほっ……」

「仮にも魔神と名乗る悪魔の娘だ。その娘がどれほど強いのか……
試してみたいと思うのは可笑しいか？」

C・Cを後ろに下がらせて魔神に言う。

魔神はクツクツと笑って隣を見た。

「ハクよ、見たとおり祝儀が台無しとなっている。そこでお前とあの男とで一つ見世物をやれ」

「そ、そんなっ……！」

「口答えは許さん。行け」

「きゃっ！」

魔神はハクウエルアを掴むと俺の前に投げた。投げられた本人は俺を見上げると後ろに下がってから立ち上がった。

「ふん……っ！」

「っ!？」

右拳から魔力弾をハクウエルアに向かって放った。しかしハクウエリアが白く光り輝き、魔力弾を消し去った。

「……ほう」

「……っ！」

光が収まり、現れたのは一言で言うところの天使だった。

白い羽を持った大きな翼、白い神からは白銀の光が漏れ出し、身に纏う衣は神聖さを醸し出す白い衣。瞳は綺麗な紅い瞳をしていた。

「アレが……悪魔、だと？」

後ろで……が呟く。そう、本当に天使の様だった。

「さあ……私を楽しませてくれ！」

魔神が腕を振ると俺とハクウエルアだけを囲んだ結界が張られた。

この我を鳥籠に入れるとは……まあ良い。後で死ぬほど後悔させてやる。今は……。

「っ……いや……！」

「……貴様の力、見せてもらおうぞ？」

俺の目的を果たす事だ。

対立する存在（前書き）

作者「C・C……恐らく私がこの作品で一番好きなキャラなのに
上手く立てられない……」

C・C・「……ちょっと来い」

作者「へ？ あ、あの何で拳に魔力を……はい！ ごめんなさぶら
あっ……！！」

対立する存在

光の矢と赤黒い魔弾が飛び交う。矢と魔弾がぶつかり合い、相殺される。

「どうした？ その程度か？ 我はまだ本気の二割も出していないぞ！」

二丁の銃から放たれる魔弾がハクウエルアを襲う。だがハクウエルアは無数の矢を一度に発射し、弾丸を相殺する。

「っ！」

「どうした？ 腕が震えているぞ！」

「きゃっ！」

先程までのよりも強力な魔弾を放ち、ハクウエルアの足元に着弾する。着弾した弾丸は爆発し、ハクウエルアを吹き飛ばす。

「拍子抜けだな。魔神と名乗る奴の娘が、下級以下の悪魔と同等とは」

「うう……」

「それでは、守れるものも守れんぞ？」

檻を壊し、この部屋の壁を魔力砲でぶち抜き、外の光景を見れるようにする。外には、奴隷にされている人間の集落らしき場所がある。

「え……何を！？」

「貴様、あの人間どもに手を差し伸べていたな？」

「……………て」

「その人間どもを守る貴様の力が弱ければ、どうなるか見てみるか？」

我は一振りの剣、エクスカリバーを投影して魔力を溜める。

「……………めて……」

「愚かな人間達だ。これが弱いものに縋った貴様らの末路だ」

剣を振り上げ、集落に目掛けて

「やめてえええええつ!!」

私の足元から幾つもの剣が突き出てきた。

「つ!!」

その場を飛び退き、剣の針から離れる。ハクウェルアを見ると、光る手を地面に突き立てていた。

「ほう……そんな芸が出来るとはな」

魔神が呟く。

そうだ……それで良い、そのまま貴様の力を見せてみる!

「さあ来い! 我との力の差を見せてやろう!」

「もうやめてええええええ!!」

上から、下から、横から、後ろから、剣、槍、斧、岩、炎、雷、風刃、水刃、様々な攻撃が俺を襲う。

「まずいつ　　！」

Ｃ・Ｃの声が聞こえた瞬間、我はその全てに飲み込まれた。刃を全て身体を切り裂き、貫いた。炎と雷で焼かれ、岩で押しつぶされる。

「はあ…！　はあ…！」

「くっ……衝撃がここまで……イブキは？」

「くっはははは……ふははははははっ！　我が娘ながら見事だ！まさかここまで力を有するとは！　気が変わった。お前は誰の子も産むな」

「え……あ……ああ……！」

「お前は私の子を生せ！　さすれば有望な駒が手に入る事は間違いないだ！」

「……この外道が。自分の娘を孕ますつもりか」

「天界の者に私の血を混ぜるつもりは無い。下僕達の玩具となっておれ。さあ、ハクよ。膳は急げだ。行くぞ」

「っ、いや！　やめてください！」

「口答えは許さん！　お前は私の　　」

「私の……何だ？」

「むっつ！？ がはっ！」

魔神の顔面を殴り飛ばし、壁にぶつける。

コートに付いた埃を払い、現状を確認する。コートはボロボロになり、血の痕がべつとりと付いていた。ホールも地面が砕け散っていた。

「まったく、とんだ反則だ。これ程の力とは。だが我には到底届かないがな」

「……はあ、心臓に悪いだろ」

C・C が呆れた声を出す。

心臓に悪い？ 不死の女が何を言う。

「あ……あぁ……」

「何をそんな驚いた顔をしている。魔皇が貴様に殺される訳が無いだろっ」

「……よかつ……たぁ……！ いき……てた……！」

「……はぁ……何を泣いているんだか」

いきなり目の前で泣き出したハクウエルアに呆れる。
今まさに殺し合いをしていた相手を前に無防備に泣き出すとは命知らずな。

「だって……っ！ イブキさんを……っ！ 殺したくっ、ないから……っ！」

「……まったくどうして、お前はそんな優しさの塊なんだ」

「え……？」

「力を持つ悪魔なら善の塊は捨てる！ 善と悪、どちらも抱け！ 威張れ！ 畏れを感じさせろ！ それが出来ずに何が悪魔か！」

怒気を込めた目線でハクウエルアを睨みつける。睨みつけられた当人は肩を震わせる。

「さあ立て！ 立って貴様の力を示せ！ この俺に！ そこにいる愚か者に！ 自分の力を示せ！」

剣を投影して斬りかかる。こいつの力なら、この程度は簡単に防げる。いや、それ以上の事が出来るはずだ。

「っ、きゃあっ！」

「っ！」

あと少しでハクウエルアの首を刎ねるところで、我の目の前に幾つもの刃が出現し、剣を止めた。そして弾き返し、刃が襲ってくる。

「そうだ……もつと己の力を知れ！ 今、貴様は掴もうとしているのだ！ 自身の力を！」

刃を身体で受け止める。傷口からは血が溢れ出すが、抜いたところから瞬時に再生された。

「わたしの……ちか、ら……？」

「そうだ！ 貴様の力だ！ 気づけ！ 知れ！ 掴め！ 己の内に眠る真の力を！」

右拳から魔力弾を放つ。しかし、それはいきなりハクウエルアの前に現れた魔力弾により相殺される。

「今、貴様は何をした！？ どうやって消した！？」

「どうやって……」

「何を思った!?!」

「何、を……」

「力を　　掴み取れ!」

上に赤黒い巨大な魔力球を出現させ、ハクウエルアに向けて落す。

「掴み　　取る　　!」

刹那、白い光の柱が魔力球を貫いた。そして球の内部から光が漏れ出し、球を破裂させた。

「……気づいたか、己の力を」

「……はい」

「……知ったか、自身の力を」

「……はい」

「……掴んだか、お前を」

「……はい!」

「何だ、それは？」

「私の力は……私は……！」

ハクウエルアは流れ出る涙を拭い、大きく息を吸う。

「私はハクウエルア・バル・ヒインドウーク！ 無から全てを創り出す悪魔です！」

「お前の心は何と言っている！？」

「私は皆と一緒に生きたい！ 人も悪魔も関係なく、笑顔で溢れる世界で生きたい！」

「その為には何をしたら良い！？」

「私が 世界を変える……！」

ハクウエルアから一気に魔力が噴出した。皇たる我に近づく魔力で、我を抑えにくる。

「大きく出たな！ だが世界を統べる者は二人も要らん！ ここで我とお前、どちらが上に立つか決めようではないか！」

ここで魔皇刀を抜き取る。この皇たる我の最強の刃。それをハクウ

エルアに向ける。向こうも弓を構える。

「では 参る！」

黒い斬撃をいくつも飛ばす。対してハクウェルアは見えない刃を我が飛ばした刃と相殺させ、無数の矢を放つ。

「そんなもの！」

左拳を正面の空間に殴りつける。すると正面の空間に罅が入り、空間ごと矢を破壊する。破壊された空間は何事も無かったように存在するが、矢だけは残っていなかった。

「まだです！」

「なにっ!?!」

気が付けば私の四肢が鎖で拘束されていた。しかもなかなか頑丈だった。

「だが！」

鎖を引き千切り、その場を移動しようとしたが、地面が剣の山となり、身体を貫く。

「これで　　！」

ハクウェルアが弓を引き絞る。矢には魔力が渦巻き、その威力を見せ付けているようだった。

「終わりです！」

空間を貫きながら我に迫る。そして矢は私の身体を貫き、天をも貫く光の柱となって爆発した。

「……イブキさん……ありがとうございました」

「何、礼はいらんさ」

「え……！」

「お前の力を見れたからな」

刀をハクウェルアの首に当てて、背後を取った。

「どつして……！」

「悪いな。我は真の王族の血が流れる悪魔か、我が創り出した武器でしか殺せないのだよ。それが、魔皇なのだ」

「そんな……っ！ いえ……流石です」

「私の身体を消すほどの威力の矢を放つお前も流石だ」

刀を鞘にしまい、次元に収納した。ハクウェルアも元の姿に戻り、弓も消した。

「私を……殺さないんですか？」

「……ハク、俺は魔皇だ。独りでも世界を統率できる。だが……独りほど退屈なものはない」

「……え？ イブキ……さん？」

「お前は人間との共存を望む。だが俺は、我は望まない。だから俺と……我とお前は対立し合う関係だ。だから……」

俺はハクに手を差し出し、こう告げた。

「俺と共に、永遠の時を対立してもらおう」

「……………！」

「お前なら、いつか我を越えそうで恐ろしい。だから、だからこそ一生傍にいて欲しい。我が終わりなき高みに向かうように」

つまり、人間風に言えば、だらけないように見張っていて欲しい。ずっと傍で。

「我から世界を奪ってみせろ」

「……………っ！ はい！」

ハクは俺の手をしっかりと握った。

そこで俺は、恐らく我になってから俺として家族以外に笑顔を向けた。

「……………んんっ！」

「「っ！」」

「お取り込み中申し訳ないが 来るぞ」

Ｃ・Ｃ・がそういつた瞬間、世界が闇に変わった。辺り一面闇に…否、宇宙となった。

『グオオオオオツ!!!』

「っ、おとつ…さま？」

俺達の視線の先に、巨大な三つ目の騎士が現れた。そいつは白い翼を広げ、雄叫びを上げながら魔力を放出した。

『この人間風情がアアアアツ!!! 私に傷を付け、娘まで奪うか!!!』

「人間風情か…：C・C、そんなに人間に見えるか？」

「……………さあな」

「何だ、ほつたらかしにされた事を怒っているのか？」

「知らん」

「……………ああ、そうだ。ギアスの契約は果たさなければな。皇として無視する事は許されん。だが契約の内容を教えられてないんじや果たそうにも果たせないな。これじゃあ何時まで経っても俺から離れてくれんな」

「……………絶対に教えん」

「ならお前も永遠と我の創り出す世界を見ておけ」

「ふふっ……」

「何が可笑しい？」

「いえ、素直じゃないですね」

「……帰ったらコキ使ってやる」

『私を前にして尚無視するか！！ もはや死さえ生温い！ 貴様らは全員生き地獄を味合わせてやる！！！』

再び奴が咆哮をあげる。飛んできた魔力の余波に、コートがバタバタと揺れる。

喧しい奴だ。俺に、いや我に向かって吼える奴は皆行き着く先は同じ。即ち

「貴様には無という終着点へ案内しよう」

魔王と魔神。最初で最後のゲームが始まる。

「よし、全員無事だな」

「うん！ お城からの追つてもいないみたい」

掴まっていた女性達と、まだ門の前にいた男衆たちを連れて、集落へと避難した。

「じゃあ、俺はイブキの手伝いに行くから」

「ま、待ってくれ！」

「んあ？」

この集落のリーダーのじいさんが走ってきた。

「ありがとう！ 皆を助け出してくれて！」

「いやいやなんの。魔界から脱出するまでまだ安心できねえぜ？」

「ああ。分かっている。じゃがお礼は言いたいものだ」

「まあ、そういつことなら。じゃあ、俺は行くから！」

「あ、それから」

「ん？」

「あの男に伝えてほしい事がある。ワシらを止めてくれてありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7858o/>

魔法少女リリカルなのは s t s ~ 魔皇の世界救済物語 ~

2011年12月30日01時53分発行